

1  
2 夏目漱石を読むという虚栄

3  
4 第二部 恐ろしく恐ろしげな「意味」

5  
6 第四章 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで

7  
8 「博士。あなたは国じゅうで一ばんあたまがいい。そのあたまをつかうときがきましたぞ。  
9 研究してみてください。

- 10 1、王さまのからだのナゾをとくこと。  
11 2、ばけものをさがすほうほうを見つけること。  
12 いいですね。」

13 博士は、めがねをはずして、よごれたレンズをハンカチでふきながら、いいました。  
14 「よろしい。わたしの、すばらしいあたまで考えるところによると、この二つのもんだい  
15 は、おたがいにかんけいがあると思う。この二つのことは、おすびつけて考えるべきであ  
16 り、そうしないとわからんことになるはずである。王さまのからだのナゾがとければ、ば  
17 けものがわかるし、ばけものがわかれば、王さまのからだのナゾがとける。王さまのから  
18 だのナゾをといて、ばけものをさがすほうほうを見つけるか、ばけものをつかまえてから、  
19 王さまのからだのナゾをあきらかにするか、そのどちらかしか、考えようのないもんだい  
20 ではないかと、わたしは思うが。あんまりあたまのよくない大臣は、どちらだと思うかね。」

21 大臣には博士がなにをいっているのか、さっぱりわかりません。わかることはどちらで  
22 もいい、

23 「早く、とりかかってください。」  
24 ということだけでした。

25 (寺村輝夫『魔法使いのチョモチヨモ』)

26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50

- 1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4110 「吾輩は猫である」は意味不明  
4 4111 五つの意味

5  
6 私の用いる〈意味〉という言葉の意味は単純だ。「言語表現が指し示す事柄または事物」  
7 (『広辞苑』「意味」といったものだ。なお、言語以外の標識、絵文字、スタンプ、ジェス  
8 チャーなどにも意味はある。こんな説明は無駄か。

9 人間は、発信者がいないはずの自然現象にも意味を見いだす。たとえば、〈嵐の前の静け  
10 さ〉という。〈静けさ〉という自然現象に意味があつて、それは〈嵐の前〉というものだ。  
11 人はあらゆる現象に意味を見いだす。だから、〈意味〉の意味は〈無意味ではないもの〉  
12 としか言いようがない。

13 ここで逆に考えてみよう。誰もが意味不明と思うべきなのに、そうは思われていない例を  
14 挙げる。

15 「吾輩は猫である」は意味不明である。なぜなら、猫に作文はできないからだ。ところが、  
16 〈『吾輩は猫である』という作品があつて、その語り手は猫である〉ということを知っている  
17 人は、〈「吾輩は猫である」にはちゃんとした意味がある〉と思ってしまう。

18 似た文で試そう。〈私はサザエ〉や〈私はカモメ〉や〈私はウナギ〉などの意味は明瞭だ  
19 ろうか？

20 文豪伝説の影響を受けていない人は、「吾輩は猫である」という言葉に接したとき、少な  
21 くとも次の五つの意味を想定するはずだ。ただし、どれとも決めかねる。

- 22  
23 ① 文字通りに受け取る。つまり、この文の語り手を動物のネコと考える。ファンタジー  
24 だ。言うまでもなく、作品名としての『吾輩は猫である』の意味はこれだが、そのこ  
25 とは、本文を読み進んで「ニャーニャー」という言葉を見つけるまで判然としない。  
26 ② 「猫」を人名と考える。〈私はサザエ〉型。あだ名や芸名なども含む。  
27 ③ 「猫」を比喩などと考える。〈私はカモメ〉型。〈クレージー・キャッツ〉の〈キャッ  
28 ツ〉は「ジャズ奏者」(『リーダーズ英和辞典』「cat」)という意味らしいが、この「猫」  
29 もそんなものとする。『我輩はカモである』(マッケリー監督)は、鴨が語り手や主  
30 人公の映画ではない。この「カモ」は、「だまして、利用しやすい相手」(『明鏡国語辞  
31 典』「鴨」)という意味だ。原題の“Duck Soup”も〈いいカモ〉だろう。  
32 ④ この文を舌足らずと考える。〈私はウナギ〉型。たとえば、〈「吾輩」が飼っているの  
33 「は」犬ではなくて「猫である」〉などの略と解釈する。〈「吾輩は猫」と呼ばれた子  
34 「である」〉の略かもしれない。『“It” (それ) と呼ばれた子』(ペルザー)を連想して  
35 もらいたい。『綿の国星』(大島弓子)のチビ猫も〈「猫」と呼ばれた子〉かもしれない。  
36 ⑤ 「吾輩」を固有名詞と考える。『グーグーだって猫である』(大島弓子)をもじれば、  
37 《ワガハイだって猫である》となる。

38  
39 「吾輩は猫である」という文を読んで①の意味しか考えられない人は幼稚だ。②は、実際  
40 にある。③を考慮しないのは、日本語をよく知らない人だ。④のように、あれこれ想像して  
41 いたら、きりがない。⑤のように、「吾輩」を猫の名前として用いる論者は多い。私は、「吾  
42 輩」ではなく、〈ワガハイ〉と書く。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4110 「吾輩は猫である」は意味不明  
4 4112 「吾輩」は意味不明

5  
6 「吾輩は猫である」という文は、〈猫のくせに「吾輩」なんて偉そうに言うから受ける〜〉  
7 みたいに誤読されているらしい。現在、〈わがはい〉という言葉は「えらそうな一人称」（ふ  
8 じいまさこ『日本人ですが、ただいま日本語の見習い中です！』）と思われている。デーモ  
9 ン閣下は「わがはい」と言う。ところが、相手が自分より偉い人だと、悪魔のくせして、「小  
10 生」と言う。使い分けの理由は容易に推測できる。

11 〈わがはい〉は謙譲語のはずだ。〈わがはい〉は複数だからだ。一人称の複数をあえて単  
12 数として用いた場合、本来の単数より格が下がるものだろう。たとえば、〈身共〉は〈身〉  
13 より格が下がる。ただし、謙譲語を不適切に用いると、かえって慇懃無礼になる。〈わがはい〉  
14 が尊大な印象を与えるとしたら、そのせいかもしれない。

15 違う例で考えよう。〈拙者〉の場合、「近世前期上方語でも、使用者はほぼ武士に限られ、  
16 目上に対して用いる、高い待遇価値を有した語であったと考えられるが、近世後期江戸語で  
17 は、目下に対して用いた例も見られるところから、待遇価値は近世前期に比べて低くなって  
18 いると考えられる」（『日本国語大辞典』「拙者」）という。同様の変化が〈わがはい〉にも起  
19 きたのかもしれない。いつ、起きたのだろう。

20  
21 彼は身動きもしない。双眸の奥から射る如き光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、  
22 御めえは一体何だと云った。大王にしては少々言葉が卑しいと思ったが何しろその声の  
23 底に犬をも挫しぐべき力が籠っているので吾輩は少なからず恐れを抱いた。しかし挨拶  
24 をしないと剣呑だと思ったから「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく平気を装  
25 って冷然と答えた。然しこの時吾輩の心臓は慥かに平時よりも烈しく鼓動しておった。彼  
26 は大に軽蔑せる調子で「何、猫だ？ 猫が聞いてあきれらあ。全てえ何こに住んでるんだ」  
27 随分傍若無人である。

28 (夏目漱石『吾輩は猫である』一)

29  
30 「彼」は「車屋の黒」というジャイアン・キャラの猫だ。  
31 「大王」は「猫中の大王とも云うべき程の偉大なる体格」（『吾輩は猫である』一）から。

32 「平気を装って」と「冷然と」は矛盾のよう。「御めえは一体何だ」に対して「吾輩は猫  
33 である」は杓子定規だ。「名前はまだ無い」は不要のようだが、この二文で「挨拶」になる。  
34 ワガハイは「心臓」が弱い。

35 「黒」はワガハイの「挨拶」に怒っていないようだから、「吾輩」という言葉は、「黒」に  
36 対して尊大な印象を与えていないはずだ。だったら、この作品が発表される前まで、「吾輩」  
37 という言葉は「えらそうな一人称」ではなかったことになる。「黒」が「大に軽蔑せる」理  
38 由は不明。どうして「あきれらあ」なのかも、不明。猫であることは一目瞭然だからか。両  
39 者の問答はかみ合っていない。作者の意図は不明。

40 「傍若無人」なのは「黒」であり、ワガハイではない。ところが、いつからか、日本人は  
41 ワガハイのキャラを「傍若無人」みたいに誤読するようになった。『吾輩は猫である』が誤  
42 読された結果、「吾輩」の意味に変化が起きたのではなからうか。

43  
44  
45

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4110 「吾輩は猫である」は意味不明  
4 4113 モザイク

5  
6 『おそ松くん』(赤塚不二夫)の井矢見は、「ミー」を主語に用いる。彼は自分の浅はかさを露呈しているわけだが、そのことに本人は気づいていない。彼のことを独りよがりとして、  
7 作者が仕組んでいるわけだ。こうした作者の意図は、子どもにでもわかる。

8  
9 同じようなことが、ワガハイの「吾輩」についても言えるのだろうか。言えない。作者が  
10 どのようなことを仕組んでいるつもりなのか、推定できない。

11 再び、〈拙者〉を例にして考えてみよう。

12 貧乏な浪人が金持ちの町人に金を借りようとする。そのとき、〈拙者〉という謙譲語をわ  
13 ざとらしく口にすれば、その意味合いは反転し、尊大になりそうだ。つまり、〈自分の方が  
14 身分は上だぞ〉と、浪人は暗示したことになりそうだ。

15 〈吾輩〉が学生の用いる謙譲語だとして、ある学生が自分よりも年長だが大卒ではない牛  
16 鍋屋の亭主の前で、これをわざとらしく用いるとき、〈将来の地位は自分の方が上だぞ〉と  
17 暗示したことにならないか。少しだけ尊大な意味合いが生まれるのではなからうか。

18 〈吾輩〉を、学生ではない青年が用いたら、どうだろう。イヤミの「ミー」と同じような  
19 ことになるのではないか。もしかしたら、もっと悪い結果になるのかもしれない。たとえば、  
20 学歴詐称や誇大妄想などと疑われるかもしれない。

21 青年ではなく、少年が無邪気に〈吾輩〉を用いたら、どうか。兄の口真似か。方言か。い  
22 ろんなふうと考えられる。

23 一種の化け物であるワガハイが「吾輩」と語るのを読むとき、この代名詞の含意を想像す  
24 ることは至難の業なのだ。

25

26 吾輩は波斯産の猫の如く黄を含める淡灰色の漆の如き斑入りの皮膚を有している。

27 (夏目漱石『吾輩は猫である』一)

28

29 ワガハイの「皮膚」はモザイクのようだ。また、「如く」や「如き」によって、語り手の  
30 ワガハイは自分の言葉にモザイクを掛けている。「斑入り」も、普通は植物に用いる言葉だ  
31 から、比喩だ。ワガハイは自分の「皮膚」について明瞭に語っていない。

32 語り手のワガハイは、語られるワガハイの「産」つまり血統などを隠蔽している。いや、  
33 自分の「産」に関するワガハイの無知を隠蔽している。ただし、その無知は、聞き手にはす  
34 でに知れているから、本当に隠蔽していることは別にありそうだ。

35

36 I ワガハイの空想する〈自分の物語〉の主人公であるワガハイは尊大。

37 II 語り手ワガハイの空想する聞き手にとって、ワガハイは謙虚。

38 III 作者の設定では、ワガハイは聡明。

39

40 こうした文脈の仕分けができないから、『吾輩は猫である』は意味不明なのだ。

41 文脈の混乱は、Nのすべての小説について言える。ただし、語り手が皮肉めかしているの  
42 で、読者は翻弄されてしまう。

43

44

45

46

47

48

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 1 0 0 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4 1 2 0 「名前はまだ無い」  
4 4 1 2 1 猫かわいがり

5  
6 「吾輩<sup>わがはい</sup>は猫である。名前はまだ無い」という二文は、〈吾輩は／名前はまだない／猫である〉という五七五を組み替えたものだろう。「名前」の真意は〈名声〉などだ。Sの場合、  
7 〈「先生は」猫である。「まるで世間に名前を知られていない人であった」〉と作文できる。  
8  
9

10 如何<sup>いか</sup>に珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。  
11 (夏目漱石『吾輩は猫である』一)

12  
13 「名前」は愛されている証拠。「されなかったか」は〈されていないか〉が適當。

14  
15 名前はまだつけてくれないが、欲をいっても際限がないから生涯<sup>しょうがい</sup>この教師の家で無名の猫で終る積りだ。  
16  
17 (夏目漱石『吾輩は猫である』一)

18  
19 単に〈名前がないこと〉を「無名」とは言わない。「無名」は「有名」(『吾輩は猫である』  
20 二)の反対語だ。ワガハイの「欲」の一つは、〈「有名」になること〉だった。その「欲」は、  
21 不合理なことに、『吾輩は猫である』の第一話が有名になることによって満たされる。しかし、  
22 別の「欲」が満たされていない。その「欲」は、結局、満たされないまま、ワガハイは  
23 溺死し、『吾輩は猫である』は不意に終わる。「欲」とは、〈猫かわいがりされること〉だろう。  
24 ただし、そのための努力はしたくない。  
25 実は、「名前」は、もうある。そのはずだ。

26  
27 この間は岡山の名産<sup>きびだんご</sup>吉備団子を態々<sup>わざわざ</sup>吾輩<sup>なあって</sup>の名宛で届けてくれた人がある。  
28 (夏目漱石『吾輩は猫である』三)

29  
30 ワガハイはこの「名<sup>な</sup>」を明かさない。お気に召さないからか。  
31 たとえば、「車屋の黒」がその名で呼ばれるのは、彼が「純粹の黒猫」(『吾輩は猫である』  
32 一)だからだ。「純粹」は意味不明だが、ワガハイに名前がないのは、心根が不純だからだ  
33 ろう。彼は「善い加減にその場を胡魔<sup>ごまか</sup>化して」(『吾輩は猫である』一)暮らしている。彼は  
34 自分がどのようなキャラとして愛されたがっているのか、明かさない。

35  
36 猫は、自分の名前について、うっとり瞑想に耽っているんだ、  
37 考えに考えて、考えに考えあぐねて、  
38 いわく言い難い、言えそで言えぬ、  
39 深遠で謎めいた、たったひとつの名前はないものかと――。  
40 (T. S. エリオット『キャッツ ポッサムおじさんの猫とつき合う法』)

41  
42 自分に命名したくてもできなくて「うっとり」しているのが「猫」だ。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 1 0 0 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4 1 2 0 「名前はまだ無い」  
4 4 1 2 2 「文学者」は僭称

5  
6 『坊っちゃん』の「五分刈り」には名前がない。「本名」どころか、「赤シャツ」に類する  
7 あだ名さえ出てこない。「五分刈り」は、他人には命名できるのに、自分にはできない。  
8 「坊っちゃん」というのは、「赤シャツ」が陰で「五分刈り」を呼ぶときのあだ名だ。だ  
9 から、「五分刈り」について語るときに「坊っちゃん」という言葉を使えば、「赤シャツ」に  
10 味方したことになる。

- 11  
12 ① 身分ある人または他人の男子の尊敬語。「大家のお一」  
13 ② あまやかされて育った、世間知らずの男子。「一そだち」  
14 (『広辞苑』「坊っちゃん」)

15  
16 清の「坊っちゃん」は①で、あだ名ではない。「赤シャツ」の言う「坊っちゃん」は②だ。  
17 「珍野苦沙弥」という名前には〈珍しい苦行僧／朕の噓〉という二種の意味がある。

18  
19 しらいどうや  
白井道也は文学者である。  
20 (夏目漱石『野分』一)

21  
22 「白井道也」は〈白い道なり〉と読める。彼の清廉潔白な生き方を暗示する。しかし、反  
23 面、〈素人っぽい方法〉という意味も読み取れる。彼は「生意気な奴だ」(『野分』一)と言  
24 われている。「文学者」は僭称。彼は「文学士」(『野分』二)だが、「文学の研究者」(『広辞  
25 苑』「文学者」)ではない。「中学校の教師」(『野分』二)だ。語り手は、白井の気負いを追  
26 認するように語る。だが、同時に、微かに彼を冷笑しているようでもある。私には、どうも  
27 よく理解できない。こうした奇妙なスタイルは、N自身の気負いと怖じ気の混交を露呈した  
28 ものだろう。

29 ちなみに、Sは「貧弱な思想家」と自己紹介しているが、これも僭称。彼は「思想家」と  
30 して仕事をしたことがない。だから、「貧弱な」と形容しても、不適當。また、語り手Pは、  
31 聞き手Qに、Sを「思想家」と紹介しているが、その証拠はまったく提出していない。

32  
33 彼等は是非とも学者文学者の云う事に耳を傾けねばならぬ時期がくる。  
34 (夏目漱石『野分』十一)

35  
36 白井は、このように吠える。「聴衆は一度にどつと鬨を揚げた」(『野分』十一)と語られ  
37 るが、『野分』の内部の社会に、この講演は何の影響も及ぼしていない。「時期」が早すぎた  
38 か。

39 「文学者の云う事」は不可解。文学作品とは違うのか。不明。肩書きが研究者でも、軽薄  
40 才子は「文学者」に擬態して吠える。

41 普通の俗物は、階層、財産、肩書き、学歴、血統、人種、出身地などを重んじる。軽薄才  
42 子の知的俗物は屁理屈や語彙力を重んじる。その語句には自分語が含まれる。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 1 0 0 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4 1 2 0 「名前はまだ無い」  
4 4 1 2 3 「どこで生まれたか」  
5

6 『吾輩は猫である』の作者は、ワガハイの「名前」を決めないことによって、彼の正体を  
7 徹底的に隠蔽しようとした。  
8

9 どこで生れたか<sup>とん</sup>頓と見当がつかぬ。

(夏目漱石『吾輩は猫である』一)

10  
11  
12 この文は、次のような話になりそうなのを回避したものだ。  
13

14 誰しも、なぜだか自分にもわからぬまま、うまく暮らしてゆき、波瀾の一生に到達する  
15 のである。すくなくとも余にとってはそうであったし、余の耳にしたところでは、この地  
16 上に棲息する人間はただのひとりも、自分がどうして生まれ、どこで生まれたかを、自分  
17 じしんの経験からでは知りようもなく、それを知るには往々きわめて不確実としかいい  
18 ようのない言い伝えをとおしてのみ、知るということである。だれか有名な人物があらわ  
19 れるとその人の生まれがどこであるかを、町と町が言い争い、奪いあいする。だからして、  
20 余にしたところで、余がこの世の光を眼にした場所が、というよりもむしろ、余が眼にし  
21 たというのではなく、この世にでてきたときにただ親愛なるママが眼にしていたのにす  
22 ぎぬのであるかもしれないが、ともかくその場所が、地下の<sup>あなぐら</sup>窖であったか、屋根裏部屋  
23 の床のうえであったか、木材の掘立小屋であったか、それについては余みずから決着のつ  
24 けようもないままではいるからには、とこしえに不確定の問題としてとどまることであろ  
25 う。それというのも、これは我れらが種族に固有の事実であるが、当時、余の眼には膜が  
26 かかっていたからである。

27 (E. T. A. ホフマン『牡猫ムルの人生観』第一巻)  
28

29 語り手のワガハイは、原因不明の悲哀を不十分に暗示する。  
30

31 何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。

(夏目漱石『吾輩は猫である』一)  
32  
33

34 「泣いていた」理由は不明だ。  
35

36 いま憶いだそうとしてもまったく暗黒の追憶にしかすぎず、ただぼんやりと余のまわ  
37 りで唸るような、鼻息のような音色がひびいていたことだけを記憶しているが、あれは長  
38 じてのち余じしん、憤怒に身を圧せられると、ほとんど我が意に反しておのずとわきおこ  
39 ってくる声とおなじものである。

40 (E. T. A. ホフマン『牡猫ムルの人生観』第一巻)  
41

42 ムルは、まだ泣いていない。  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4130 「書生」はダミー  
4 4131 泣き真似

5  
6 ムルは自信過剰だが、ワガハイは強がりの弱虫だ。

7  
8 何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩  
9 はここで始めて人間というものを見た。然もあとで聞くとそれは書生という人間中で一  
10 番<sup>どうあく</sup>獰悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕<sup>つかま</sup>えて煮て食うという話  
11 である。

12 (夏目漱石『吾輩は猫である』一)

13  
14 ワガハイは、「書生」によって捨てられる。「書生」は誰かに命じられたのだろう。

15  
16 それよりももっと明瞭に、しかもかなりはっきりと意識して憶いだせるのは、じつに窮  
17 屈な容器のなかに閉じこめられていたことで、身のまわりの壁は柔らかく、息をつぐこと  
18 さえかなわず、苦しさと不安に哀れっぽい悲鳴をあげたものである。なにものがその容  
19 器のなかに手をつっこんで、余のからだをじつに荒<sup>ママ</sup>らっぽく掴むのを感じたが、これが契  
20 機で、自然が余に授けてくれた最初の驚異的な力を自覚し、その力を実地にもちいる機会  
21 をえたのであった。余は、もしかもしゃに毛でおおわれた前脚から尖ったしなやかな爪を  
22 とっさに突きだすと、余のからだを掴んだやつにその爪のさきを埋めてやったものであ  
23 るが、のちになって教わったところでは、そいつは人間の手というやつにほかならなかつ  
24 た。この手というのが、容器のなかから余をひきずりだすなり投げつけた、かとおもった  
25 とたんに、顔の両がわを二つほど烈しく殴られたのであるが、なにある殴打されたその  
26 あたりには、ただいまでは憚りながら堂々たる、と言ってもよろしい、立派な髭がはえて  
27 いる。その手が二つ三つ余に平手打ちをくらわせたというのも、いまにして判断がつくの  
28 だが、余の前脚の筋肉が躍動したあまり傷をうけたがためであった。余としてはこのとき  
29 初めて<sup>モラーリッシュ</sup>道徳上の原因と結果の関係なるものを体験したわけで、まさに道徳的本能に駆ら  
30 れて余はとっさに、爪を出したときとおなじぐらいのすばやさで引っこめたのであった。

31 (E. T. A. ホフマン『牡猫ムルの人生観』第一巻)

32  
33 ムルは、この「人間の手」の持ち主に教育された結果、自信過剰になる。

34  
35 吾輩は池の前に坐ってどうしたらよかろうと考えてみた。別にこれという分別も出な  
36 い。暫く泣いたら書生が又<sup>むかい</sup>迎に来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試みにや  
37 ってみたが誰も来ない。

38 (夏目漱石『吾輩は猫である』一)

39  
40 「どうしたらよかろう」は変。どうしたかったのか。

41 「又<sup>むかい</sup>迎に来て」の「又」は、おかしい。以前にも「来て」いたみたいだ。  
42 この「ニャー、ニャー」は泣き真似だ。先の「ニャーニャー」と違い、いじましい。

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4130 「書生」はダミー  
4 4132 「ニャーニャー」

5  
6 ドイツの教育は厳しい。飴と鞭だ。

7  
8 すでに述べたように、手は再度にわたって余を大地に投げつけた。が、その直後まもなく、手はあらためて余の頭部をつかまえると、地面におかたまりやり押しつけたから、余は口さきをなにやら液体のようなものの中につっこむはめとなったのであるが、さて、自分としてはどうしてそんな気になったものかほとんどわからぬところからすると、どうやら肉体的本能というやつにちがいなかるう、余はその液体を舐めはじめたのである。そうすると、余の身うちには異様な内的快感が勃興してしたのだ。いまならなんなくわかることだが、余が堪能した液体とは甘美きわまるおいしいミルクで、しかも余はおおいに空腹であったから、これをたっぷり飲むうちに、すっかり満腹をおぼえたものである。こうして精神的修業がはじまったのちに肉体的修業が開始されたのであった。

16  
17 (E. T. A. ホフマン『牡猫ムルの人生観』第一部)

18  
19 良くも悪くも、こうした「修業」を経て、ムルは自信を得る。

20  
21 —はじめ余は唸ってばかりいた、が、やがて尻尾をきわめて優美にまるく環に曲げるあの他者には模倣しがたい才能があらわれ、ついで、「にゃあ」というたった一語で喜びも、悲しみも、歓喜や恍惚も、不安も絶望も、要するにありとあらゆる感情や情熱をいずれにせよもっとも多種多様なニュアンスで表現するという、奇蹟とまごう天賦の才があらわれてきたのである。

26  
27 (E. T. A. ホフマン『牡猫ムルの人生観』第一巻)

28  
29 ワガハイには、ごく普通の、しかし、「奇蹟とまごう天賦の才」がない。Nは、五歳児並みの「奇蹟とまごう天賦の才」が死ぬまで習得できなかったはずだ。

30  
31 —気候、祖国、風俗、慣習、こうしたものから受けた印象は、なんと拭いきれぬものであるう、いや、そうしたものこそまさしく、世界の市民を外的にしる内的にしる形成するにあずかって力あるものなのではないか！—いまこの胸に高鳴っている高邁な志、崇高なものへ迫らんとするやみがたい衝動、こうしたものはいずこから余の内面に来たものであろうか。ふしぎとしかいいようのないほど稀有な攀じのぼる技倆といい、このうえもなく大胆にして天才的な跳躍の羨望されてしかるべき技術といい、いったいどこからやってきたものなのか。—ああ！ 余の胸は甘美なる哀愁にみたされている！—生まれ故郷の屋根裏部屋をおもむ憧れの情がはげしくたちさわいでいる！—おお、美しき祖国よ、余は汝にこの涕涙を、この哀愁のこもる歓喜の声、にゃあを捧げよう！

40  
41 (E. T. A. ホフマン『牡猫ムルの人生観』第一巻)

42  
43 Nは、「ニャーニャー」を「にゃあ」に変えるような「修業」ができなかった。

44  
45  
46  
47  
48

- 1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4130 「書生」はダミー  
4 4133 「家族的生活」と父権

5  
6 国語科の問題で、「名前はまだ無い」で改行されている理由は何か」というのを見たこと  
7 がある。答えは、「第一段落の主題は「名前」で、第二段落の主題は「どこで生まれたか」  
8 だからだ」という。大間違い！ 正解は「第一段落の二文は「挨拶」だから」だ。また、第  
9 二段落の主題は「どこで生まれたか」ではない。「書生」だ。

10  
11 白君は先日玉の様な子猫を四足産まれたのである。ところがその家の書生が三日目  
12 にそいつを裏の池へ持って行って四足ながら棄てて来たそうだと。白君は涙を流してその  
13 一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をす  
14 るには人間と戦ってこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々尤の議論と思う。

15 (夏目漱石『吾輩は猫である』一)

16  
17 ワガハイは母と再会しない。ムルは再会する。

18  
19 ———おまえが生まれるとすぐ、おまえの父親は、おまえやおまえの兄弟を食べてしま  
20 いたなどという因果な食欲にとりつかれたんだわ」

21 「かあさん」と、余はまだら猫のことばをさえぎった、「ねえ、かあさん、そんなにま  
22 までしてその嗜好を呪わなくてもいいでしょう。この世でもっとも教養のある民族ですら、  
23 子ども食いという風変わりな食欲を神々なる種族の嗜好としてみとめているぐらいなん  
24 ですからね。

25 (E. T. A. ホフマン『牡猫ムルの人生観』)

26  
27 ワガハイの「書生」は、ムルの「父親」のダミーだ。

28  
29 この書生というのは時々我々をつかまえて煮て食うという話である。

30 (夏目漱石『吾輩は猫である』一)

31  
32 作者は、「家族的生活」と父権の関係について、きちんと考えたくないらしい。

33  
34 子供より親が大事、と思いたい。子供のために、などと古風な道学者みたいな事を殊勝  
35 らしく考えてみても、何、子供よりも、その親のほうが弱いのだ。少なくとも、私の家庭  
36 においては、そうである。

37 (太宰治『桜桃』)

38  
39 〈「思いたい」のに思いきれない「私」は父性愛に満ちている〉とでも暗示したつもりか。  
40 「古風な道学者」なら、「孝、道之美、百行之本也」(『広辞苑』「孝は百行の本」と主張す  
41 るはずだ。「子供より親が大事、と思いたい」の真意は、〈妻には彼女の「子供より」も「親」  
42 である夫「が大事、と思いたい」こんでもらい「たい」〉といったものだ。

43  
44  
45  
46  
47

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 1 0 0 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4 1 4 0 「吾輩は死ぬ」  
4 4 1 4 1 「有名」

5  
6 ワガハイは、幼いころに泣き真似を覚え、語り手に成り上がっても泣き真似を続ける。

7  
8 吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏南無  
9 阿弥陀仏。難有い難有い。

10 (夏目漱石『吾輩は猫である』十一)

11  
12 この場面の聞き手は誰だろう。「太平を得る」は意味不明。

13  
14 おれはそれぎり永久に、<sup>ちゅうう</sup>中有の闇へ沈んでしまった。

15 (芥川龍之介『藪の中』「<sup>みこ</sup>巫女の口を借りたる<sup>しりょう</sup>死霊の物語」)

16  
17 語り手の「おれ」は「死霊」だから、この文は合理的だ。『サンセット大通り』(ワイルダ  
18 ー監督)参照。

19 語り手のワガハイに対応する聞き手の正体は不明だ。

20  
21 吾輩は新年来多少有名になったので、猫ながらちょっと鼻が高く感ぜらるるの<sup>ありがた</sup>は難有  
22 い。

23 (夏目漱石『吾輩は猫である』二)

24  
25 ワガハイの手記を読んだ人たちが作中に実在するらしい。では、その人たちは、〈猫は字  
26 を書ける〉と信じているのだろうか。そうではなからう。だから、この作品は不合理だ。不  
27 合理ではないとすると、苦沙弥がワガハイに成りすまして書いたものを発表したことにな  
28 る。そして、その事実に、語り手のワガハイがまったく触れていないことになる。

29  
30 そこで一瞥してみますというと、このまったく独特で風変りな筆跡にこころ惹かれま  
31 してね、すこし読んでみたんですが、そのうちなぜか自分じしんにもわからぬままに、こ  
32 いつはもしかするとムルの仕業かもしれんという異様な考えが頭にうかんできたのです。  
33 理性、というか、そう、われわれだれひとりとして逃れることのできないある種の生活経  
34 験、そしてこれがまた結局のところ理性にほかならないのですが、要するにその理性なる  
35 ものが、そんな考えは不合理だ、だって猫にはものが書けないのだし、まして詩などをつ  
36 くることはできないのだから、とわたしに言うのですが、それでもわたしはその考えをど  
37 うしても棄てることができなかつたのです。

38 (E・T・A・ホフマン『牡猫ムルの人生観』第一巻)

39  
40 「わたし」は人間で、ムルの書いた「詩」を読んで戸惑っている。一方、ワガハイの呟き  
41 が『吾輩は猫である』という作品の内部の世界において、どのような性質の「もの」なのか、  
42 読者にはまったく想像できない。作者は「理性」を無視している。だから、笑えない。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4140 「吾輩は死ぬ」  
4 4142 「理性」がない

5  
6 Nの小説の聞き手は正体不明だ。

7  
8 最後の審判のらっぱがなんどき鳴ってもいい。私はこの書物を手にして、至高の審判者  
9 のまえにすすみでよう。私は声を高くしていおう。これが私のやったことです。考えたこ  
10 ことです。かつてあった日の姿です。善も悪も同じようにすなおに語りました。わるいから  
11 といって何一つかくさず、よいからといって何一つつけ加えませんでした。たまに何か勝  
12 手な文飾をほどこしたとすれば、それは記憶の喪失でできたすきまをみたくするためにすぎ  
13 なかったのです。真実だったとさとしてこれを真実としたことはありますが、いつわりだ  
14 とさとしてこれを真実としたことは決してありません。私は自分のかつてあった姿をそ  
15 のまま示しました。さげすむべき、いやしい人間であったときは、そのように。善良で、  
16 寛大で、けだかい人間であったときは、またそのように。永遠の存在である神よ、私はあ  
17 なた自身が見られたままに、私の内面をさらけだしたのです。私のまわりに無数の同じ人  
18 間の仲間をよせあつめ、彼らに私の告白をきかせ、私の卑劣さに声をあげ、私のあさまし  
19 さに顔を赤らめさせてください。そしてこんどは、彼らの一人一人に、あなたの玉座のも  
20 とに、私と同じ誠実さでその心をうちあけさせてください。そして、ただの一人でも、あ  
21 なたにおかって、「私はこの男よりすぐれています」といえるものがあつたら、いわせて  
22 ください。

23 (ジャン-ジャック・ルソー『告白録』巻一)

24  
25 Pが「審判者」なら、彼は「遺書」を評価すべきだ。そのために、彼はP文書を再開する  
26 義務がある。ところが、作者はP文書の再開を避けた。なぜか。

27  
28 私は私の過去を善悪ともに他の参考ひとに供する積りです。然し妻だけはたった一人の例  
29 外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないので。妻が己れの過去に対し  
30 てもつ記憶を、なるべく純白マフに保存して置いて置マフいて遣マフりたいのが私の唯一けいいつの希望なのですか  
31 ら、私が死んだ後あとでも、妻が活着あている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密と  
32 して、凡てを腹の中にしまマフって置いて下さい

33 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十六)

34  
35 「過去」が〈前歴〉という意味なら、それは「ふつう、人に知られたい事柄について  
36 用いる」(『類語例解辞典』303-01)から、「善」という言葉にそぐわない。だから、「過去」  
37 は意味不明。「他ひと」つまりRは、Qと重なる。Sは「遺書」をPに送って死ぬ「積り」だか  
38 ら、「他ひと」に発信する余裕はない。「積り」になれるわけがない。「参考」にするかどうかは、  
39 「他た」の決めること。僭越。「供する積り」は〈あなたを介して「供する積り」〉の略か。  
40 「純白に保存して」は意味不明。だから、「希望」は不可解。この文の趣旨は、「妻の記憶  
41 に暗黒な一点を印いんするに忍びなかったから」(下五十二)などと同じらしいが、「暗黒な一点」  
42 の具体例は不明。P文書の語りの時点では、静は生存している。語りの場は「秘密」だ。

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4140 「吾輩は死ぬ」  
4 4143 口封じ

5  
6 『吾輩は猫である』には一貫性がないように思える。

7  
8 猫の視点から人間世界を見るという奇抜な着想による作品。語り手の飼い主である苦  
9 沙弥（くしゃみ）先生の書齋に集まる美学者の迷亭、物理学者の寒月ら、また俗物の実業  
10 家夫人など、戯画化された登場人物の様子と、その取りとめもない談論を描く。文明批評  
11 を軽やかな文体にのせた、知的ユーモアにあふれる風刺小説。

12 (『日本歴史大事典』「吾輩は猫である」佐藤泉)

13  
14 「人間世界」は意味不明。「人間」以外の猫のことも、多く話題になっている。しかも、  
15 両者は影響し合っている。ワガハイの猫としての成長と苦沙弥の絶望の深化が並行してい  
16 るのだ。ワガハイの死は事故だが、作者は「先生」どもが精神的な袋小路に入ったからワガ  
17 ハイを殺したのだろう。ただし、企画倒れだから、わかりにくい。「奇抜」ではない。『牡猫  
18 ムルの人生観』のパクリだ。他にも多くの書物から陰に陽に引用されている。それらをこと  
19 ごとく点検することは、私などには不可能だ。つまり、独創性を計量することは、私にはで  
20 きない。誰にできたのか。

21 「語り手の飼い主」は不適切。〈語られるワガハイの「飼い主」〉だ。ただし、彼は「飼い  
22 主」らしいことをしていない。ムルの「師匠」とは大違いだ。「とりとめもない談論」と思  
23 うのなら、小説を読む能力がかなり不足している。本筋はあるのだ。ただし、それは隠蔽さ  
24 れている。

25 「文明批評」は誤読。あるいは、「文明」も「批評」も意味不明。「批評」になっていない。  
26 どんなに甘く読んでやっても、「書齋」派の与太話だ。隠蔽された物語の存在に気づかない  
27 から、「とりとめもない談論」と誤読してしまうわけだ。「軽やかな文体」ではない。むしろ、  
28 重苦しい。劇団ひとりの台詞さえ、佐藤は「軽やかな文体」と評するのかもしれない。「知  
29 的ユーモア」ではなく、書生気分の抜けない「先生」どものみっともない雑言だ。「風刺小  
30 説」に偽装された不安と怨恨の露呈。

31  
32 風刺であるためには、対象に対して距離をとり、憤りを抑制して表現する必要がある。  
33 この独特な態度こそが風刺の本質であり、その表現は対象の誇張的変形を伴い、機知を示  
34 すことが多い。

35 (『日本大百科事典(ニッポニカ)』「風刺」佐々木健一)

36  
37 「モリエールの『人間嫌い』のアルセストやスウィフトのガリバーのように、最後には社  
38 会から疎外されるという形で否定される風刺の主体もある」(『ニッポニカ』「風刺」)とい  
39 うことだが、ワガハイは「疎外される」のではない。「先生」どもの代わりに死ぬのだ。

40 『ころ』も同様だ。Sは誰かに「疎外される」のではない。疎外されているような妄想  
41 を抱いて自殺を夢見ている。だが、真相は逆で、Sは実際に疎外されているはずだ。彼は口  
42 封じのために、作者に殺された。ただし、読者にはどうとも決めかねる。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4150 「太平」を求めて  
4 4151 喫茶去

5

6 「吾輩は猫である。名前はまだ無い」は出会いの「挨拶」で、「吾輩は死ぬ。死んで太平  
7 を得る」は別れの「挨拶」だ。「名前」は〈「太平」を得た人に与えられる「名前」〉のあまり  
8 にも不当な略だろう。いわば戒名だ。

9

10 「まだある。苦沙弥先生御茶でも上がれと云う句がある」

11 「アハハハ御茶でも上がればきびし過ぎる。それで大に君をやり込めた積りに違ない。  
12 大出来だ。天道公平君万歳だ」と迷亭先生は面白がって、大いに笑い出す。主人は少から  
13 ざる尊敬を以て反復読誦した書翰の差出人が金箔つきの狂人であるを知ってから、最前  
14 の熱心と苦心が何だか無駄骨の様な気がして腹立たしくもあり、又瘋癲病者の文章を左  
15 程心労して翫味したかと思うと恥ずかしくもあり、最後に狂人の作にこれほど感服する  
16 以上は自分も多少神経に異状がありはせぬかとの疑念もあるので、立腹と、慚愧と、心配  
17 の合併した状態で何だか落ち付かない顔付をして控えている。

18

(夏目漱石『吾輩は猫である』九)

19

20 「まだある」は、〈天道公平から来た「書翰」には「まだ」他の「句」が「ある」〉の略。  
21 迷亭が笑う理由は不明。「御茶でも上がればきびし過ぎる」は、むずかし過ぎる。  
22 作者は、苦沙弥の「神経」をどんなものと設定しているのだろう。

23

24 禅語。お茶でも飲んで来い。もともと相手を叱咤する語であるが、後には「お茶でも召  
25 し上がれ」の意に解され、日常即仏法の境地を示す語と解された。

26

(『広辞苑』「きっさ - こ【喫茶去】」)

27

28 迷亭によれば、天道公平は「世人が迷ってるから是非救ってやりたいと云うので、無暗に  
29 友人や何かへ手紙を出すんだね」(『吾輩は猫である』九)とのこと。「救ってやりたい」の  
30 真意は〈「やり込めた積り」になりたい〉だろう。天道公平の救済は、「軽蔑」のための演技  
31 らしい。しかも、そのことを相手に知らしめようという意図があるようだ。彼は「狂人」を  
32 装った皮肉屋のつもり、つまり佯狂のふりの、やはり「狂人」だろう。

33

34 天道公平の本名は「立町老梅」(『吾輩は猫である』九)だ。おっちょこちょいのくせに落  
ち付いているふりをする。青年Sに似ている。彼は、お節介な「狂人」だった。

35

36 もし心神が不快なときは、必ず茶を喫するがよい。心臓の調子を整えれば、万病を除き  
37 治すことになるのである。心臓の調子のよいときは、他の諸臓に病いがあつたとしても、  
38 そんなに痛むものではない。

39

(栄西『喫茶養生記』巻の上)

40

41 苦沙弥は、天道公平と茶を飲むべきだった。「狂人」の言葉でも、その知識までが間違っ  
42 ているとは限らない。間違っているとしたら、栄西が間違っていることになる。

43

44

45

46

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4150 「太平」を求めて  
4 4152 「大和魂」

5  
6 『吾輩は猫である』の隠蔽された主題は、被愛願望だ。満たされない性的欲求不満が文明  
7 批評に偽装されているので、その主張は不明瞭になっている。

8 苦沙弥やワガハイなどが、ちょっとしたことで怒ったり笑ったりするのは、被愛願望が満  
9 たされないことによる不安を紛らわせるためだ。そのときに怒りや笑いの対象に据えるの  
10 は、近代社会でも、西洋でも、俗物でも、異性でも、何でもかまわない。八つ当たり。

11  
12 「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが、誰も遇った  
13 者がない。大和魂はそれ天狗の類か」

14 (夏目漱石『吾輩は猫である』六)

15  
16 苦沙弥のこの詩のようなものを、文明批評などと誤読して威張る人がいる。だが、単純な  
17 大和魂批判なら、江戸時代からやられている。近代人の仕事ではない。

18  
19 事に迫りて死を軽んずるは、日本だましひなれど多くは慮の浅きに似て、学ざる  
20 の悞なり。

21 (曲亭馬琴『椿説弓張月』後篇卷之四)

22  
23 苦沙弥の「大和魂」は、「霊か相思の烟のたなびき」(『吾輩は猫である』六)という詩に  
24 対するものだから、恋愛の比喩なのだ。ただし、文芸的な比喩にはなっていない。

25  
26 ほんとうの恋は、幽霊と同じで、誰もがその話をするが見た人はほとんどいない。

27 (ラ・ロシュフーコー『箴言集』七六)

28  
29 「誰も愛の国を見たものはない」(康珍化作詞・佐藤隆作曲『桃色吐息』)と高橋真梨子が歌  
30 う。愛する人は「愛の国」が存在しないことを知っている。愛されたがる人は知らない。

31 Nのほとんどの小説の隠蔽された主題は、満たされない被愛願望とその反動として生じ  
32 る被害妄想だ。Nは遺棄される不安に怯えていた。その不安を紛らわすために、怒り、笑う。  
33 躁になり、鬱になる。正体不明の加害者に怯え、正体不明の保護者の到来を夢見た。

34 彼の妄想が本格的なものだったら、確かな意味のある表現になっていたろう。

35  
36 私の場合 おもに3人の声が聞こえます 野太い男の声 小さな子供の声 甲高い女  
37 の声

38 (木村きこり『統合失調症日記』)

39  
40 誰にでも〈もう一人の自分〉つまりDはいるはずだ。

41 Nの場合、幻聴めいた思考のキャラが仕分けできていないので、妄想としても冗談として  
42 も、筋が通らない。たとえば、迷亭と公平と老梅のキャラが被っている。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4100 笑えない『吾輩は猫である』  
3 4150 「太平」を求めて  
4 4153 「ヴァイオリン」

5  
6 『吾輩は猫である』の作者の企画は混乱している。  
7

8 そんな浮気な男が何故牡蠣の生涯を送っているかと云うのは吾輩猫などには到底分ら  
9 ない。或人は失恋の為だと云うし、或人は胃弱のせいだとも云うし、又或人は金がなくて  
10 臆病な性質だからだとも云う。

11 (夏目漱石『吾輩は猫である』二)

12  
13 〈苦沙弥は「失恋」のせいでネガティブになった〉といった物語があるわけだが、この物  
14 語は語られない。三つの噂話は一本にまとめられる。〈苦沙弥は「ヴァイオリンなどをブー  
15 ブー鳴らしたりする」(『吾輩は猫である』一)と語られる。「ブーブー」は駄目な音だ。「ヴ  
16 ァイオリン」は女体の象徴で、彼は女をよがらせることが苦手らしい。だから、予め「失恋」  
17 をしてしまう。「失恋」の真意は〈女性恐怖〉か。

18  
19 「一昨夜もちょっと合奏会をやりましてね」と寒月君は又話をもとへ戻す。「どこで」  
20 「どこでもそりゃ御聞きにならんでもよいでしょう。ヴァイオリンが三挺とピアノの伴  
21 奏で中々面白かったです。ヴァイオリンも三挺位になると下手でも聞かれるものですね。  
22 二人は女で私の中へまじりましたが、自分でも善く弾けたと思いました」「ふん、そ  
23 してその女というのは何者かね」と主人は羨ましそうに問いかける。

24 (夏目漱石『吾輩は猫である』二)

25  
26 表面的には、「元」に戻したのではない。

27 寒月は、「自分を恋っている女が有りそうな、無さそうな、世の中が面白そうな、つま  
28 らなさそうな、凄いな艶っぽい様な文句ばかり並べて」(『吾輩は猫である』二)いる男  
29 だ。彼に苦沙弥は嫉妬し続ける。だが、その自覚はないようだ。

30  
31 そのうちに総身の毛穴が急にあって、焼酎を吹きかけた毛脛の様に、勇氣、胆力、分  
32 別、沈着などと号する御客様がすうすうと蒸発して行く。心臓が肋骨の下でステテコを踊  
33 り出す。両足が紙鳶のうなりの様に震動をはじめ。これは堪らん。いきなり、毛布を頭  
34 からかぶって、ヴァイオリンを小脇に掻い込んでひょろひょろと一枚岩を飛び下りて一  
35 目散に山道八丁を麓の方へかけ下りて、宿へ帰って蒲団へくるまって寝てしまった。

36 (夏目漱石『吾輩は猫である』十一)

37  
38 寒月の語り。よくわからない話だ。この話を、苦沙弥は寒月にさせまいと、ねちねち、邪  
39 魔をし続ける。その意図は不明。

40 「ヴァイオリン」のせいで「自分を恋っている」化け物が寄ってきた。この体験談は、寒  
41 月の女性恐怖を露呈したものと解釈できる。女性恐怖は苦沙弥とその仲間たちに共通する  
42 ものだ。この話を聞いて苦沙弥の嫉妬が消えたせいか、ワガハイは無用になり、死ぬ。

43  
44  
45

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4200 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4210 「親譲りの無鉄砲」は意味不明  
4 4211 「弱虫」の武勇伝

5  
6 『坊っちゃん』の「五分刈り」が最初に語る武勇伝は奇妙だ。

7  
8 小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそ  
9 んな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を  
10 出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出  
11 来まい。弱虫やーい。と囃したからである。

12 (夏目漱石『坊っちゃん』一)

13  
14 こんな意味不明の文章を読んでわかったつもりになる人は愚かしい。

15 「抜かした」は、「一週間程」だから〈「抜かし」てい「た」〉が適當。

16 「無闇」とは、私は思わない。「二階から飛び降りる事」のできない少年は「弱虫」だ。

17 「理由でもない」は〈「理由」があったわけ「でもない」〉の不当な略。ただし、本当は切  
18 実な「理由」があったのに違いない。その「理由」は隠蔽されている。

19 「新築」と断る理由は不明。「同級生の一人」は、自分を外部から眺めるもう一人の「五  
20 分刈り」つまりDだろう。あるいは、Dの代理人だろう。だから、「五分刈り」は「冗談」

21 と決めつけることができたわけだ。「威張っても」は唐突。真意は〈空威張りしても〉だろ  
22 う。強がり怖がりだ。語り手の「五分刈り」も、聞き手からのツッコミを怖がっている。

23 この武勇伝には落ちがない。たとえば、〈「同級生の一人」は「五分刈り」を「弱虫」と呼  
24 ばなくなった〉といった物語がない。ないのは、彼がDもしくはその代理人だからだ。

25 「五分刈り」は、本当に「弱虫」だった。彼は本性を他人に知られまいと虚勢を張って生  
26 きていた。彼が普通の「弱虫」だったら、他人に甘えたらう。だが、彼は誰かに甘えて拒絶  
27 されたり利用されたりすることを極端に恐れていた。彼は可愛げのない「弱虫」なのだ。

28  
29 「あの飛びおりは、大胆さなどとは関係もないことだ。」

30 と、彼はぶあいそうにいました。

31 「ウリーは、はしごから飛びおりたとき、いつもの彼よりゆうかんだったわけじゃない。  
32 絶望にかりたてられて、あいつは飛びおりたんだ。」

33 「だが、絶望の勇氣というのだってあるぞ。」高等科二年のだれかがさげびました。「そ  
34 れがちがうところだ。はしごから飛びおりるなんて、夢の中でだって考えられないような、  
35 臆病なやつがいくらもいる。たとえどんなに絶望したってだ。」

36 ゼバスチアンは、それにも一理あるというように、うなずきました。

37 (エーリッヒ・ケストナー『飛ぶ教室』第九章)

38  
39 議論はまだ続く。議論が盛りあがるのは、ウリーが可愛げのある少年だからだ。

40 「五分刈り」は、こうした議論の種になったろうか。無理だろう。その理由は二つある。  
41 一つは、「五分刈り」が「同級生」の誰にも愛されていないからだ。もう一つの理由は、日  
42 本に議論をする習慣がなく、議論を構想する能力が作者に不足しているからだ。

43  
44

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 2 0 0 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4 2 1 0 「親譲りの無鉄砲」は意味不明  
4 4 2 1 2 「親譲り」の「親」は誰か

5  
6 語り手の「五分刈り」は嘘をついている。ただし、冗談半分のように偽装している。

7  
8 おやゆず 無鉄砲で子供の時損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び  
9 降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れ  
10 ぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、  
11 いくら威張っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫や一い。と囃したからである。  
12 小使に負ぶさって帰ってきた時、おやじが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜  
13 かす奴があるかと云ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

14 (夏目漱石『坊っちゃん』一)

15  
16 「親譲り」の「親」は誰か。伝説では、「おやじ」だ。その根拠として、「二階位から飛び  
17 降りて腰を抜かす奴があるか」という叱責が挙げられる。しかし、他人に「無鉄砲」を強い  
18 る人が「無鉄砲」とは限らない。「おやじ」が本当に「無鉄砲」なら、自分で飛び降りて見  
19 せたはずだ。「二階」どころか、屋根の上から。

20 「この次は抜かさずに飛んで見せます」という息子の虚勢に対する「おやじ」の反応は語  
21 られていない。だから、「おやじ」が息子に「無鉄砲」を強制したかどうかさえ、不明。

22 「この次」の物語もない。「答えた」で改行され、話題が変わる。聞き手は置いけきぼり  
23 にされている。作者は何をしているのだろう。いらつかない？

24 自己紹介に「無鉄砲」という言葉を用いるのは、おかしい。

25  
26 「向う見ず」は、当人が結果のことをあまり考えないでしている点に重点があり、「無  
27 鉄砲」は、外から見て全く計画性を欠いており、常識外れの行動であるという点に重点が  
28 ある。

29 (『角川類語新辞典』「無鉄砲」)

30  
31 書き出しの文は、二股を掛けたものだろう。

32  
33 I 〈「五分刈り」は「親譲りの無鉄砲」のせいで「損」をする〉と、Dは語る。

34 II 〈「おれ」は「疝性だから」(『坊っちゃん』四)しくじる〉と、「五分刈り」は語る。

35  
36 本文の語り手の「五分刈り」は、IにおけるDの語りを不十分に反復している。つまり、  
37 「五分刈り」は本当に気丈なのか、「弱虫」のくせに強がっているだけなのか、判然としな  
38 いのだ。『坊っちゃん』の語り手は二人いることになる。

39 IIの物語で語られる「五分刈り」は不安だろう。この「疝性」も「神経過敏で激しやす  
40 い性質。また、病的にきれい好きなこと」(『広辞苑』「癩症・癩性」)の二股を掛けている。

41 本文は、皮肉と虚勢が入り混じったまま、意味不明になっている。

42 このように二股を掛けて真相を隠蔽するのが、Nのスタイルだ。

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4200 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4210 「親譲りの無鉄砲」は意味不明  
4 4213 「ろくなものにならない」

5  
6 「親譲り」は「親」の性格とは無関係。「無鉄砲」は「虚勢」といった意味だろう。「親譲  
7 りの無鉄砲」は「五分刈り」の自分語で、「恐ろしい力」の作用を隠蔽しつつ正体不明の聞  
8 き手に伝播するための言葉だろう。「五分刈り」の〈自分の物語〉の主題は恐怖だったはず  
9 だ。『坊っちゃん』は、本当は怖い話だ。

10  
11 どうせ嫌きらなものなら何をやっても同じ事だと思ったが、幸い物理学校の前を通り掛っ  
12 たら、生徒募集の広告が出ていたから、何も縁えんだと思って規則書をもらってすぐ入学の手  
13 続をしてしまった。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起った失策だ。  
14 (夏目漱石『坊っちゃん』一)

15  
16 両親の死後、「五分刈り」は「兄」から手切れ金みたいなものを貰った。それを散財した  
17 のなら「無鉄砲」だろうが、学資に使ったのだから「無鉄砲」ではない。「失策」でもない。  
18 「これ」の指す言葉がない。この「親譲りの無鉄砲」は無意味だろう。  
19 卒業後、「五分刈り」は、「四国辺のある中学校で数学の教師」(『坊っちゃん』一)になる  
20 ように勧められ、引き受ける。「無鉄砲」ではなく、その逆。受身で弱気。

21  
22 尤もつとも教師以外に何をしようと云うあてもなかったから、この相談を受けた時、行きま  
23 しょうと即席そくせきに返事をした。これも親譲りの無鉄砲たが祟ったのである。  
24 (夏目漱石『坊っちゃん』一)

25  
26 「あて」がないまま、遊び人になったのではない。デモシカ先生でも、人から尊ばれる職  
27 に就いたのだから、「無鉄砲」という形容はまったく見当違いだ。  
28 「親譲りの無鉄砲」の真意は〈躰たが悪いので、あてずっぽうで行動するタイプ〉だろう。

29  
30 おやじは些ちともおれを可愛かあいがってくれなかった。母は兄ばかりひいきにしていた。この兄  
31 はやに色ママが白くって、芝居しばいの真似まねをして女形おんながたになるのが好きだった。おれを見る度たびにこ  
32 いつはどうせ碌ろくなものにはならないと、おやじが云った。乱暴で乱暴で行く先が案じられ  
33 ると母が云った。成程なるほど碌なものにはならない。御覧の通りの始末である。行く先が案じら  
34 れたのも無理はない。只ただ懲役ちやうえきに行かないで生きているばかりである。  
35 (夏目漱石『坊っちゃん』一)

36  
37 〈父親が息子を可愛がる〉としたら、その方が変だ。  
38 「母」に限らず、「長男」が重んじられるのは、普通のことだ。  
39 「無鉄砲」は、「兄」の言葉では〈碌ろくなものにならない〉性格〉などと言い換えられる。  
40 「母」の言葉では「乱暴」だ。  
41 誰がどこで「五分刈り」のどんな姿を「御覧」になっているのだろう。  
42 「おやじ」も「懲役ちやうえきに行かないで生きているばかり」の男だったのだろうか。

43  
44  
45  
46

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで

2 4200 本当は怖い『坊っちゃん』

3 4220 養子妄想

4 4221 「駄目だ駄目だ」

5

6 「おやじ」も「無鉄砲」なら、少しは「五分刈り」に同情したのではないか。

7

8 おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖の様に云って  
9 いた。何が駄目なんだか今に分からない。妙なおやじが有ったものだ。

10

(夏目漱石『坊っちゃん』一)

11

12 「何にもせぬ男」は「無鉄砲」だろうか。作文してみよう。

13

14 〈「貴様は」「親譲りの無鉄砲」だから「駄目だ」と、「おやじ」は言った。

15

16 この「親」は「おやじ」自身だろうか。

17 「駄目だ駄目だ」を愛の鞭と解釈する人がいる。そんな人は、核家族を神聖化する『ファ  
18 ミリー・ツリー』（ペイン監督）みたいな愚作に涙するのだろう。

19 「妙な」のは、「おやじ」ではない。語り手の「五分刈り」だ。「何にもせぬ男」は、〈父  
20 親らしいことは「何にもせぬ男」〉のあまりにも不当な略だが、こうした解釈を採用すると、  
21 父親に対する「五分刈り」の怨恨の物語が異様なまでに不足していて、うまくない。語られ  
22 る「五分刈り」は「おやじ」の冷たさに対して平気だったみたいだが、実は逆で、語り手の  
23 「五分刈り」には言いたいことが多すぎて、うまく語れないのだろう。ただし、そうした文  
24 芸的表現になっているわけではない。Nの育ちの悪さの素朴な反映だ。

25 「五分刈り」は、自分の本当の「親」が誰なのか、知らないのだろう。第一次反抗期に、  
26 〈自分は養子だ〉と思った少年は少なくなろう。その頃、親が急に冷たい態度を示すよう  
27 に思えるからだ。こうした思いを〈養子妄想〉と呼ぶことにする。少年は〈いつか本当の親  
28 に会える〉と夢見る。こうした妄想を文芸化したのが〈旅をする子の物語〉だ。典型的なの  
29 が『家なき子』（マロ）だ。『クオレ』（デ・アミーチス）の「母をたずねて三千里」はちょっ  
30 と違う。この作品の主人公である少年は、離れて暮らす実母のことをよく知っているし、  
31 慕ってもいるからだ。『家なき子』のレミは、そうではない。母親に再会しても気づかない。

32

両親の死後、「五分刈り」は「兄」に捨てられる。

33

34 兄はそれから五十円出してこれを序に清に渡してくれと云ったから、異議なく引き受  
35 けた。二日立って新橋の停車場で分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

36

(夏目漱石『坊っちゃん』一)

37

38 「会わない」は、〈会ってくれないし、会いたくもない〉などの不当な略。「五分刈り」の  
39 実母は「清」だった。彼は「無鉄砲」だから疎まれたのではない。庶子だから疎まれたのだ。  
40 疎まれる理由を偽造するために、彼は「無鉄砲」キャラを演じた。

41 というようなのが、養子妄想の物語だ。しかし、妄想ではなかったのかもしれない。親族  
42 の秘密と「五分刈り」の妄想が混交しているような感じだ。

43

44

45

46

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4200 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4220 養子妄想  
4 4222 「おれを製造して」

5  
6 清は「五分刈り」の実母だった。あるいは、彼女は彼の養子妄想に付き合ってくれた。

7  
8 清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真っ直ぐでよい御気性だ」と賞める事が時々あ  
9 った。然しおれには清の云う意味が分からなかった。好い気性なら清以外のものも、もう  
10 少し善くしてくれるだろうと思った。清がこんな事を云う度におれは御世辞は嫌だと答  
11 えるのが常であった。すると婆さんはそれだから好い御気性ですと云っては、嬉しそうに  
12 おれの顔を眺めている。自分の力でおれを製造して誇ってる様に見える。少々気味がわる  
13 かった。

14 (夏目漱石『坊っちゃん』一)

15  
16 清は「五分刈り」を自分にとっての理想の息子として「製造して」いた。産み直し。

17  
18 考えると物理学校などへ這入って、数学なんて役にも立たない芸を覚えるよりも、六百  
19 円を資本にして牛乳屋でも始めればよかった。そうすれば清もおれの傍を離れずに済む  
20 し、おれも遠くから婆さんの事を心配せずに暮される。一所に居るうちは、そうでもなか  
21 ったが、こうして田舎へ来てみると清はやっぱり善人だ。あんな気立てのいい女は日本中  
22 さがして歩行いたって滅多にはない。

23 (夏目漱石『坊っちゃん』七)

24  
25 〈「五分刈り」は清と結婚する〉などと誤読する人があるようだ。

26  
27 すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた帰りに、読みかけた手紙を庭  
28 の方へなびかしたから、仕舞ぎわには四尺あまりの半切れがさらりさらりと鳴って、手を  
29 放すと、向うの生垣まで飛んで行そうだ。おれはそんな事には構ってられない。坊っち  
30 ちゃんは竹を割った様な気性だが、只肝癢が強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に  
31 無暗に渾名なんか、つけるのは人に恨まれるもことになるから、やたらに使っちゃいけない。

32 (夏目漱石『坊っちゃん』七)

33  
34 「初秋の風」は清の生霊だ。「五分刈り」と清の言葉が混じる。二人の思念は一体化した。

35  
36 おれは若い女も嫌ではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。これは  
37 大方清がすきだから、その魂が方々の御婆さんに乗り移るんだらう。

38 (夏目漱石『坊っちゃん』七)

39  
40 誰かに好意を抱くと、その「魂」が似た別人に乗り移る？ 意味不明。

41 この「年寄」は「五十位」(『坊っちゃん』七)で、「五分刈り」には「うらなり君の御母さ  
42 ん」(『坊っちゃん』七)のように思える。「御婆さん」は〈母〉の自分語だろう。

43  
44

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4200 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4220 養子妄想  
4 4223 「御婆さん」と「御母さん」

5  
6 Nは、生まれてすぐ、里子に出された。

7  
8 私は何時頃その里から取り戻されたか知らない。然しじき又ある家へ養子に遣られた。  
9 それは慥私の四つの歳であったように思う。私は物心のつく八九歳まで其所で成長した  
10 が、やがて養家に妙なごたごたが起ったため、再び実家へ戻る様な仕儀となった。

11 浅草から牛込へ遷された私は、生れた家へ帰ったとは気が付かずに、自分の両親をもと  
12 通り祖父母とのみ思っていた。そうして相変らず彼らを御爺さん、御婆さんと呼んで毫も  
13 怪しまなかった。向でも急に今までの習慣を改めるのが変だと考えたものか、私にそう  
14 呼ばれながら澄ました顔をしていた。

15 (夏目漱石『硝子戸の中』二十九)

16  
17 「養母やすは金之助とともに夏目家に引き取られたが、しばらくして戻った」(ちくま文  
18 庫註)という。彼女が清のモデルだろう。「五分刈り」は清が理想的な母であってくれるこ  
19 とを願いながら、実際にはその願いは叶わないとも思っていたろう。つまり、「清の墓」と  
20 いう非現実的な世界においてのみ、その願いはかなうのだ。作者は、この種の夢想のような  
21 物語を隠蔽しつつ、読者にその物語の気分のみを伝達しようとしている。

22  
23 下女は暗い中で私に耳語をするようにこういのである。――

24 「貴君が御爺さん御婆さんだと思っていらっしゃる方は、本当はあなたの御父さんと  
25 御母さんなのです。先刻ね、大方その所為であんなに此方の宅が好なんだろう、妙なも  
26 のだな、と云って二人で話していらしたのを私が聞いたから、そっと貴君に教えて上げ  
27 るのですよ。誰にも話しちゃ不可せんよ。よござんすか」

28 私はその時ただ「誰にも云わないよ」と云ったぎりだったが、心の中では大変嬉しかっ  
29 た。そうしてその嬉しさは事実を教えてくれたからの嬉しさではなくって、単に下女が私  
30 に親切だったからの嬉しさであった。不思議にも私はそれ程嬉しく思った下女の名も顔  
31 もまるで忘れてしまった。覚えているのはただその人の親切だけである。

32 (夏目漱石『硝子戸の中』二十九)

33  
34 この出来事は少年Nの夢だろう。「下女」は養母がモデルだろう。

35 いくつもの物語が、不十分なまま、うねるように重なる。〈祖母は実母だ〉と〈下女は養  
36 母だ〉と〈下女は理想の母だ〉と〈理想の母は実在しない〉と〈母の物語は夢だ〉など。物  
37 語は、他にも考えられる。

38 夢でなくても、「女中」の話がすんなりと呑み込めたのは、すでにいろんな事象から推測  
39 していたことだからだろう。たとえば、兄弟や親戚は、少年Nを実子として扱っていた  
40 のに違いない。実母や養母に対する単純ではない彼の心情や、ありがちな養子妄想などがご  
41 っちゃになってもいるようだ。

42  
43  
44  
45  
46

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 2 0 0 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4 2 3 0 複数の物語を跳び回る  
4 4 2 3 1 「あんまりないが」から「今考へても」

5

6 「初秋の風」場面は、神秘主義的には、〈「五分刈り」の思念と清の魂は一体化した〉と解  
7 釈できる。だが、実際には、〈「五分刈り」の物語〉と〈清の物語〉が混交しただけだ。作者  
8 が複数の物語の統合に成功したわけではない。

9

10 ここで、「あんまりないが」から「今考へても惜しい」までは、坊っちゃんのことばで  
11 ある。しかし、「……失敬なことを聞く。あんまりないが子供の時……」と続けて読んで  
12 ゆくと、「あんまりないが」以下は、坊っちゃんの心の中の動きとしか取れない。「今考へ  
13 ても惜しい」のあとに、「と云つたら」と出てくるので、はじめて今のが坊っちゃんのこと  
14 ばの内容だったかと気付く。

15

(金田一春彦『日本語』「V 文構成から見た日本語」)

16

17 「と云つたら」は、〈「と云つたら」どうかと思いながら黙っていたら〉などがふさわしい。  
18 あるいは、この前の〈「赤シャツは気味の悪るい様に」～「見つともない」〉と同じく、語り  
19 手の「五分刈り」が不特定の聞き手に向かって語った言葉かもしれない。

20

金田一の指摘はまっとうだ、本文はもっと難解だ。

21

22 君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味の悪るい様に優し  
23 い声を出す男である。まるで男だか女だか分りゃしない。男なら男らしい声を出すもんだ。  
24 ことに大学卒業生じゃないか。物理学校でさえおれ位な声が出るのに、文学士がこれじゃ  
25 見つともない。

26

27 おれはそうですねあと少し進まない返事をしたら、君釣をした事がありますかと失敬  
28 な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮒を三匹釣った事がある。それか  
29 ら神楽坂の毘沙門天の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思ったら、ぼち  
30 やりと落としてしまったがこれは今考えても惜しいと云つたら、赤シャツは顔を前の方  
31 へ突き出してホホホホと笑った。何もそう気取って笑わなくても、よきそうなものだ。

31

32 「それじゃ、まだ釣の味は分らんですな。御望みならちと伝授しましょう」と頗る得意  
33 である。だれが御伝授をうけるものか。一体釣や獵をする連中はみんな不人情な人間ば  
34 かりだ。不人情でなくて、殺生をして喜ぶ訳がない。魚だって、鳥だって、殺される  
35 より生きてるほうが楽に極まってる。釣や獵をしなくっちゃ活計がたたないなら格別だ  
36 が、何不足なく暮している上に、生き物を殺さなくちゃ寐られないなんて贅沢な話だ。こ  
37 う思ったが向うは文学士だけに口が達者だから、議論じゃ叶わないと思って、黙ってた。

37

38 すると先生このおれを降参させたと疇違して、早速伝授しましょう。御ひまなら、今日  
39 どうです。一所に行っちゃ。吉川君と二人ぎりじゃ、淋しいから、乗給えとしきりに勧め  
40 る。吉川君と云うのは画学の教師で例の野だいこの事だ。

40

(夏目漱石『坊っちゃん』五)

41

42 Nの小説の語り手たちは、奇妙なスタイルを用いる。複数の物語を跳び回るのだ。

43

44

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 2 0 0 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4 2 3 0 複数の物語を跳び回る  
4 4 2 3 2 妄想的な語り手

5  
6 「釣り」の話で、実際の発言と断定できそうな部分だけを抜き出すと、次のようになる。

7  
8 赤シャツ 君、釣りに行きませんか。  
9 五分刈り そうですなあ。  
10 赤シャツ 君、釣りをしたことがありますか。  
11 五分刈り あんまりないが……。  
12 赤シャツ ホホホホ。それじゃ、まだ釣りの味はわかりません。お望みなら、ちと伝授  
13 しましょう。  
14 五分刈り ——。  
15 赤シャツ 早速伝授しましょう。お暇なら、今日どうです。一緒に行っちゃ。吉川君と二  
16 人ぎりじゃ、淋しいから、来たまえ。

17  
18 「釣り」の話を「五分刈り」が実際に口にしたとは考えにくい。その理由は三つある。

- 19  
20 ① 「五分刈り」が「赤シャツ」の「声」に違和感を覚えたのは、話題が「釣り」だっ  
21 たせいだ。違和感の由来を隠蔽するために、「五分刈り」は声や学歴の話を絡めた。  
22 「赤シャツ」の声について非難するのが無礼だから「五分刈り」は黙っていたのでは  
23 なく、話が飛躍しているから言いだしにくかったのだろう。  
24 ② 「釣」の思い出を「五分刈り」が「赤シャツ」に向かって長々と語るのは不自然だ。  
25 しかも、「小梅」や「神楽坂」という固有名詞は、「赤シャツ」にとって馴染みのない  
26 ものかもしれない。「五分刈り」は自分が江戸っ子なのを自慢しているみたいだ。  
27 ③ 「釣や猟」に対する非難は、「釣り」の思い出が語られた後だと、「赤シャツ」には負  
28 け惜しみのように思えたらう。「議論」の巧拙が問題なのではないはずだ。

29  
30 〈「赤シャツ」は「五分刈り」を魚のように釣る〉という物語が〈「釣」に誘われる〉とい  
31 う物語へと流れる。この流れを作者が意図的にこしらえているようには思えない。

32  
33 「赤シャツ」は「五分刈り」を仲間に引き入れようとして、いつもより「優しい声」で話  
34 しかけた。だから、「五分刈り」は過敏に反応した。しかし、相手の企みが不明なので、学  
35 歴などの話にすりかえた。人に釣られるのを恐れる気分から「子供の時」の不快な思い出を  
36 連想するが、「赤シャツ」の企みを具体的に想像するのは無理だった。そこで、「釣や猟」批  
37 判へと論点をすりかえる。ただし、すりかえを自覚しなくて、「議論じゃ叶なわない」  
38 と、今度は勝敗に話をすりかえた。さらに、「先生このおれを降参させたと疍違いでして」な  
39 どと、腹の中で相手を軽蔑して自己欺瞞を試みる。しかし、まだ逃げ切れない。突如、彼は  
40 妄想の物語の語り手に成り上がり、「吉川君と云いのは」というふうさらに話を変えた。

41  
42 「五分刈り」は、複数の物語を跳び回りながら、妄想的な語り手に成り上がったのだ。

43  
44  
45  
46  
47

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 2 0 0 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4 2 3 0 複数の物語を跳び回る  
4 4 2 3 3 映像化に不向き

5  
6 Nの小説では、登場人物の気分と、語り手の気分と、作者の気分が、複雑に混交している。  
7 だから、複雑すぎる部分を見逃して、単純なように誤読する人が多いのだろう。  
8 「釣」に関する場面を、会話としてベタに起こしてみよう。

9  
10 赤シャツ 君、釣りに行きませんか。  
11 五分刈り 気味の悪いように優しい声を出す男である。まるで男だか女だかわかりやし  
12 ない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じゃないか。物理学校でさえおれ  
13 ぐらいな声が出るのに、文学士がこれじゃみっともない。——そうですねあ。  
14 赤シャツ 君、釣りをしたことがありますか。  
15 五分刈り 失敬なことを聞く。あんまりないが、子供のとき、小梅の釣堀で鮒を三匹釣っ  
16 たことがある。それから神楽坂の毘沙門天の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめ  
17 たと思ったら、ぽちゃりと落としてしまったが、これは今考えても惜しい……  
18 赤シャツ ホホホホ。  
19 五分刈り 何もそう気取って笑わなくっても、よさそうなものだ。  
20 赤シャツ それじゃ、まだ釣りの味はわからんですな。お望みなら、ちと伝授しましょう。  
21 五分刈り そこぶる得意である。だれがご伝授を受けるものか。いったい釣りや猟をする  
22 連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくて、殺生をして喜ぶわけがない。魚だ  
23 って、鳥だって殺されるより生きているほうが楽に決まっている。釣や猟をしなくっちゃ活  
24 計がたたないなら格別だが、何不足なく暮らしているうえに、生き物を殺さなくちゃ寝られ  
25 ないなんて贅沢な話だ。  
26 赤シャツ ——  
27 五分刈り 文学士だけに口が達者だから、議論じゃ敵わない。  
28 赤シャツ 降参させた。——早速伝授しましょう。お暇なら、今日どうです。一緒に行っ  
29 ちゃ。吉川君と二人ぎりじゃ、淋しいから、来たまえ。  
30 五分刈り ——吉川君というのは画学の教師で例の野だいこのことだ。

31  
32 変だけど、こういう会話だってありうる。語り手の「五分刈り」に対応する聞き手がこん  
33 な会話を聞いたように勘違いしても、おかしくはない。ただし、この場合、「五分刈り」は  
34 世間知らずの駄々っ子で、「赤シャツ」は懐の広い苦勞人になってしまう。  
35 文豪伝説の信者は、「五分刈り」を純真な男と見なすのだろう。だが、そうした印象は誤  
36 読の産物なのだ。この印象は、〈実際には「赤シャツ」の前で小さくなっていた「五分刈り」〉  
37 と〈語られる「五分刈り」の空想の世界で空威張りをしていた「五分刈り」〉を足して2で  
38 割ったものだ。語り手の「五分刈り」は、〈「五分刈り」は卑怯だ〉と〈「五分刈り」は大胆  
39 だ〉の二種の物語に二股をかけている。〈卑怯の物語は現実で、大胆の物語は空想だ〉とい  
40 った仕分けは、誰にもできないはずだ。現実味がないのとは違う。  
41 『坊っちゃん』を映像化しても成功しない。ありえたはずの出来事を作者が隠蔽している  
42 からだ。『こころ』も、同様。Nの小説のどれもが映像化に不向きだ。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4200 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4240 俳文のようなもの  
4 4241 狂気と自虐

5  
6 『坊っちゃん』は意味不明なのだが、定説では正反対だ。

7  
8 単純なプロットにふさわしく、文体も畳み込むようなリズムを最後まで失わない。江戸  
9 っ予らしい俠気（きょうき）と諧謔（かいぎやく）にあふれた佳作で、南国の太陽を思わ  
10 せるさわやかな読後感が、いまなお多くの読者を集めている。

11 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「坊っちゃん」三好行雄)

12  
13 「文体も畳み込むような」のは、「単純なプロット」すらないのをごまかすためだ。

14  
15 E. M. フォースターの定義（『小説の諸相』1927）によれば、物語や寓話の出来事が時間  
16 の順序通りに並べられているのに対して「因果関係を意識して出来事を組立てている」も  
17 のとされる。

18 (『ブリタニカ国際大百科事典』「プロット」)

19  
20 「俠気（きょうき）と諧謔（かいぎやく）」のように誤読できるのは、語り手の「五分刈  
21 り」の〈狂気と自虐〉の露呈だ。『坊っちゃん』の内部の世界の出来事の多くは、語られる  
22 「五分刈り」の妄想の反復だろう。ただし、そのような文芸的表現になってはいない。だから、  
23 作者が妄想的なのだろう。「南国」なら、土佐だろう。「太陽を思わせる」なんて、ハワ  
24 イアンかよ。〈読後感が〉～「読者を集めている」は日本語になっていない。ひどいもの  
25 だ。三好は悪文家。本当にひどいのは、こんな悪文を事典に載せてしまう編集者だ。また、  
26 この種の定説を真実のように垂れ流す教師だ。そして、教師に媚びる生徒だ。

27 『坊っちゃん』の本文は、少なくとも次の三つの物語の層からできている。

- 28  
29 I 登場人物である清が「五分刈り」に語った〈「坊っちゃん」の物語〉  
30 II 作中の「五分刈り」が自分自身に対して語りつつある〈「おれ」の物語〉  
31 III 語り手の「五分刈り」が誰にともなく語っている〈「坊っちゃん」の物語〉

32  
33 この三種の物語のどれもが、始まりもなく、終わりもない。どれかの物語が行き詰まると、  
34 別の物語へジャンプする。ある物語が別の物語の原因になるのでもなく、結果になるのでも  
35 ない。糊代みたいのものもない。作者は、この三種の物語を仕分けできない。いや、仕分けし  
36 たくないのだろう。

37 「五分刈り」は清の拵えてくれた〈「坊っちゃん」の物語〉の内部の世界で生きようとし  
38 た結果、実社会で失敗してしまう。失敗したのは、本来は清が語り手である〈「坊っちゃん」  
39 の物語〉を彼自身が作中で語り始めたせいだ。つまり、清の期待するマザーズ・ボーイ（I）  
40 になろうとするのではなく、人々から尊敬される英雄（III）になろうとした。ところが、す  
41 でに誰かに愛されているつもりの男（II）を演じてしまった。恥ずかしい男だ。こうした真  
42 相を作者は読者に対して隠蔽している。なぜかって？ 恥ずかしいからだよ。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4200 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4240 俳文のようなもの  
4 4242 鏡像としてのD

5  
6 「釣り」に誘われたとき、「五分刈り」は〈「赤シャツ」個人に対する苦手意識〉と〈「釣  
7 り」に対する苦手意識〉を混同してしまう。そして、「釣り」の思い出を語りだす。このと  
8 き、「五分刈り」は、「赤シャツ」に対して、〈「釣り」の誘いを断るのは「釣り」が苦手だから  
9 であって、「赤シャツ」が苦手だからではない〉という虚偽の暗示を試みたことになる。  
10 偽装が目的だから、結論は出にくい。「五分刈り」は〈「赤シャツ」は不当な方法で「五分刈  
11 り」に勝つ〉という話をでっち上げる。空想の「議論」に負けた「五分刈り」は、自分が「野  
12 だいこ」の同類になったように感じる。そのとき、両者を区別するために、何と、「赤シャ  
13 ツ」が「野だいこ」の話を持ち出してくれる。作者は無節操だ。

14 語り手の「五分刈り」は、〈「五分刈り」は愛すべき男だ〉という物語の気分を聞き手に伝  
15 達しようとしている。勿論、気分だけだ。作者は、この物語の真偽が問えないように工夫し  
16 ている。読者は、作者に騙されなければならない。

17 「山嵐」は「赤シャツ」と闘い、「五分刈り」は「野だいこ」と闘った。彼らは別々の敵  
18 と闘ったのだ。だから、その後、「五分刈り」と「山嵐」は交際していない。

19  
20 野だは大嫌だ。こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈めちまう方が日本の為だ。赤シ  
21 ャツは声が気に食わない。

22 (夏目漱石『坊っちゃん』六)

23  
24 「野だ」は「野だいこ」のこと。「こんな奴」は〈あんな「奴」〉が適当だが、〈「こんな」  
25 自分に似た「奴」〉の異様な略か。一方、「赤シャツ」に対する非難は甘い。

26 なぜ、「五分刈り」は「野だいこ」に殺意を抱くのか。「山嵐」との関係における自分が「野  
27 だいこ」に似ているからだ。子分あるいは弟分。彼は「野だいこ」的自分を「海の底」つま  
28 り彼自身の潜在意識に「沈めちまう」ことにした。ただし、作者がそうした文芸的な表現を  
29 試みているのではない。だから、『坊っちゃん』に確かな意味はない。

30 「野だいこ」は、「五分刈り」のDの代理だ。

31

32 親類のものから西洋製のナイフを貰って綺麗な刃を日に磨いて、友達に見せていたら、  
33 一人が光る事は光るが切れそうもないと云った。切れぬ事があるか、何でも切って見せる  
34 と受け合った。そんなら君の指を切ってみろと注文したから、何だ指位この通りだと右の  
35 手の親指の甲をはずに切り込んだ。

36 (夏目漱石『坊っちゃん』一)

37

38 「親類のもの」は登場しない。「一人」は、少年「五分刈り」のDもしくはその代理だ。  
39 「西洋製」は「五分刈り」に不釣り合い。語り手「五分刈り」はそのことを隠蔽している。

40 「五分刈り」は、〈君の指を「切って」見せる〉と、逆振じを食わせるべきだった。相手  
41 は「切れぬ」と主張しているのだから、拒否できまい。「五分刈り」が左利きでないのなら、  
42 「右の手」は鏡に映った自分の〈左の手〉かもしれない。

43

44

45

46

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4200 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4240 俳文のようなもの  
4 4243 聞き手不在

5  
6 『坊っちゃん』の語り手と聞き手の関係は不明瞭だ。

7  
8 今日清の手紙で湯に行く時間が遅くなった。  
9 (夏目漱石『坊っちゃん』七)

10  
11 聞き手が不特定多数ならば、「今日」は〈この日〉などでなければならない。

12  
13 きのう着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寐ている。  
14 (夏目漱石『坊っちゃん』二)

15  
16 これは「五分刈り」が書いた清への手紙の一部だ。だから、「きのう」は悪くない。ただ  
17 し、これを読む清にとって、「きのう」はわかりづらい。「きのう着いた」は、〈「きのう着い  
18 た」ばかりなのに、おれはもう手紙を書いてやっているのだぞ〉みたいな文の省略らしい。

19 先の「今日」の文の語り手である「五分刈り」は、手紙の文体で語っているみたいだ。で  
20 は、語り手の「五分刈り」に対応する聞き手は清か。そんなはずはない。彼女はすでに「死  
21 んで」(『坊っちゃん』十一) いるからだ。あるいは、聞き手の清は死霊だろうか。だったら、  
22 『坊っちゃん』は怪談だ。

23 『吾輩は猫である』や『草枕』の聞き手も、読者には想像できない。『こころ』のP文書  
24 の聞き手Qも、読者に想像できない。文芸的語りではなく、主人公の妄想みたいだ。

25  
26 さっきから松原を通ってるんだが、松原と云うものは絵で見たよりも余っ程長いもん  
27 だ。何時まで行っても松ばかり生えていて一向要領を得ない。

28 (夏目漱石『坑夫』)

29  
30 主語は「自分」だ。聞き手は、不明というより、不在。俳文のようなものだ

31  
32 それは二十世紀の新しい小説様式である、「意識の流れ」のスタイルに近似している。  
33 (吉田精一『『坑夫』解説 独創的な実験小説』\*)

34  
35 「近似」は怪しい。『坑夫』の文体を「意識の流れ」と言いたがる人は少なくない。だが、  
36 〈でたらめ〉と言っても同じことだ。ツイートの〈なう〉と変わらない。

37  
38 文学で、常に変化する意識を動的な流れとして描写する手法。  
39 (『広辞苑』「意識の流れ」)

40  
41 意味不明。  
42 『浮雲』(二葉亭四迷)の文三の独白だって、「意識の流れ」と言いたければ言える。

43  
44 \*『夏目漱石全集4』(ちくま文庫)所収。

45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4200 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4250 「うらなりとはなんのことか」  
4 4251 「しろうるり」

5  
6 人は、意味などあるはずもない自然現象にも意味を読み取るものだ。この癖が高じると、  
7 発信者が無意味なものとして表現している言葉にも意味を読み取ろうとするようになる。  
8

9 この僧都、或法師<sup>あるほふし</sup>を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何物ぞ<sup>なにもの</sup>」と、人  
10 の問ひければ、<sup>と</sup>「さる物を我も知らず。若しあ<sup>も</sup>らましかば、この僧<sup>そう</sup>の顔<sup>かほ</sup>に似てん」とぞ言  
11 いひける。

12 (吉田兼好『徒然草』第六十段)

13 ある辞書は、「しろうるり」を「白うるり」と表記している。

14 (徒然草の話をふまえて)江戸時代、正体の知れないもの、また、あやしげな者などの  
15 たとえ。

16 (『広辞苑』「白うるり」)

17 「しろ」に関する同様の説。

18 「しろ」は、白であろうが、「うるり」は不明。盛親もわからずにあだ名しているのでは  
19 ない。

20 (安良岡康作『徒然草全注釈』)

21 別の辞書は、さらに暴走する。

22 白い瓜のように色白で面長な顔のことか。

23 (『日本国語大辞典』「白うるり」)

24 どうして「うり」が「瓜」なのか。〈瓜〉説に拘りたいのなら、〈「るり」→り〉と言ひ張  
25 ればよかろう。「(オランダ語風の発音)⇒ペリー」(『広辞苑』「ペルリ」)という例がある。

26 瓜を二つに割った形がそっくりなところから、兄弟などの容貌が甚だよく似ているこ  
27 とにいう。

28 (『広辞苑』「瓜二つ」)

29 「この僧の顔に似てん」という言葉から〈瓜二つ〉を連想し、それから離れられなくなっ  
30 たのだろうか。だったら、そのように書き足してもらいたいものだ。

31 「うるり」は「うるりこ(細魚)」(『日本国語大辞典』「うるり」)の略でよかろう。〈うる  
32 りこ〉は「あみ(醬蝦)の古名」(『日本国語大辞典』「うるりこ」)だから、「しろうるり」  
33 は〈白細魚〉でいいのだ。冗談だよ。

34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4200 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4250 「うらなりとはなんのことか」  
4 4252 「うらなり」は自分語

5  
6 「マドンナ」の婚約者だった古賀のあだ名は「うらなり」だ。

7  
8 それから英語の教師に古賀とか云う大變顔色の悪<sup>ママ</sup>い男が居た。大概の顔の蒼<sup>あお</sup>い人は  
9 瘡<sup>やせ</sup>てるもんだがこの男は蒼くふくれている。昔し小学校へ行く時分、浅井<sup>ママ</sup>の民<sup>ママ</sup>さんと云う  
10 子が同級生にあったが、この浅井のおやじがやはり、こんな色つやだった。浅井は百姓<sup>ひやくしやう</sup>  
11 だから、百姓になるとあんな顔になるのかと清に聞いてみたら、そうじゃありません、あ  
12 の人はうらなりの唐茄子<sup>とうなす</sup>ばかり食べるから、蒼くふくれるんですと教えてくれた。それ以  
13 来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食った酬<sup>むくい</sup>だと思う。この英語の教師  
14 もうらなりばかり食<sup>ちが</sup>ってるに違<sup>ちが</sup>ない。尤もうらなりとは何の事か今<sup>もっ</sup>以て知らない。清に  
15 聞いてみた事はあるが、清は笑って答えなかった。大方清も知らないんだらう。

16 (夏目漱石『坊っちゃん』二)

17  
18 「うらなり」は「小振り」(『広辞苑』「うらなり【末生り・末成り】」)だから、「ふくれて  
19 いる」というのは不可解。「顔色の青白い元気の無い人のたとえ」(『広辞苑』「うらなり」)  
20 なら、〈末生りの瓢箪〉というのが普通だらう。

21  
22 人をののしることば。容貌の醜いこと、間がぬけていることなどにいう。

23 (『日本国語大辞典』「唐茄子」)

24  
25 「唐茄子<sup>とうなす</sup>」は、ぶよぶよに「ふくれて」いない。「うらなりの唐茄子<sup>とうなす</sup>ばかり食べるから、  
26 ふくれるんです」という伝説があったのだろうか。

27 普通の意味での「うらなり」がどういうものか、「五分刈り」が知らないはずはなかろう。  
28 彼は〈清のいう「うらなり」の意味は普通のとは違〉と考えているのだらう。つまり、〈清  
29 のいう「うらなりの唐茄子<sup>とうなす</sup>」は「蒼くふくれ」たものだらう〉と、漠然と受け取っているよ  
30 うだ。だから、「うらなりとは何の事か今以て知らない」や「大方清も知らないんだらう」  
31 という話になるのだらう。よくわからない。

32  
33 きざでさらわれ者の若旦那がくさった豆腐を知ったふりをして酢豆腐だというおかし  
34 さに取材。さげは拍子落ち。別題「ちりとてちん」。

35 (『日本国語大辞典』「酢豆腐」)

36  
37 酸っぱい豆腐があるのだろうか。あるとしよう。しかし、若旦那の試食した「酢豆腐」は、  
38 きちんとした食品や料理ではない。この「酢」は〈饘〉が適当だ。

39 「うらなり」の「うら」は、〈末〉とは書かないのかもしれない。〈裏〉か。「うらなり」  
40 は、「五分刈り」の空想する清の自分語だらう。作者は、〈自分語を共有する演技によって親  
41 密さが増す〉というルールを暗示しているようだ。ちなみに、「赤シャツ」その他の「渾名<sup>あだな</sup>」  
42 も清だけに知らせたものらしい。

43  
44  
45  
46

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 2 0 0 本当は怖い『坊っちゃん』  
3 4 2 5 0 「うらなりとはなんのことか」  
4 4 2 5 3 自分語の共有演技

5  
6 作家以前のNは文学を研究しているつもりでいた。

7  
8 凡そ文学的内容の形式は(F + f)なることを要す。Fは焦点的印象又は観念を意味し、  
9 fはこれに附着する情緒を意味す。されば上述の公式は印象又は観念の二方面即ち認識  
10 的要素(F)と情緒的要素(f)との結合を示したるものと云ひ得べし。吾人が日常経験  
11 する印象及び観念はこれを大別して三種となすべし。

12 (一) Fありてfなき場合即ち知的要素を存し情的要素を欠くもの、例へば吾人が有す  
13 る三角形の観念の如く、それに伴ふ情緒さらにあることなきもの。

14 (二) Fに伴ふてfを生ずる場合、例へば花、星等の観念に於けるが如きもの。

15 (三) fのみ存在して、それに相応すべきFを認め得ざる場合、所謂“fear of  
16 everything and fear of nothing”《何もかもが怖いとか何も怖くないとかい  
17 う感情》の如きもの。即ち何等の理由なくして感ずる恐怖など、みなこれに属す  
18 べきものなり。

19 (夏目漱石『文学論』「第一編 文学的内容の分類 第一章 文学的内容の形式」)

20  
21 「内容の形式」は困る。〈「三角形」に「情緒」がなく、「花、星等」に「情緒」がある〉  
22 なんて、おかしい。「吾人の心中には底なき三角形あり、二辺並行せる三角形あるを奈何せん  
23 (N『人生』)という述懐をいかんせん。

24 (二)が普通。(一)は特殊。(三)は意味不明。

25  
26 「甘い」にも「白い」にも、それが味覚や視覚とはまったく別種の感覚領域に転用され  
27 ても通用するだけのプラス・アルファが、つまりこれらの表現をそのまま他の感覚領域に  
28 移しかえても変化しないような、いいかえれば、「甘い」がもはや味覚のことでなくなり、  
29 「白い」がもはや視角のことでなくなっても、それ自身は同一のままにとどまりうるよう  
30 な、なにかの感触がある。この感触にもとづいて考えた場合には、ふつうは相互に比較し  
31 たり区別したりできないはずの「甘い」と「白い」とを、共通の基盤の上で比較し、区別  
32 することができることになる。

33 (木村敏『異常の構造』「3 常識の意味」)

34  
35 〈「別種の感覚領域に転用され」る〉というのは、木村によれば、〈あのヴァイオリンの音  
36 色が「甘い」〉などという場合だ。しかし、「なにかの感触がある」とは、私には思えない。  
37 味覚の場合、砂糖を足せば甘さは増える。聴覚の場合、どうすれば甘さが増えるのだろう。

38 〈甘い音色〉に「通用するだけ」の「共通の基盤」はないのではないか。ある音を聞いて「甘  
39 い」と表現する人が複数いたとしても、その人たちの感じが同質であるかどうか、確かめよ  
40 うがない。脳を調べて似た反応が出たとしても、だからどうだといった判断はできまい。

41 「五分刈り」に与る「うらなり」というFのfは、〈「なにかの感触」はないが、自分  
42 と清には「共通の基盤」があるという情緒〉だろう。自分語の共有演技だ。

43  
44 (付記)『文学論』の旧字体は新字体に改めた。

45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4310 ばらける知情意  
4 4311 「智に働けば角が立つ」  
5

6 Nに関して日本人が共有しているのは〈Nは文豪だ〉という伝説だけだろう。〈文豪〉と  
7 は「特に優れた作品を多く残した偉大な作家」(『類語例解辞典』616-49)のことで、その例  
8 として、日本人の作家では真っ先にNの名が挙がる。だから、〈Nは文豪ではない〉という  
9 文は無意味に近い。「優れた作品」の具体例は、勿論、Nの作品ということだ。堂々巡り。  
10 Nの名文として最も有名なのは、『草枕』の冒頭だろう。だが、意味不明。  
11

12 智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は  
13 住みにくい。

14 (夏目漱石『草枕』一)

15  
16 「智に働けば角が立つ」というのは重複。「角が立つ」自体に、「智に働けば」といった意  
17 味が含まれているからだ。

18  
19 理屈っぽい言い方や堅苦しい態度をして、物事がおだやかでなくなる。  
20 (『日本国語大辞典』「かどが立つ」)

21  
22 「智」の文に関する辞書の説明は、少しずつ違う。しかも、意味不明。

23  
24 「理知だけで割り切っていると他人と衝突する」(『大辞泉』)

25 「理知的に動こうとすれば人間関係がぎすぎすして穏やかに暮らしづらくなる」(『明鏡  
26 ことわざ成句使い方辞典』)

27 「理知的に働けば他人との間に角が立って穏やかに暮らせなくなる」(『故事ことわざ・慣  
28 用句辞典』)

29 「世の中というものは、理知的な判断だけで動こうとすると他人と摩擦を起こすことにな  
30 なる」(『成語林』)

31 「あまり理知的に対応すると、人間関係はぎくしゃくしてしまうものだ」(『会話・スピー  
32 チで使える! 場面別ことわざ・名言・四字熟語』「智に働けば角が立つ」)

33  
34 『大辞泉』は処置なし。

35 『明鏡ことわざ』の「理知的に動こう」は意味不明。また、「動こうとすれば」だから、  
36 まだ動いていないわけで、その段階では何も起こりようがない。無意味だ。

37 『故事ことわざ』の「角が立って」は禁じ手を使っている。

38 『成語林』も「動こう」としている段階だから、無意味。

39 『会話・スピーチで』の「あまり」は「働けば」の先取りか。

40 「智に」について、これらの辞典は全部、〈「智」が〉と誤読している。『草枕』の語り手  
41 は〈「智」が〉のつもりかもしれないが、その場合、この文は悪文と判定すべきだ。

42 Nは悪文家なのだ。  
43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4310 ばらける知情意  
4 4312 「情に棹させば流される」

5  
6 「情」の文の「棹させば」は、わかりにくい。

7  
8 「棹さす」という語が本来は〈舟を流れと同じ方向に進める〉という意味であったのが、  
9 いまは〈流れに逆行する〉という意味に使われていることは広く知られていて、国語辞典  
10 も『新明解国語辞典』と『三省堂国語辞典』はいちおう「誤って」とはしながらも記載し  
11 ている。『新潮現代国語辞典』では「誤って」とも書かず、単に「(近時の用法)流れに逆  
12 らう」となっている。この意味では漱石の『草枕』の冒頭の「情に棹させば流される」が  
13 正しく読めないではないかと息巻いてみても、時代の流れに抗するのは難しい。

14 (国広哲弥『日本語誤用・慣用小辞典』「第一部 意味の誤用」「棹さす」)

15  
16 『草枕』を「正しく読めない」から「時代の流れ」が変わったのではないか。

17  
18 「他人の感情を気遣っていると、自分の足元をすくわれる」(『大辞泉』)

19 「人情に従えばその場の状況に流されて足もとをすくわれる」(『明鏡 ことわざ成句使  
20 い方辞典』)

21 「感情に走って世間を渡れば思わぬところに行ってしまう」(『故事ことわざ・慣用句辞  
22 典』)

23 「人情だけを大切に考えると他人の気持ちに引きずられてしまう」(『成語林』)

24 「感情に身をゆだねると物事が流されてしまう」(『会話・スピーチで使える! 場面別こ  
25 とわざ・名言・四字熟語』「智に働けば角が立つ」)

26  
27 『大辞泉』の「他人」は、どこから現れたのか。「足元をすくわれる」は、よくある間違  
28 い。〈「気遣っていると」～「すくわれる」〉は無意味。ひどい辞書だ。

29 『明鏡ことわざ』は日本語になっていない。

30 『故事ことわざ』の「感情に走って」が正しい。ただし、「思わぬところ」は曖昧。「思わ  
31 ぬ良い結果となった」(『自然科学系和英大辞典』「思わぬ」という例がある。

32 『成語林』の「人情だけ」の「だけ」は変。この「他人」も、『大辞泉』と同様の誤り。

33 『会話・スピーチで』の「身をゆだねる」はいいが、「物事が流されてしまう」が意味不  
34 明。

35 『故事ことわざ』と『会話・スピーチで』以外の辞書は、まったくの見当違いだ。なぜな  
36 ら、「情」は、「智」や「意地」と同じく、当人のものと解釈すべきだからだ。

37 ちなみに、『風雲! 大歴史実験!』(NHKB S)の「源平壇ノ浦の戦い」や『歴史科学  
38 捜査班』(BSイレブン)の「壇ノ浦の戦い」などで、〈(も)じ あかま だん 浦はたぎ(っ)て  
39 おつる塩なれば、源氏の舟は塩にむかふて、心ならずをしおとさる。平家の船は塩にお  
40 うてぞい(出)できた(来)る」(『平家物語』巻第十一)というの嘘でした)みたいな実験をやっ  
41 ていた。操船とは無関係の実験だ。海戦は、競艇ではない。〈流れに棹さすのは損でも得でも  
42 ない〉というのなら、「逆櫓」(『平家物語』巻第十一)の工夫も無駄だったわけだ。「熟田津  
43 に船乗せむと月待てば 潮も適ひぬ今は漕ぎ出でな」(『万葉集』1・8)も空想の産物か。

44  
45 \*付記 参考 『歴史探偵』(NHK)「源平合戦 壇の浦の戦い」

46

1  
2 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
3 4300 臭い『草枕』  
4 4310 ばらける知情意  
5 4313 「意地を通せば窮屈だ」

6  
7 「意地」という言葉は突然出てくる。ここは〈意〉であるべきだ。語り手は怪しい。

8 「意地を通せば窮屈だ」を「自分の意地を通せば何かと不自由する」(『故事ことわざ』  
9 と言い換えて、どうにかなるのだろうか。ならない。ちなみに、「かたくなに自分の思いを  
10 押し通そうとする」(『明鏡国語辞典』「意地を通す」)というのは変。「通す」を「通そうと  
11 する」にすり替えている。〈意地〉は「その気持ちを潔しとして使われることが多い」(『明  
12 鏡ことわざ』「意地を通す」)という。「自分の信念を曲げまいと意地を通せば、がんじがら  
13 めになる」(『会話・スピーチで』)は意味不明。なお、「意地を張る」はしばしばマイナス  
14 の評価が伴う」(『明鏡ことわざ』「意地を通す」)という。

15  
16 祖母は、九十を過ぎても人の世話にはならないと意地を通して一人暮らしを続けた。  
17 (『故事ことわざ・慣用句辞典』「意地を通す」)

18  
19 好きでやっているのに、「窮屈」とはどういうことか。

20  
21 狭かったり、堅苦しかったりして、思うように動けないこと。心身の自由を束縛される  
22 こと。また、気づまりに感じる事。また、そのさま。  
23 (『日本国語大辞典』「窮屈」)

24  
25 この説明の例として『草枕』の三文が引用されている。だが、この説明で「意地」の文は  
26 理解できない。「束縛されること」だと、本文の場合、束縛する主体が不明。

27  
28 周囲や相手に気がねをして、心がのびのびしないこと。窮屈に感じる事。  
29 (『日本国語大辞典』「気詰」)

30  
31 〈「意地を通せば」「気がね」する〉なんて、無意味だろう。

32 「とにかく」は、〈と、このように〉という意味ではなく、「何にせよ」(『広辞苑』「とにかく」)  
33 という意味だろう。前の三文は「人の世は住みにくい」という感慨の原因を語るのではない。

34  
35 自画自賛 智に働けば角が立つ。 「私の論理」(下九) 〈屁理屈〉

36 自暴自棄 情に棹させば流される。 「強烈な一念」(下三十二) 〈やけくそ〉

37 自縄自縛 意地を通せば窮屈だ。 「精神的に癩性」(上三十二) 〈やせ我慢〉

38 自業自得 とかくに人の世は住みにくい。 「ぐたり」(下五十五) 〈いじけ〉

39  
40 四つに共通するのは自作自演だろう。足りないのは、自問自答と自由自在だろう。自重自  
41 愛が隠蔽されているのかもしれない。

42 知情意は心を三分割したものだ。ばらけたままなら、しくじるのは当然だ。「智・情・意」  
43 の三者が各々権衡を保ち、平等に発達したものが完全の常識だろう」(洪沢栄一『論語と算盤』  
44 「常識と習慣」「常識とは如何なるものか」)という。「智」が作者には働かないようだ。

45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4320 ウケ狙いの名文もどき  
4 4321 「屁をいくつ、ひった」

5  
6 『悪文』という本に、次のような悪文が収録されている。

7  
8 “文章の音感”というのは、いわゆる美文調や、伝統的三七調・七五調などを言うので  
9 はない。それに、よく言われるとおり、文章の律動に酔って表現内容を貧弱にしてしま  
10 うことは、十分警戒しなければならない。けれども一方、文章の音感を持たない名文はな  
11 い、と言っても言いすぎではないであろう。文の長短・構造の繁簡など、適宜に織りませ  
12 たいろどりがなければ、文章という織物を、光彩あるものとするにはできにくい。一つ  
13 一つの文そのものが持っている律動と、それらの連続が生みだす文章としての律動と、そ  
14 の二つが、ここに言う“文章の音感”をつくり出す。例をあげよう。

15 (岩淵悦太郎編著『第三版 悪文』「文の切りつなぎ」「歯切れのよい文章」)

16  
17 「文章の音感」は、勿論、意味不明。これに関する説明も意味不明。  
18 『悪文』では、こうした「名文」の「例」として『草枕』の冒頭の部分が挙げてある。

19  
20 世の中はしつこい、毒々しい、こせこせした、その上ずうずうしい、いやな奴で埋っ  
21 ている。元来何しに世の中へ面を曝しているんだか、解しかねる奴さえいる。しかもそん  
22 な面に限って大きいものだ。浮世の風にあたる面積の多いのを以て、さも名誉の如く心得  
23 ている。五年も十年も人の臀に探偵をつけて、人のひる屁の勘定をして、それが人世だと  
24 思ってる。そうして人の前へ出て来て、御前は屁をいくつ、ひった、いくつ、ひったと頼  
25 みもせぬ事を教える。前へ出て云うなら、それも参考にして、やらんでもないが、後ろの  
26 方から、御前は屁をいくつ、ひった、いくつ、ひったと云う。うるさいと云えば猶々云う。  
27 よせと云えば益云う。分ったと云っても、屁をいくつ、ひった、ひったと云う。そうし  
28 てそれが処世の方針だと云う。方針は人々勝手である。只ひったひったと云わずに黙って  
29 方針を立てるがいい。人の邪魔になる方針は差し控えるのが礼義だ。邪魔にならなければ  
30 方針が立たぬと云うなら、こっちも屁をひるのを以て、こっちの方針とするばかりだ。そ  
31 うなったら日本も運の尽きだろう。

32 (夏目漱石『草枕』十一)

33  
34 冒頭の知情意論の真意は、この程度のこと。語り手は「屁」の具体例を隠蔽している。  
35 「探偵」はDだ。〈D〉は〈detective〉の頭文字。「屁」は〈SのK殺し〉に相当する。

36  
37 ああ、だまりなさい、小人物よ。二種類のひびきがある。山の頂きをめぐる嵐のさけび  
38 声と、——あなたのおならだ。あなたはおならだ。しかしあなたはすみれのおいがする  
39 と信じている。

40 (ウィルヘルム・ライヒ『きけ、小人物よ!』14)

41  
42 『草枕』の「音感」は、「運の尽き」ならぬ、うんこ付きの「屁」だろう。

43  
44  
45  
46

- 1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4320 ウケ狙いの名文もどき  
4 4322 「探偵」はいない

5  
6 次の文章は『草枕』の冒頭よりもいい出来だと、私は思う。

7  
8 大方の世間の人が、一生懸命、額に汗をして田を耕す、荷物を運ぶ、自動車を造る、書  
9 類を書く、上司や得意先に理不尽なことを言われ、立場上、反論はできない、きりきり痛  
10 む胃のあたりを押さえながら愛想を言う、などして働いている。將にそのとき、エンター  
11 テイナーは、へらへら冗談を言う。腰を振って踊り狂う、高歌放吟する、酒を飲む、麻葉  
12 を吸う、などして遊んでいるのだ。彼我の差を見れば、仮に人間が百人居たとして、その  
13 百人に、君はエンターテイナーと普通の働き奴とどっちになりたい？ と訊いたら、百  
14 人が百人、口を揃えて、エンターテイナーと答えるに決まっている。エンターテイナーは  
15 それぐらい素敵な職業であるのである。

16 しかしながらみんながみんなエンターテイナーになってしまっは国が立ちゆかない  
17 ので、子供には家庭で学校で、アリとキリギリスの話をするなどして、ともすればエンター  
18 テイナーを目指そうとする子供に、そういう面白おかしい生活は人間としてはおろか、  
19 昆虫としても間違っているのだ、という教育を施し、一丸となって、子供のエンターテ  
20 ーナー化を防止してきたのだけれども、それがこのところおかしくなってきた。

21 (町田康『ロックの泥水』)

22  
23 この語り手は、「乞食歌手」と自己紹介する。だが、紹介されるまでもなく、彼の与太話  
24 が自嘲自虐の表現であることは、誰にでも察せらるはずだ。

25 一方、『草枕』の語り手は聞き手を翻弄している。彼は、自分の「屁」や「運」について  
26 隠蔽している。しかも、「探偵」が比喻でないことも隠蔽している。

27  
28 「私もまだよく判らないんですよー」  
29 垂れ目メイクは完璧、香水はジル・スチュアートのオーデオロン、お洋服は不本意なが  
30 ら男ウケだけを狙った、総レースの白いAラインミニワンピース（化繊）に、靴はピンク  
31 のサマンサ。せめて自我を保つために靴下だけはアンティパスト。ファッション誌『C.  
32 C』に配属された同期の女子社員が催した本気モード合コンの場で、悦子は「モチ子コス  
33 プレ」をしている自分に対する羞恥心とひたすら戦っていた。

34 (宮木あや子『校閲ガール』「第二話 校閲ガールと編集ウーマン」)

35  
36 『草枕』の「智」などの単語は、「自我を保つために」用いられる「アンティパスタ」な  
37 どと同様のオシャレなのだ。違うのは、『草枕』では「自分」との戦いが表現されていない  
38 点だ。悦子の欲望は鮮明だから、その不満も鮮明だ。一方、『草枕』の画工の希望は不鮮明  
39 だから、その不満や恐怖もぼんやりとしている。

40 画工の語り手は「男ウケだけを狙った」名文もどきなのだ。『草枕』の語り手が聞き手とし  
41 て想定しているのは男だ。しかも、教養を鼻にかける軽薄才子だ。悩みさえ自慢の種。そう  
42 したことを作者は隠蔽している。だから、意味不明になった。

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4320 ウケ狙いの名文もどき  
4 4323 「屁」のような「罪」

5  
6 『草枕』の冒頭において、語り手は〈「屁」の物語〉を美化しようとして失敗した。しか  
7 し、聞き手として想定される悩める軽薄才子の男どもは、その失敗に目をつぶってやる。な  
8 ぜなら、彼らも自分なりの〈「屁」の物語〉を美化したいからだ。作者は、日本人の共有す  
9 る〈「屁」の物語〉をちらつかせて読者を翻弄する。「屁」を言い換えると、「自分に対する  
10 羞恥心」みたいなことになる。

11 画工は「探偵」に恥をかかされるので怒っている。〈「屁」の物語〉は、いわば狂騒的なも  
12 のだが、これを陰鬱に語ると、Sの〈「罪」の物語〉になる。

13  
14 私はその時さぞKが軽蔑<sup>けいべつ</sup>している事だろうと思って、一人で顔を赧<sup>あか</sup>らめました。然し今  
15 更Kの前に出て、耻<sup>はじ</sup>を搔<sup>か</sup>かせられるのは、私の自尊心にとって大なる苦痛でした。  
16 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十八)

17  
18 Kは、Sにとって「探偵」だった。Pも「探偵」だ。Sは「探偵」から逃げるために死を  
19 夢見る。Sは、〈「耻<sup>はじ</sup>」の物語〉を隠蔽するために〈「罪」の物語〉を捏造したわけだ。

20 『こころ』の読者は、Sの「罪」が〈「屁」のような「耻<sup>はじ</sup>」〉であることを感得しながらも、  
21 そのことを意識にのぼらせないように心掛けなければならない。

22  
23 私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓<sup>まいげつ</sup>へ毎月行か  
24 せます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくして遣  
25 れと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍の人から鞭<sup>むちう</sup>たれたいとまで思  
26 った事もあります。こうした階段を段々経過して行くうちに、人に鞭<sup>むちう</sup>たれるよりも、自分  
27 で自分を鞭<sup>むちう</sup>つ可<sup>べ</sup>きだという気になります。自分で自分を鞭<sup>むちう</sup>つよりも、自分で自分を殺すべ  
28 きだという考<sup>ま</sup>が起ります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。  
29 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十四)

30  
31 「ただ」は宙に浮いている。「人間の罪というもの」は意味不明。いつの間にか、Sの犯  
32 した個別の「罪」が話題ではなくなってしまった。『草枕』の画工は、自分に特有の「屁」  
33 について、具体的に語らなかった。Sも「罪」を具体的に語っていない。Sの「罪」を〈K  
34 の死に関わる罪悪感〉などと解釈するのは誤読だ。Sは「耻<sup>はじ</sup>」によって苦しんでいる。死ん  
35 だKに対して雪辱を果たすことは不可能だからだ。

36 「その感じ」とは羞恥だが、ただし、それを言葉にするのも苦痛であるような羞恥だ。  
37 Sは、墓参りや姑の介護や妻への労わりを喜んでやっているわけではない。通行人が鞭打  
38 ってくれたとしても、自分で鞭打つ方が痛みは軽かろう。自分を鞭打つより、「死んだ気で  
39 生きていこう」と思う方がもっと楽だろう。

40 「こうした階段を段々」に楽な方へ移って振出しに戻る。これが「ぐるぐる」と呼ばれる  
41 実在しえない〈悪魔の階段〉だ。エッシャーの絵のような錯覚。『インセプション』(ノーラ  
42 ン監督)参照。

43  
44  
45  
46

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4330 「非人情」は非自然か  
4 4331 漂流する思考

5  
6 『草枕』の第一段落は次の一個の文だけでできている。

7  
8 <sup>やまみち</sup>山路を登りながら、こう考えた。

(夏目漱石『草枕』一)

10  
11 なぜ、「登り」か。「考えた」の主語は、「余」だ。「こう」は第二段落以下の叙述。  
12 第二段落で知情意の悪文になる。しばらく読み進むと、次のように語られる。

13  
14 存分食えばあとが不愉快だ。……

15 <sup>よ</sup>余の<sup>かんがえ</sup>考がここまで漂流して来た時に、余の<sup>うそく</sup>右足は突然<sup>すわ</sup>坐りのわるい<sup>かくいし</sup>角石の<sup>はし</sup>端を<sup>そ</sup>踏み損  
16 くなった。

(夏目漱石『草枕』一)

17  
18  
19 「考えた」と「余の<sup>よ</sup>考<sup>かんがえ</sup>がここまで漂流して来た時に」は、明らかに矛盾している。「考  
20 えた」は〈「考え」てい「た」〉などでなければならない。前の段落の最後が「……」で終わ  
21 っていることから、このことは明らかだ。なお、彼の思考は最後まで漂流し続ける。

22 作者は、語り手に「考」を纏めさせられなかった。だから、主人公が「考」を中断で  
23 きるよう、その足もとに「坐りのわるい<sup>かくいし</sup>角石」を置いてやった。過去の主人公が見事に「角  
24 石の<sup>いし</sup>端<sup>はし</sup>を<sup>そ</sup>踏み損<sup>そ</sup>なくなった」ので、現在の語り手は一息つくわけだ。言葉の手品。

25  
26 あざやかな自然描写と東洋的な人生観、芸術観が示されている。余裕派を標榜（ひょう  
27 ぼう）した漱石の初期代表作の一つ。

(『百科事典マイペディア』「草枕」)

28  
29 Nの「人生観、芸術観が示されている」というのは、伝説。

30 語り手でもある主人公の「余」は「余裕派を標榜（ひょうぼう）した」画工と言える。だ  
31 が、実際には余裕なんか、全然ない。羊頭狗肉。『じゃりん子チエ』（はるき悦巳）の小林マ  
32 サルと一緒に。のびのび、のびのび、のびのび、のびのび……。

33  
34  
35 正岡子規の写生文に始まり、高浜虚子や夏目漱石によって確立。人生に余裕ある態度で  
36 臨み、高踏的に人生を観察する低徊（ていかい）趣味（漱石の造語）の文学。

(『日本史事典』「余裕派」)

37  
38  
39 「確立」は意味不明。〈「人生に」～「臨み」〉は意味不明。

40 この文芸用語は、「主として自然主義を中心とする文壇からやや嘲弄的に使用された」（『日  
41 本国語大辞典』「余裕派」という。これには「反自然主義の立場」（『近現代文学事典』「余裕  
42 派」といった程度の意味しかない。

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4330 「非人情」は非自然か  
4 4332 「神経が過敏なのかも」

5  
6 辞書には、しばしば例文として文芸作品から引用されている。だが、不適切な場合もある。  
7 なぜなら、文芸作品に用いられた語句は、それが印象的であればあるほど、日常的な使い方  
8 と違っているものだからだ。〈自分語かも?〉と疑うべきだ。

- 9  
10 ① 人情のないこと。人に冷たいこと。思いやりのないこと。  
11 ② (「不人情」と区別して) 人情から超然として、それにわずらわされないこと。夏目漱  
12 石、草枕「不人情ぢゃありません、一な惚れ方をするんです」。「一に眺める」  
13 (『広辞苑』「非人情」)

14  
15 「非人情な惚れ方」という言葉が②の意味で理解できるか。私にはできない。しかも、こ  
16 の辞書の説明だと、②の「非人情」は〈超俗〉などが適当のように思われる。

17  
18 西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく万斛の愁などと云う字がある。詩人だから  
19 万斛で素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の  
20 倍以上に神経が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜びもあろうが、無量の悲も多かろう。そ  
21 んならば詩人になるのも考え物だ。

22 (夏目漱石『草枕』一)

23  
24 「西洋」と「支那」を並べるのはナンセンス。

25 「神経が鋭敏」は怪しい。語り手の「余」は、〈語られる「余」は「神経が鋭敏」ではな  
26 い〉と暗示している。〈「神経」過敏ではない〉という虚偽の暗示をしているのだ。

27 「超俗の喜び」について、語り手は経験済みだろうか。「超俗の喜び」とは、〈躁鬱〉の〈躁〉  
28 のことだろう。「無量の悲」は、躁の反動として味わう〈鬱〉のことだろう。語り手は語  
29 られる自分の精神状態を隠蔽している。

30 〈人情〉は「自然」(『広辞苑』「人情」)だ。では、「非人情」は〈非自然〉か。

31  
32 あの女は家のなかで、常住芝居をしている。しかも芝居をしているとは気がつかん。自  
33 然天然に芝居をしている。

34 (夏目漱石『草枕』十二)

35  
36 「あの女」は那美。同棲していないのに「常住」とわかるわけがない。

37 読心術者でもないのに「気がつかん」とわかるわけがない。

38 「自然天然に芝居をしている」はどういう冗談だろう。「芝居」をしないのが〈非「自然」〉  
39 で、つまり「非人情」か。〈テクニカラー〉を〈天然色〉と訳すような感じか。

40 少し後で、「あの女の所作を芝居と見なければ、薄気味がわるくて一日も居たたまれん」  
41 (『草枕』十二)と修正。「芝居」が「薄気味がわるく」感じられるのなら、那美は尼神インター  
42 の誠子が演じるかわいそうな女たちの同類だろう。

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4330 「非人情」は非自然か  
4 4333 「芝居」と「技巧」

5  
6 那美の「芝居」は、三千子や静の「技巧」の同義語だろう。だが、それは男の誤解かもしれ  
7 ない。女は、幼時期から他人を誘うような態度を示すものだ。

8  
9 過度な情緒性と人の注意を引こうとすることが特徴で、具体的には注目の的でないと  
10 楽しくないとか、過度なほど性的に誘惑的、挑戦的な対人交流などが挙げられる。  
11 (『精神科ポケット事典[新訂版]』「演技性パーソナリティ障害〔演技性人格障害〕」)

12 那美の意味不明の言動が「芝居」なら、画工の「非人情」論も「芝居」だろう。

13  
14  
15 わたしは、虚栄心の強い者たちがすべて、よい俳優であるのを見いだした。虚栄心の強  
16 い者たちは演技し、そして、自分たちが人々から喜んで見物されることを欲する、——彼  
17 らの全精神がこの意欲にこめられているのだ。

18 (フリードリッヒ・ニーチェ『ツァラトゥストラ』「第二部〔21〕人間と交わるための  
19 賢さについて」)

20  
21 主人公の画工には、那美が実際に「芝居」をしているのか、どうか、わからない。いや、  
22 わかりたくない。なぜなら、彼自身がのびのびキャラを演じているからだ。他人の演技を認  
23 めることは、同時に自分の演技をも認めることになりかねない。作者も文学者を演じている。

24 『天使のはらわた』(石井隆)の土屋名美は、名美を演じている。名美を演じない名美は、  
25 名美ではない。

26  
27 名美か？ 名美だな？ 今どこなんだ 話し合おうじゃないか？ どこなの？ ヤケ  
28 になって バカな事 やってんじゃないだろうな？ 女と男は違うんだからね バカし  
29 ちゃ モシモシ！ 名美！ モシモシ！ 名美！ どこなの!?

30 (石井隆『シングルベッド』)

31  
32 男たちは名美を探し続けている。その間だけ、男たちはやっと生きていられる。名美は、  
33 男たちのために名美を演じてくれる。名美とは、そういう女だ。名美を演じきれなくなった  
34 とき、彼女はいなくなる。『グラディーバ あるポンペイの幻想小説』(イェンゼン) 参照。

35 男が女を愛するとき、女の嘘をも愛する。『昼下がりの情事』(ワイルダー監督) 参照。

36  
37 だれかうまい嘘のつける相手 探すのよ

38 (千家和也作詞・浜圭介作曲『そして神戸』)

39  
40 Nの小説に出てくる男たちは、自分の被愛願望を自覚できず、それを女性に擦り付けて非  
41 難する。女たちは何者でもない。つまり、いないのも同然なのだ。彼女たちに性的魅力はな  
42 い。女装した男たちだからだ。那美は女装した「余」だ。

43  
44 \*GOTO ミットソン『漫画の思い出』石井隆

45  
46  
47  
48  
49

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4340 「着想」のみ  
4 4341 「どこへ越しても住みにくい」

5  
6 第二次大戦前の青年は『草枕』を好んだらしい。嘘みtainな性的場面と賢しげな屁理屈が  
7 混在しているからだろう。

8  
9 とかく住みにくい人の世の煩いを逃れ、芸術のための桃源郷を求めて熊本郊外の温泉  
10 を訪れた画工が、宿の美しい娘那美(なみ)の妖(あや)しい言動に驚かされるというの  
11 が発端。那美は出戻りで、不羈奔放(ふきほんぼう)な魅力に富む女性だが、彼女を画中  
12 の人にしようとする画工の苦心を通じて、人の世はものの「見様(みよう)」でどうに  
13 てもなる、俗塵(ぞくじん)を離れた心持ちになれる詩こそ真の芸術だという独自の文学観、  
14 いわゆる非人情の美学が語られる。しかし、この文学観はのちに作者によって否定された。  
15 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』『草枕』三好行雄)

16  
17 「とかく住みにくい」は誤った引用。(「熊本郊外」に「桃源郷」がある)という伝説でも  
18 あったのか。私は知らない。

19 「出戻り」は「差別的な語」(『明鏡国語辞典』『出戻り])だそうだ。

20 語り手によって「語られる」のであり、作者が語るのではない。

21 この「作者」は〈作家〉つまりNのことだ。Nは、どうして持論を撤回してしまったのだ  
22 ろう。「非人情」は、客寄せのための宣伝文句だったからだ。『草枕』は枕なのだ。つまり、  
23 前置きだ。Nのすべての小説は枕だ。『道草』は、文豪伝説にとって道草だが、N個人にと  
24 っては本道だ。『明暗』は枕が長すぎて、本道に差し掛かったところでNが死ぬ。

25  
26 住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ<sup>ママ</sup>越しても住みにくいと悟っ  
27 た時、詩が生れて、画が出来る。

28 人の世を作ったものは神でもなければ鬼でもない。やはり向う三軒両隣りにちらちらす  
29 る唯<sup>ただ</sup>の人である。

30 (夏目漱石『草枕』一)

31  
32 「安い」は、〈住み易い〉と〈心安い〉などを無理に重ねた言葉。「住みにくい」と思った  
33 から、画工は放浪しているのだろう。「悟った」という体験があるのなら、作品はすでに  
34 きているはずだ。「出来る」は〈「出来る」のだろう〉などの誇張だ。

35 「人の世」の傍点は不可解。『創世記』で「神」に追われて放浪の旅に出たカインが辿り  
36 ついた「ノド(さすらい)の地」は、彼にとって住みやすかったろう。「鬼」は唐突。〈渡る  
37 世間に鬼はない〉とは無関係か。

38 「やはり」は変。画工は、ご近所さんが「ちらちらする」だけで息苦しくなるらしい。「唯  
39 の人」は、「神や怪物ではない普通の人」(『広辞苑』『ただびと])のことだが、「異常な能力  
40 や性情などを持たない常人」(『広辞苑』『ただびと])のことではないらしい。社会を「作っ  
41 た」人はいたろう。彼らが「専門家に対して、一般の人」(『日本国語大事典』『ただの人』)  
42 つまり素人であるはずはない。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4340 「着想」のみ  
4 4342 「詩人という天職」

5  
6 語り手の画工は、おかしな話を続ける。  
7

8 越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容<sup>くつろげ</sup>で、束の間<sup>つかま</sup>の命  
9 を、束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職が出来て、ここに画家とい  
10 う使命<sup>くた</sup>が降る。あらゆる芸術の士は人の世を長閑<sup>のどか</sup>にし、人の心を豊かにするが故に尊<sup>ゆえ</sup>とい。  
11 (夏目漱石『草枕』一)  
12

13 「越す事のならぬ世」という話は、唐突。「寛容<sup>くつろげ</sup>」という語は、Kの「安心」やSの「鷹揚<sup>おうよう</sup>」  
14 などの同義語らしい。「命」は〈生涯〉と解釈するが、「命を」の「を」は処理できない。〈人々  
15 が自分を受け入れてくれないのなら、自分を変えればいいのだが、自分を変えるのは無理〉  
16 という話が抜けている。無理である理由を隠蔽するためだ。

17 「ここに詩人という天職が出来て」くるのなら、そこに救世主という「天職」も出来てこ  
18 ないのか。「使命」を降す主体は「天」だろう。

19 「長閑<sup>のどか</sup>」と「人の心を豊かにする」と「寛容<sup>くつろげ</sup>」の関係が不明。「心配のないさま」(『広  
20 辞苑』「のどか」と「心の満ち足りているさま」(『広辞苑』「ゆたか」と「安心する」(『広  
21 辞苑』「くつろぐ」)が、夏目語ではほぼ同じ意味になるらしい。〈慢心≒安心)か。  
22

23 住みにくき世から、住みにくき煩<sup>わずら</sup>いを引き抜いて、難有<sup>ありがた</sup>い世界をまのあたりに写すの  
24 が詩である、画である。あるは音楽と彫刻である。こまかに云えば写さないでもよい。只  
25 まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧<sup>わ</sup>く。着想を紙に落さぬとも瑔<sup>きゆうそう</sup>鏘<sup>おん</sup>の音は胸裏<sup>きょうり</sup>  
26 に起る。  
27 (夏目漱石『草枕』一)

28  
29 「音楽」の次に出てきそうな〈舞踊〉がない。総合芸術の〈演劇〉もない。

30 「着想」だけで、作品はない。

31 この後、大量の難読漢字をモザイクに用いて本音を隠し、改行。気分のことを話題にする  
32 うち、色気の話になり、それもすぐに種が尽きたか、食い気に墮して、「……」で、また改  
33 行。「余<sup>よ</sup>の考<sup>かんがえ</sup>がここまで漂流して来た時に」と始める。  
34

35 ものうい眼が、諦めの甘美な風情ととけ合い、睫毛のこまかくふるえる影が、こんな風  
36 に頬にうつりもするだろう。そのとおりだ。そしてそのとおりではないのだ。何が欠けて  
37 いるのか。何でもないものさ。が、この何でもないものがすべてなのだ。

38 (オノレド・バルザック『知られざる傑作』)  
39

40 このように語る画家は、後に不定の「すべて」を描ききったつもりになる。

41 一方、『草枕』の画工は「着想」を模倣するのだろう。

42 ちなみに『知られざる傑作』を映画化した『美しき諍い女』(リヴェット監督)は駄作。  
43  
44  
45  
46  
47

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 3 0 0 臭い『草枕』  
3 4 3 4 0 「着想」のみ  
4 4 3 4 3 「胸中の画面」

5  
6 漂流を続けてきた『草枕』だが、結末もない。

7  
8 ある日、元夫と再会した那美さんの顔に「憐れ」を感じ、画を完成させる。  
9 (『近現代文学事典』「草枕」)

10  
11 嘘だね。「再会した」は〈「再会した」後、別れて、その後、偶然、また再会したが、言葉  
12 を交わす暇もなく別れることになった〉などの不当な略。「完成させる」は大間違い。

13  
14 画家は、この貴婦人と、そが美しき装ひを草々の筆にて描き、ひたすらこの細部のため  
15 に忍耐を留保せしものの如し。ここに至りて、画家の筆の微に入り細をきはめたるは、こ  
16 の豆人物、天眼鏡を用ゐざれば見るを得ざらしめんがためなり。こは美服をまとへる紅顔  
17 可憐の青年なり。ああ、いかばかり彼女は、いとほしく、ほれほれと、青年の姿に見入る  
18 ことぞ。

19 (アンリ・ド・レニエ『水都幻談』「美しき貴婦人」)

20  
21 那美も、去って行く「元夫」に見入ったようだ。

22  
23 茶色のはげた中折帽の下から、髯だらけな野武士が名残り惜気に首を出した。そのとき、  
24 那美さんと野武士は思わず顔を見合せた。鉄車はごとりごとりと運転する。野武士の顔は  
25 すぐ消えた。那美さんは茫然として、行く汽車を見送る。その茫然のうちには不思議にも  
26 今までかつて見た事のない「憐れ」が一面に浮いている。

27 「それだ！ それだ！ それが出れば画になりますよ」

28 と余は那美さんの肩を叩きながら小声に云った。余が胸中の画面はこの咄嗟の際に  
29 成就したのである。

30 (夏目漱石『草枕』十三)

31  
32 「野武士」は比喩。〈那美の物語〉が「成就した」のではない。  
33 那美さんは余の手を邪険に跳ね除けた。その顔から「憐れ」はもう完全に消えている。

34 「せからしか！ 貴様、なんぼしよっとね。こんだらが」  
35 ぐふっ。非人情がちとすぎたようだ。ボディ―ブローはじわじわと効いてくる。那美さ  
36 んの拳骨が、しゅっしゅっと余の顔面ぎりぎりまで往還していた。芝居ではない。  
37 余は痛む腹を抱えて線路へ飛び降りた。

38 「あの人、出歯亀よ～」と叫ぶ女の声がする。例によって、ストレス解消の芝居だ。  
39 余が踏切まで漂流してきたときに、余の右足は突然坐りの悪い角石の端をふみ損なった。  
40 余の自慢の鼻へ山路が急接近する。そこには柔らかそうな何かがこんもりと置かれてあっ  
41 た。ありがたい。ぐしゃ。それは、ひり出されたばかりの馬糞の山だった。ポワ〜ン。  
42 これが本当の(ト鼻をつまんで)くっさあ枕。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 3 0 0 臭い『草枕』  
3 4 3 5 0 夢のような伏線  
4 4 3 5 1 俳句は意味不明

5  
6 『草枕』を、Nは「この俳句的小説——名前は変であるが」(『余が草枕』)と紹介する。  
7 勿論、「俳句的」は、よくわからない。そもそも、俳句は、わかるものなのだろうか。

8 俳句に確かな意味はない。あるのは、妙味とか何かだ。確かな意味のある十七文字は〈川  
9 柳〉などと呼ばれる。「<sup>ち</sup>智に働けば」などは俳句にならない。

10  
11 有名な松尾芭蕉の句に、

12 古池や蛙<sup>かわず</sup>飛び込む水の音

13 というのがある。これは蛙が何匹とびこんだ音か、という論争がある。一般には、静け  
14 さを破って一匹だけポチャンととびこみ、その後はもっと静かに感じられたと解釈する。

15 しかし、そうではなく、芭蕉が目の前の池を静かにながめていたところ、別の遠くの池  
16 で、静けさを破るようにつぎつぎと蛙のとびこむ音がしたという解釈もある。

17 芭蕉がこの句をつくったとき、最初「蛙とびこむ水の音」ができ、上の句ができなかつ  
18 た。そこで弟子の其角に「お前ならどうだ」とたずねたところ、其角は「山吹や」と詠ん  
19 だと伝えられる。

20 (博学こだわり倶楽部『退屈しのぎの博学塾 I 森羅万象の謎』)

21  
22 「古池」の句に確かな意味がないことぐらい、小学生にだってわかるはずだ。ところが、  
23 中学生ぐらいになると、知ったかぶりを始める。

24 「解釈・鑑賞も多彩で、種々の見方を許すだけでなく、芭蕉自身の理解が変化したことも  
25 指摘される」(雲英末雄・佐藤勝明訳注『芭蕉全句集』)という。学校で教わったっけ？

26 この句は、言うまでもなく、散文として完成していない。つまり、〈古い池があつて、そ  
27 こに蛙が飛び込む音がして……〉としか現代語訳できない。だから、これを鑑賞する場合、  
28 鑑賞者がそれぞれの思いや考えを付け足すことになる。俳句は連歌から始まったものとい  
29 う。俳句を鑑賞するには、前句付の心持ちが必要だろう。俳句の鑑賞は創作の始まりなのだ。  
30 参加することに意義がある。俳句を読めば物足りない感じがするものだ。この感じに馴れて  
31 しまつてはいけない。〈こいつを何とかしてやろう〉と足掻かねばならない。

32 ところが、半可通は鑑賞者の立場から一步も出ようとせず、「一匹だけポチャン」みたい  
33 な説を一個だけ鵜呑みにして、わかったふりをする。しかも、〈この句の趣味は日本人にし  
34 かわかるまい〉などと嘯き、煙幕を張る。すると、おっちょこちょいの日本人は、〈あつ、  
35 じゃあ、私にはわかるんだ〉などと自己暗示にかかつてしまう。〈意味不明と白状するのは  
36 恥ずかしい〉と自覚するのさえ恥ずかしく、ポチャン、俳句のように中途半端な、優雅な、  
37 つまり曖昧な日本文化の古池に飛び込み、知的に自殺してしまう。

38  
39 芭蕉翁 ぽちゃんといふと 立ちどまり

(『俳風柳多留』)

40  
41  
42 ぽちゃ、ぽちゃぽちゃぽちゃ……  
43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4350 夢のような伏線  
4 4352 「出世間的」  
5

6 『草枕』の大筋は、「出門多所思」に始まる漢詩の成立過程だ。これが完成した時点で、物語はほぼ終わっている。那美は端役なのだ。なお、この詩を実際に拵えたのはNだ。  
7 元のタイトルは『春興』という。『漱石詩註』（吉川幸次郎）参照。

9 画工は、「青海」（『草枕』十二）の見える崖の上で「木瓜」（『草枕』十二）を見つけた。

11 評して見ると木瓜は花のうちで、愚かにして悟ったものであろう。世間には拙を守ると云う人がある。この人が来世に生れ変わると屹度木瓜になる。余も木瓜になりたい。

13 （夏目漱石『草枕』十二）

15 この「木瓜」は草木瓜か。「愚かにして悟ったもの」の物語がない。〈呆け〉の洒落か。

17 木瓜咲くや漱石拙を守るべく

18 （夏目漱石『漱石俳句集』273）

20 「拙を守る」は〈節を守る〉の洒落か。あるいは、「拙」は「自分のことをへりくだって  
21 いう語」（『広辞苑』「拙」）で、「拙を守る」は〈自分の欠点を隠す〉という思いの露呈か。

23 小供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切って、面白く枝振を作って、筆架をこしらえた事がある。

25 （夏目漱石『草枕』十二）

27 嘘っぽい。この後も嘘っぽくて臭い話が続く。

29 寐るや否や眼についた木瓜は二十年来の旧知己である。見詰めていると次第に気が遠  
30 くなって、いい心持ちになる。又詩興が浮ぶ。

31 （夏目漱石『草枕』十二）

33 詩は、夢見るようにできるらしい。

35 出門多所思。春風吹吾衣。芳草生車轍。廢道入霞微。停筇而  
36 矚目。万象帶晴暉。聽黃鳥宛轉。觀落英紛霏。行盡平蕪遠。題詩古寺  
37 扉。孤愁高雲際。大空斷鴻歸。寸心何窈窕。縹渺忘是非。三十我欲  
38 老。韶光猶依々。逍遙隨物化。悠然對芬菲。

39 ああ出来た、出来た。これで出来た。

40 （夏目漱石『草枕』十二）

42 どうして「これで出来た」と思えるのだろうか。私にはさっぱりわからない。

43  
44  
45  
46

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4300 臭い『草枕』  
3 4350 夢のような伏線  
4 4353 直訳的語法

5  
6 『春興』は、『草枕』の内部において呪文のように機能している。

7  
8 これで出来た。寐ながら木瓜を<sup>み</sup>観て、世の中を忘れていた感じがよく出た。木瓜が出な  
9 くっても、海が出なくっても、感じさえ出れば、それで結構である。と唸りながら、喜ん  
10 でいると、エヘンと云う人間の<sup>せきばらい</sup>咳払が聞えた。こいつは驚いた。

11 (夏目漱石『草枕』十二)

12  
13 この「人間」が那美の元夫、「野武士」だ。彼は、『春興』によって呼び出され、「木瓜」  
14 や「海」の「感じ」によって送り出される。この場合の「海」は、彼の渡る<sup>うな</sup>玄界灘つまり「生  
15 死の分かれ目となるような危険な場所」(『日本国語大辞典』「玄界灘」)だろう。

16  
17 <sup>つむぎ</sup> 紬着る人見おくるや木瓜の花 <sup>きよりく</sup> 許六

18  
19 画工の自己満足の「感じ」は、隠蔽された原典の「感じ」なのだ。  
20 画工の語りと彼の詩歌などとの不協和は、彼と那美の会話の不協和と同質だろう。

21  
22 田家春望 高適

23  
24 出門何所見  
25 春色滿平蕪  
26 可歎無知己  
27 高陽一酒徒

28  
29 ウチヲデテミリヤアテドモナイガ  
30 正月キブンガドコニモミエタ  
31 トコロガ会ヒタイヒトモナク  
32 アサガヤアタリデ大ザケノンダ

33 (井伏鱒二『厄除け詩集』)

34  
35 「厄除け」の「厄」とは何だろう。

36  
37 古く漢文は、文化輸入の源泉として尊重されたから、訓読によって生じた多くの直訳的  
38 語法や語彙(ごい)が日本語の中に重い地位を占め、さらに日本語の他の分野にも大きな  
39 影響を及ぼした。

40 (『百科事典マイペディア』「訓読」)

41  
42 「厄」とは〈直訳的語法や語彙(ごい)による日本語の混乱〉のことかもしれない。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 1 0 会話の基本  
4 4 4 1 1 『ボッコちゃん』

5  
6 思考とは、もう一人の自分との会話のことだ。会話のできない人は、思考もできない。語  
7 句を並べて思考したつもりになるだけだ。

8 会話の基本は、〈聞かれたことに対して機械的に答える〉というものだ。

9  
10 「名前は」  
11 「ボッコちゃん」  
12 「としは」  
13 「まだ若いのよ」  
14 「いくつなんだい」  
15 「まだ若いのよ」  
16 「だからさ……」  
17 「まだ若いのよ」

18 この店のお客は上品なのが多いので、だれも、これ以上は聞かなかつた。

19 (星新一『ボッコちゃん』)

20  
21 「上品なの」ではないのと会話をするのは、危険だ。

22  
23 「ぼくを好きかい」  
24 「あなたが好きだわ」  
25 「こんど映画へでも行こう」  
26 「映画へでも行きましょうか」  
27 「いつにしよう」

28 答えられない時には信号が伝わって、マスターがとんでくる。

29 (星新一『ボッコちゃん』)

30  
31 「マスター」のような調整役を〈M〉と書く。Mを頭の中に呼べる人は冷静だ。  
32 「奥さんは心得のある人」(下+三)という報告が真実なら、静の母はMでありえた。

33  
34 「殺してやろうか」  
35 「殺してちょうだい」

36 彼はポケットから薬の包みを出して、グラスに入れ、ボッコちゃんの前に押しやった。

37 「飲むかい」

38 「飲むわ」

39 (星新一『ボッコちゃん』)

40  
41 M抜きで問答をするのは命がけだ。だから、卑怯な人は、一方的に語ることに、書くことに  
42 逃避する。語ることに、書くことは、賢さの証明にはならない。全然。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 1 0 会話の基本  
4 4 4 1 2 「私を愛してくれるものと」

5  
6 公正な司会者Mが不在のとき、Dとの問答は危険を伴う。

7  
8 ハムレ さあ、この剣にかけて、さあ。  
9 亡 霊 [地下から] 誓え！

10 (ウィリアム・シェイクスピア『ハムレット』第一幕第五場)

11  
12 父の「亡霊」はハムレットのDと解釈できる。  
13 ハムレットにはMがいなかった。だから、彼は悲劇的な最期を遂げることになる。

14  
15 リンダ こうするしか、しょうがないんでしょうね。  
16 ウィリー そうさ、一番いいことさ。  
17 ベン 一番いいことだ！  
18 ウィリー それしかないのさ。これで万事——さあ、おやすみ。疲れた顔をしているよ。  
19 リンダ すぐいらしてね。

20 (アーサー・ミラー『セールスマンの死』)

21  
22 ベンは実在した。だが、このベンはウィリーのDだ。ベンの亡霊ではない。だから、この  
23 場面のベンは、リンダには見えていない。勿論、声も聞こえていない。

24 ベンに相当するのが、Sの場合、「一種の魔物」(下37)だ。本当の「魔物」なら、ハム  
25 レットの父の亡霊と同格になる。

26 Sは、自分の両親の亡霊のようなものを空想する。これが「黒い影」などになる。Sがこ  
27 れらに負けるのは、Mのようなキャラクターを作り出すことができなかったからだ。

28  
29 私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗って、急に世の中が判然見えるようにしてく  
30 れたのではないかと疑いました。私は父や母が、この世に居なくなつた後でも、居た時と  
31 同じように私を愛してくれるものと、何処か心の奥で信じていたのです。

32 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」七)

33  
34 「突然死んだ」というのは、おかしい。突然死ではない。「突然」は「疑いました」に係  
35 るのか。だったら、これは不図系の言葉だ。別種の物語への飛躍の露呈だ。

36 〈父母の霊魂はSを守護した〉という具体的な物語は、皆無だ。

37 「居た時と同じように」は「愛してくれる」に係るだけでなく、「信じていた」にも係る。  
38 両親の生死に関わらず、Sには〈父や母が「私を愛してくれ」ている〉という実感、つま  
39 り被愛感情を抱いたことがなかったのだろう。「父や母が、この世に居なくなつた後」だか  
40 ら被愛妄想的気分に浸ることが楽になつたわけだ。「何処か心の奥で信じて」には、〈頭では  
41 全然違うことを考えて〉という含意がある。

42 Sの自己欺瞞の見事さを、Pは讃嘆するのだろう。読者も同様。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 1 0 会話の基本  
4 4 4 1 3 イヤミの同類

5  
6 Dは誰にでもいるはずだ。私にはいる。

7  
8 デモンはソクラテスの意志をある一瞬に停止させ、なすべきことを告げるよりもむしろ、しようとしていたことをやめさせるのです。直観は、ソクラテスのデモンが実践上で行なうのと同じことを、思索の面でしばしば行なうように思われます。少なくとも同じ形で直観は始まり、また直観が最もはっきりした現われ方をするのも同じ形によってです。すなわち直観は制止するものです。広く受け入れられてきた見解、明白と思われてきた主張、科学的として通ってきた命題、これらを前にして直観は、とんでもない、不可能だ、との言葉を哲学者の耳にささやくのです。

11  
12  
13  
14  
15 (アンリ・ベルクソン『哲学的直観』「媒介的イメージ」)

16  
17 Sの場合、こうした「直観」がうまく働かなかった。SのDは、〈自分の物語〉の主人公  
18 Sにとってのみ「明白と思われてきた主張」あるいは「倫理上の考」(下二)を代弁する人  
19 格として現れていたのだろう。「直観」の代弁者でないばかりか、常識的な倫理観の代弁者  
20 でもなさそうだ。なぜだろう。

21  
22 花間一壺酒 かかん いっこ さけ 花間 一壺の酒  
23 獨酌無相親 どくしゃく あいした な 独酌 相親しむ無し  
24 舉杯邀名月 さかずき あ めいげつ むか 杯を挙げて 名月を邀え  
25 對影成三人 かげ たい さんにん な 影に対して 三人を成す

26 (李白『月下獨酌』)

27  
28 Sが「影」(D)とうまくやれないのは、「名月」(M)を仰がないからだ。  
29 イヤミが大金を拾う。すると、天使の姿をしたイヤミと悪魔の姿をしたイヤミが現れる。

30  
31 天使 とどける!!  
32 悪魔 ネコババしろ!!  
33 イヤミ (悪魔を指して) こっち がんばれ!!  
34 悪魔 (天使を殴る) ポカッ おれにはイヤミがついてるんだ。(イヤミに向かって)  
35 ネコババしろ!!  
36 イヤミ ネコババ キーめた!!

37 (赤塚不二夫『おそ松くん』「どこへかくした百万円」より)

38  
39 このとき、イヤミの「意志」を停止させる「直観」は働かなかった。Mが不在だからだ。  
40 語られるSは、イヤミの同類だろう。Sは悪魔的Dである「恐ろしい力」氏の味方をして  
41 しまい、自殺願望を抱くようになる。ところが、そのことに語り手Sは気づいていない。作  
42 者も気づいていないらしい。だったら、読者も気づくべきではなからう。

43  
44  
45  
46  
47

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 2 0 脳内会議  
4 4 4 2 1 デーモンたち

5  
6 自問自答が成果を挙げないのは、理性的で公正なMを招聘できないからだ。

7  
8 或声 お前はそれでも夏目先生の弟子か？

9 僕 僕は勿論夏目先生の弟子だ。お前は文墨に親しんだ漱石先生を知っているかも知  
10 れない。しかしあの気違いじみた天才の夏目先生を知らないだろう。

11 或声 お前には思想と云うものはない。偶々あるのは矛盾だらけの思想だ。

12 僕 それは僕の進歩する証拠だ。阿呆はいつまでも太陽は盥よりも小さいと思ってい  
13 る。

14 或声 お前の傲慢はお前を殺すぞ。

15 (芥川龍之介『闇中間答』一)

16  
17 言うまでもなく、「矛盾だらけの思想」は「思想」のうちに入らない。

18 芥川のDは複数いた。この「或声」の持ち主は「天使」だ。次にやってくるのは「悪魔」  
19 で、最後に「僕等を支配する Daimôn」(『闇中間答』三)がやってくる。三者ともDだ。  
20 デーモンは、「いつかまたお前に会いに来るから」と言い残して去る。

21  
22 僕 (ひとり) (一人になる。) 芥川龍之介！ 芥川龍之介、お前の根をしっかりとおろせ。

23 (芥川龍之介『闇中間答』三)

24  
25 「僕」のDは、またやって来た。ところが、「僕」はそのことに気づかない。「僕」がDに  
26 乗っ取られてしまったからだ。自分を「お前」と呼んでいるのは、そのせいだ。

27  
28 モジュール理論を自己欺瞞に当てはめると、私たちの精神的な生活は、専門別のいくつ  
29 ものチームが運営していて、このチームを構成しているのは「デーモン」(オリヴァー・  
30 セルフリッジが用いた魅力的な名称を使うことにする)(注37)である。従来の考え方、  
31 つまり意識されている心がすべてを管理し、情報処理システムのヒエラルキーの頂点か  
32 ら末端の下働きに命令を下している、という思い込みは捨てる必要がある。それよりもタ  
33 フツ大学の哲学者ダニエル・C・デネットが説く心の捉え方のほうが求めるものに近い。  
34 デネットによると、私たちの心にはさまざまな現実が同時に存在し、それぞれが支配権を  
35 握ろうと、もみくちゃになって争っている。「心の中にあるものは、その争いでほかのも  
36 のに勝ち、行動を支配する力を持ったとき初めて意識される」というのだ。(注38)

37 心という広大な部屋いっぱいには忙しく働く人がひしめいているようすを思い描いてみ  
38 よう。

39 (デイヴィッド・リヴィングストン・スミス『うそつきの進化論 無意識にだまそうとする  
40 心』)

41  
42 「モジュール」は「脳内会議」(E TV『ベーシック国語』2016)みたいものだろう。

43  
44  
45  
46  
47

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 2 0 脳内会議  
4 4 4 2 2 「迷信の塊」

5

6 何四天王の小説や慢語三兄弟の評論などを面白がる人は、会話の基本を身に着けていな  
7 い「淋<sup>さび</sup>しい人間」だろう。主に男たちだが、女子会から弾かれた紅一点、聖母で魔女のマド  
8 ンナも混じる。紅が二点でも三点でも、事情は変わらない。

9

10 私は突然死んだ父や母が、鈍い私の眼を洗って、急に世の中が判然<sup>はっき</sup>見えるようにしてく  
11 れたのではないかと疑いました。私は父や母がこの世に居なくなった後でも、居た時と同  
12 じように私を愛してくれるものと、何処<sup>どこ</sup>か心の奥で信じていたのです。尤<sup>も</sup>もその頃でも  
13 私は決して理に暗い質<sup>たち</sup>ではありませんでした。然し先祖から譲られた迷信の塊も、強い力  
14 で私の血の中に潜<sup>ひそ</sup>んでいたのです。今でも潜<sup>ひそ</sup>んでいるでしょう。

15 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」七)

16

17 「その頃」が年齢のことなら、おかしい。「質<sup>たち</sup>」と「頃」は無関係だろう。〈「理に暗い質<sup>たち</sup>」  
18 の人がまだ多かった「その頃」〉のつもりか。ただし、「理に暗い」は意味不明。

19 「先祖から譲られた」は不可解。〈「父や母」「から譲られた」〉のではないらしい。「迷信」  
20 は怪しい。自分が信じていることを「迷信」とは、普通、言わない。自嘲か。「塊」は意味  
21 不明。たとえば、〈欲の塊〉は強欲な人のことだ。〈好奇心の塊〉は好奇心の強い人のことだ。  
22 だから、「迷信の塊」は、普通、〈迷信家〉といった意味になる。ホムンクルスのようなDか。

23 〈「強い力で」～「潜<sup>ひそ</sup>んで」〉は意味不明。「血」が「質<sup>たち</sup>」の比喩だとすれば、矛盾めいて  
24 いる。「血の中に潜<sup>ひそ</sup>んで」は意味不明。血栓か。「潜<sup>ひそ</sup>んで」というのなら、「迷信の塊」は動  
25 物か。これはDだろう。「迷信の塊」としてのDは、〈Sの両親は、存命中にSを愛さなくても  
26 も、死後にはSを愛する〉といった、ありそうにない物語を語ったのだろう。ありそうにな  
27 い物語だから、Sは「迷信」と呼び、「塊」にして正体不明にしてしまったようだ。少年S  
28 は、理想の両親の霊魂などと出会うために、現実の両親の他界を願っていたのに違いない。  
29 「潜<sup>ひそ</sup>んでいるでしょう」という推量の根拠は不明。あるいは、〈「今」から後「も潜<sup>ひそ</sup>んでいる」  
30 こと「でしょう」〉などの不当な略だろう。〈父母の霊魂はSを守護する〉という物語の枠組  
31 みはあるが、その中身はまったくない。中身のない物語を語るSの魂胆は、かなり怪しい。

32

33 知識人のハムレットは亡霊の素性を疑い、王の本心を探るため国王殺しの芝居を見せ  
34 るが、王は顔色を変えて立ち上がる。

35 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「ハムレット」小津次郎)

36

37 「王」のこの反応が「亡霊」の告げた「国王殺し」の情報の正しさを証明するとは限るま  
38 い。だが、ハムレットは一応探ってみたのだ。

39 一方、Sは「亡霊の素性」を疑わない。彼の考えでは、「亡霊」そのものが実在しないから  
40 だ。ところが、「亡霊」の働きは疑わない。Sは、守護霊の物語を「迷信の塊」として封  
41 印しつつ温存しているので、近代主義的な〈もう一人の自分〉といった概念に思いが及ばな  
42 い。亡霊との問答も、自問自答もできない。ほとんど何も考えていない。

43

44

45

46

47

- 1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 2 0 脳内会議  
4 4 4 2 3 『ホームレス中学生』

5  
6 都合のいいDが出現したら、奇跡のようなものだ。Nの小説の語り手は〈奇跡が起きない  
7 のは変だ〉といった構えでいる。〈鬼退治に出かけた少年が桃太郎のような英雄でないのは  
8 変だ〉みたいな構えだ。

9  
10 パン売り場の前に行き、よだれを垂らした。体力の限界がきてパン売り場の前にしゃが  
11 み込んだとき、店の人から死角になっていた。

12 こんなに腹が減っているのだから一個ぐらい盗ったってバチは当たらないだろうと、  
13 いけない考えが浮かんできた。かなり葛藤した。

14 お兄ちゃんの働く店だからという考えは一切浮かばず、ただ罪を犯すか犯さないかで  
15 迷っていた。腹の虫と理性が戦っていた。

16 そのとき、お母さんの顔が浮かんだ。

17 もしお母さんが見ていて、そんなことをしようとしていると知ったら、どんな顔をする  
18 だろうか。

19 それを考えると、とても盗む気にはなれなかった。

20 腹の虫が負けた。

21 (田村裕『ホームレス中学生』「空腹の果てに……」)

22  
23 ここには数々のDが登場する。

24 「店の人」「お兄ちゃん」「腹の虫」「理性」「お母さん」だ。「店の人」は冷たい世間の一  
25 例であり、まだ被害者にはなっていない。「腹の虫」は悪魔だ。司会をすべき「理性」が「戦  
26 って」も、「こんなに腹が減っているのだから一個ぐらい盗ったってバチは当たらないだろ  
27 う」という考えには理がある。盗人にも三分の理。この理を無視すれば、「理性」は神のよ  
28 うになる。この神は「店の人」と区別できない冷酷な神だ。「渴しても盗泉の水は飲まず」  
29 という。冷酷な神と切実な悪魔の戦いは尽きない。そこへ死んだ「お母さん」が天使になっ  
30 て舞い降りた。すると、「理性」が素直に働いた。「理性」は天使に軍配を上げる。このとき、  
31 〈「理性」が天使を召喚した〉とも言えるし、〈天使が「理性」に仕事をさせた〉とも言える。

32 少年田村がこのように分析的に考えていたわけではない。語り手田村が反省した結果、D  
33 たちがある程度の輪郭を獲得したのだ。彼が食欲について丁寧に語ったから、「理性」が登  
34 場できた。彼が丁寧に語れたのは、少年田村が母親とうまく話しあえていたからだろう。

35  
36 最後の晩餐<sup>ばんさん</sup>というものがあって、死ぬ前に何でも好きなものを食べさせてやるから三  
37 品自由に選べと食の神様に問われたら、一品は迷うかもしれないけれど、二品は即答する。  
38 お母さんのカレーと湯豆腐。

39 (田村裕『ホームレス中学生』「空腹の果てに……」)

40  
41 Nの場合、こうした「お母さん」のようなDは出現しなかった。いや、出現しないのでは  
42 く、存在しなかったのだろう。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4400 『二百十日』など  
3 4430 こじらせタイプ  
4 4431 『ダイナマイト節』

5  
6 Nの小説では、会話が弾まない。弾むようだと、中身がない。

7  
8 「我々が世の中に生活している第一の目的は、こう云う文明の怪獣を打ち殺して、金もカ  
9 もない、平民に幾分でも安慰を与えるのにあるだろう」

10 「ある。うん。あるよ」

11 「あると思うなら、僕と一所にやれ」

12 「うん。やる」

13 「きっとやるだろうね。いいか」

14 「きっとやる」

15 「そこでともかくも阿蘇<sup>ママ</sup>へ登ろう」

16 「うん、ともかくも阿蘇<sup>ママ</sup>へ登るがよかろう」

17 二人の頭の上では二百十一日の阿蘇が轟々と百年の不平を限りなき碧空<sup>へきくう</sup>に吐き出して  
18 いる。

19 (夏目漱石『二百十日』五)

20  
21 煽っているのは「圭<sup>けい</sup>さん」で煽られているのが「碌<sup>ろく</sup>さん」だ。ちなみに、圭がKに、碌が  
22 Sに相当しそうだ。そして、「阿蘇」が「房州」に相当するはずだが、碌と違い、SはKに  
23 オルグされなかった。されないのが普通だろう。碌は、碌でなしだ。

24 「文明の怪獣」は「社会の悪徳を公然道楽にしている奴等」(『二百十日』四)だそうだが、  
25 意味不明。「人を圧迫した上に、人に頭を下げさせようとするんだぜ」(『二百十日』一)と  
26 いうのが本音らしい。圭は彼のための「安慰」を求めているだけだろう。階級的怨念に偽装  
27 した個人的被害妄想の露呈だ。作者は「平民」を出汁にしている。

28 圭が具体的にどんなことを「僕と一所にやれ」と唆すのか、不明。実力行使は封印してい  
29 る。その理由は不明。「相手も頭でくるから、こっちも頭で行くんだ」(『二百十日』四)と、  
30 圭は語る。敵が不鮮明だから、戦術も不鮮明なのだろう。作者は何をしているのか。

31 「うん、ともかく」街に出て歌うがよかろう。

32  
33 四千余万の 同胞<sup>そなた</sup>のためにや

34 赤い囚衣<sup>しきせ</sup>も苦にやならぬ

35 コクリミンブクゾウシンシテ ミンリョクキュウヨウセ

36 若しも成らなきや ダイナマイトどん

37 (演歌壮士団作詞・曲『ダイナマイト節』\*)

38  
39 この歌の内部の世界の「壮士」は「ダイナマイトどん」とやる気である。だから、この演  
40 歌の意味は明瞭で、「演歌壮士団」の意図も明瞭だ。

41 一方、『二百十日』は空疎だ。二人が何をしようとしているのか、さっぱりわからない。  
42 当然、作者の意図も不明。

43

44 \*『演歌の明治大正史』(添田知道)より。

45

46

47

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 3 0 こじらせタイプ  
4 4 4 3 2 「深い原因」

5  
6 圭は、憤懣の原因を隠蔽している。作者は、その隠蔽工作に加担している。

7  
8 隣りの部屋で何だか二人しきりに話をしている。

9 「そこで、その、相手が竹刀しなを落したんだあね。すると、その、ちょっと、小手を取った  
10 んだあね」

11 「ふうん。とうとう小手を取られたのかい」

12 「とうとう小手を取られたんだあね。ちょっと小手を取ったんだが、そこがそら、竹刀を  
13 落したものだから、どうにも、こうにも仕様がないやあね」

14 「ふうん。竹刀を落したのかい」

15 「竹刀は、そら、さっき落してしまったあね」

16 「竹刀を落してしまって、小手を取られたら困るだろう」

17 「困らああね。竹刀も小手も取られたんだから」

18 二人の話ママはどこまで行っても竹刀と小手で持ち切ママっている。黙然として、対座してい  
19 たまさんと碌さんは顔を見合ママわして、にやりと笑った。

20 (夏目漱石『二百十日』一)

21  
22 「竹刀を落してしまって、小手を取られたら困るだろう」という文は意味不明。「竹刀」  
23 がどうであれ、また「小手」であれ、面であれ、胴であれ、一本を「取られたら」試合は中  
24 断、あるいは終了だろう。だから、「困る」は意味不明。

25 圭と碌が「隣の部屋」の「二人の話し」のどこをどうおかしがっているのか、不明。

26  
27 「あの隣りの客は竹刀と小手の事ばかり云ってるじゃないか。全体何者だい」とまさんは呑気なものだ。

28  
29 「君が華族と金持ちの事を気にする様なものだろう」

30 「僕のは深い原因があるのだが、あの客のは何だか訳が分らない」

31 「なに自分ママじあ、あれで分ってるんだよ。——そこでその小手を取られたんだあね——」  
32 と碌さんが隣の真似をする。

33 「ハハハハそこでそら竹刀を落したんだあねか。ハハハハ。どうも気楽なものだ」とま  
34 さんも真似してみる。

35 「なにあれでも、実は慷慨家かも知れない。そらよく草双紙にあるじゃないか。何とか  
36 の何々、実は海賊の張本毛剃九右衛門て」

37 (夏目漱石『二百十日』二)

38  
39 「深い原因」を知れば、圭の意味不明の言葉の「訳」がわかるようになるのだろうか。ちな  
40 なみに、「深い原因」は、Sの「背景」と同じものだろう。

41 「そこでそら竹刀を落したんだあね」は、「隣の真似」になっていない。作者は、圭に  
42 わざと間違えさせているのだろうか。不明。

43  
44  
45  
46

- 1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 3 0 こじらせタイプ  
4 4 4 3 3 「単純でいい女」

5  
6 『二百十日』の圭の性格と『草枕』の画工の性格は対立するもののように誤読できる。一  
7 方は社会悪と戦い、一方は社会悪から逃げるからだ。しかし、どちらの場合も、社会悪の実  
8 体は語られない。被害妄想的である点で、二人の気分は共通している。

9  
10 「あの下女は異彩を放ってるね」と碌さんが云うと、圭さんは平気な顔をして、  
11 「そうさ」と何の苦もなく答えたが、  
12 「単純でいい女だ」とあとへ、持って来て、木に竹を接いだ様につけた。  
13 「剛健な趣味がありやしないか」  
14 「うん。実際田舎者の精神に、文明の教育を施すと、立派な人間が出来るんだがな。惜  
15 しい事だ」  
16 「そんなに惜しけりゃ、あれを東京へ連れて行って、仕込んでみるがいい」  
17 「うん、それも好かろう。然しそれより前に文明の皮を剥かなくちゃ、いけない」  
18 「皮が厚いから中々骨が折れるだろう」と碌さんは水瓜の様な事を云う。  
19 「折れても何でも剥くのさ。綺麗な顔をして、下卑た事ばかりやってる。それも金がない  
20 奴だと、自分だけで済むのだが、身分がいいと困る。下卑た根性を社会全体に蔓延させ  
21 るからね。大変な害毒だ。しかも身分がよかったり、金があったりするものに、よくこう  
22 ママ 云う性根の悪い奴があるものだ」

23 (夏目漱石『二百十日』三)

24  
25 「あの下女」が『二百十日』のヒロインになるべきだった。  
26 Nの小説では「単純でいい女」が、ちらほらする。だが、男たちは、藤尾や那美のような  
27 性悪女に、良くも悪くも関わりたがる。「マドンナ」を、「五分刈り」は「水晶の珠」(『坊  
28 っちゃん』七)にたとえるが、なぜか、近づかない。ちなみに、「山嵐」は彼女を「かの不貞  
29 無節なる御転婆」(『坊っちゃん』九)と呼ぶ。「マドンナ」は静の原型で、正体不明。  
30 「木に竹を接いだ様」の「竹」こそが『二百十日』の隠蔽された主題だ。圭が単純でいい  
31 男なら、「単純でいい女」と睦もう。ところが、彼自身、「下卑た根性」の持ち主だから、同  
32 類を憎悪するわけだ。勿論、作者の企画ではない。  
33 「下卑た根性」とは被愛願望のことだ。Kは、自分の被愛願望を自他に対して隠蔽するた  
34 めに、他人の被愛願望を無闇に攻撃している。圭は、〈自分は「単純でいい女」に愛される〉  
35 という物語を夢としてさえ語れない。愛されない不満ではなく、〈愛の物語〉を語れない不  
36 安を紛らわそうとして、正体不明の「文明の皮」を話題にしているのだ。  
37 『草枕』の画工の場合、那美の「文明の皮」を剥いたことになる。ただし、嘘っぱい。作  
38 者は後日談を構想できなかった。  
39 『二百十日』や『野分』の隠蔽された主題は、それらと真逆のような『草枕』の隠蔽され  
40 た主題と同一なのだ。Nのすべての小説の隠蔽された主題は、〈「文明の皮」を被った女を「単  
41 純でいい女」に変えたい〉と要約できる。〈「単純でいい女」に「文明の教育を施すと、立派  
42 な人間が出来るんだがな」といったロマンチックな話ではない。

43  
44  
45  
46

- 1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 4 0 寛容と横暴  
4 4 4 4 1 「思想とか意見とかいうもの」

5  
6 青年Pにとって「不得要領」だったSの言葉の数々は、Sの「過去」つまり〈「遺書」の  
7 物語〉を文脈に用いることによって明瞭になった。そのように誤読できる。

8  
9 「あなたは私の思想とか意見とかいうものと、私の過去とを、ごちゃごちゃに考えている  
10 んじゃありませんか。私は貧弱な思想家ですけども、自分の頭で纏<sup>まと</sup>め上げた考<sup>ママ</sup>を無暗に  
11 人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を<sup>ことごと</sup>悉くあなたの前<sup>ママ</sup>に  
12 物語らなければならぬとなると、それは又別問題になります」

13 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」三十一)

14  
15 「私の思想とか意見とかいうもの」は〈「あなた」が勝手に「私の思想とか意見とかいう  
16 もの」と思っているもの〉などの不適當な略。「私の過去」は〈「私」が勝手に「自分の過去」  
17 の何かと思っている「もの」〉などの不適當な略。Sの「思想とか意見とかいうもの」の中  
18 身は不明。「過去」も「ごちゃごちゃ」も意味不明。「ごちゃごちゃに考えて」は意味不明。  
19 「考えているんじゃないですか」に対するPの返事は、あるようで、ない。当然だろう。  
20 Sは質問をしているのではなく、その真意は〈考えるな〉だから。厭味つたらしい。

21 「けれども」は変。沈黙考する人は怪しい。「赤ん坊沈黙考うんちだぞ」という句が  
22 ある。頭の中の「思想とか意見とかいうもの」と腹の中の「うんち」の区別は可能か。

23 「隠す必要がない」のは、「思想とか意見とかいうもの」がないからだろう。

24 「<sup>ことごと</sup>悉く」でなくてもよかろう。Pにとって必要な程度だ。「あなたの前に」の「の前」  
25 は不要。「物語らなければ」の「物」は不要。「なければ」はきつい。Pは、〈語れ〉と迫っ  
26 ていない。「はっきり云ってくれないのは困ります」(下三十一)と訴えただけだ。「又」は不  
27 要。「別問題」というが、本来の「問題」が私にはわからない。

28 Sは「思想とか意見」と「過去」を切り離すことに成功しているつもりだろうか。

29  
30 「意見」という言葉の意味を、いいかえれば或る問題がいろんな風に論じられうるとい  
31 うことを、主人に納得させるのにどれほど困難を味わったか、私は今でも忘れることがで  
32 きない。というのは、「理性」はわれわれが確実に知っている事柄についてのみ、肯定す  
33 るか否定する<sup>べ</sup>を教えるものであり、もしこちらがなんらの知識をももち合わせてい  
34 ない事柄については、肯定も否定もできないはずだ、というのが主人の考えであったから  
35 である。そんなわけで、間違<sup>ないし</sup>った乃至は疑わしい、命題について、論争したり喧嘩したり  
36 討論したり主張したりすること自体、明らかに悪であり、フウイヌムにとっては理解に苦  
37 しむ体<sup>こてい</sup>のものなのだ。

38 (ジョナサン・スウィフト『ガリヴァー旅行記』「第四篇 フウイヌム国渡航記」)

39  
40 何に関してであれ、私に独自の「意見」はない。他人の「意見」に対する疑問が浮ぶこと  
41 はあって、その疑問を異見として提出することなら、ある。議論を面白くするために、自分  
42 の趣味とは反対の「意見」を急造することさえ、ある。「意見」なんて、その程度のものだ。

43  
44  
45  
46

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 4 0 寛容と横暴  
4 4 4 4 2 「意見」について

5  
6 互いの「意見」を変えるために、できれば第三案を求めて、人は話し合うはずだ。

7  
8 私は意見の相違はいかに親しい間柄でも、どうする事も出来ないと思っていましたから、私の家に入出入りをする若い人達に助言はしても、その人々の意見の発表に抑圧を加えるような事は、他に重大な理由のない限り、決して遣った事がないのです。私は他の存在をそれほどに認めている、すなわち他にそれだけの自由を与えているのです。だから向うの気が進まないのに、いくら私が汚辱を感じるような事があっても、決して助力は頼めないのです。そこが個人主義の淋しさです。

14 (夏目漱石『私の個人主義』)

16  
17 『福翁自伝』参照。

18 「重大な理由」かどうか、誰が決めるのか。「限り」を設定すれば、「決して」は無効。  
19 〈「存在を」～「認めて」〉は意味不明。「それ」の指す言葉がない。「すなわち」は機能していない。Nには他人に「自由を与えて」やる資格があるらしい。「自由」は、生まれながら各自に備わったものではないらしい。

22 「だから」は機能していない。「気が進まない」か、進むか、どうやって知るのだろう。  
23 「汚辱」は唐突。「汚辱」と「助力」の関係は不明。「頼めない」には〈頼みたいのに〉という含意がある。この含意を「若い人達」が忖度したら、頼んだのと同じだろう。〈「頼めない」から忖度しろ〉と明言したくないだけだろう。〈頼みたくないし、忖度してもほしくない〉などと明言しなければ無責任だ。

26 「そこ」がどこだか知らないが、「そこ」がN式個人主義のさもしさだろうね。

28 Nは寛容の演技をしている。「寛容には限界がある」(『ブリタニカ』「寛容」)のであり、その「限界」つまり「重大な理由」などを明示しないのなら、実際には横暴と同じことだ。

30  
31 もっと解り易く云えば、党派心がなくて理非がある主義なのです。

32 (夏目漱石『私の個人主義』)

34 さらに「解り易く云えば」そんな「主義」は、〈事なかれ主義〉あるいは〈日和見主義〉だ。あるいは、〈特殊な「理非」について暗黙の了解「がある主義」〉だ。

36  
37 だが彼等は超党派的であるが故に、却ってセクト的なのである。なぜなら、彼等相互の間を連ねるものは主観的な、内部的(彼等に言わせれば)なもの以外にはあってならないのだから。

40 (戸坂潤『日本イデオロギー論』15「文学的自由主義」の特質)

41  
42 「彼等」とは、「個人主義者である今日の文学的自由主義者」(『日本イデオロギー論』)だ。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 4 0 寛容と横暴  
4 4 4 4 3 「同じ孤独の境遇」

5  
6 青年Sは、Kを密かに操ろうとする。語り手Sは、語られるSの邪気を反省できない。作  
7 者にも反省できないのだろう。だったら、読者も。

8  
9 よし私が彼を説き伏せたところで、彼は必ず激するに違いないのです。私は彼と喧嘩を  
10 する事は恐れてはいませんでしたけれども、私が孤独の感に堪えなかった自分の境遇を  
11 顧みると、親友の彼を、同じ孤独の境遇に置くのは、私に取って忍びない事でした。

12 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二十四)

13  
14 「彼」はKだ。「説き伏せた」は〈「説き伏せ」ようとし「た」〉の不当な略か。〈説き伏せ  
15 る〉は、「喧嘩をする」と同じ意味らしい。皮肉か。もう、無茶苦茶。

16 Sは、〈Kの間違いをSが指摘すると、KはSと絶交する〉という物語を前提にして語っ  
17 ている。だが、この物語は怪しい。Kの間違いの実態が不明だからだ。したがって、Sの指  
18 摘の仕方を想像することもできない。Kの「激する」理由や様子なども想像できない。

19 〈Sの「境遇」とKの「境遇」は同種だ〉と、Sは思いこんでいる。思いこみから発した  
20 〈お・も・て・な・し〉は、裏ばかり。結局、SはKを「孤独の感」よりも苦しい「境遇」  
21 に追い詰めることになった。「私に取って」は、すごい。謙遜のつもりらしいが、すでに「利  
22 己心の発現」(下四十一)が起きている。そのことに作者は気づいていないようだ。

23  
24 特攻隊というと、批評家はたいへん観念的に批評しますね、悪い政治の犠牲者という公  
25 式を使って。特攻隊で飛び立つときの青年の心持になってみるという想像力は省略する  
26 のです。その人の身になってみるというのが、実は批評の極意ですがね。

27 (小林秀雄・岡潔『人間の建設』における小林発言)

28  
29 「その人の身になってみる」のは普通の人「想像力」の働きであり、批評以前の気配り  
30 だ。気配りは、自分の先入観に基づくものである公算が高い。有難迷惑。

31  
32 一歩進んで、より孤独な境遇に彼を突き落すのは猶厭でした。それで私は彼が宅へ引き  
33 移ってからも、当分の間は批評がましい批評を彼の上に加えずにいました。

34 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二十四)

35  
36 「批評がましい」は〈差し出「がましい」〉という言葉を示している。  
37 〈「当分の間は」～「加えずにいました」〉は意味不明。

38  
39 I 語られるSの立場 〈「当分の間」～「加えずにいました」〉

40 II 語り手Sの立場 〈「当分の間は」～「加えずにい」ようと思ってい「ました」〉

41  
42 語られるSと語り手Sの立場の混同は、随所に見られる。すごく読みにくい。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 5 0 『虞美人草』  
4 4 4 5 1 「病気」の甲野

5  
6 Sは養子妄想を抱いていたようだ。Pも同様。「淋しい人間」とは、養子妄想を抱いたまま成長した男のことだろう。彼らは、自分が実際に養子なのかどうか、はっきりさせたいがらない。本当に養子だとわかると、つらいからだ。逆に、自分が他人に疎まれる理由を養子妄想に結びつけると反省せず済んで楽だからでもある。Kの「深い理由」やSの「過去」などの物語の主題は養子妄想的なもののはずだが、それを明確に語ることは非常に困難なので、別途の物語によって主題の気分を伝達しようとする。この企画に作者は加担している。だから、本文が意味不明になるのだ。

13  
14 「みんな私が悪いんでしょうね」と母は始めて欽吾に向った。腕組をしていた人は漸く口を開く。――

15  
16 「偽の子だとか、本当の子だとか区別しなければ好いんです。平たく当り前にして下されば好いんです。遠慮なんぞなさらなければ好いんです。なんでもない事をむずかしく考えなければ好いんです」

17  
18  
19 甲野さんは句を切った。母は下を向いて答えない。或は理解出来ないからかと思う。  
20 甲野さんは再び口を開いた。――

21 「あなたは藤尾に家も財産も遣りたかったのでしょうか。だから遣ろうと私が云うのに、  
22 いつまでも私を疑って信用なさらないので悪いんです。あなたは私が家に居るのを面白  
23 く思って御出でなかったでしょう。だから私が家を出ると云うのに、面当の為めだとか、  
24 何とか悪く考えるのが不可ないです。あなたは小野さんを藤尾の養子にしたかったんで  
25 しょう。私が不承知を云うだろうと思って、私を京都へ遊びに遣って、その留守中に小野  
26 と藤尾の関係を一日一日と深くしてしまっただけでしょう。そう云う策略が不可ないです。  
27 私を京都へ遊びにやるんでも私の病気を癒す為に遣ったんだと、私にも人にも仰しゃる  
28 でしょう。そう云う嘘が悪いんです。――そう云う所さえ考え直して下されば別に家を出  
29 る必要はないのです。何時までも御世話をして好いのです」

30 甲野さんはこれだけでやめる。母は俯向いたまま、しばらく考えていたが、遂に低い声  
31 で答えた。――

32 「そう云われて見ると、全く私が悪かったよ。――これから御前さんがたの意見を聞いて、  
33 どうとも悪い所は直す積だから……」

34 (夏目漱石『虞美人草』十九)

35  
36 「悪いんでしょうね」は下品。「母」は甲野欽吾の義母。「腕組をしていた人」が甲野。「養  
37 子」は〈婿〉のことで、「うらなり」の後裔である小野がその候補。甲野の「病気」は、「嘘」  
38 ではなからう。『虞美人草』は、〈甲野は「病気」だ〉という観点で読みなおすべきだ。〈甲  
39 野は「病気」のせいで義母を「疑って信用なさらぬ」と解釈すべきなのだ。

40 甲野は、「五分刈り」の後裔で、「母」に愛されない。暇人で、義母の娘である藤尾の恋愛  
41 の邪魔をして遊ぶ。まるで義妹に恋をしているみたいだ。

42 『じゃじゃ馬ならし』(シェイクスピア)のような喜劇を、作者は構想できなかった。

43  
44

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 5 0 『虞美人草』  
4 4 4 5 2 「恐ろしい悲劇」は妄想

5

6 「自由と独立と己<sup>おの</sup>れ」を一緒くたにして〈エゴイズム〉と呼ぶのは安直だ。これでいいの  
7 なら、作者が〈エゴイズム〉という言葉を使わなかった理由を知らねばならない。

8

9 美男子で金持ちで家柄のよい青年ウィロビー・パターンは、きわめて高慢でしかも自分  
10 かってな男であったが、妻を選ぶに際して相手の気持ちを考えず、身がってな行ばかりと  
11 るために、ついに女性から次々に手厳しくしっぺ返しをされるという喜劇。

12 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「エゴイスト」小池滋)

13

14 自覚のないエゴイストの物語が『明暗』だ。作者は、主人公の津田が「女性から次々に手  
15 厳しくしっぺ返しをされるという」結末を回避しようとしたが、無理で、未完に終わった。

16 『エゴイスト』の男女の立場を取りかえたのが『虞美人草』だ。藤尾は女装したウィロビー  
17 ーだ。原典のエゴイストは死なないが、突如、藤尾は憤死する。

18

19 尊大と、慢心と、退屈と、また、われらの間に見出される粗野と雑駁との痕跡、それら  
20 を正そうとするのが「喜劇」の女神なのだ。

21

(ジョージ・メレディス『エゴイスト』「序の章」)

22

23 藤尾の死後、義兄の甲野は、友人の宗近に宛てて「悲劇は遂に来了」(『虞美人草』十九)  
24 と書き送る。義妹の死を悲しむ様子はない。異様に冷たい文章だ。

25

26 道義の観念が極度に衰えて、生を欲する万人の社会を満足に維持しがたき時、悲劇は突  
27 然として起る。ここに於て万人の眼は悉く自己の出立点に向う。

28

(夏目漱石『虞美人草』十九)

29

30 「自由と独立と己れ」云々の「現代」は「道義の観念が極度に衰えて、生を欲する万人の  
31 社会を満足に維持しがたき」時代だろう。だったら、Sは端折り過ぎ。

32

32 藤尾の「悲劇」は、甲野の妄想の産物だ。『虞美人草』自体は悲劇でも喜劇でもなく、意  
33 味不明。Sの「恐ろしい悲劇」も「遺書」を読んだPの妄想の産物だ。

34

35 明治以後も、新派悲劇とよばれる「お涙頂戴(ちょうだい)」劇が中心を占めるのは、  
36 日本人は国民性として真の原理的対立を好まず、現実を直視せずに互いに甘えをよしと  
37 する性向をもつからだとも考えられよう。西洋の悲劇はいわば「ドラマ」の本質を明示す  
38 るものであり、日本にこうした悲劇がなかったことは、彼我の演劇観の相違を示唆するも  
39 のであるといえる。

40

(『日本大百科事典 (ニッポニカ)』「悲劇」毛利三彌)

41

42 『エゴイスト』の喜劇を悲劇に偽装しようとして失敗したのが『虞美人草』だ。

43

44

45

46

47

48

49

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 4 0 0 『二百十日』など  
3 4 4 5 0 『虞美人草』  
4 4 4 5 3 「真面目」は意味不明

5  
6 「真面目」は、真面目人間になりすますための呪文のようだ。

7  
8 僕は昨日も、今日も真面目だ。君もこの際一度真面目になれ。人一人真面目になると当  
9 人が助かるばかりじゃない。世の中が助かる。

(夏目漱石『虞美人草』十八)

10  
11  
12 「僕」は宗近で、「君」は小野。Kは宗近の末裔。  
13 「真面目になれ」とは、〈藤尾との火遊びはやめろ〉といった意味だ。

14  
15 真面目になれる程、精神の存在を自覚する事はない。天地の前に自分が厳存していると  
16 云う観念は真面目になって始めて得られる自覚だ。真面目とはね、君、真剣勝負の意味だ  
17 よ。遣っ付ける意味だよ。

(夏目漱石『虞美人草』十八)

18  
19  
20 「真面目」は、作中で呪文のように機能する。この宗近の与太話を聞かされた小野は、こ  
21 ろりと改心してしまうのだ。小野はあっさりと藤尾を捨てる。捨てられた藤尾はショックで  
22 自殺する。そして、「世の中が助かる」という喜劇、いや、「悲劇」だそうだ。

23  
24 凡てが美しい。美しいもののなかに横わる人の顔も美しい。驕る眼は長えに閉  
25 じた。驕る眼を眠った藤尾の眉は、額は、黒髪は、天女の如く美しい。

(夏目漱石『虞美人草』十九)

26  
27  
28 このように語れば、悲劇的というか、お涙頂戴だろう。『虞美人草』が悲劇なら、藤尾は  
29 犠牲者だろう。彼女の性格の悪さは親譲りということになる。

30 甲野の手紙をイギリスで読んだ宗近は、「此所では喜劇ばかり流行る」(『虞美人草』十九)  
31 と答える。「喜劇」の実例は示されていない。『エゴイスト』だろうか。

32 『エゴイスト』の物語は、ウィロビーの敗北に終わる。悪役が負けるのだから、この物語  
33 は立派な喜劇だ。『虞美人草』の悪役が藤尾なら、『虞美人草』も喜劇のはずだ。ところが、  
34 作者の観点では悲劇らしい。不可解。真の悪役は甲野の義母だろうが、彼女は改心したふり  
35 をして生き残るから、喜劇ですらない。竜頭蛇尾。

36 『こころ』は、「エゴイスト」(中十五)容疑のSが主人公の喜劇であるべきだ。ところが  
37 が、「恐ろしい悲劇」のように偽装されている。その結果、Sは「矛盾な人間」として死ぬ  
38 しかなくなる。矛盾しているのはSではなく、作者の思考なのだ。「矛盾な」は未熟な日本  
39 語。真意は〈異常な〉だろう。

40 『こころ』に続く『道草』では、『二百十日』の圭に始まってKに至る独善家は登場しな  
41 いが、その後の『明暗』では圭に似た小林という男が出てくる。津田は小林を疎む。晩年の  
42 Nは、圭的キャラに対する違和感をやっと自覚できるようになったらしい。

43

44

45

46

47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4510 「還元的一致」  
4 4511 「意識の連続」は意味不明

5  
6 Nは変な読み方をしていた。夏目宗徒は、その読み方に倣うらしい。

7  
8 だからこれに対して<sup>きょうらく</sup>享楽の境<sup>さかい</sup>に達するという意味は、文芸家のあらわした意識の連続  
9 に随伴すると云う事になります。だから我々の意識の連続が、文芸家の意識の連続とある  
10 程度まで一致しなければ、享楽と云う事は行われるはずがありません。いわゆる還元的感  
11 化とはこの一致の極度において始めて起る現象であります。

12 (夏目漱石『文芸の哲学的基礎』)

13  
14 「これ」は不明。「意識の連続」は意味不明。「ある程度」がどの程度か、不明。  
15 どんな理由で「一致」が起きるかはともかく、誰に「一致」という現象が観察できよう。  
16 「いわゆる」は意味不明。この「一致」は、ある特殊な読者の独り芝居だ。あるいは自己  
17 暗示。「読書行為が意味の再生産の場となるということ」(佐藤裕子『漱石のセオリー『文学  
18 論』解説』「結論」)などとは無関係。「再生産」が異本制作を含むのなら、見当違いだ。

19 「感化」は「自己の繙読しつゝある一書物より一個の<sup>サゼツシヨウ</sup>暗示を得べく努むること」(N『余  
20 が一家の読書法』)の「<sup>サゼツシヨウ</sup>暗示」と同じ意味だろうが、これも意味不明。

21  
22 かような男が、何かの<sup>いんねん</sup>因縁で、急にこの還元的一致を得ると、非常な<sup>ぶおとこ</sup>醜男子が絶世の美  
23 人に惚れられたように喜びます。

24 (夏目漱石『文芸の哲学的基礎』)

25  
26 「かよう」は、どの「よう」か? 「何か」って、何か? 「<sup>いんねん</sup>因縁」は意味不明。「急に」  
27 が〈徐々に〉では駄目か。「還元的一致」は無意味。『美女と野獣』(ポーモン夫人)みたいに、  
28 「<sup>ぶおとこ</sup>醜男子」が美男子に変身するのか。どういう魔法か。「美女」が<sup>しこめ</sup>醜女になることはないの  
29 か。『みにくいシシュレック』(スタイグ)参照。アニメではなく、絵本の方。

30 「文芸家」に愛されたような気分を味わいたくて読書をする人は、作家が特定できない場  
31 合、あるいは共同制作の場合、どうするのだろう。

32 Nの考える「文芸家」は、実在の、しかし不特定の読者の被愛願望を満たしてやるために  
33 作品をこしらえることになる。そういう「文芸家」が実在したとしても、その事実を観察す  
34 ることは、「文芸家」本人を含め、誰にもできない。超能力者なら、できるかも。

35 『こころ』のような虚構の中で、〈遺書〉を媒介にして、SとPの間で「一致」が起きた  
36 と誤読することは可能だ。ただし、〈「一致」が起きた〉という事実は語られていない。〈S  
37 は「一致」を期待し、Pは「一致」を夢見た〉などと想像するのがやっつだ。

38 Nは、実作を続けるうち、「還元的一致」が妄想であることに気づく。だから、〈ある作者  
39 とある読者〉の関係を、〈語り手Sと聞き手P〉の関係に置き換えて処理した。ところが、  
40 作品の外部の世界で、この妄想が真実のように伝播する。つまり、作中のSとPの間で起き  
41 なかったことが、Nと自分の間で起きたように思う人が出てくるわけだ。そんな「非常な<sup>ぶ</sup>  
42 <sup>おとこ</sup>醜男子」を、普通の信者と区別して、宗徒と呼ぶ。

43  
44  
45

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4510 「還元的一致」  
4 4512 仲良しごっこ

5  
6 Nの『文学論』を解説できた人は、いないようだ。できそうな気になる人はいる。

7  
8 『文学論』は、以後のかれの小説作品を解く鍵であるばかりでなく、日本の近代の精神  
9 構造を解く大きな鍵である。

10 (高橋和巳『夏目漱石『文学論』』\*)

11  
12 この文は結語だが、唐突。「鍵」を挿入するための鍵穴の形状や性質などは不明。  
13 この文は、高橋の「精神構造を解く大きな鍵」にもなりそうだ。

14  
15 フランスのある寓話に、ある貧しい少年が、魔法使いから一つの青い玉を授かった話か  
16 ある。その玉は、耐え難い不幸に襲われた時に覗くと、世界の何処かで、いま自分が経験  
17 するのと同じ不幸<sup>ミズ</sup>を耐えている見知らぬ人の姿が浮んでくる。その少年は、その玉を唯一  
18 の富とし、その映像にのみ励まされて逆境に耐えてゆく。李商隠が夥しい故事を羅列する  
19 とき、それは概ね、彼の意識に浮んだ青い玉の像だと解してよい。それ故にまた、そこに  
20 表現される意味が享受者の精神の玉に何らかの像を結べばそれで充分であり、それ以上  
21 の穿鑿は必ずしも必要とはしない。それが文学なる人間のいとなみが持つ最大の効用で  
22 あるだろうから。

23 (高橋和巳『『李商隠』解説』)

24  
25 「覗く」のは、垣間見とって、「文学なる人間のいとなみ」だから、盗撮も文学的だ。  
26 現在では、機械仕掛けの「青い玉」を使えば、「見知らぬ人」の私生活が覗ける。やがて、  
27 脳と脳を繋ぐことも可能になる。高橋式「文学」は、無用の長物になりつつある。

28 〈共感できないと理解できない〉という文は、〈理解できれば共感できる〉という文と同  
29 値だ。言うまでもなく、理解できても共感できるとは限らない。

30 「還元的一致」において、発信者の期待するような反応を受信者が示せないと、発信者は  
31 「縁なき衆生<sup>しゅじょう</sup>は度しがたし」(『文芸の哲学的基礎』)とばかりに受信者を切り捨てる。だか  
32 ら、気弱な受信者は理解しようと努力する。ずるい人は、理解できたふりをする。やがて、  
33 他人はさておき自分だけは理解できたと思ひこむ。こうした態度は、当人たちが幼少期に味  
34 わわされた「不幸」によって学んだものだろう。高橋やNの「精神構造」は、ネグレクトさ  
35 れた幼児の不安や羞恥などによって形成されている。

36  
37 あいまいなものから出発して、それが何であろうととにかくおのれの思考のなかに生  
38 ずるものを明確にしようと試みるような連中は、まさしく豚野郎である。

39 (アントナン・アルトー『神経の秤』)

40  
41 〈ボッチは恥〉という気分は、「日本の近代の精神構造」と無関係ではないのかもしれな  
42 い。〈五族共和〉という仲良しごっこの標語があった。辛亥革命のパクリ。

43  
44 \*『日本の名著 近代の思想』(桑原武夫編) 参照。

45  
46  
47  
48

1 4 0 0 0 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4 5 0 0 ボッチは恥  
3 4 5 1 0 「還元的一致」  
4 4 5 1 3 「一を聞いて十を感ずる人」

5  
6 Nは意図的におかしな言葉遣いをしていた。  
7

8 とにかく、そんな形容を使わなければならない気分が起りまして、<sup>はんもん</sup>煩悶致します。煩悶  
9 してどうか発表したいとするが発表できない。できないでしまえばそれまでであります  
10 が、せめて不完全ながら十の一でもあらわそうとすると、是非とも象徴に訴えなければな  
11 りません。十のものを十だけあらわさないで——あらわさないと云っては間違<sup>ママ</sup>になります  
12 す。あらわせないのです。でやむをえず一だけにしてやめておく叙述であります。無論<sup>ママ</sup>気  
13 分を気分としてあらわすなら、大に悲しいとか、少々<sup>うれ</sup>嬉しいとか云うだけで、始めから表  
14 わせる表わせないの議論をする必要がないのですが、この深いような、広いような、複雑  
15 なような気分の対象を、客観的なる非我的世界に見出そうとすると十の気分を一の形相  
16 で代表させて、残る九はこの象徴を通じて思い起すようにしなければなりません。しかし  
17 ながら元来これは本人すら無理な事をしているのですから、他人にはよほど通用しにく  
18 くなる訳であります。一を聞いて十を知ると云う事がありますが、一を見て十を感ずる人  
19 でなければできない事です。

20 (夏目漱石『作家の態度』)  
21

22 〈「そんな」～「気分」〉とは「無限の憧憬<sup>しょうけい</sup>」(『作家の態度』)だが、N自身「実は分り  
23 ません」(『作家の態度』)と述べている。

24 「十の一」は無意味。「象徴」は意味不明。

25 「あらわさないと云っては間違」で馬脚をあらわしたか。

26 「やむをえず」は意味不明。

27 「無論」以下、意味不明。珍糞漢糞。難解な漢文のような珍文。

28 「一を聞いて十を感ずる」ことが「還元的感化」だろうか。そうだとすると、誰が〈君は  
29 「十」を感じ得た〉と保証してくれるのか。

30  
31 おすぶ手のしづくににごる山の井のあかでも人に別れぬるかな 紀貫之

32 (『古今和歌集』巻第八 離別歌404)  
33

34 〈「山の井」の物語〉を知らずに、歌人の「気分」を想像することはできない。  
35

36 朝香山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに

37 (『万葉集』巻第十六 3807)  
38

39 この歌を知れば、「むすぶ手」の歌人の「気分」を微かに「感ずる人」になれるかもしれ  
40 ない。ただし、〈「朝香山」の物語〉が不明だ。この物語を知らずに、〈私は「十」を感じ得  
41 た〉と主張するのは、おっちょこちょい。

42 Nは、本歌などの原典を隠蔽したまま、その「気分」だけを伝達しようとした。  
43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4520 「失恋」は恥の「象徴」  
4 4521 英文学者か

5  
6 Nは「明治・大正期の小説家、英文学者」（『日本歴史大事典「夏目漱石」）と紹介されて  
7 いる。「英文学者」というのは怪しい。

8  
9 私はこの頃日本近代医学の紀元は森鷗外のドイツ留学に求むべきだと、固く信ずるよ  
10 うになってきた。

11 （丸山博『森鷗外と衛生学』「日本近代医学の出発点としての森鷗外」

12  
13 Nについて、〈英文学研究の紀元はNの英国留学に求むべきだ〉といった評価はなかろう。  
14 ちなみに、留学は「英語研究のため」（新潮文庫『こころ』年譜）だった。

15 森に関する「明治・大正期の小説家、翻訳家、評論家、陸軍軍医」（『日本歴史大事典』「森  
16 鷗外」）に〈衛生学者〉を加えるべきだろう。

17 Nは「翻訳家」ですらない。

18  
19 シモンズの<sup>フランス</sup>仏蘭西の象徴派を論じた文の中に、こんな句があります。「我々が林中の木  
20 を一本一本に叙述するの煩<sup>はん</sup>を避けて、自然を怖<sup>おそ</sup>れて逃れんとするがごとくもてなすと、ま  
21 すます自然に近くなります。また普通の俗人は日常の雑事<sup>とら</sup>を捉えて実在に触れていると  
22 考えておりますが、これらの煩<sup>はん</sup>瑣<sup>さ</sup>な事件を掃蕩<sup>そうとう</sup>してしまうと、ますます人間に近くなるも  
23 のであります。世界に先<sup>さき</sup>って生じ、世界に後れて残るべき人間の本体に近づくものであ  
24 ります」

25 （夏目漱石『作家の態度』）

26  
27 誰の訳か知らないが、意味不明。Nに理解できていたのか。

28  
29 すべては、文学を霊化し、修辞の古い束縛、つまり外面性という古いしがらみを回避す  
30 る試みである。美しい物事を魔術を使ってかのように喚起するために、描写が追放される。  
31 言葉がもっと精妙な翼に乗って飛翔するために、詩形の規則的な拍子が破壊される。その  
32 まっただ中に閉じこめられて私たちが孤立している大きな神秘は、未知の海が大きな虚  
33 空でしかなかった人に恐れられていたようには、もはや恐れられていないのである。森の  
34 木々の目録を作ることを蔑みながら、戦慄らしいものを抱いて自然から尻込みしている  
35 ように見えるとき、私たちは実はその自然にもっと近づいていることになるのである。さ  
36 らに言えば、日常生活のいろいろの偶発事のなかで呻吟していると、男も女も自分たちだ  
37 けが実在に触れていると想像するものだが、私たちはそういった偶発事を払いのけると  
38 き、人間性に、世界が生まれる前から始まっていたかもしれない、また世界が終わったあ  
39 とにも存続するかもしれない人間性のあらゆる要因に、ますます近づいていくのである。

40 （アーサー・シモンズ『〔完訳〕象徴主義の文学運動』「序言」山形和美訳）

41  
42 この訳文だと、〈シモンズの考えは難解らしい〉ということが察せられる。

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4520 「失恋」は恥の「象徴」  
4 4522 象徴と暗示

5  
6 Nがシモンズを引用したのは、「象徴」の効用について紹介したかったからだ。

7  
8 要するに象徴として使うものは非我の世界中のものかも<sup>ママ</sup>知れませんが、その暗示する  
9 ところは<sup>ママ</sup>自己の気分であります。要するに<sup>ママ</sup>おれの気分であって、非常に厳密に言う<sup>ママ</sup>と他人  
10 の気分ではない、外物の気分では無論ない。

11 (夏目漱石『作家の態度』)

12  
13 「要するに」は便利。「気分」を伝えるのに「象徴」は不要。泣いたり笑ったりすれば、  
14 伝わる。もらい泣きというのがある。「気分」は伝染する。集団ヒステリーというのものもある。

15  
16 ある象徴により特定の事象を置き換えて表現すること。桜で日本を表現するなど二者  
17 間に事実関係が認められるもの、芸術にみられる比喩的なもの、夢に代表される無意識的  
18 表象作用によるものがあり、いずれも自我の防衛機制として用いられる。

19 (『精神科ポケット辞典 [新訂版]』「象徴化」)

20  
21 Nの理解では〈「人間の本体」＝「自己の気分」〉だろう。独りよがり、勘違い、自惚れの  
22 〈おれジナル〉だ。一方、「完訳」では〈「人間の本体」＝「人間性」〉だ。どちらが適当か。  
23 考えるまでもなからう。

24  
25 象徴の用は、之が助を<sup>か</sup>藉りて詩人の観想に類似したる一の心状を<sup>ママ</sup>読者に与ふるに在り  
26 て、必らずしも同一の概念を<sup>ママ</sup>伝へおと<sup>つと</sup>勉むるに非ず。されば<sup>しづか</sup>静に象徴詩を<sup>ママ</sup>味ふ者は、自  
27 己の感興に<sup>くわんしやう</sup>応じて、詩人も未だ説き及ぼさざる言語道断の妙趣を<sup>ママ</sup>翫賞し得可し。故に一  
28 篇の詩に対する解釈は人各或は見を異にすべく、要は<sup>たゞ</sup>只類似の心状を喚起するに在りと  
29 す。

30 (上田敏『海潮音』「序」)

31  
32 Nのいう「暗示」は、不適切なもののように思われる。暴力的、あるいは病的。

33  
34 ①別のものを示して、それとなく感づかせること。「一を与える」「将来を一する」

35 ②〔心〕感覚・観念・意図などが、理性に訴えることなく無意識のうちに他人に伝達さ  
36 れる現象。「一にかかる」

37 (『広辞苑』「暗示」)

38  
39 上田の「象徴の用」は、①だろう。Nの「暗示」は②だろう。そうだとすれば、「作家」  
40 は、暗示②によって他人の心を操る人、メンタリストの DaiGo みたいな人だろう。彼らは  
41 芸術的技能を必要としない。読心術師が「力と自信をもって宣言すれば、単純な要求も暗示  
42 になりうる」(トルステン・ハーフェナー『心を上手に透視する方法』)からだ。

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4520 「失恋」は恥の「象徴」  
4 4523 「赤い本」

5  
6 語り手のワガハイは苦沙弥の「失恋」について、明確に語れない。語り手Sは、Kの「失  
7 恋」について、明確に語れない。「失恋」がNの自分語だからだろう。「失恋」は、Nの「気  
8 分」の「象徴」なのに違いない。

9 迷亭が、「実はこれでも失恋の結果、この歳<sup>とし</sup>になるまで独身で暮らしているんだよ」(『吾  
10 輩は猫である』六)と前置きして思い出を語り始める。苦沙弥の「失恋」の話を代用だろう。

11 迷亭が一目ぼれした美女が実は「葉缶頭<sup>やかんあたま</sup>」(『吾輩は猫である』六)だったので「失恋」をし  
12 たという。「失恋」は〈失望〉などが適当だろう。

13 おかしなことに、彼女の頭は苦沙弥の妻の頭に似ている。

14  
15 ———主人が偕老同穴<sup>かいろうどうけつ</sup>を契った夫人の脳天の真中には真丸な大きな禿<sup>はげ</sup>がある。  
16 (夏目漱石『吾輩は猫である』四)  
17

18 苦沙弥が妻の「禿<sup>はげ</sup>」を発見すると、寒月そっくりの「泥棒陰士」(『吾輩は猫である』五)  
19 が登場する。寒月が真球を作り損ねる話をすると、迷亭は「葉缶頭<sup>やかんあたま</sup>」の少女に「くだらない  
20 失恋」をした話をする。『吾輩は猫である』は、〈寒月は苦沙弥に注がれるべき女の愛を横取  
21 りする〉という物語を隠蔽するために進行する。寒月はKに相当する。苦沙弥はSだ。

22 「この泥棒君が天地の間に存在するのは富子嬢の生活を幸福ならしむる一大要件であ  
23 る」(『吾輩は猫である』五)と、ワガハイは語る。意味不明。

24  
25 先刻<sup>きつぎ</sup>から赤い本に指を噛まれた夢を見ていた、主人はこの時寐返り<sup>ねがえ</sup>を堂と打ちながら  
26 「寒月だ」と大きな声を出す。

27 (夏目漱石『吾輩は猫である』五)  
28

29 「赤い本」には、「失恋」という名の赤恥の物語が記されているのだろう。

30 泥棒は、後に逮捕され、ワガハイの前に現われる。だが、そのとき、寒月似という話はな  
31 い。映画の『吾輩は猫である』(市川崑監督)では、捕まった泥棒を寒月と同じ俳優が演じ  
32 ていた。当然なのだが、その笑顔を目にしたとき、私はどきんとしたことだ。

33  
34 「竹刀も取られるんだあねか。ハハハハ。何でも赤い表紙の本を胸の上<sup>マフ</sup>へ載せたまんま寐  
35 ていたよ」

36 「その赤い本が、何でもその、竹刀を落したり、小手を取られるんだあね」と碌さんはど  
37 こまでも真似をする。

38 「何だろう、あの本は」

39 「伊賀の水月<sup>いが すいげつ</sup>さ」と碌さんは、躊躇<sup>ちゆうちゆう</sup>なく答えた。

40 (夏目漱石『二百十日』二)  
41

42 「赤い本」には圭の赤恥の物語が記されているはずだ。「伊賀の水月<sup>いが すいげつ</sup>」は仇討ち。

43  
44  
45  
46

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4530 真善美荘  
4 4531 独特の手法か

5  
6 Nは言葉を用いて何をした人だと思われてきたのだろう。

7  
8 作家である以上、彼はその眼に映じる人間の真の姿を描かすには済まされない。しかし、  
9 それは彼の内部に存在する「善」と「美」に対する感受性と必然的に相剋せざるを得ない。  
10 いわば告白しないことによって告白し、虚構や象徴によってのみ自己の秘密を語るとい  
11 う、漱石独特の手法が生れたのはここからである。それは、換言すれば、いわば非存在に  
12 よって存在を語ることであり、事実には直ちに還元し得ぬ真実を語ることであった。

13 (江藤淳『漱石の文学』\*)

14  
15 〈「作家である以上、彼は」～「を描かすには済まされない」〉といった類の宣言は、いか  
16 がわしい。「彼」はNだ。「人間の真の姿」なんてフィギュア、どこで売ってるの? 「真の  
17 姿」に対応する「眼」は〈心眼〉とすべきだ。「物事の真の姿をはっきり見分ける心の働き」  
18 (『日本国語大辞典』「心眼」) だからだ。

19 「しかし」は、〈ところで〉といった感じか。「存在する」の被修飾語は「善」と「美」  
20 か。「感受性」か。どちらでも意味不明。「善」と「美」は鉤で囲ってあるのに、前の文の「真」  
21 は丸出し。「必然的に」は不可解。「それ」の指すものが不明だから、「相剋」は意味不明。  
22 〈対立〉という意味なら、〈真×偽〉や〈善×悪〉や〈美×醜〉だろう。

23 「いわば」は不可解。「告白しないことによって告白し」なんて……、ああ、誰か止めて  
24 やれよ。「自己の秘密」=「人間の真の姿」か。しかし、「人間」が「自己」なら、どうし  
25 て本人の「その眼に映じる」ことになるのだろう。「鏡の前にわが顔を映して」(『それから』  
26 一) いるのか。「の前」は不要。「独特の手法」の実践例は不明。「ここ」は、どこ?

27 「換言すれば」って、何を何に? 「換言」と「いわば」は重複のようだが、どうだろう。  
28 「非存在」が「本来思考の対象にならないもの」(『日本国語大辞典』「非存在」) なら、「独  
29 独特の手法」どころか、ありえない話だ。サルトル的には逆で、「想像力はその対象を非存在  
30 あるいは不在のものとして思念する」(『哲学事典』「無化」) とされるから、Nは普通のこと  
31 をやっただけで、「独特の手法」ではなく、〈素人「の手法」〉だ。「虚構や象徴」は記号とし  
32 てなら、紛れもなく存在している。話がまるで見えない。「存在を語る」は意味不明。「事実  
33 には直ちに還元し得ぬ真実」は意味不明。フレッシュ・ジュースという「事実」からできた  
34 「真実」つまり濃縮果汁は、「直ちに」ではなく適当な時期に水増しすれば、濃縮果汁還元  
35 ジュースという「事実」になるが、フレッシュ・ジュースという「事実」にはならない。そ  
36 ういう話か。あるいは、〈整数〉という「真実」を、〈1、2、3…〉という個々の「事実」  
37 に「還元」しようとしても、完全には不可能。そういう話か。江藤は、〈Nは具体的な物語  
38 が想定できない空疎な教訓を語った〉と言っているようなものだ。酸化物を還元すると単体  
39 になる。だから、〈単純な「真実」に「還元」しづらい雑多な「事実」〉などと、逆に言うべ  
40 きだろう。あるいは、〈「事実」として存在する個々の他人「には直ちに」利益を「還元し得  
41 ぬ真実を語ること」〉などの略か。あるいは、「還元」は「換言」の変換ミスか。「語ること  
42 であり」と「語ることであった」の主語がない。

43  
44 \*夏目漱石『こころ』(新潮文庫) 所収。

45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4530 真善美荘  
4 4532 「荘厳に対する理想」

5  
6 江藤は忘れたようだが、『文芸の哲学的基礎』に「文芸家の理想」を「美的理想」と「真  
7 に対する理想」と「愛に対する理想及び道義に対する理想」と「荘厳に対する理想」に分け、  
8 「理想は四種あるので、四種以下にはならぬのであります」と書いてある。「荘厳に対する  
9 理想」は「heroism」と呼ばれる。ちなみに〈善美〉や〈壮美〉という語があるが、これら  
10 をNがどう始末したか、不明。

11  
12 一般の世が自分が実世界における発展を妨げる時、自分の理想は技巧を通じて文芸上  
13 の作物としてあらわるるほか路がないのであります。そうして百人に一人でも、千人に一  
14 人でも、この作物に対して、ある程度以上に意識の連続において一致するならば、一歩進  
15 んで全然その作物の奥より閃めき出ずる真と善と美と壮に合して、未来の生活上に消え  
16 がたき痕跡を残すならば、なお進んで還元的感化の妙境に達し得るならば、文芸家の精神  
17 気魄は無形の伝染により、社会の大意識に影響するが故に、永久の生命を人類内面の歴史  
18 中に得て、ここに自己の使命を完うしたるものであります。

19 (夏目漱石『文芸の哲学的基礎』)

20  
21 この講演は「意識の連続」と「還元的感化」の関係について論じたものだが、この二つの  
22 言葉はともに意味不明なので、その関係も不明だ。「真と善と美と壮」の「壮」の字に注目。  
23 「荘厳」の「荘」とは違う。ただし、「荘厳」と〈壮麗〉は似ているから、こだわる必要は  
24 ないのかもしれない。「社会の大意識」は意味不明。〈「社会」の意識〉でも意味不明。「影響  
25 するが故に、永久の生命を」という因果関係は不明。エイキョーはエイキューかい。「得て」  
26 と「完うしたるものであります」の主語が不明。「自己」は、「自分」でも「作物」でもな  
27 く、「文芸家の精神気魄」だろうか。だったら、「永久」の前で文が捻じれていることになる。  
28 「荘厳に対する理想」に関して、Nは次のような話を挙げている。

29  
30 楠公が湊川で、願くは七たび人間に生れて朝敵を亡ぼさんと云いながら刺しちがえて  
31 死んだのは一例であります。

32 (夏目漱石『文芸の哲学的基礎』)

33  
34 「刺しちがえて」は〈弟と「刺しちがえて」〉の略。で、誰が「云いながら」だろうね。

35  
36 死に臨み正成に最期の一念を尋ねられて、「七生マデ只同ジ人間ニ生レテ、朝敵ヲ滅サ  
37 バヤトコソ存候へ」と答えた『太平記』は伝えている。これが明治以降「七生報国（し  
38 ちしょうほうこく）」という天皇制国家擁護のイデオロギーにすり替えられ、「忠臣の鑑」  
39 のエピソードとして喧伝された。

40 (『日本歴史大事典』「楠正季」渡邊浩史)

41  
42 「荘厳に対する理想」は、「天皇制国家擁護のイデオロギー」を含むか、含まないか。

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4530 真善美荘  
4 4533 生半可

5

6 Nは言葉を用いながら、何をしなかった人だろう。

7

8 彼は問題を解決しなかったから偉大なのであり、一生を通じて彼の精神を苦しめていた  
9 問題に結局忠実だったから偉大なのである。彼が「明暗」に「救済」の結末を書いたと  
10 したなら、それは最後のどたん場で自らの問題を放棄したことになる。

11 (江藤淳『決定版 夏目漱石』「第二部 晩年の漱石」第六章)

12

13 「彼」はNだ。「問題」なんか、ありはしない。「問題」がないから、「解決し」ようもない。  
14 汚点みたいな傍点を付けるのは、江藤の癖。自身の言語技術の不足を隠蔽するためだ。  
15 〈「問題」が「苦しめて」〉は意味不明。〈「問題に」～「忠実」〉は意味不明。「忠実だったから偉大」は、逆説を弄しすぎて無意味。「忠実だった」の真意は〈固執した〉などだろう。

17 〈Nは『明暗』に何らかの「結末」を書きえた〉なんてことは証明できまい。「どたん場」  
18 って、何の？ 「最後の」は不要。「問題」は不明だから、「放棄したこと」にならない。N  
19 は、困難を直視したくなくて「自らの問題」なるものを捏造しようと試み、そして失敗して  
20 いた。彼は〈万人が考えるように考えてみる〉という普通の手法を「放棄したこと」になる。

21

22 ぼくらの心に感動をひきおこすのは、こうした彼の悲惨な姿である。彼はおそらく救済  
23 の瀬戸際せとぎわに立っている。しかし救済はあらわれぬ。彼の発見した「現代人」というものが、  
24 すでにそのような宿命を負わされた人間であった。そして生半可な救済の可能性を夢想  
25 するには、漱石はあまりに聡明そうめいな頭脳を持ちすぎていたのである。

26 (江藤淳『決定版 夏目漱石』「第二部 晩年の漱石」第六章)

27

28 「こうした」の指すものは不明。「悲惨な姿」は何の比喩か。「救済」の中身は空っぽ。「救  
29 済の瀬戸際せとぎわ」は意味不明。「救済」がなされていないのに、その「瀬戸際せとぎわ」が知れるものか？

30 「救済はあらわれ」は意味不明。「救済」は〈「救済」の神〉の略か。

31 「発見した「現代人」」は意味不明。「そのよう」の指すものは不明。「宿命」の中身は空  
32 っぽ。「負わされた」って、誰が負わせたの？ 〈「宿命」の神〉かな。

33 「そして」は機能していない。「生半可な」がやっとでてきたぞ。Nは生半可な問題しか  
34 作れないから、当然、生半可な解決すらできない。その「悲惨な姿」が「ぼくら」には「偉  
35 大」に見えるんだとき。なぜって、「ぼくら」に似ているからだよね。「夢想するには、漱石  
36 はあまりに」どんな「頭脳」をもっていただろう。「頭脳を持ちすぎて」は笑える。「頭脳」  
37 をいくつ持っていたの？ 〈「聡明」「すぎて」〉と書きたかったのだろうが、こんな誤記を  
38 する江藤の「頭脳」は普通に「聡明そうめいな」ののだろうか。聡明すぎたら、異常だろう。「偉大」  
39 は〈異常〉の美化語だろうね。

40 批判すべきなのは、批評家や研究者だけではない。こんな悪文を採用した編集者だ。こん  
41 なものを売って稼ぐ本屋だ。『こころ』を名作として生徒に読ませる教師だ。読まされてわ  
42 かったふりをしたがるゴマスリの生徒だ。つまり、かつての私だ。

43

44

45

46

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4540 何様？  
4 4541 コノテーション

5  
6 Nは何様？  
7

8 彼は大きい<sup>かし</sup>櫛の木の下に<sup>ママ</sup>先生の本を読んでいた。櫛の木は秋の日の光の中に<sup>ママ</sup>一枚の葉  
9 さえ動かさなかった。どこか遠い空中に<sup>ガラス</sup>硝子の皿を垂れた<sup>はかり</sup>秤が一つ、丁度平衡を保って  
10 いる。——彼は先生の本を読みながら、こう云う光景を感じていた。……  
11 (芥川龍之介『或阿呆の一生』「十 先生」)

12  
13 「平衡」は、正気と狂気のそれか。あるいは、演技と本音のそれか。「先生」はNだ。

14  
15 家も心もひっそりとしたうちに、私は硝子戸を開け放って、静かな春の光に包まれなが  
16 ら、恍惚<sup>うっとり</sup>とこの稿を書き終るのである。そうした後で、私は一寸<sup>ひじ</sup>腕を曲げて、この縁側に  
17 一眠り眠る<sup>つもり</sup>積である。

18 (夏目漱石『硝子戸の中』三十九)

19  
20 「静かな春」と「春の光」は別。「硝子戸を開け放って」誰かの訪問を待つみたい。読者  
21 への別れの挨拶ではない。誰かを歓迎するり芝居だ。「恍惚」は、「この稿を書き終る」理由  
22 がないことを隠蔽する言葉だ。

23 ちなみに、『漱石悶々』(NHKエンタープライズ)は、このような場面で終わる。ドラマ  
24 のNは、夢の中である女に会う「積<sup>つもり</sup>」らしい。〈女はNの夢を見ている〉という夢。

25  
26 おきかえやあいまい化によって、ものは存在をやめはしない。むしろ増幅された形であ  
27 らわれる。たとえばなにかを黒い箱にかくしたとすれば、その黒い箱がなにかを意味する  
28 ようになる。十個の黒い箱の一つにまぎれこませたりすると、ますますひどいことになり、  
29 十個の箱がすべてがなにかの象徴になってしまう。つまり、二重、三重に内容をあいまい  
30 化してゆくと、それに置きかえられるものの数は二倍、三倍になってゆき、意味があいま  
31 いになるほど、それを意味するものは増えてゆくのである。もし性的なものが「口に出し  
32 ていえないなにか」といったものにまで漠然化してくると、この〈なにか〉はあらゆるも  
33 ののうちに見ることができるようになってしまうのである。性がかくされることで、逆に  
34 あらゆるものが性的なコノテーションを帯びてしまうという状況のうちで、ヴィクトリ  
35 ア期は性的な強迫観念におびやかされていた。性は蓋をされて抑圧されてしまうことで、  
36 逆にあらゆるものが性の匂いをはなっていた。性がおおわれると、ピアノの脚がその象徴  
37 となり、ピアノの脚がおおわれると、こんどはそのおおわれたピアノの脚がその象徴とな  
38 るという、象徴と意味論のとめどない連鎖がはりめぐらされてゆく。十九世紀後半の絵画  
39 の象徴性、神話性、物語性はこのような時代の意味論から生みだされたものだ。

40 (海野弘『世紀末のイラストレーターたち』「紙の昆虫館」)

41  
42 「ヴィクトリア期」は、「明治の精神」の「明治」に置き換えられる。

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4540 何様？  
4 4542 愛の定義

5  
6 Nは〈定義〉の価値を貶めたかったらしい。

7  
8 「元来円とか直線とか云うのは幾何学的のもので、あの定義に合った様な理想的な円  
9 や直線は現実世界にはないもんです」「ないもんなら、<sup>よ</sup>廃したらよかろう」と迷亭が口を  
10 出す。「それで先ず実験上<sup>さ</sup>差し支<sup>つかえ</sup>ない位な球を作ってみようと思ひましてね、先達<sup>せんだつ</sup>てから  
11 やり始めたのです」

12 (夏目漱石『吾輩は猫である』六)

13  
14 最初の話者は寒月。「あの定義」の内容は示されない。「理想」と「現実」は反対語だから、  
15 寒月の主張は同語反復だ。〈寒月は理系〉という設定だが、あまり理系らしくない。

16 「<sup>よ</sup>廃したら」は、〈作ってみよう〉とするのは「<sup>よ</sup>廃したら」の略。  
17 「球」の「定義」は、「3次元空間で1定点から一定の距離 $r$ 以内にある点全体の集合」  
18 (『広辞苑』「球」)だろうか。だったら、どうやって「1定点」を決めるのだろう。

19  
20 段々<sup>す</sup>磨って少しこっち側の半径が長過ぎるからと思つて<sup>もつち</sup>其方を心持落すと、さあ大変  
21 今度は向側が長くなる。そいつを骨を折って漸く磨り潰<sup>つぶ</sup>したかと思うと全体の形が<sup>いび</sup>び  
22 つになるんです。やっとの思いでこの<sup>いびつ</sup>を取ると又直径に狂いが出来ます。始めは  
23 林檎<sup>りんご</sup>程な大きさのものが段々小さくなって<sup>いちご</sup>毎程になります。それでも根気よくやっていると大豆程になります。大豆程になってもまだ完全な円は出来ませんよ。

24 (夏目漱石『吾輩は猫である』六)

25  
26  
27 寒月が真球を作ろうとするのは「蛙の<sup>めだま</sup>眼球の電動作用に対する紫外光線の影響」(『吾輩は  
28 猫である』六)を調べるに先立って「蛙の眼球のレンズの構造」(『吾輩は猫である』六)を  
29 解明するためというが、意味不明。

30 「半径」の長さをどうやって決めたのか。「直径」の間違いか。

31 寒月が「珠作りの博士」(『吾輩は猫である』六)をやるのは、本物の博士になるのを「金  
32 田令嬢が御待ちかね」(『吾輩は猫である』六)だからだ。

33 「珠」は〈愛〉の象徴。〈愛〉の「定義に合った様な理想的な」愛は「現実世界にないも  
34 ん」だ。作者はそんな考えを隠蔽しつつ読者に伝達しようとしている。〈愛〉の「定義」は  
35 示されない。作者には理想的な愛のイメージがないから、言葉数が増えるほど、イメージが  
36 希薄になる。「珠」が「段々小さくなって」しまう。そうした真相を隠蔽するために「珠作  
37 り」を笑い話に仕立てているわけだ。面倒くさい。

38 寒月の話を遮るみたいに、迷亭は「相思の情」(『吾輩は猫である』六)について語り始め  
39 る。だが、潜在的には、話は継続している。

40 『吾輩は猫である』は、「相思の情」に関するNの無知を隠蔽するために出現した模擬作  
41 品だ。文明批評などに偽装された座談の主題は満たされない被愛願望だ。作者は、自分が被  
42 愛感情を表現できないことを隠蔽するために、「ワガハイ」を死なせて終りにする。

43  
44  
45  
46

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4540 何様？  
4 4543 『大衆の反逆』

5  
6 苦沙弥からSに至る無名の「先生」どもは人気者だ。中途半端なのに。中途半端だから？

7  
8 論文は現今の文学者の攻撃に始まって、広田先生の讃辞に終わっている。

9 (夏目漱石『三四郎』六)

10  
11 この「論文」の題は「偉大なる暗闇」(『三四郎』六)という。奇を衒ったもの。「論文」  
12 を書いたのは「佐々木与次郎」(『三四郎』三)で、彼は広田を「偉大なる暗闇」と称する。  
13 「文学者」は〈「文学」研究「者」〉のことだが、広田の研究は紹介されていない。この「論  
14 文」には「全く美がない」(『三四郎』六)と、三四郎は評する。広田本人には「美」がある  
15 みたいだ。「論文」が「二十七頁」(『三四郎』六)あるのは、与次郎が二十七歳だからか。

16  
17 大衆が「思想」を持つということ、つまり、教養を持つというのは、大いなる進歩を意  
18 味するのではなからうか。いやけっしてそうではないのである。この平均人の「思想」は  
19 真の思想ではなく、またそれを所有することが教養でもないのである。思想とは真理に対  
20 する王手である。思想を持ちたいと望む人は、その前に真理を欲し、真理が要求するゲー  
21 ムのルールを認める用意をととのえる必要があるのである。思想や意見を調整する審判  
22 や、議論に際して依拠しうる一連の規則を認めなければ、思想とか意見とかいってみても  
23 無意味である。そうした規則こそ文化の原理なのである。その原則がどういう種類のもの  
24 であってもかまわない。わたしがいいたいのは、われわれの隣人が訴えてゆける規則がな  
25 いところには文化はないということである。われわれが訴えるべき市民法の原則のない  
26 ところに文化はない。議論に際して考慮さるべきいくつかの究極的な知的態度に対する  
27 尊敬の念のないところには文化はない。人間がその庇護のもとに身を守りうるような交  
28 通制度が経済関係を支配していないようなところには文化はない。美学論争が芸術作品  
29 を正当化する必要を認めないところに、文化はないのである。

30 (オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』八)

31  
32 私なりに要約すれば、〈自分語の使用は落第〉ということだ。

33 Nの小説に出てくる「先生」どもは、定義を軽んじる胡散臭い「平均人」だ。

34  
35 「根本義は死んでも生きても同じ事にならなければ、どうしても安心は得られない。す  
36 べからく現代を超越すべしといった才人は兎に角、僕は是非とも生死を超越しなければ  
37 駄目だと思う」

38 (夏目漱石『行人』「塵勞」四十四)

39  
40 「根本義」は意味不明。夏目語か。「安心」は〈あんじん〉と読ませたいか。

41 「才人」は高山樗牛らしい。真意は〈軽薄才子〉か。Nは高山に嫉妬していたようだ。「僕」  
42 は一郎。彼は自分が「才人」ではないことを認めるが、では、何様？

43  
44  
45  
46  
47

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4550 恐れ系  
4 4551 「断られるのが恐ろしいから」

5  
6 Sを自殺に追いやるのは「恐ろしい力」だ。Nの用いる恐れ系の言葉は意味不明。  
7

8 私は思い切って奥さんに御嬢さんを貰い受ける話をして見ようかという決心をした事  
9 がそれまでに何度となくありました。けれどもその度毎に躊躇して、口へはとうとう出  
10 さずにしまったのです。断られるのが恐ろしいからではありません。  
11 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十六)

12  
13 「見ようかという決心」は意味不明、「何度となく」翻す「決心」は滑稽。  
14 「躊躇して」しまうような「決心」は滑稽。  
15 Sは、「奥さん」を恐れているわけではない。この「恐ろしい」は、〈つらい〉や〈恥ずか  
16 しい〉などが適当だろう。この後に続く文は意味不明。  
17 『ベネッセ表現読解国語辞典』で〈おそろしい〉について調べた。適当にまとめてみる。

- 18  
19 ① 身に危険が感じられて不安である。  
20 日本軍がシンガポールを陥落させた直後に写した写真だが、こんなことをしてもい  
21 いのだろうかと思いを抱いたほど恐ろしい光景であった。(井伏鱒二『黒い雨』)  
22 ② 強い力や意志を感じる。  
23 平岡は代助の眼のうちに狂える恐ろしい光を見出した。(夏目漱石『それから』)  
24 ③ 不利なことや不都合なことになりそうで、警戒しなければならない。  
25 「女は恐ろしいものだよ」と与次郎が云った。「恐ろしいものだ、僕も知っている」  
26 と三四郎も云った。(夏目漱石『三四郎』)  
27 ④ 驚くべき力や能力が感じられる。  
28 然しそこが習慣の恐ろしいところで、六十回も同じ事を毎月繰り返していると、六十  
29 一回にもやはり十円払う気になる。(夏目漱石『吾輩は猫である』)  
30 ⑤ 程度がある基準を超えて、はなはだしい。

31  
32 説明の①は疑わしい。また、その例文も不適當のようだ。

33  
34 その時の私は恐ろしさの塊りと云いましょうか、又は苦しさの塊りと云いましょうか、  
35 何しろ一つの塊りでした。  
36 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」下三十六)

37  
38 「恐ろしさ」は「苦しさ」とも言えるが、本当は「何」とも言えないのだ。そんな「恐ろ  
39 しさ」は〈ものおそろしさ〉とでも言うべきだ。例によって不当な二者択一。  
40 〈ものおそろし〉について、辞書には、「人げ遠き心地してものおそろし」(『源氏物語』  
41 『広辞苑』)や「物の心も知らぬ娘一人残りて、ものおそろしく、つつましかれば」(『宇津  
42 保物語』『日本国語大辞典』)という例が出ている。  
43 ちなみに、「おそろしい情慾」(太宰治『ア、秋』)も意味不明。

44  
45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4550 恐れ系  
4 4552 恐れなど

5  
6 Sは、恐れ系の言葉を、「軽蔑されるかも知れないという恐怖」(下四十八)というふう  
7 用いる。夏目語の「恐怖」は、「耻を搔かせられるのが辛い」(下三十四)という気分が激し  
8 くなったものらしい。極度の羞恥だろう。  
9 恐れに対象がない場合、〈物恐ろしい〉あるいは〈空恐ろしい〉という言葉を用いる。だ  
10 が、通常、〈怖い〉や〈恐ろしい〉といった恐れ系の言葉を用いると、反射的に対象を作り  
11 出してしまうものだ。

12  
13 ぼくも十八歳ごろ、誰もいない夜に山の中の無人の神社を訪問してみたことがある。そ  
14 のとき、鳥居の近くにくると、いままで味わったこともない恐怖心におそわれて退却した  
15 ことがある。僕は生まれつき「こわい」ということにはきわめて鈍感な男だったが、その  
16 ときだけはこわかった。たぶん「おとろし」の仕業であろうと思う。  
17 (水木しげる『水木しげるの妖怪図鑑』「おとろし」)

18  
19 「おとろし」は水木が民話の知識をもとに作り出してしまった対象だろう。

20  
21 「驚く」などと語源的な関わりがあり、「恐る」が意識的・精神的であるのに対して、  
22 どちらかといえば反射的・無意識的・身体的反応をいう。  
23 (『日本国語大辞典』「怖じる」)

24  
25 Sは恐怖の対象を作り出している。ところが、その自覚がない。出典も不明。

26  
27 然し私がどの方面かへ切って出ようと思いつくや否や、恐ろしい力が何処からか出て  
28 来て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないようにするのです。  
29 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十五)

30  
31  
32 「切って」は〈打って〉が正しい。〈先頭を「切って」〉の露呈。「思いつくや否や」怖気  
33 づき、「恐ろしい力」という言葉を思いつき、自らその「力」の影響を受ける。語り手Sは  
34 そうした経緯を反省できない。語られるSが「おとろし」といった怪物の登場する物語にリ  
35 ンクしていたら、Sの「自叙伝」は怪談として成立したはずだ。語り手Sは「恐ろしい力」  
36 の登場する物語を隠蔽したまま、その気分だけを読者に伝達しようとしている。鬱陶しい。

37  
38 「怖がる」は危険に直面した時などに広く用いるが、「おびえる」はすでに経験したこ  
39 とがもとになって感じる恐怖の気持ちを表す。  
40 (『角川類語新辞典』「怯える」)

41  
42 Sは「すでに経験したこと」を思い出したろうか。あるいは、それを捏造したろうか。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 4000 『吾輩は猫である』から『三四郎』の前まで  
2 4500 ボッチは恥  
3 4550 恐れ系  
4 4553 「何らの理由なくして感ずる恐怖など」

5  
6 Sは、自分の抱く恐れの対象や原因などを明示できない。Nがそうだったからだろう。  
7

8 (三) fのみ存在して、それに相応すべきFを認め得ざる場合、所謂<sup>いわゆる</sup>“fear of  
9 everything and fear of nothing”《何もかもが怖いとか何も怖くないとかいう感情》  
10 の如きもの。即ち何らの理由なくして感ずる恐怖など、みなこれに属すべきものなり。

11 (夏目漱石『文学論』「第一編 文学的内容の分類」「第一章 文学的内容の形式」)  
12

13 「所謂<sup>いわゆる</sup>」とあるが、「fear of everything and fear of nothing」の出典は不明。  
14 これを「何らの理由なくして感ずる恐怖など」と訳してよいのだろうか。二重山括弧内は無  
15 視する。

16  
17 特定の対象に面してひるんでいる感情が恐怖と呼ばれるのに対して、対象のない無に  
18 脅かされてひるんでいる感情が不安である。  
19 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「不安」柏原啓一)

20  
21 この説明は厳密すぎるのかもしれない。  
22

23 だがここで、私が提案して、「私は恐怖を感じる」やそれに似た表現はただ他動詞的に  
24 のみ使うことにしたとする。すると、前には「私は恐怖の感情を抱く」(自動詞的に)と  
25 言ったところを今度は、「『私は何か怖い。が何が怖いのが知らない』と言い換えること  
26 になる」。この用語法に異議はありませんか。

27 「いや、『知る』という言葉が奇妙な具合に使っていることの他は異議はない」と言わ  
28 れよう。だが次の場合を考えてほしい——私は、特定対象に向けられていない一般的な恐  
29 れを感じる。その後或る経験をして「今では恐れていたものが何かを知っている。私はし  
30 じかじかのことが起るのが恐いのだ」と言う。さて私の初めの恐怖を自動詞の動詞で表現す  
31 るのが正しいのだろうか。それとも、私は恐怖には対象があったのだが、あったことを私  
32 は知らなかった、と言うべきだろうか。

33 (ルートウィヒ・ウィトゲンシュタイン『青色本』)

34  
35 恐れ系の語句は「必要のないことをあれこれ心配をすること。とりこし苦労」(『日本国語  
36 大辞典』「杞憂」と関係があるのかもしれない。

37  
38 ある特定の物事に対して、その理由がないことを知りながら、恐怖・不安を感じる神経  
39 症。

40 (『広辞苑』「恐怖症」)

41  
42 『文学論』のNは「恐怖症」について論じているのかもしれない。  
43  
44  
45  
46  
47  
48

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51

第五章 一も二もない『三四郎』

王さまのお話を、まだまだつづけますから、かくごして読んでください。  
(寺村輝夫『王さまびっくり』『まほうのレンズ』)

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 1 0 0 「母」と「あの女」  
3 5 1 1 0 「新しい女」  
4 5 1 1 1 あこがれの近代的自我

5  
6 『三四郎』も誤読されてきた。

7  
8 熊本から上京した東大生小川三四郎は東京に驚き、不安を感じるが、先輩の野々宮（の  
9 のみや）や広田（ひろた）先生、同級生の与次郎（よじろう）らと出会い、啓発されてゆく。  
10 また、勝気で美しい里見美禰子（さとみみねこ）に恋をするが、実らない。  
11 (『近現代文学事典』「三四郎」)

12  
13 三四郎と美禰子の「恋」は、なぜ、「実らない」のか。Nが美禰子を嫌いだからだ。

14  
15 美禰子は同じ作者の『虞美人草』の藤尾と同タイプの自我に目ざめた「新しい女」とし  
16 て描かれている。  
17 (『ブリタニカ国際大百科事典』「三四郎」)

18  
19 「自我」は意味不明。「これは幼児期に自覚されはじめるが、確立するのは青年期とされ  
20 ている」(『日本国語大辞典』「自我」)というのが常識だろう。

21  
22 《文芸用語》 自立した個人・市民としての自覚に基づいて形成されてゆく自我。  
23 (『近現代文学事典』「近代的自我」)

24  
25 「近代的自我」の「近代的」には、「〈近代化〉という観念がかつて有していた〈あこがれ〉  
26 のニュアンス」(『百科事典マイペディア』「近代化」)が含まれているようだ。「封建的遺制な  
27 ど、前時代的なものの束縛から解放され、個人主義・自由主義を背景に覚醒した自我。日本  
28 では、前提となる近代市民社会の確立を欠いたため、未成熟に終わった」(『三訂 常用国語  
29 便覧』「近代的自我」)という。この「自我」も意味不明。「日本では」いつごろ「近代市民  
30 社会の確立」ができたのだろう。まだか？ そうかもしれない。

31  
32 因習を打破し、婦人の新しい地位を獲得しようとする女。1911年（明治44）女流文学  
33 者の集団「青鞥（せいとう）」派の人々が婦人解放運動を起こした頃からいう。  
34 (『広辞苑』「新しい女」)

35  
36 藤尾や美禰子は「女流文学者」ではないし、「婦人解放運動」をやってもいない。

37  
38 女性解放運動の宣言とみられた問題作で、ノーラは〈新しい女〉の代名詞となったが、  
39 イブセン自身はこれを人間描写の劇とした。  
40 (『百科事典マイペディア』「人形の家」)

41  
42 「ノーラ」は〈ノラ〉が普通。平野ノラはバブリーなノラ。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 1 0 0 「母」と「あの女」  
3 5 1 1 0 「新しい女」  
4 5 1 1 2 塩原事件

5  
6 「新しい女」には、プラスの価値とマイナスの価値があった。

7  
8 ジャーナリズムが『青鞥』のスカンダルを煽（あお）るにつれて、対象が『青鞥』の  
9 女性へと収斂（しゅうれん）してゆき、毒々しい罵詈（ばり）に変わっていった。

10 (『日本歴史事典』「新しい女」堀場清子)

11  
12 「ジャーナリズム」は、「新しい女」という言葉をマイナスの価値で用いた。  
13 美禰子のモデルは平塚らいてうとされる。どこが似ているのか、私にはわからない。

14  
15 卒業後文学講座での教え子平塚らいてうと心中事件を起こし物議をかもしたが、漱石  
16 の庇護に救われ、長編『煤煙』(09)を発表。

17 (『ブリタニカ国際大百科事典』「森田草平」)

18  
19 「心中事件」の後、『三四郎』が出て、その後に『煤煙』が出て、その『煤煙』を『それ  
20 から』の代助が冷評している。しかし、『三四郎』や『それから』より『煤煙』の方が面白  
21 い。ただし、『煤煙』のヒロインの思惑などは、私には推量できない。

22  
23 卒業後、生田長江（いくたちょうこう）の閨秀（けいしゅう）文学会に参加して森田草平（そ  
24 うへい）を知り、1908年「心中未遂」と騒がれた「塩原事件（煤煙事件（ばいえんじけん）」  
25 を起こすが、これも遺書によれば「わが生涯の体系を貫徹」するためとされる。

26 (『日本歴史大事典』「平塚らいてう」)

27  
28 「心中未遂」について、彼女は自伝で、きっぱりと否定している。森田は恋愛妄想を抱い  
29 ていたらしい。この妄想に、Nもマスゴミも巻き込まれてしまったようだ。

30  
31 夏目先生の小説は、本当の意味の小説ではない、ホトトギス派の写生と理屈で書いた学  
32 者の小説で、ああいう徘徊趣味の文学は、自分の趣味ではないなどといい、夏目先生とい  
33 う人は、女のひとをまったく知らず、それも奥さん一人しか女を知らないで小説を書くの  
34 だから、作中の女はみんな頭で作られ、生きている女になっていない。いつも弟子たちの、  
35 とくに女性についての話を注意深く聞いていて、そのまま翌々日あたりの新聞小説に書  
36 いたりする。女の使う言葉もまったく知らないから、わたくしが教えているのだ、などと  
37 いい、夏目先生の家庭のこと、奥さんの人柄などについても、森田先生はよく噂話をして  
38 もいました。

39 (平塚らいてう『平塚らいてう自伝 元始、女性は太陽であった』「塩原事件」)

40  
41 Nは、『三四郎』で、『草枕』的混迷から脱しようともがいている。恋愛未経験のおっさん  
42 が青春小説を書こうとしてかなり無理をしている。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 1 0 0 「母」と「あの女」  
3 5 1 1 0 「新しい女」  
4 5 1 1 3 陰険な専横

5  
6 「塩原事件」はフェイク・ニュースだったらしい。だが、今でも訂正されていない。

7  
8 この事件をニュースとして知らせた新聞は、「決死の原因」というところで、こんなふうにかいている。

9  
10 「おかしから情死はそんなにめずらしいものではないが、この事件のように最高の教育をうけた紳士淑女が、おろかな男女のまねをしたのは、今までになかったことだ。自然主義、性欲満足主義の最高を代表する、めずらしいニュースとっていい。しかもふたりが尾花峠の山上で、逮捕にきた警官にたいし『私たちの行動は恋の神聖を發揮するもので、だれにも恥ずかしいとは思わない』といばったのは、けしからんではないか」  
11  
12  
13  
14  
15 (松田道雄『恋愛なんかやめておけ』『女の反抗』)

16  
17 注目すべきなのは、「性欲満足主義」と「恋の神聖」の対立だ。対立しているのは、新聞記者の見方と森田草平の見方だ。この対立は、「恋は罪悪」あるいは「神聖」というSの意味不明の発言に似ている。だが、『こころ』の場合、Sの恋愛観が矛盾めいているのだ。  
18  
19  
20 辻潤の妻だった伊藤野枝は「青鞥」を受け継ぐが、既婚者の大杉栄や神近市子などと絡む。日蔭茶屋事件だ。『エロス+虐殺』(吉田喜重監督)参照。

21  
22  
23 このごろ坪内博士の『いわゆる新シイ女』を読んだ。  
24 老人は馬鹿で利口で利口で馬鹿であるとは、フランスの皮肉家ロシュフォーゴールの言葉である。  
25  
26 (大杉栄『本能と創造』)

27  
28 「坪内博士」は坪内逍遙。彼は、ノラをあまり非難せず、彼女の夫をやや非難し、中立公正な評価をしたつもりらしい。その煮え切らない態度に大杉が嘔みつく。

29  
30  
31 これほどの明快な解釈に対しては、僕もまた一言の加うべき文字を持たない。しかしこういうのが宜しくない夫ともなるとか、これがイプセンの皮肉な見解だなどというのは、  
32  
33 おそらくは博士の例の馬鹿が災わざわいした言葉で、実はこういうのがほんとうに恐るべき宜しくない夫であり、またこれがイプセンの真面目な見解なのじゃあるまいか。

34  
35 僕らはことさらに温和なる専横を憎む。砂糖スイートウォーター水を嫌う。  
36  
37 (大杉栄『本能と創造』)

38 「こういうのが」から「見解だ」までは、『いわゆる新シイ女』の要約らしい。「夫」は〈ノラの「夫」〉のこと。彼は、妻の犠牲的不貞を知った後、仮面夫婦を続けようと提案する。  
39  
40 「温和なる専横」の本質は〈陰険な専横〉だ。それはやがて〈苛烈な専横〉に変わる。大逆事件には捲き込まれなかった大杉と伊藤だが、後に虐殺される。甘粕事件。その後の甘粕正彦が『ラスト・エンペラー』(ベルトリッチ監督)に出てくる。

41  
42  
43  
44 (追記) 大杉と伊藤について、『風よあらしよ』(NHK)参照。

45  
46  
47

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 1 0 0 「母」と「あの女」  
3 5 1 2 0 「現実世界だとすると」  
4 5 1 2 1 「大変な動き方」

5  
6 『三四郎』の語り手は、三四郎の〈自分の物語〉を隠蔽するために無駄話をする。

7  
8 三四郎が東京で驚いたものは沢山ある。第一電車のちんちん鳴るので驚いた。それから  
9 そのちんちん鳴る間に、非常に多くの人間が乗ったり降りたりするので驚いた。次に丸の  
10 内で驚いた。尤も驚いたのは、何処まで行っても東京が無くならないと云う事であった。  
11 しかも何処をどう歩いても、材木が放り出してある、石が積んである、新しい家が往来か  
12 ら二三間引込んでいる、古い蔵が半分取崩されて心細く前の方に残っている。凡ての物が  
13 破壊されつつある様に見える。そうして凡ての物がまた同時に建設されつつある様に見  
14 える。大変な動き方である。

15 (夏目漱石『三四郎』二)

16  
17 三四郎は都会というものをまったく知らないらしい。以下、「東京」らしい事物は一つも  
18 出てこない。しかも、「沢山」ではない。東京について三四郎が知っている二、三の事柄に  
19 ついて、語り手は戯画的に語る。作者は何をしているのだろう。

20 「第一」は意味不明。三四郎の故郷である熊本の「電車」は「ちんちん」と鳴らないのか。  
21 あるいは、「電車」がないのか。ええい、どっちだ？ いらつく。

22 「非常に多くの人間」には驚かないのか。熊本の「電車」が満員になることはないのか。

23 「次に」は意味不明。「次」の次は、あるのか、ないのか。

24 「丸の内」を「何処まで行っても」「東京」から、出られるわけがない。くだらねえ！ 「東  
25 京」は〈繁華街〉などの換喩だろうが、無理。

26 「何処をどう歩いても」は嘘だろう。裏通りに入らなかつたらしい。貧民の暮らしぶり  
27 を見なかった。器用にも、道に迷わなかった。「ある」は〈あたり〉が適当だが、語り手は  
28 わざと拙く語っている。三四郎の浮かれた感じを表現しているつもりらしい。「引込んでい  
29 る」は〈引込んでいる〉ように見える〉が適当だろう。「家」が移動したかどうか、彼が知  
30 るわけではない。三四郎は先入観をもって「東京」を見ている。では、そういう文芸的表現に  
31 なっているのか。てんでなっていない。「材木」や「石」や「家」や「蔵」が動く様子は語  
32 られていない。勿論、勝手に動いたら、「大変な」ことだ。驚くどころの騒ぎではない。人  
33 間が動かしているわけだが、労働者の姿がない。「心細く」は〈心細そうに〉などが適当だ  
34 が、建物の擬人化はウザい。

35 〈「凡ての物が破壊されつつ」あり、「すべての物が同時に建設されつつある」〉というの  
36 は無意味。だから、そんな情景が「見える」ということは考えられない。もしかして、二種  
37 の情景が三四郎の脳裏でオーバーラップしてしまうのか。どういう病気？

38 「動き方」は唐突。〈「非常に多くの人間が乗ったり降りたりする」その「動き方」に「驚  
39 いた」〉という話ではなかろう。語り手は、三四郎の心の「動き方」を、外界の「動き方」  
40 によって表現したかつたらしい。企画倒れ。外界の動きは彼の想像でしかないからだ。

41 三四郎が元気なら、驚きは喜びに変るはずだ。ところが、彼は喜ばない。逆に、めげる。  
42 三四郎は澁刺としていない。その理由について、語り手は明瞭に語りたくないらしい。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 1 0 0 「母」と「あの女」  
3 5 1 2 0 「現実世界だとすると」  
4 5 1 2 2 「三四郎の自信」

5  
6 『三四郎』の語り手は、三四郎自身の〈自分の物語〉の語り手と区別できない。『三四郎』  
7 という作品は、作中の〈三四郎の独白〉と区別できない。作中の三四郎は頭の中のDに語っ  
8 ている。三四郎のDと、『三四郎』の語り手に対応する聞き手を区別することはできない。  
9 また、複数の聞き手と『三四郎』の読者を区別することもできない。言うまでもなく、作者  
10 が三四郎という人物を拵えたわけだが、その三四郎と、三四郎が拵えた〈もう一人の自分〉  
11 を区別することは、『三四郎』の読者にはできない。

12  
13 三四郎は全く驚いた。要するに普通の田舎者が始めて都の真中に立って驚くと同じ程  
14 度に、また同じ性質に於て大いに驚いてしまった。今までの学問はこの驚きを予防する上  
15 に於て、売薬程の効能もなかった。三四郎の自信はこの驚きと共に四割方減却した。不愉  
16 快でたまらない。

17 (夏目漱石『三四郎』二)

18  
19 「要するに」は不適當。「同じ」ではないはずだ。  
20 「学問」の中身は不明。「売薬」は意味不明。『広辞苑』の「売薬」ではこの文が引用され  
21 ているが、辞書の「効能」はない。〈「売薬程の効能」しかなかった〉が適當だろうが、その  
22 場合、「全く」が意味不明になる。「我が生れし邦をば、売薬をするものの様に、我計りをよ  
23 しと云て自慢することに候ば」(『日本国語大辞典』「売薬」)を踏まえた表現か。

24 「学問」の中身は不明。「予防する」は〈治癒する〉などでないと、理屈に合わない。  
25 何の「自信」か。近頃の〈自分に自信がない〉も舌足らず。「四割方」の中身は不明。「四  
26 割方減却し」は無意味。

27  
28 〈僕はまったく驚いた〉と、日記には書いておこう。「この驚き」という言葉によって、  
29 「自信」は六割方保てそうな気がする。少し愉快だ。

30  
31 『三四郎』の読者は、三四郎の嘘の〈日記〉を読まされているようなものだ。

32  
33 この劇烈な活動そのものが取りも直さず現実世界だとすると、自分が今日までの生活  
34 は現実世界に毫も接触していない事になる。

35 (夏目漱石『三四郎』二)

36  
37 「この劇烈な活動そのもの」は語られていない。「現実世界だとすると」あるから、「この  
38 劇烈な活動そのもの」は彼の幻覚かもしれない。〈「生活は」～「接触し」〉は意味不明。「今日  
39 まで」に呼応するには、「接触していない」を〈「接触して」いなかった〉とやるのが適當。  
40 ただし、真相は違うのだろう。三四郎は、郷里の「現実世界」にも「接触して」いなかった  
41 はずだ。そうした真相を露呈しているのが「事になる」という言葉だろう。

42 常識的には、〈東京と熊本が「接触していない事」に気づいた〉などが適當だろう。

43  
44  
45  
46  
47

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 1 0 0 「母」と「あの女」  
3 5 1 2 0 「現実世界だとすると」  
4 5 1 2 3 「自分の世界」

5  
6 「世界」という言葉の意味が次第に朦朧となる。

7  
8 世界はかように動揺する。自分はこの動揺を見ている。けれどもそれに加わる事は出来  
9 ない。自分の世界と、現実の世界は一つの平面に並んでおりながら、どこも接触していな  
10 い。そうして現実の世界は、かように動揺して、自分を置き去りにして行ってしまう。甚  
11 だ不安である。

12 (夏目漱石『三四郎』二)

13  
14 「世界」は「都」が妥当。「かように」の指す言葉は不明。「動揺する」は変。地震ではあ  
15 るまい。「転じて、気持ちなどが不安定になること。不安」(『広辞苑』「動揺」)というのを  
16 元に「転じて」いるわけだ。下手な冗談。動いているのは、「世界」そのものではなく、そ  
17 の内部の人や乗り物だ。街並みの変化を、上京したばかりの彼が見ているはずはない。三四  
18 郎は「自分」の心の「動揺」を外界に投影して「見ている」のだろう。だが、そうした文芸  
19 的表現になっているのではない。作者が浮ついているのだ。

20 「けれども」は機能していない。「それ」の指すのが「動揺」なら、無意味。

21 「自分の世界」は意味不明。「現実の世界」は先の「現実世界」と同じか。「平面」は意味  
22 不明。「物体を真上から垂直に見た形」(『広辞苑』「平面」)という意味ではなかろう。「並ん  
23 で」も「接触」も意味不明。『日本国語大事典』は「接触」の項でこの文を引くが、無益。

24 「そうして」は機能していない。「現実の世界」と「並んで」いたのは「自分の世界」だ  
25 から、「置き去りに」されるのは「自分の世界」でないでと理屈に合わない。

26 「不安」は唐突。

27  
28 三四郎は東京の真中に立って電車と、汽車と、白い着物を着た人と、黒い着物を着た人  
29 との活動を見て、こう感じた。けれども学生生活の裏面に横たわる思想界の活動には毫も  
30 気が付かなかった。——明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年で  
31 繰返している。

32 (夏目漱石『三四郎』二)

33  
34 「東京の真中」は意味不明。「白い着物」と「黒い着物」は何の比喩だろう。

35 「けれども」は機能していない。「学生生活の裏面」は意味不明。「裏面に横たわる」は意  
36 味不明。「思想界」について、『三四郎』のどこにも明示されていない。

37 「明治の思想」は意味不明。「歴史にあらわれた」は意味不明。「三百年」は、いつからい  
38 つまでか。「三百年」プラス「四十年」を「四十年で繰返して」いるのではないのか。どち  
39 らにせよ、追いついたわけか。「思想」と「活動」の関係が不明。

40 「現実の世界」と「自分の世界」という意味不明の比較が、いつの間にか、「日本」の何  
41 かと「西洋」の何かの不合理な比較になっている。三四郎がおかしいのか。作者だろう。

42 「——」は姑息。作者は語り手に奇妙な特権を与えている。「あらわれた」は意味不明。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5100 「母」と「あの女」  
3 5130 物語のない「世界」  
4 5131 「異性の味方」  
5

6 引用を続ける。ただし、話は、突如、変わる。  
7

8 ———明治の思想は西洋の歴史にあらわれた三百年の活動を四十年で繰返している。

9 三四郎が動く東京の真中に閉じ込められて、一人で鬱ぎ込んでいるうちに、国元の母から手紙が来た。東京で受取った最初のものである。

11 (夏目漱石『三四郎』二)

12  
13 「動く東京」は意味不明。何によって「閉じ込められて」いるのか。「閉じ込められて」  
14 いるのは「一人」か。あるいは、「鬱ぎ込んでいる」のが「一人」か。「いるうちに」は怪し  
15 い。「国元の母から手紙が来た」という展開は、唐突。〈三四郎が「不安」になって「母」に  
16 手紙を書いたら、その返信が届いた〉といった展開が普通だろう。作者は「東京の真中」と  
17 「国元」の比較が必要になった理由を意図的に隠蔽しているはずだ。

18  
19 要するに自分がもし現実世界と接触しているならば、今のところ母より外にないのだ  
20 ろう。その母は古い人で古い田舎に居る。その外には汽車の中で乗合した女がいる。あれ  
21 は現実世界の稲妻である。接触したと云うには、あまりに短くってかつあまりに鋭過ぎた。  
22 ———三四郎は母の云い付け通り野々宮宗八を尋ねる事にした。

23 (夏目漱石『三四郎』二)

24  
25 「もし」は「現実世界」の有様を隠蔽するための小細工。「現実の世界」が、「現実世界」  
26 に戻った。作者は、かなり無理をしている。「今のところ」はおかしい。〈「接触しているな  
27 らば」～「母より外にないのだろう」〉は日本語になっていない。

28  
29 女とは京都からの相乗である。乗った時から三四郎の眼に着いた。第一色が黒い。三四  
30 郎は九州から山陽線に移って、段々京大阪へ近付いてくるうちに、女の色が次第に白くな  
31 るので何時の間にか故郷を遠退く様な憐れを感じていた。それでこの女が車室に這入っ  
32 て来た時は、何となく異性の味方を得た心持がした。この女の色は実際九州色であった。

33 三輪田の御光さんと同じ色である。国を立つ間際までは、お光さんは、うるさい女であ  
34 った。傍を離れるのが大いに難有かった。けれども、こうして見ると、お光さんの様な  
35 も決して悪くはない。

36 (夏目漱石『三四郎』一)

37 「異性の味方」の原型は「母」だ。

38 「九州色」は無理な冗談。

39 御光は、Sの従妹や『彼岸過迄』の千代子の前身だろう。彼女たちは「母」のダミーであ  
40 り、「母」こそが「うるさい女」なのだろう。

41 御光という名が『新版歌祭文』(近松半二ほか)からなら、美禰子と三四郎が駆け落ちす  
42 る展開もありえたか。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5100 「母」と「あの女」  
3 5130 物語のない「世界」  
4 5132 「母」と「花」

5  
6 私が常識だと思っていることと、語り手が常識だと思っていることは、違うらしい。

7  
8 元来あの女は何だろう。あんな女が世の中に居るものだろうか。女と云うものは、ああ  
9 落付いて平気でいられるものだろうか。無教育なのだろうか、大胆なのだろうか。それと  
10 も無邪気なのだろうか。要するに行ける所まで行ってみなかったから、見当が付かない。  
11 思い切ってもう少し行ってみるとよかった。けれども恐ろしい。別れ際にあなたは度胸の  
12 ない方だと云われた時には、喫驚した。二十三年の弱点が露見した様な心持であった。親  
13 でもああ旨く言い中てるものではない。……

14 (夏目漱石『三四郎』一)

15  
16 「あの女」に三四郎は「花」(『三四郎』一)と命名する。「花」は「遊女をもさす」(『日  
17 本国語大辞典』「はな」)から、ネタバレみたいだが、よくわからない。

18 〈「あんな女」でも娼婦ではない〉という表現は見当たらない。また、〈三四郎は娼婦とい  
19 う職業婦人を知らない〉という表現も見当たらない。〈三四郎は、売春という仕事を知って  
20 はいたが、お花が娼婦だと夢にも思わなかった〉という表現も見当たらない。〈そのくらい、  
21 三四郎は初心だった〉という表現も見当たらない。作者は何をしているのだろうか。

22 「無邪気」という言葉は、静に対しても用いられる。

23 「行ける所まで」は、〈性行為の諸段階を「行ける所まで」〉の略だが、空しい。

24 この「恐ろしい」は夏目語だろう。美人局だったら、恐ろしい。性病に罹るのは恐ろしい。  
25 ストーカーも恐ろしい。〈恥をかかされて「恐ろしい」〉の略らしいが、恥をかくのを普通は  
26 「恐ろしい」と言わない。〈据え膳食わぬは男の恥〉みたいな言葉が前提にあるのだから、  
27 この言葉は逆説だ。据え膳を食う方が、常識的には恥。

28 据え膳を食う「度胸」があったら、「無鉄砲」だろう。お花の捨て台詞は「あんな女」に  
29 特有の負け惜しみが言わせたものだが、作者の意図は不明。「喫驚」は意味不明。

30 「二十三年」は三四郎の年齢。「弱点」は〈「度胸のない」こと〉だろう。

31 「親」は「母」だ。彼女は息子に「御前は子供の時から度胸がなくて不可ない」(『三四郎』  
32 七)と言っている。「度胸のない方」の真意は〈受動的男性〉などだ。

33 語り手は、「母」といたときの三四郎が世間知らずだったように語る。だが、無理だ。三  
34 四郎が童貞だとしても、売春の知識ぐらいいはあるはずだ。お花は、三四郎にとって、人間で  
35 はなかったのだろう。「母」の化身のような存在らしい。「母」の生霊が息子に追いつがった  
36 わけだ。だから、「恐ろしい」と形容される。作者は、この種の怪談を隠蔽しつつ、その雰  
37 囲気を醸し出そうとしている。

38  
39 I お花は、娼婦ではなく、男を買う女だった。

40 II お花は「母」の化身だった。

41  
42 I の物語は無視されている。II の物語は隠蔽されている。だから、本文は意味不明。

43  
44  
45  
46  
47

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5100 「母」と「あの女」  
3 5130 物語のない「世界」  
4 5133 エクソシスト広田

5  
6 三四郎は、「母」の支配から逃れるために上京する。だが、今度は都会に対する不安が募  
7 る。彼の心は揺れている。「母」に対する依存と忌避が交互に起きる。

8  
9 三四郎は手紙を巻返して、封に入れて、枕元へ置いたまま眼を眠った。鼠が急に天井で  
10 暴れ出したが、やがて静まった。

11 (夏目漱石『三四郎』四)

12  
13 「手紙」は「母」からのもの。  
14 「鼠」も「母」の化身だ。「急に」は不図系の語。

15  
16 田舎の母の嫌な「気」が来ないように、東京と田舎の間に防御のバリエーをずっと昔か  
17 ら張っていたのである。母が死んだら大気が軽やかになったということは、母の出す怨霊、  
18 生霊が東京の空の下で暮らす我が身に重くのしかかっていたというのだろうか。しかし、  
19 バリエーが破られていたという実感はなかった。東京駅から西北に約55キロほどの所に、  
20 某私鉄の「森林公園駅」というのがあって、そのあたりがバリエーを張ってある場所だ  
21 だったのである。その私鉄を利用して時たま田舎に向かう時など、その駅が近づくと母が出  
22 ていると思われる嫌な毒ガスのようなものの濃度が強く感じられて暗い気分になったも  
23 のだし、また逆に帰京する時は、その駅を境に通り過ぎると、空気も新鮮になった。夏な  
24 どの場合、車輪がレールのつなぎ目を通過する音に混じって、口やかましい母の言葉が耳  
25 鳴りのようにセミの泣き声と一緒に聞こえたものだが、その幻聴もこの森林公園駅を通  
26 過するとともに遠のいていくようだった。

27 (花輪和一『不成仏霊童女』「あとがき」)

28  
29 花輪の「セミ」が三四郎の「鼠」に相当する。花輪は「嫌な「気」」を異様なものとして  
30 回想できるが、三四郎は違う。

31 花輪の「森林公園駅」に相当するのが広田だ。彼は東京で三四郎と再会し、「知ってる、  
32 知ってる」(『三四郎』四)と言うが、この出会いについて話題にしない。その理由は不明。

33  
34 ひげを濃く生やしている。おもなが やせ 面長の瘠ぎすの、どことなく神主じみた男であった。ただ鼻筋  
35 が真直に通っている所だけが西洋らしい。学校教育を受けつつある三四郎は、こんな男を  
36 見るときっと教師にしてしまう。

37 (夏目漱石『三四郎』一)

38  
39 広田は〈同性の「味方」〉だ。彼は「神主」つまり「バリエー」を張ってくれるエクソシ  
40 トであると同時に、普通の「教師」だ。

41 作者は、〈「神主」は三四郎を救う〉という物語と〈「教師」では三四郎を救えない〉とい  
42 う物語を、同時に、不完全な形で発信している。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 1 0 0 「母」と「あの女」  
3 5 1 4 0 「囚われちゃ駄目だ」  
4 5 1 4 1 「ベーコンの二十三頁」

5  
6 三四郎はハイティーンみたいだが、「二十三年」(『三四郎』一)も生きているのだ。

7  
8 三四郎はベーコンの二十三頁を開いた。

9 (夏目漱石『三四郎』一)

10  
11 二十三歳だから、「二十三頁」を開いた。作者の意図は不明。

- 12  
13 I 三四郎は奇跡的に「二十三頁」を開いた。  
14 II 三四郎は自分の性格などを占うために「二十三頁」を開いた。  
15 III 作者は奇跡や占いなどを嘲笑している。

16  
17 三四郎が「読んでも解らないベーコンの論文集」(『三四郎』一)の「二十三頁」を開いて  
18 眺めると、広田がエクソシストとして召喚される。だから、作者は、IもIIもIIIも暗示して  
19 いるのだろう。不合理なことだ。しかし、作者は自然なことのように考えているのかもしれ  
20 ない。作者は「自然の力に従って始めて自然に勝つ」(『吾輩は猫である』十一)という「ベ  
21 ーコン」の言葉を暗示していて、三四郎は無自覚にそれを実践しているところらしい。

22  
23 スコラ哲学に反対し、学問の最高課題は、一切の先入見と謬見すなわち偶像(イドラ)  
24 を捨て去り、経験(観察と実験)を知識の唯一の源泉、帰納法を唯一の方法とすることに  
25 よって自然を正しく認識し、この認識を通じて自然を支配すること(「知はカなり」)であ  
26 るとした。

27 (『広辞苑』「ベーコン」)

28  
29 「イドラ」は「偶像と訳されることもあるが、正しくない」(『日本国語大辞典』「イドラ」  
30 とのこと。

31  
32 『ノウム・オルガヌム』で彼はまず、人間の知性の真理への接近を妨げる偏見として、  
33 四つのイドラ idola(偶像幻影)をあげる。第一は、自己の偏見にあう事例に心が動かされ  
34 る、人類に共通の種族の偶像、第二は、いわが洞窟(どうくつ)に閉じ込められた広い世  
35 界をみないために個人の性向、役割、偏った教育などから生じる洞窟の偶像、第三は、舞  
36 台上の手品・虚構に迷わされるように、伝統的な権威や誤った論証、哲学説に惑わされる  
37 場合の劇場の偶像、第四は、市場での不用意な言語のやりとりから生じる市場の偶像であ  
38 る。

39 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「ベーコン」杖下隆英)

40  
41 三四郎は、いわゆる偶像破壊を企てようとしたらしい。だが、彼はこの四つのイドラのど  
42 れ一つとして破壊できない。逆だ。むしろ、より深く偏見に囚われていくことになる。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5100 「母」と「あの女」  
3 5140 「囚われちゃ駄目だ」  
4 5142 「別の世界の事」  
5

6 三四郎は旧弊な思想のせいで近代都市の生活になじめないのではない。三四郎は「田舎」  
7 にいたときから、「母」や周囲の人々と打ち解けることができなかった。その不安や苦しみ  
8 や違和感などが、都会に出ることになってからやっと自覚できるようになったのだ。

9 勿論、語り手がこのように語るわけではない。語り手は嘘つきらしい。作者は語り手を支  
10 持している。作者は読者を誑かそうとしている。だから、読者は誑かされてやらなければな  
11 らない。Nは、自分の苦悩や不安などを文芸化することによって、解決したのではない。解  
12 決しようとして失敗したのですらない。憂さ晴らしだ。つまり、作者に成り上がることによ  
13 って、苦悩や不安などを読者に丸投げし、共感や同情を求めている。拗ね者。

14  
15 三四郎は急に気を易えて、別の世界の事を思出した。——これから東京<sup>ママ</sup>に行く。大学に  
16 這入る。有名な学者に接触する。趣味品性の<sup>そなわ</sup>具った学生と交際する。図書館で研究をす  
17 る。著作をやる。世間で喝采<sup>ママかっさい</sup>する。母が嬉しいがる。と云う様な未来をだらしなく考えて、  
18 大いに元気を回復してみると、別に二十三頁の中に顔を埋めている必要がなくなった。そ  
19 こでひょいと頭を上げた。すると筋向うにいたさっきの男がまた三四郎の方を見ていた。  
20 今度は三四郎の方でもこの男を見返した。

21 (夏目漱石『三四郎』一)

22  
23 「別の世界」は意味不明。元の「世界」は、お花との一夜の体験というか未体験を指すの  
24 だが、それを「世界」と呼ぶのは無理だろう。

25 広田は「有名な学者」ではない。ただの教師だ。

26  
27 その道の人なら、西洋人でもみんな野々宮君の名を知っている。

28 (夏目漱石『三四郎』三)

29  
30 三四郎は、「有名な学者」の野々宮と親密にならない。その理由は不明。

31 与次郎は「趣味品性の<sup>そなわ</sup>具った学生」ではない。だが、遊び上手でもない。くだらない男。  
32 「図書館」に入り浸ることもない。

33 三四郎は、学究肌ではないから、「著作」はやれまい。当然、「世間」には知られない。

34 「母が嬉しいがる」と、三四郎はきちんと「考えて」いない。だから、「大いに元気を回復  
35 して」しまうという話には無理がある。

36 エクソシスト広田は、「母」と三四郎の間を裂くのではない。

37  
38 「うん。そうそう。なるべく御母さんの言う事を聞かなければ不可ない」と云ってにこに  
39 こしている。まるで子供に対する様である。三四郎は別に腹も立たなかった。

40 (夏目漱石『三四郎』七)

41  
42 広田は、三四郎の宿親のようだ。作者は「母」の毒気を希釈しようとしている。姑息。

43  
44  
45  
46  
47

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5100 「母」と「あの女」  
3 5140 「<sup>とら</sup>囚われちゃ駄目だ」  
4 5143 「<sup>ほろ</sup>亡びるね」

5  
6 作者は「母」の話題を避けるために、広田を登場させたのだ。

7  
8 「然しこれからは日本も段々発展するでしょう」と弁護した。すると、かの男は、すまし  
9 たもので、

10 「<sup>ほろ</sup>亡びるね」と云った。——熊本でこんなことを口に出せば、すぐ<sup>な</sup>擲ぐられる。わるくす  
11 ると国賊<sup>とりあつかい</sup>取扱にされる。

12 (夏目漱石『三四郎』一)

13  
14 「然し」は無視。「これ」は〈日露戦争の後〉だ。「弁護した」のは三四郎だが、「弁護」  
15 は〈自己「弁護」〉の略か。普通に言うなら、〈反論〉だろう。

16 「かの男」は広田。「すまし」は「きどる」(『広辞苑』「すます」)か。

17  
18 1876年(明治9)熊本城外の花岡山で祈禱会を開き、キリスト教奉教趣意書に署名。日  
19 本におけるプロテスタントの源流の一つ。

20 (『広辞苑』「熊本バンド」)

21  
22 Nは熊本の第五高等学校講師をやっていたのだから、熊本バンドを知らないはずがない。  
23 無視か。だったら、なぜ?

24  
25 熊本バンドの一人。同志社中退。1887年(明治20)民友社を設立、「国民之友」「国民  
26 新聞」を発行し、平民主義を提唱。日清戦争以後、帝国主義の鼓吹者となる。

27 (『広辞苑』「徳富蘇峰」)

28  
29 『八重の桜』(NHK)参照。

30  
31 「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……」で一寸切ったが、三四郎の  
32 顔を見ると耳を傾けている。

33 「日本より頭の中の方が広いでしょう」と云った。「<sup>とら</sup>囚われちゃ駄目だ。いくら日本の<sup>ため</sup>為  
34 を思ったって<sup>ひいき</sup>鼻肩の引倒しになるばかりだ」

35 この言葉を聞いた時、三四郎は真実に熊本を出た様な心持がした。

36 (夏目漱石『三四郎』一)

37  
38 「広い」は意味不明。広田が「広田」なのは、この言葉からか。くだらねえ。

39 「東京より日本」は無意味。「傾けている」は〈「傾けている」ので〉云々とやるべき。

40 「頭の中」が一番狭いやね。「広い」は逆説だから、きちんと説明すべきだ。

41 何に「<sup>とら</sup>囚われちゃ」だろう。「帝国主義」か。「平民主義」か。両方か。あらゆる「主義」  
42 か。「<sup>とら</sup>囚われちゃ駄目だ」なんて意味不明の言葉に<sup>とら</sup>囚われちゃうと「<sup>ほろ</sup>亡びる」よ。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 1 0 0 「母」と「あの女」  
3 5 1 5 0 「偉大なる暗闇」  
4 5 1 5 1 「のっぺらぼう」

5  
6 三四郎は都市と地方の文化的格差を目の当たりにし、「自信」を失った。「自信」が回復し  
7 ないのは、広田や与次郎のせいだ。彼らのような知的俗物と馴れ合うからだ。「自信」がな  
8 いからやめられない。やめられないから「自信」を得られない。悪循環。  
9 知的俗物は、他人の著書に落書きをする。

10  
11 「ヘーゲルの講義を聞かんとして、四方より伯林に集まれる学生は、この講義を衣食の資  
12 に利用せんと野心を以て集まれるにあらず。唯哲人ヘーゲルなるものありて、講壇の上  
13 に、無上普遍の真を伝うると聞いて、向上<sup>くどう</sup>求道の念に切なるがため、壇下に、わが不<sup>ふ</sup>穩底<sup>おんてい</sup>  
14 の疑義を解釈せんと欲したる清浄心の発現に外ならず。この故に彼等はヘーゲルを聞いて、  
15 彼等の未来を決定し得たり。自己の運命を改造し得たり。のっぺらぼうに講義を聴  
16 いて、のっぺらぼうに卒業し去る公等日本の大学生と同じ事と思うは、天下の己惚<sup>うぬぼれ</sup>なり。  
17 公等はタイプ<sup>ママ</sup>ライターに過ぎず、しかも慾張<sup>よくば</sup>ったるタイプ<sup>ママ</sup>ライターなり。公等のなす  
18 所、思う所、云う所、遂に切実なる社会の活気運に關せず。死に至るまでのっぺらぼうな  
19 るかな。死に至るまでのっぺらぼうなるかな」

20 (夏目漱石『三四郎』三)

21  
22 「ヘーゲル」が〈デカルト〉でも〈カント〉でも〈小便早よ出る〉でも同じことで、所詮、  
23 『デカンショ節』だ。「伯林」に留学して、学生たちからアンケートでもとったか。

24 「無上普遍の真」は意味不明。「伝うると聞いて」のこのこやって来るのは、おっちょこ  
25 ちよいだな。「不<sup>ふ</sup>穩底<sup>おんてい</sup>」は意味不明。

26 「清浄心」の話が「社会」の話に替わっている。八つ当たりでしかないからだ。「活気運」  
27 は意味不明。

28 「のっぺらぼう」が目鼻を盛っても「死に至るまでのっぺらぼう」だろう。

29  
30 論文は現今の文学者の攻撃に始まって、広田先生の讃辞に終わっている。ことに大学文科  
31 の西洋人を手痛く<sup>ばとう</sup>罵倒している。早く適當の日本人を招聘<sup>しょうへい</sup>して、大学相當の講義を開か  
32 なくっては、学問の最高府たる大学も昔の寺小屋同然の有様になって、煉瓦石<sup>れんがせき</sup>のミイラと  
33 撰<sup>えら</sup>ぶ所がない様になる。尤も人がなければ仕方がないが、ここに広田先生がある。

34 (夏目漱石『三四郎』六)

35  
36 「論文」は与次郎の書いた「偉大なる暗闇」のこと。

37 「広田先生の讃辞」は〈「広田先生」へ「の讃辞」〉の間違い。

38 「文学者」は〈文学研究者〉のことだろうが、広田は文学研究者ではない。ただの教師だ。

39 「ことに」以下は、前の「始まって」に続けるべきだ。

40 「手痛く」は〈手厳しく〉が適當。「多く、相手から受ける損害や非難などにいう」(『広  
41 辞苑』「手痛い」)からだ。『日本国語大辞典』は「手痛い」の項で『三四郎』のこの部分か  
42 ら引用しているが、不適當だろう。

43  
44  
45

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5100 「母」と「あの女」  
3 5150 「偉大なる暗闇」  
4 5152 教養主義

5  
6 広田の周囲に集まる青年たちは、極めて怪しい。

7  
8 主なメンバーとして、作家に森田草平（もりたそうへい）・鈴木三重吉（すずきみえきち）・  
9 中勘助（なかかんすけ）・芥川龍之介・野上弥生子（のがみやえこ）、学者に寺田寅彦（てらだ  
10 とらひこ）・阿部次郎・和辻哲郎（わつじてつろう）らがいた。漱石から人間的・文学的に影  
11 響を受けた彼ら文学者グループを、“漱石山脈”と呼ぶ。

12 (『近現代文学事典』「木曜会」)

13  
14 野上弥生子は「《青鞥》にも作品を寄稿した」(『マイペディア』「野上弥生子」)という。

15  
16 しかし社会学的には、同世代の年少者から成る闘争的な集団を指す。第1次集団として  
17 強い結束を保ち、集団内にだけ通用する掟や隠語を持つ。元来は遊戯的な性格を持ち、社  
18 会化訓練の場としても機能する。しかし他の集団と接触し、対立や闘争することで暴力的  
19 な性格を帯び、反社会的な行為にいたる、とされる。

20 (『百科事典マイペディア』「ギャング」)

21  
22 与次郎は、「広田の賛辞」を表明するだけで十分だったはずだ。

23  
24 この個人主義はここに再び、先の間人学主義の必要を感じて来るのであって、この人間  
25 と人間との結合様式として人間学的なものが採用されるのである。人間と人間との云わ  
26 ば「パトス」的な結合がそこに取り上げられる。こうやって、この自由主義者によれば、  
27 人間は或る一定の間人達だけと、一定の結合関係に這入るのである。それはどういうこと  
28 かというと、人間学的趣味判断の上から、好きな人間同志が、一つの社会結合をするので  
29 ある。処で吾々はこうした社会結合を、セクトと呼ばねばならぬだろう。

30 (戸坂潤『日本イデオロギー論』15「文学的自由主義者」の特質)

31  
32 木曜会はセクトとして大正教養主義の主流をなした。その流れは戦後も、そして、二十一  
33 世紀も続いているのだろう。

34  
35 戦後の雑誌『心』は、その代表的メディアであった。その特徴は、藤田省三によれば反  
36 俗的エリート意識、西欧や日本の文化的伝統の尊重、個人を前提にした共同体の保持(人  
37 と人の和)、社会科学や法則的認識の軽視などにあった。また政治的には軍隊嫌いゆえの  
38 一定の反軍的傾向と、制度ではない天皇個人への愛着があり、これが戦後の文化的象徴天  
39 皇制を支える根拠となった。

40 (『日本歴史大事典』「大正教養主義」安田常雄)

41  
42 軽薄才子は、セクト、ギャング、山脈その他を形成する。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5100 「母」と「あの女」  
3 5150 「偉大なる暗闇」  
4 5153 セクトごっこ

5  
6 官僚のセクハラ疑惑に関して、元官僚の女性が〈男子校〉という言葉を使って説明していた。  
7 旧制高校〉と言いたいのを我慢したか。

8  
9 ひょっとすると、日本の近代精神史を解明するひとつの鍵は、明治末年から昭和の前半  
10 までつづいた、あの「友情」という特殊な観念の君臨だったかもしれない。それは、漱石  
11 の『こころ』の「先生」と友人「K」を支配し、無数の旧制高等学校の生徒たちの感情を  
12 呪縛し、反俗と無頼を誇る文士たちの精神を支えてきた。多くの場合、友情は家族愛や男  
13 女の絆よりも強く、しかし、そうした濃密な感情に似て、公的世界の人間関係に対立する、  
14 純粋に私的な紐帯を作りあげた。青年たちは、この紐帯のなかで最初の趣味を試され、  
15 人生についての見方を学び、いわば、人生観と世界観の原点を教えられたのであった。

16 この友情の集団には、師匠でなければ、たいてい兄貴分の教祖的な青年がいて、集団内  
17 部だけの秘教的な雰囲気の中で、独特の尊敬と畏怖を集めていた。彼は、友人たちの趣  
18 味と教養に裁断的な批評をくだし、その誠実さと忠誠心を試しては、心の最後の殻をも剥  
19 ぎとることを要求した。ときには酒席の無礼講の狂態のなかで、ときには読書会や、同人  
20 誌の作品合評の席で、この感情生活をめぐる私的制裁は、あたかも青春の通過儀礼のよう  
21 に行なわれるのであった。

22 (山崎正和『森鷗外 人と作品 一不党と社交』\*)

23  
24 SとKは、セクトを形成していない。彼らは外敵を特定することができず、セクトごっこ  
25 をやって気取っていた。外敵がいなく、敵は内部に想定される。内ゲバ。Nは、実生活  
26 で木曜会を拡大しながら、小説の中では「男同志」(下二十五)の関係を徐々に壊していく。

27  
28 津田は陰晴定めなき天気を相手にして戦うように厄介なこの友達、もっと適切にいう  
29 とこの敵、の事を考えて、思わず肩を峙だてた。すると一旦緒口の開いた想像の光景は  
30 其所で留まらなかった。彼を拉してずんずん先へ進んだ。彼は突然玄関へ馬車を横付にす  
31 る、そうして怒鳴り込むような大きな声を出して彼の室へ入ってくる小林の姿を眼前に  
32 髪髷した。

33 (夏目漱石『明暗』百八十一)

34  
35 「陰晴定め」あれば、どうなのか。「天気を相手にして戦う」は意味不明。「この友達」は  
36 小林。「峙だてた」は〈聳やかした〉と解釈する。語り手は誰に「いう」のか。Sにとって  
37 のKは、津田にとっての小林と同様、「敵」だったろう。三四郎にとって、与次郎は「敵」  
38 だったはずだ。「五分刈り」にとっての「山嵐」も同様。苦沙弥にとっての寒月も。

39 「開いた」は〈見つかった〉と解釈する。

40 「拉して」の主語は、形式的には「想像の光景」だが、意味的には「想像」か。

41 〈「突然」～「横付にする」〉は変だが、「想像」だから、まあ、いいか。

42 「怒鳴り込む」は〈怒鳴る〉が適当。

43  
44 \*森鷗外『阿部一族・舞姫』(新潮文庫)所収。

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 2 0 0 「三つの世界」  
3 5 2 1 0 「母」は墓  
4 5 2 1 1 「母の云いつけ通り」

5  
6 三四郎は、「母」の手の上で踊らされている。

7  
8 ——三四郎は母の云いつけ通り野々宮宗八を尋ねる事にした。

9 (夏目漱石『三四郎』二)

10  
11 三四郎は野々宮を媒介にして、広田と再会し、美禰子と知り合う。一方、野々宮の妹に「母  
12 の影」(『三四郎』三)を見て和む。彼女は「この間見た女の様<sup>ママ</sup>な気がして堪まらない」(『三  
13 四郎』三)という。お花のことだ。

14  
15 安心して床に這入ったが、三四郎の夢は頗る危険であった。——轢死を企てた女は、  
16 野々宮に関係のある女で、野々宮はそれと知って家へ帰<sup>ママ</sup>って来ない。只三四郎を安心させ  
17 る為に電報だけ掛けた。妹無事とあるのは偽<sup>いっわり</sup>で、今夜轢死のあった時刻に妹も死んでし  
18 まった。そうしてその妹は即ち三四郎が池の端<sup>はた</sup>で逢った女である。……

19 (夏目漱石『三四郎』三)

20  
21 「池の端<sup>はた</sup>で逢った女」は美禰子。この時点の三四郎は、彼女の名を知らない。

22 「夢」の美禰子の自殺は、三四郎の「母」に対する殺意の象徴だが、作者にそうした意図  
23 はない。野々宮の妹は三四郎の「母の影」つまり「異性の味方」だが、「母」は性的対象に  
24 ならない。インセスト・タブーのせいではない。「母」が両義的だからだ。つまり、「母」は  
25 「味方」でありながら、毒づくママゴンでもある。「母」のお気に入りのお光ではない「あ  
26 の女」つまりお花のようなのが美禰子なのだ。「列車」(『三四郎』三)を運転していたのは  
27 広田だろうか。居眠り運転。三四郎の見た小説のような「夢」に、小説としての意味はない。  
28 作者の混乱の露呈だ。

29 この「夢」が文芸的なものなら、夢知らせでなければならない。美禰子は、藤尾と同様、  
30 「母」の身代わりとなって死ぬ。彼女は、婚約者と三四郎の板挟みになった。真間手児奈  
31 だ。そういった展開にならないことには決着がつかない。喜劇なら、迫り来る列車の前に飛  
32 び込もうとする彼女を、三四郎が危機一髪のところまで抱き留め、彼女は改心する。

33 「轢死を企てた女」を三四郎は実際に見たが、この出来事は、伏線でも何でもない。『ア  
34 ンナ・カレーニナ』(トルストイ)とは違う。「電報」に関わる出来事も実際に起きたが、  
35 これもなくしていい話だ。おかしいことに、現実の出来事よりも「夢」の出来事の方が筋が通  
36 っているように思われる。語り手は、この変な感じを消してくれない。

37  
38 三四郎の魂がふわつき出した。

39 (夏目漱石『三四郎』四)

40  
41 三四郎が落ち着かないのは、広田のせいだろう。「少し広田さんにかぶれたな」(『三四郎』  
42 四)と思う。ちなみに、Pも「少し先生にかぶれたんでしょう」(上三十三)と言う。

43  
44  
45  
46  
47

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 2 0 0 「三つの世界」  
3 5 2 1 0 「母」は墓  
4 5 2 1 2 「立退場たちのきぼのようなもの」は墓

5  
6 「母」は三四郎の精神的自立を阻もうとしている。野々宮家は「母」の手先かもしれない。  
7 だが、広田までが手先とは考えられない。広田は独身で、マザコンらしい。三四郎は自分が  
8 広田のようになることを恐れているのだろうが、〈マザコンだと恋愛はできないし、結婚し  
9 ても夫婦としてうまくやっていけそうにない〉というふうを考えているわけではない。語り  
10 手も、そんなふうには語らない。では、作者はそうした可能性をまったく考慮していないの  
11 だろうか。そうではない。逆だ。その可能性を必死になって隠蔽している。虻蜂取らず。だ  
12 から、『三四郎』には結末らしい結末がない。

13  
14 三四郎には三つの世界が出来た。一つは遠くにある。与次郎の所謂いわゆる明治十五年以前の香  
15 がする。凡てが平穩である代りに凡てがねほけ気ている。尤も帰るに世話はいららない。戻ろ  
16 うとすれば、すぐに戻れる。ただいざとならない以上は戻る気がしない。云わば立退場たちのきぼの  
17 様なものである。三四郎は脱ぎ棄てた過去を、この立退場の中へ封じ込めた。なつかしい  
18 母さえ此処こゝに葬ったかと思うと、急に勿体もったいなくなる。そこで手紙が来た時だけは、暫く  
19 この世界に低徊して旧歡を温める。

20 (夏目漱石『三四郎』四)

21  
22 『三匹の仔豚』みたいだが、三四郎は賢い三匹目ではない。「四」があるから。  
23 「世界」は意味不明。〈人生設計〉などとは違う。当然、「出来た」も意味不明。

24 与次郎は「山嵐」の後裔。「明治十五年」は与次郎が生まれた年。彼は三四郎に対して「尤  
25 も君は九州の田舎から出たばかりだから、明治元年位の頭と同じなんだろう」(『三四郎』四)  
26 と言う。Nは「明治元年」の前年に生まれているから、二人の「頭」は「同じ」ようなもの  
27 と考えられる。三四郎は、肉体だけが若返ったNだろう。

28 「平穩」は欺瞞。「代りに」は意味不明。「ねほけ気て」は意味不明。広田や与次郎らに暗示  
29 をかけられて、または自己暗示にかかって、「平穩」と思っている。語り手は、嘘とも冗談  
30 ともつかない語り口によって、聞き手を寝ぼけさせようとしている。

31 「尤も」は意味不明。「世話」は必要だろう。三四郎の自己欺瞞だ。

32 「戻ろうとすれば、すぐに」汽車に乗ればいいわけだが、その場合、休学するのか。

33 「いざ」がどのような事態か、不明。「ならない以上」は意味不明。「いざとならない」場  
34 合でも、たとえば長期休暇でも「戻る気がしない」のだろうか。

35 「立退場たちのきぼ」が「立ち退いて仮に移っている所」(『日本国語大辞典』「立退所」)なら、冗談  
36 がきつ過ぎて意味不明。彼は故郷を捨てたいはずだ。何かあったのに違いないのだが、不明。

37 「脱ぎ棄てた過去」は意味不明。〈「過去を」～「封じ込めた」〉は意味不明。

38 上京して間もないのに「なつかしい」は変。「葬ったか」は殺意の露呈だが、文芸的表現  
39 ではない。「急に勿体もったいなくなる」の真意は〈ずっと邪魔だった〉だろう。

40 「そこ」の指す言葉がない。「手紙」がこの前に紹介されている。「低徊」は夏目語で、意  
41 味不明。「旧歡」は皮肉めいている。「温める」は〈「温める」という演技をしている〉の不  
42 当な略。勿論、実在の「母」の気持ちは温まらない。

43  
44  
45  
46

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5200 「三つの世界」  
3 5210 「母」は墓  
4 5213 冬彦さん

5

6 「国元」を「立退場」と呼ぶのは奇妙だ。「国元」は、母胎であると同時に墓所だろう。  
7 「母」は墓なのだ。三四郎は、清と同じ墓に入った後で蘇生した「五分刈り」だ。

8

9 死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋め  
10 て下さい。御墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますと云った。だから  
11 清の墓は小日向の養源寺にある。

12 (夏目漱石『坊っちゃん』十一)

13

14 「五分刈り」の遺骨は、彼自身の墓や彼の親族の墓ではなく、「清の墓」に入るわけだ。  
15 三四郎が安心できる「世界」も、「母」と入る墓の中だけだろう。

16 『広辞苑』の「世界」を適当にまとめる。

17

18 ① 「世」は過去・現在・未来の三世、「界」は東西南北上下を指すとされる。

19 ② 地球上の人間社会のすべて。万国。「一地図」「一周」

20 ③ 人の住む所。地方。

21 ④ 世の中。世間。うきよ。

22 ⑤ 世間の人。

23 ⑥ 同類のもの集まり。「学者の一」

24 ⑦ ある特定の範囲。「学問の一」「勝負の一」

25 ⑧ 歌舞伎・浄瑠璃で、戯曲の背景となる特定の時代・人物による類型。「義経記の一」

26

27 「三つの世界」の「世界」は⑥のようだが、その場合、「出来た」が処理できない。世界  
28 ⑥は、三四郎と無関係に、もとからあるはずだ。⑧が適当だろう。しかし、作者にその自覚  
29 はなかり。「世界」に先立つ物語もない。

30 三四郎はマザコン青年だが、その自覚が足りない。ただし、乳離れできない甘えん坊のマ  
31 マズ・ボーイとは違う。「母親に対する愛憎入りまじった複雑な感情」(『広辞苑』「マザー  
32 コンプレックス」)を抱いている。彼は、『ずっとあなたが好きだった』(TBS)の冬彦さ  
33 んみたいに、母親に対して殺意を抱いているはずだ。

34 『吾輩は猫である』の富子の母は、ワガハイに非難されるだけだった。「五分刈り」の母  
35 性的な清も死んだ。『虞美人草』の悪い母を、作者は改心させた。だから、三四郎は「母」  
36 を軽視できる。『それから』や『門』に悪い母は出てこないが、主人公の男たちは鬱屈して  
37 いる。再び、『彼岸過迄』で母が登場する。この母の本心は不明なのに、須永は必死で良い  
38 母と思いたがる。その反動で、『行人』の一郎は死にそうに苦しむ。静の母は、悪い母とも  
39 良い母とも決まらないまま、死ぬ。「母」に死なれたSは、その後を追って死にたがる。

40 『三四郎』の語り手は、〈「母」と三四郎の物語〉を隠蔽している。その物語が明示されな  
41 ければ、「世界」の意味は確定しない。物語が不要なら、きちんと「世界」の定義をすれば  
42 いい。だが、そんなこともしない。「三つの物語」が混濁したまま、『三四郎』は終わる。

43

44

45

46

47

48

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 2 0 0 「三つの世界」  
3 5 2 2 0 「第二の世界」  
4 5 2 2 1 「現世を知らないから」

5  
6 「第二の世界」は不透明だ。

7  
8 第二の世界に動く人の影を見ると、大抵不精な髭ひげを生やしている。  
9 (夏目漱石『三四郎』四)

10  
11 「第二の世界」は知識人の集団のようだ。しかし、これは〈男の「世界」〉だ。「母」の「世  
12 界」と「第三の世界」である男女交際の間にある。三四郎は、郷里で同性の友人や先輩がい  
13 なかったようだ。語り手は、この種の真相を隠蔽している。「動く」は意味不明。「影」は意  
14 味不明。「不精な髭」は〈不精髭〉のことだろうが、きちんとした「髭」でない理由は不明。  
15 蛮カラ、つまり、一種のお洒落か。

16 三四郎の思考あるいは『三四郎』の語り手の語り口は奇妙だ。

17  
18 このなかに入るものは、現世を知らないから不幸で、火宅を逃れるから幸さいわいである。広  
19 田先生はこの内にいる。野々宮君もこの内にいる。三四郎はこの内の空気を略解し得た所  
20 にいる。出れば出られる。然し折角解し掛けた趣味を思い切って捨てるのも残念だ。

21 (夏目漱石『三四郎』四)

22  
23 「このなか」は「第二の世界」だ。「現世を」は〈「現世」の快樂「を」〉などの不当な略。

24 「現世」云々は「現世安穩げんぜあんのん」(『法華経』葉草喩品第五)の皮肉か。「火宅」は、冗談だろう  
25 が、意味不明。「我レ永ク火宅ヲ離レテ人間ニ不來ズト云ヘドモ、孝養ノ為ニ強ニ來テ」  
26 (『今昔物語集』卷第十三陽勝修苦行成仙人語第三)と仙人が語る。「第二の世界」は、仙界  
27 などではない。なお、仙人でも「現世」に戻ることはある。

28 「空気」は意味不明。だから、〈「空気を」～「解しかい」〉も「解し得た所」も意味不明。「得  
29 た所」は〈「得」る「所」〉が適当なのではないか。「所」は、場所か、時間か。

30 「出れば」は〈「出」たくな「れば」〉と解釈する。欲望を曖昧にしたいらしい。

31 「空気」が「趣味」に変わったようだ。〈「趣味を」～「捨てる」〉は意味不明。「第二の世  
32 界」の住人は、共同研究者などではないらしい。文系と理系の区別はなく、目的を共有する  
33 様子もない。だから、「世界」を形成する意図が不明。「解しげ」は「解しかい」と同義か。「思い  
34 切って」は意味不明。「捨てる」理由は「不幸」だからか。

35 三四郎は、知的俗物の広田と知的技術者の野々宮と本格的な思想家などを区別すること  
36 ができない。彼が「第二の世界」に参入できたとしても、広田のような教師にしかなれまい。  
37 卒業後、帰郷し、「母」と同居し、お光と結婚させられる。だが、作者は、三四郎の将来に  
38 ついて、未定と暗示するのだろう。

39 広田は、苦沙弥の後裔である白井道也のそのまた後裔だ。Sと同様、知識人として成功し  
40 ていないし、成功する見込みもない。一言居士の教師風情に魅力を感じるようでは、三四郎  
41 も学者になれまい。そのことに、作者は気づいていないらしい。野々宮は寒月の後裔で、与  
42 次郎は迷亭の、美禰子は富子の後裔。ネタの使い廻し。飽き飽きだ。

43  
44  
45  
46

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5200 「三つの世界」  
3 5220 「第二の世界」  
4 5222 広田式「翻訳」

5  
6 広田は「第二の世界」のメンバーらしいが、Sと同様、怪しい人物だ。

7  
8 すると、

9 「君、不二山<sup>ふじさん</sup>を翻訳してみた事がありますか」と意外な質問を放たれた。

10 「翻訳とは……」

11 「自然を翻訳すると、みんな人間に化けてしまうから面白い。崇高だとか、偉大だとか、  
12 雄壮<sup>ママ</sup>だとか」

13 三四郎は翻訳の意味を了した。

14 (夏目漱石『三四郎』四)

15  
16 「すると」は機能していない。これは不図系の言葉だろう。

17 「不二山<sup>ふじさん</sup>」は、三四郎の内言では「富士山」(『三四郎』四)と表記されている。「質問」  
18 をしたのは広田だ。彼の台詞でも、前は「富士山」(『三四郎』四)と表記されていた。不気  
19 味。「意外な」は意味不明。これも不図系らしい。「翻訳」は夏目語だろう。

20  
21 「自然が人間を翻訳する前に、人間が自然を翻訳するから、御手本は矢張り人間にある  
22 のさ。瀬を下って壮快なのは、君の腹にある壮快が第一義に活動して、自然に乗り移るの  
23 だよ。それが第一義の翻訳で第一義の解釈だ」

24 「肝胆相照らすと云うのは御互に第一義が活動するからだろう」

25 (夏目漱石『虞美人草』五)

26  
27 「肝胆相照らす」は言葉遊び。「還元的感化」を含め、類語なら、いろいろ、ある。共感。  
28 共鳴。同調。同情。以心伝心。つうと言えばかあ。感情移入。気韻生動。テレパシー。類は  
29 友を呼ぶ。付和雷同。胸中を察する。意気投合。伝染。気が合う。似た者同士。馬が合う。  
30 馬は馬連れ。阿吽の呼吸。相呼応。シンクロニシティ。憑依。一心同体。一体感。

31 「翻訳とは」の後が不明。広田は、三四郎の質問を無視したようだ。

32 「人間に化けて」や「面白い」は意味不明。「富士山」と「不二山<sup>ふじさん</sup>」は、「翻訳」しても  
33 同じ言葉になるのか。三四郎は、「富士山」について「崇高」(『三四郎』四)という印象を抱  
34 いていた。

35 富士山は霊峰であり、「日本の山岳信仰の代表的なもの」(『日本歴史大辞典』「富士山信  
36 仰」)だから、「人間に化けて」はおかしい。〈神「に化けて」〉などが妥当のはず。

37  
38 森羅万象に神の発現を認める古代日本の神観念を表す言葉。

39 (『百科事典マイペディア』「八百万の神」)

40  
41 広田と三四郎は、富士山という具体的な物に関して、「古代日本」の文化とは異なる「共  
42 通の基盤」に立ち、「肝胆相照らす」ような仲になりかけているらしい。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 2 0 0 「三つの世界」  
3 5 2 2 0 「第二の世界」  
4 5 2 2 3 「婦人席」  
5

6 明治三十九年、新渡戸稲造が第一高等学校の校長に就任する。  
7

8 どのような人かと講堂に集まった学生たちを前に、新渡戸は語った。  
9 「……いままでの教育はメンタリティすなわち知、モラリティすなわち徳、バイタリティ  
10 すなわち体、この三つに重点を置いてきたが、それだけでは個としての人間しかできない。  
11 これに加えてソシアリティすなわち社会的観念がなくては、全体としての人間は完成し  
12 ない。いかにすぐれた知徳体を有していても、実社会に適用するものでなければ、価値が  
13 ない。口先のうまい人になれというのではない。実社会で円満な活動のできる人間に、な  
14 ってもらいたいのである……」

15 (星新一『明治の人物誌』「新渡戸稲造」)  
16

17 「第二の世界」の成員が新渡戸の方針に沿うのなら、広田など不要だろう。  
18

19 <sup>ろうじょう</sup>籠城主義、<sup>どぜん主義</sup>独善主義の傾向のあった一高に、新風を吹き込んだ。彼はつとめて講演を  
20 し、寛大さ、謙虚さ、心のふれあいの必要を説いた。学生たちも大言壮語がへり、禁酒と  
21 か思索を重んじるのがふえていった。

22 (星新一『明治の人物誌』「新渡戸稲造」)  
23

24 広田は学生の「<sup>ろうじょう</sup>籠城主義、<sup>どぜん主義</sup>独善主義の傾向」を諫めるのだろう。また、SはKの「<sup>ろうじょう</sup>籠城  
25 主義、<sup>どぜん主義</sup>独善主義の傾向」を諫めたかったのだろう。話としては簡単なのだ。Nは無理に話を  
26 難しくしている。新渡戸の功績を横取りしたかったからか。

27  
28 しかし、これを質実剛健の伝統を崩すものと受け取る学生もあり、校長への信、不信を  
29 めぐって学内で討論会が開かれた。反対派はこう論じた。

30 「某新聞は先生を、八方美人と評している。それがソシアリティの本質では困るのだ。運  
31 動会の時、婦人のための見物席を作るなど、なにごとであるか……」

32 (星新一『明治の人物誌』「新渡戸稲造」)  
33

34 広田に師事する若者たちの性格は判然としない。  
35

36 三四郎が失望したのは婦人席が別になっていて、普通の人間には近寄れない事であっ  
37 た。

38 (夏目漱石『三四郎』六)  
39

40 「婦人席」の象徴的意味が不明。戦後の常識だと女性差別の象徴みたいだが、当時として  
41 は男女平等の象徴だったろう。「普通の人間」は〈偉くない男〉のこと。

42 婦人席に近寄る資格を得るために、SやKは「偉くなる積り」(下十九)だったか。  
43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 2 0 0 「三つの世界」  
3 5 2 3 0 「第三の世界」  
4 5 2 3 1 「囚われちゃいけませんよ」

5  
6 三四郎にとって、「第二の世界」は「恋に上る階段」かもしれない。  
7

8 自分は田舎から出て大学へ這入ったばかりである。学問という学問もなければ、見識と  
9 云う見識もない。自分が、野々宮に対する程な尊敬を美禰子から受け得ないのは当然であ  
10 る。そう言えば何だか、あの女から馬鹿にされている様でもある。先刻、運動会はつまら  
11 ないから、此処にいと、丘の上で答えた時に、美禰子は真面目な顔をして、この丘には  
12 何か面白いものがありますかと聞いた。あの時は気が付かなかったが、今解釈してみると、  
13 故意に自分を愚弄した言葉かもしれない。——三四郎は気が付いて、今日まで美禰子の自  
14 分に対する態度や言語を一々繰り返してみると、どれもこれもみんな悪い意味が付けら  
15 れる。三四郎は往来の真中で真赤になって俯向いた。不図、顔を上げると向うから、与次  
16 郎と昨夕の会で演説をした学生が並んで来た。与次郎は首を豎に振ったぎり黙っている。  
17 学生は帽子を脱って礼をしながら、

18 「昨夜は。どうですか。囚われちゃ不可ませんよ」と笑って行き過ぎた。

19 (夏目漱石『三四郎』六)  
20

21 「田舎から出て」に対応するのは〈都会に来た「ばかり」〉だ。「大学へ這入ったばかり」  
22 に対応するのは、〈高校か何か「から出て」〉だ。三四郎の〈自分の物語〉の素材は二種あり、  
23 一つは「田舎」で、もう一つは「大学」だ。彼は、この二種の物語を混同している。語り手  
24 は、混同に気づいてない。作者も気づいていないのだろう。読みづらい。

25 「学問という学問」や「見識と云う見識」は意味不明。

26 「尊敬」と〈偏愛〉を三四郎は混同している。

27 「馬鹿にされている」のは間違いない。だが、「馬鹿」だから好かれないとは限らない。

28 「運動会はつまらない」と思ったのは、「婦人席」に近づけないからだ。野々宮は「婦人  
29 席」に近づけた。ただし、彼は「掛員」(『三四郎』六)で、しかも、「婦人席」に妹がいた  
30 せいだろう。三四郎は、「掛員」になるために「学問」や「見識」を必要とするのか。

31 「愚弄した」のなら「故意」に決まっているようだが、違うのだ。ややこしい。

32 「意味が付けられ」は意味不明。

33 「不図」の後は、三四郎の幻覚みたいだ。この与次郎は三四郎に一瞥も与えなかったよう  
34 だからだ。「——」のあたりから、三四郎は徐々に正気を失いつつあったらしい。勿論、そ  
35 ういう文芸的表現が試みられているのではない。

36 この与次郎は、〈君の「演説」に賛同する〉などと言いながら「首」を振っているのだろ  
37 う。「昨夕の会」の「演説の意味」(『三四郎』六)は、私には理解できないのだが、「席に在  
38 った学生は悉く喝采した」(『三四郎』六)と語られている。

39 〈演説をした「学生」は「運動会」でも活躍する〉と、三四郎は思っている。その「学生」  
40 と思しき男は「婦人席の方を向いて立って」(『三四郎』六)いた。「学問」や「知識」でな  
41 く、体育で秀でるのでも、女に好かれるわけだ。文武両道。

42 何に「囚われちゃ」なのか、わからない。『三四郎』を読み終えても、わからない。  
43  
44  
45

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 2 0 0 「三つの世界」  
3 5 2 3 0 「第三の世界」  
4 5 2 3 2 「主人公であるべき資格」

5  
6 「三つの世界」は、三題噺のように、偶然に出現したのではない。

7  
8 第三の世界は燦<sup>さん</sup>として春の如く盪<sup>うご</sup>いている。電燈がある。銀匙<sup>ぎんさじ</sup>がある。歓声<sup>しやう</sup>がある。笑  
9 語<sup>ご</sup>がある。泡立つ三鞭<sup>さんべん</sup>の盃がある。そうして凡ての上に冠として美しい女性<sup>にようしやう</sup>がある。三  
10 四郎はその女性の一人に口を利いた。一人を二遍見た。この世界は三四郎に取って最も深  
11 厚な世界である。この世界は鼻の先にある。ただ近づき難い。近づき難い点<sup>おひ</sup>に於て、天外  
12 の稲妻と一般である。三四郎は遠くからこの世界を眺めて、不思議に思う。自分がこの世  
13 界のどこかへ這入らなければ、その世界のどこかに欠陥が出来る様な気がする。自分はこ  
14 の世界のどこかの主人公であるべき資格を有しているらしい。それにも拘<sup>かか</sup>わらず、円満の  
15 発達<sup>こいねが</sup>を冀<sup>ママ</sup>うべき筈のこの世界が却って自らを束縛<sup>しゆつにゆう</sup>して、自分が自由に出入<sup>しゆつにゆう</sup>すべき通路  
16 を塞<sup>ふさ</sup>いでいる。三四郎にはこれが不思議であった。

17 (夏目漱石『三四郎』四)

18  
19 「第三の世界」は〈男女交際の「世界」〉らしいが、不明。「盪<sup>うご</sup>いて」は意味不明。  
20 「電燈」などはハイカラな小道具で、「田舎」になかったのだろう。

21 お光は「笑語<sup>しやうご</sup>」が言えなかったか。

22 「凡ての上に冠として」は意味不明。「美しい女性<sup>にようしやう</sup>」も小道具の一種らしい。

23 「その女性の一人」は美禰子だろう。彼女は正体不明だ。最後まで正体不明。

24 「一人を」は〈その「一人を」〉の略か。

25 「深厚な世界」は意味不明。

26 「鼻の先にある」のなら、すでに近付いているはずだから、「近づき難い」というのは無  
27 意味。

28 「天外」には、近付きたくても近付けない。「稲妻」には 近付けても近付きたくない。

29 「近づき難い」が意味不明だから、「一般」は無意味。ただし、「天外」は〈奇想「天外」〉  
30 の不当な略で、真意は〈奇想〉なのかもしれない。だったら、悪文。

31 「遠くから」だって? 「鼻の先にある」のではなかったのか。

32 「第三の世界」というホテルがあるとしよう。「この世界のどこか」は、ホテルの中にあ  
33 る特別室のようなものだ。その特別室に三四郎が「這入らなければ」ホテル「第三の世界」  
34 に「欠陥」が生じる。つまり、特別室がなくなるわけだ。そういうことはある。

35 「この世界のどこかの主人公」は、言うまでもなく、〈「この世界」の「主人公」〉ではな  
36 い。特別室の「主人公」だ。三四郎は〈「主人公」の特別室に入る「資格」〉と書かれたチケ  
37 ットを持ってホテルの前に立っている。ところが、ホテルの前には〈三四郎は立入禁止〉と  
38 いう看板が出ている。そのチケットは、三四郎のものではない。

39 ホテルが「自らを束縛<sup>しゆつにゆう</sup>して」いるのではない。「出入<sup>しゆつにゆう</sup>すべき通路」は〈特別室に「出入<sup>しゆつにゆう</sup>  
40 すべき通路」〉の不当な略。ホテルの宴会場に、三四郎は紛れ込んだ。だが、特別室にしけ  
41 こむことはできない。相手がいないからだ。

42 何の「不思議」もない。

43

44

45

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 2 0 0 「三つの世界」  
3 5 2 3 0 「第三の世界」  
4 5 2 3 3 白抜きの「主人公」

5  
6 「第三の世界」は、ありきたりの青年の性的夢想の産物ではない。つまり、この場面の三  
7 四郎が顔のない女体をカキノタネにしているわけではない。

8  
9 恋慕<sup>れんぼ</sup>の情がはじめて胸に影を落とした。ついに時がめぐって来て、彼女も恋をしたので  
10 ある。まるで大地にこぼれた種<sup>たね</sup>が、春のぬくもりに芽ぐむように。以前から彼女の想像は、  
11 安逸と哀愁にめらめらと燃えあがりながら、運命の糧<sup>かて</sup>に飢えていた。以前から心の悩みが、  
12 ういういしい胸を締めつけていた。魂が……誰かしらを待ち受けていた。

13 今こそ待ったかいがあった。眼は豁然と開かれた。「これこそ、その人なのだ！」思わ  
14 ず彼女はこう叫んだ。ああ、今や昼も夜も、独り寝の熱い眠りの間も、たえず彼の面影が  
15 みなぎっていた。何もかもが絶え間なく魔法の力で彼のことを、可愛いおとめにささやい  
16 ていた。

17 (アレクサンドル=セルゲービチ・プーシキン『オネーギン』「第3章 令嬢」)

18  
19 「彼女」はタチヤーナで、「彼」はオネーギン。

20 三四郎の「第三の世界」は、タチヤーナと三四郎を取り換えただけではできない。「その  
21 人」が三四郎だからだ。「あらゆる小説の主人公が、夢見るおとめの眼にはただ一つの姿と  
22 映り、ただひとりオネーギンの姿に溶け入った」(『オネーギン』)とされるオネーギンが「第  
23 三の世界」の三四郎に相当する。タチヤーナの思い描くロマンスの世界の「主人公」と三四  
24 郎の思い描く「第三の世界」の「主人公」は同類であり、〈女に恋される男〉だ。

25 タチヤーナの恋愛妄想的ロマンスは単純で、次のように進行する。

26 〈「おとめ」は「主人公」を愛する。タチヤーナは「主人公」を愛する。「主人公」はオネ  
27 ーギンだ。よって、タチヤーナはオネーギンを愛する〉

28 三四郎は、女にとっての客体である「主人公」になりたいのだ。ややこしい。

29  
30 外は朧の春の宵である。室内は昼を欺く空気ランプの光<sup>ひかり</sup>花模様のカーペットに照り<sup>は</sup>  
31 えて、純陽<sup>じゅんよう</sup>夏野の如き鮮かな輝<sup>かがやき</sup>に満たされた中に、テーブルの上の鉢植の匂<sup>におい</sup>董<sup>にほひすみれ</sup>は、ピ  
32 イルの香<sup>か</sup>や、菘<sup>たばこ</sup>の煙や、嬌<sup>なまめか</sup>しい香水の匂と相蒸<sup>あいき</sup>熱れて、ストオブの活気<sup>かろ</sup>に軽く<sup>かる</sup>瞑眩<sup>めんけん</sup>を  
33 覚ゆるばかり暖い西洋間。若い才有<sup>によしやうら</sup>る女性等が崇拜の瞳に仰がれながら、我と我が詩想  
34 の麗しい幻想を追って空とりと夢見るやうな飲<sup>うつ</sup>哉は飲半<sup>のみま</sup>しのコップを握つたまゝ、ア  
35 ムチエーアの肘掛に身を<sup>もた</sup>靠せて暫くは辭<sup>ことば</sup>も無い。彼の暁の夢にと唱<sup>か</sup>つた、常世<sup>とこよ</sup>の其の浄  
36 楽界を憧れて居るのでもあらうか。

37 (小栗風葉『青春』「春之巻」一)

38  
39 三四郎の空想する「アムチエーア」は空席だ。「若い才有<sup>によしやうら</sup>る女性等」が彼を拒むのでは  
40 ない。合コンの主催者が彼を拒むらしい。その主催者は「母」だろう。ただし、そうした  
41 文芸的表現にはなっていない。作者は混乱している。

42 野々宮一家と美禰子、三四郎の関係は、『青春』からいただいたものらしい。

43  
44  
45

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 2 0 0 「三つの世界」  
3 5 2 4 0 緋い交ぜ  
4 5 2 4 1 「世界を掻き混ぜて」

5  
6 「三つの世界」は未来の物語の「世界」だ。〈「母」の「世界」〉さえ未来のシェルターだ。

7  
8 三四郎は床のなかで、この三つの世界を並べて、互に比較してみた。次にこの三つの世界を掻き混ぜて、その中から一つの結果を得た。——要するに、国から母を呼び寄せて、美しい細君を迎えて、そうして身を学問に委ねるに越した事はない。

9  
10  
11 (夏目漱石『三四郎』四)

12  
13 「掻き混ぜて」はいけない。「三つの世界」の物語を、それぞれ、構想すべきだ。

14  
15 江戸歌舞伎で、顔見世狂言に上演すべき世界⑩を定める儀式。

16 (『広辞苑』「世界定め」)

17  
18 三四郎は〈自分の物語〉を語るための世界定めに失敗した。

19  
20 二つ以上の在来の筋(世界)をませ合わせて、一編の脚本に仕立てること。

21 (『日本国語大辞典』「緋交」)

22  
23 緋い交ぜの例。

24  
25 入間家の姉娘花子は剃髪して清玄尼となるが、妹の桜姫と吉田家の松若との仲を嫉妬し、破戒する。後に惣太に殺され、その亡霊が若松と同じ姿で現われ、双面(ふたおもて)を演じる。通称「女清玄」。

26  
27 (『日本国語大辞典』「隅田川花御所染」)

28  
29  
30 『隅田川花御所染』の第一の「世界」は〈清玄桜姫物〉だ。

31  
32 清水(きよみず)寺の清玄が桜姫に恋し、墮落して寺を追われ、ついに桜姫のしもべに殺されるが、執念がなお姫につきまとうという筋を取り入れたもの。

33  
34 (『日本国語大辞典』「清玄桜姫」)

35  
36 『隅田川花御所染』の第二の「世界」は〈加賀美山〉だ。

37  
38 お家横領を企てる大杉源蔵の一味の局岩藤は、密書を中老尾上に拾われたのでこれを草履で打つ。尾上はくやしきの余り自害し、その下女お初が岩藤を討つという筋。

39  
40 (『日本国語大辞典』「加賀見山旧錦絵」)

41  
42 『近世戯曲史序説』(諏訪春雄)参照。

43  
44 \*goto ミットソン [『いろはきいろ』 #020[世界]02 日本近世戯曲]

45  
46  
47

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5200 「三つの世界」  
3 5240 緋い交ぜ  
4 5242 『ゴドーを待ちながら』  
5

6 『ロンバケ』は『コンペティション』（オリアンスキー監督）と『結婚しない女』（マザ  
7 ースキー監督）の緋い交ぜだ。『セントエルモス・ファイアー』（シュマッカー監督）も考え  
8 られるが、これは『ふぞろいの林檎たち』（TBS）や『男女7人夏物語』（TBS）の原典  
9 だろうから、『ロンバケ』の直接の原典ではなかろう。とにかく、『ロンバケ』には少なくと  
10 も三種の物語の世界があって、それらが一つに統合されていく。

11 三四郎の「三つの世界」は統合されない。三四郎が「低徊家」（『三四郎』四）で〈自分の  
12 物語〉の「主人公」になれないのは、複数の「世界」の緋い交ぜに成功しないからだ。初心  
13 だからではない。彼の〈自分の物語〉は、いわゆるタブラ・ラサの状態、白紙なのではない。  
14 逆だ。「三つの世界」という物語の断片がぐじゃぐじゃになっている。ごみ屋敷。  
15

16 ただこうすると広い第三の世界を<sup>びょう</sup>眺たる一個の細君で代表させる事になる。美しい  
17 女性<sup>にょしやう</sup>は沢山ある。美しい女性を翻訳すると色々になる。——三四郎は広田先生にならっ  
18 て、翻訳という字を使ってみた。——苟<sup>いやしく</sup>も人格上の言葉に翻訳の出来る限りは、その翻  
19 訳から生ずる感化の範囲を広くして、自己の個性を<sup>まった</sup>完からしむる為、なるべく多くの  
20 美しい女性<sup>にょしやう</sup>に接触しなければならぬ。細君一人を知って甘んずるのは、進んで自己の  
21 発達を不完全にする様なものである。  
22

（夏目漱石『三四郎』四）

23  
24 「こう」は「結果」の内容。「広い」は不可解。「眺たる」は意味不明。「代表させる」が  
25 意味不明なので、「事になる」かどうか、不明。

26 「翻訳」は意味不明。しかも、その結果が「いろいろ」とあるのなら、推量もできない。  
27 「沢山」でも「いろいろ」とは限らない。多数と多種は違う。  
28 広田流「翻訳」の仕方が不可解なのだ。

29 「人格上の言葉」は意味不明。「感化」は意味不明。「個性を<sup>まった</sup>完からしむる」は意味不明。「接触  
30 し」の具体例が不明。

31 「知って」は意味不明。性行為の暗示なら、「接触し」も性的な行為か。「甘んずる」は、  
32 満足なのか、諦めるのか。「自己の発達」は意味不明。  
33

34 伝統的作劇法を完全に無視して、サーカスや寄席（よせ）の道化（どうけ）芝居に近い  
35 体裁のもとに、何かを待ち続ける現代の人間の条件をみごとにとらえた作品。

36 （『日本大百科事典（ニッポニカ）』「ゴドーを待ちながら」）  
37

38 三四郎のように複数の可能性に対して受身だと、「低徊家<sup>ていかいか</sup>」になる。「道化（どうけ）」を  
39 演じるつもりはなくても、笑いものにされる。

40 「ゴドー」は正体不明だ。三四郎の待ち続ける「あの女」も正体不明だ。そのことに作者  
41 は気づいていない。作者が近代的「作劇法」を意図的に破壊しているわけではない。ちなみ  
42 に、これのパクリの『待ち伏せ』（稲垣浩監督）にはわざとらしい結末があって、滑稽。  
43  
44  
45  
46

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 2 0 0 「三つの世界」  
3 5 2 4 0 緋い交ぜ  
4 5 2 4 3 「彼女の<sup>かのおんな</sup>夫<sup>ハズバンド</sup>たる唯一の資格」

5  
6 三四郎は、「三つの世界」を統合することができない。だが、実際には、作者が〈三四郎  
7 の物語〉の創作に失敗している。作者は、自分の無力を作中人物の未熟に偽装している。

- 8  
9 I a 「母」は三四郎を愛する。  
10 II a 広田は三四郎を尊ぶ。  
11 III a 美禰子は三四郎を愛する。

12  
13 〈a群〉の統合は極めて困難だ。これらの物語の主語が全部違うからだ。しかも、〈I a〉  
14 は虚偽だろう。〈II a〉は期待だ。広田が三四郎を鼻負している様子はない。肝心要の〈III  
15 a〉は、三四郎の妄想である疑いが濃い。美禰子はお花と同様、正体不明なのだ。

16  
17 美禰子<sup>みねこ</sup>に愛せられるという事実その物が、彼女の<sup>かのおんな</sup>夫<sup>ハズバンド</sup>たる唯一の資格の様な気がして  
18 いた。

19 (夏目漱石『三四郎』九)

20  
21 〈III a〉は虚偽の〈I a〉の異本だ。「美禰子<sup>みねこ</sup>」を「母」に、そして「夫<sup>ハズバンド</sup>」を〈息子〉  
22 に置き換えると、マザコンの物語になる。つまり、「美禰子<sup>みねこ</sup>に愛せられる」は、「理想の「母」  
23 に愛されるように「美禰子<sup>みねこ</sup>に愛せられる」の不当な略だ。

- 24  
25 I b 三四郎は、自分が「母」に愛されていると信じたら、「母」を愛する。  
26 II b 三四郎は、自分が広田に尊ばれていると信じたら、広田を尊ぶ。  
27 III b 三四郎は、自分が美禰子に愛されていると信じたら、美禰子を愛する。

28  
29 〈b群〉の主語は同じだから、統合は困難ではなさそうだ。三種の三四郎が「唯一」の〈自  
30 分の物語〉に含まれるのであれば、統合はいくらか容易になりそうだ。  
31 では、次の場合、統合は容易か。

- 32  
33 I c 太郎は「母」からもらった特殊な黍団子を持っている。  
34 II c 太郎は男性専用の由緒ありげな鉞を持っている。  
35 III c 太郎は「美しい女性<sup>によしゅう</sup>」からもらった不思議な玉手箱を持っている。

36  
37 「三つの世界」がそれぞれ単純のようでも、〈c群〉の物語の原典を想起してしまうと、  
38 統合は困難になる。三人の太郎は、どのような場面で出会っても、三人のままだ。彼らが同  
39 一人物なら、太郎は三種のアイテムを所持している。〈竜宮城とは鬼が島の異名で、酒呑童  
40 子は乙姫をさらってきた〉というような、かなり無理な話になる。

41 無理な玉手箱に相当するのが「ヴァイオリン」(『三四郎』九)だ。これは寒月の物語に由  
42 来するエロチックな道具だ。

43  
44  
45  
46  
47

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5200 「三つの世界」  
3 5250 「ピチーズ アキン ツー ラヴ」  
4 5251 『オルノーコ』

5  
6 広田らの「小集」(『三四郎』四)は、愛に関する無知を隠蔽するために親しむらしい。

7  
8 「その脚本の中に有名な句がある。Pity 's akin to loveという句だが……」  
9 (夏目漱石『三四郎』四)

10  
11 広田の発言。「そ」は「サザーンという人」(『三四郎』四)だ。「脚本」の題は『オルノー  
12 コ』という。広田は「有名な句」を翻訳できない。与次郎は、この「句」を「可哀想だた惚  
13 れたって事よ」(『三四郎』四)と訳す。広田は「不可ん、不可ん、下劣の極だ」(『三四郎』  
14 四)と評する。ところが、野々宮は、与次郎訳を「なるほど旨い訳だ」(『三四郎』四)と評  
15 する。なお、おかしなことに、三四郎は、これを「pity 's love」(『三四郎』六)と間違  
16 って記憶する。わけがわからない。

17 安達祐美の名台詞、「同情するなら金をくれ」(『家なき子』日本テレビ)ではどうか。

18  
19 「あの女は自分の金があるのかい」  
20 (夏目漱石『三四郎』八)

21  
22 「自分の金がある」の隠蔽された意味は、〈性的に自立している〉だ。  
23 この「有名な句」の和訳は「《ことわざ》かわいそうとは惚れたの始まり」(『ランダムハ  
24 ウス英和大辞典』「pity」)で決まりのはずだ。

25  
26 これは例の『三四郎』の“Pity 's akin to love”……、何と訳しましたっけ、「可  
27 哀想だた惚れたって事よ」。

28 (村上春樹・柴田元幸『翻訳夜話』における村上発言)

29  
30 『『三四郎』の〈翻訳〉——不可能性の体験——』(佐々木亜希子)参照。

31  
32 ヴァイオラ お気の毒に存じます。  
33 オリヴィア というのは恋への一歩ね。  
34 ヴァイオラ いいえ、残念ながら違います。敵を気の毒に思うことすら、ままたることで  
35 ございます。

36 (ウィリアム・シェイクスピア『十二夜』第三幕第一場)

37  
38 〈三四郎は美禰子の「敵」だ〉という隠蔽された物語がある。この物語を合理的に表現し  
39 ようとすると、〈三四郎は「敵」を恐れる〉と〈三四郎は「敵」に愛されたがる〉の二種に  
40 分裂してしまう。作者は物語の分裂を隠蔽することによって深遠に見せかけている。

41 作者の期待する訳は、〈同情は愛情に偽装した「厭味」(『三四郎』七)か〉などだろう。  
42 被愛願望は防衛の一種だ。ただし、三四郎にその自覚はない。作者にもなからう。

43  
44  
45  
46  
47

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5200 「三つの世界」  
3 5250 「ピチーズ アキン ツー ラヴ」  
4 5252 「失われたる人の子」

5  
6 美禰子にとって、三四郎は「敵」だったか。

7  
8 客と遊女が互いを呼ぶ称。

9 (『広辞苑』「敵」)

10  
11 美禰子と三四郎は、互いに〈自分を愛させよう〉と競り合っていた。ただし、三四郎にそ  
12 の自覚はなかったらしい。自覚していたら、次のように語られていたろう。

13  
14 女は顔を上げた。蒼白き頬の締れるに、薄き化粧をほのかに浮かせるは、一重の底に、  
15 余れる何物かを感せるが如く、感せるものを見極わめんとあせる男は悉く虜となる。  
16 男は眩げに半ば口元を動かした。口の居住の崩るる時、この人の意志は既に相手の餌食  
17 とならねばならぬ。下唇のわざとらしく色めいて、然も判然と口を切らぬ瞬間に、切り  
18 付けられたものは、必ず受け損なう。

19 女は唯隼の空を搏つが如くちらと眸を動かしたのみである。男はにやにやと笑った。  
20 勝負は既に付いた。舌を脰頭に飛ばして、泡吹く蟹と、烏鷺を争うは策の尤も拙なきもの  
21 である。風励鼓行して、已むなく城下の誓をなさしむるは策の尤も凡なるものである。  
22 蜜を含んで針を吹き、酒を強いて毒を盛るは策の未だ至らざるものである。最上の戦に  
23 は一語をも交うる事を許さぬ。拈華の一撈は、ここを去る八千里ならざるも、ついに不言  
24 にして又不語である。只躊躇する事利那なるに、虚をうつ悪魔は、思う坪に迷と書き、  
25 惑と書き、失われたる人の子、と書いて、すわと云う間に引き上げる。下界万丈の鬼火  
26 に、腥さき青燐を筆の穂に吹いて、会釈もなく描き出せる文字は、白髪をたわしにして  
27 洗っても容易くは消えぬ。笑ったが最後、男はこの笑を引き戻す訳には行かない。

28 (夏目漱石『虞美人草』二)

29  
30 「女」は藤尾。「蒼白き」原因は不明。「何物か」は被愛願望らしい。「感せるが如く」は  
31 〈「感せる」を仄めかす「が如く」〉の不当な略だ。さもなければ、「感せるものを見極わめ  
32 ん」とするのは徒労になる。「あせる男は悉く」とあるが、次の文の「男」つまり小野以  
33 外に「あせる男」は登場しない。藤尾こそが〈「あせる」女〉だ。ただし、彼女は男漁りを  
34 しない。どうやって、小野という「男」一人に絞り込んだのか。母親の指示か。

35 「戦」とは、男女が互いに相手の愛を奪いあう競争だ。〈相手を愛さずに自分を愛させ  
36 る〉という「戦」が近代的恋愛と誤解されていたらしい。「ここを去る八千里ならざるも」  
37 は〈「ここを去ること八千里」なるインド「ならざる」ここで「も」〉の略。

38 「虚をうつ」は〈「虚を」つく〉と〈不意を「うつ」〉の混交か。「悪魔」とは、藤尾のこ  
39 と。「思う坪」の「坪」は〈壺〉が正しい。これは丁半博打の壺だ。「迷と書き、惑と書き」  
40 したら〈迷惑〉になりそう。「失われたる人の子」は〈lost child〉の直訳らしいが、意味  
41 不明。「迷える子」(『三四郎』五)の前触れだろう。

42 語り手は、〈愛されるための「戦」〉に関する無知を美文によって隠蔽している。

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 2 0 0 「三つの世界」  
3 5 2 5 0 「ピチーズ アキン ツー ラヴ」  
4 5 2 5 3 「露悪家」

5  
6 美禰子は、結婚前にアバンチュールを楽しみたかったみたいだ。

7  
8 —昔の偽善家はね、何でも人に善く思われたいが先に立つんでしょう。ところがその  
9 反対で、人の感触を害する為めに、わざわざ偽善をやる。横から見ても縦から見ても、相  
10 手には偽善としか思われなように仕向けて行く。相手は無論厭な心持がする。そこで本人  
11 の目的は達せられる。偽善を偽善そのまま先方に通用させ様とする正直な所が露悪家  
12 の特色で、しかも表面上の行為言語は飽までも善に違いないから、——そら、二位一体と  
13 いう様なことになる。

14 (夏目漱石『三四郎』七)

15  
16 語っているのは、広田。

17 「善く思われたい」は彼愛願望。

18 「露悪家」は、広田が「即席に作った言葉」(『三四郎』七)だ。広田は「露悪家」の具体  
19 例らしいのを何人か挙げているが、私には納得できない。静母子の「好意らしく見せる積り」  
20 (下十六)は「露悪」のことだろう。

21 「二位一体」は〈三位一体〉のもじりだろうが、意味不明。「その理解には教会によって  
22 相違がある」(『マイペディア』「三位一体」)とのこと。「そら」と促されても、無学な私に  
23 は対応できない。広田は胡散臭いやつだ。〈表裏一体〉では駄目なのか。

24 困ったことに、「露悪」は〈偽悪〉と同じ意味のように誤解されている。

25  
26 悪いところをわざとさらけ出すこと。

27 \*三四郎(1908)〈夏目漱石〉七「美事な形式を剥ぐと大抵は露悪(ロアク)になるの  
28 は知れ切ってる」

29 (『日本国語大辞典』「露悪」)

30  
31 大間違い。偽悪者とは、目立つために憎まれ口を叩くしかない能のないチンピラだ。「露  
32 悪」の「悪いところ」とは〈偽善〉だ。つまり、「露悪」とは〈偽善者ぶること〉だ。

33 私も即席で〈露善家〉という言葉を作ってみよう。

34  
35 昔の偽悪家はね、何でも人に悪く思われたいが先に立つんでしょう。ところがその反対で、  
36 人の感触を擽るために、わざわざ偽悪をやる。横から見ても縦から見ても、相手には偽悪と  
37 しか思われなように仕向けていく。相手は無論善い心持がする。そこで本人の目的は達せ  
38 られる。偽悪を偽悪そのまま先方に通用させようとする正直な所が露善家の特色で、しか  
39 も表面上の行為言語はあくまでも悪に違いないから(以下、略)

40  
41 広田が「露悪家」を嫌うのは、自分が露善家だからだ。露善家というのは、毒蝮三太夫、  
42 ビートたけし、綾小路きみまろあたりの鬱陶しい連中だ。冗談半分、本気も半分。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぽいのが好き  
3 5310 男色文化  
4 5311 「友愛の敵」  
5

6 広田の考える「ピチーズ アキン ツー ラヴ」の意味は〈女が男に暗示する恋情はぶ  
7 りっこだから注意せよ〉いったものかもしれない。だが、その場合、作者がこうした意味を  
8 文芸的に表現しない理由が不明だ。

9  
10 東風君と寒月君はヴァイオリンの隠れ家についてかくの如く問答をしているうちに、  
11 主人と迷亭君も何かしきりに話している。  
12 「こりゃ何と読むのだい」と主人が聞く。  
13 「どれ」  
14 「この二行さ」

15 (夏目漱石『吾輩は猫である』十一)

16  
17 「ヴァイオリン」は〈女体〉の象徴。東風と寒月は、異性に対する興味の「隠れ家」つま  
18 り性欲の隠蔽の方法について、暗に議論をしているらしい。「うちに」は変。

19 一方、苦沙弥と迷亭は「問答」を止めさせたがっているようだ。

20 「この二行」の意味は「女子とは何ぞ。友愛の敵にあらずや」(『吾輩は猫である』新潮文  
21 庫「注解」というものだが、これは本文に記されていない。その理由は不明。

22 Nの小説では、作者が男女の性愛に関する無知を隠蔽しようとして、奇怪なことを試みて  
23 いる。その際、ゲイを隠れ蓑に用いることがある。

24  
25 いま私は、同性愛の対象選択にみちびく新しいメカニズムをしめすことができる。もっ  
26 とも、極端にあらわでひたむきな同性愛が形成されるときにこのメカニズムの役割がど  
27 の程度に大きいものをいうことはできないが。幼児に母コンプレックスから競争者に  
28 ——多くは兄にたいして——強い嫉妬の興奮を現わした多数の例を観察し注目した。そ  
29 れらの例では、この嫉妬は同胞にたいする強い敵意と攻撃的態度をみちびき、その死を願  
30 うまでにたかまったが、そのまま発展しつづけることはなかった。教育の影響や、この興  
31 奮が無力になってとどまるという事情もあって、それは抑圧されるようになり、ある感情  
32 の転回が起こって、その結果、幼児の競争者はこんどは最初の同性愛の対象になった。

33 (ジグムント・フロイト『嫉妬、パラノイア、同性愛に関する二、三の神経症的機制につ  
34 いて』C)

35  
36 この「メカニズム」はNの小説の隠蔽された世界を思わせる。

37  
38 「とうとう古つづらの中へ隠しました。このつづらは国を出る時御祖母さんが<sup>せんべつ</sup>銭別に  
39 くれたものですが、何でも御祖母さんが嫁に来る時持って来たものだそうです」

40 (夏目漱石『吾輩は猫である』十一)

41  
42 「隠しました」は〈「ヴァイオリン」を「隠しました」〉の略。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぼういのが好き  
3 5310 男色文化  
4 5312 ソドミー

5  
6 三四郎の夢想する「第二の世界」の本質は同性愛的なものだ。

7  
8 これまで、三角関係の行方や主人公の自己認識と狂気という側面で語られてきた『それ  
9 から』や『門』、『行人』、『こころ』の作品世界は同性愛という別な側面からもアプローチ  
10 することができる。『それから』以降の漱石作品に共通する三角関係や女性不信、自己認  
11 識の堂々巡り、孤独、狂気といったテーマは同性愛の問題と深く結びついているように思  
12 えてならない。また、『それから』以降の小説を相互に関連させるテーマが個々の作品の  
13 内部で自己完結しない理由も、何かを隠蔽しているからだと考えたい。まさに同性愛の問題  
14 が隠されているのである。

15 (島田雅彦『漱石を書く』)

16  
17 「自己完結しない」のではない。逆だ。自己完結している。だから、意味不明なのだ。

18  
19 知能や性格が遺伝しないなら、性的指向同様だろう。同性愛は親の「歪んだ」子育てや  
20 幼少期の「異常な」友だち関係によって生じた病理で、本人の「努力」で克服できること  
21 になる。これはいうまでもなく、同性愛を「神への冒瀆」とする宗教原理主義者たちの主  
22 張と同じだ。遺伝率ゼロの理想社会は、同性愛者を徹底的に差別する世界になるろう。

23 もちろん「リベラル」なひとは、こうした批判に耳を貸さないだろう。彼らは、「知能  
24 や精神疾患、犯罪は遺伝しないが、同性愛は生得的だ」というにちがいない。なぜなら科  
25 学的に正しいかどうかには関係なく、すべては「政治的に正しい」べきだから。これがP  
26 C (Political Correctness / 政治的正しさ) で1970年代以降、アメリカのアカデミ  
27 ズムでは「科学」と「政治」のどちらを取るかが大論争になった。——日本のアカデミ  
28 ズムではまったく話題にならなかったが。

29 (橘玲『もっと言ってはいけない』)

30  
31 Nは両性愛者だったのかもしれない。だが、そんな詮索は不要だろう。

32  
33 かう云ふ風に 自分の周囲には男色の空気が非常に濃厚であった 殊に一級上の若林  
34 と云ふ美少年に 自分ははげしく恋してゐた

35 (芥川龍之介『VITA SEXUALIS』)

36  
37 題名を見ると『キタ・セクスアリス』(森鷗外)の模倣のようだ。

38  
39 自分自身の事実には多少の粉飾を加へるのが前の VITA SEXUALIS と違つてゐる点である  
40 (芥川龍之介『SODOMY の発達 (仮)』)

41  
42 芥川は同性愛者だったことがあるらしい。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 3 0 0 B L ぽいのが好き  
3 5 3 1 0 男色文化  
4 5 3 1 3 『人を恋ふる歌』

5  
6 女子は、男子にとって「友愛の敵」だった。

7  
8 恋の命をたづぬれば  
9 名を惜<sup>ママ</sup>むかなをとこゆゑ  
10 友のなさをたづぬれば  
11 義のあるところ火をも踏む

12 (与謝野鉄幹『人を恋ふる歌』)

13  
14 初出の題は『友を恋ふる歌』だそうだ。

15  
16 自分はそれまでに美しい男の子を私<sup>ひそ</sup>かに恋したことがあった。しかし、女を恋しく思っ  
17 たことはなかった。

18 (武者小路実篤『初恋』)

19  
20 自慢？

21  
22 ボーイズラブはその後、幕府の肅清で江戸後期に衰退するものの、明治維新でボーイズ  
23 ラブ大国である薩摩(\*)が天下を取ったことで復活、進化を遂げ、日本では完全な「ボ  
24 ーイズラブ=友情文明」が完成するのです。

25 特に男子学生の間では、

26  
27 女性好き=軟派  
28 ボーイズラブ=硬派

29  
30 と名づけ、ボーイズラブは女性とのセックスより素晴らしく、きわめて高尚なものであ  
31 るという論調が蔓延したのです。

32 (ジョージ・ポットマン『ジョージ・ポットマンの平成史』)

33  
34 『につぼん！ 歴史鑑定』「武将が愛した美少年」(TBS) 参照。

35  
36 翻って、漱石的世界におけるこうしたホモソーシャル(同性社会的)な人間関係は、作  
37 品世界全体を貫く、看過できない特徴でもあった。危機的時代にあつての、漱石によるこ  
38 うした「男同士の絆」の強調は、帝国日本の自立拡大、そのための男性中心社会の形成、  
39 引いてはコロニアリズム(植民地主義)の言説とも無縁ではなかった。

40 (高橋秀次『文学者たちの大逆事件と韓国併合』「第二章 危機の時代の夏目漱石」)

41  
42 「第二の世界」では、N式「個人主義」と国家主義が混交している。怪しい。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぽいのが好き  
3 5310 男色文化  
4 5314 『男色大鑑』

5  
6 とにかく、『男色大鑑』（井原西鶴）を読んでからだ。  
7

8 少なくとも元禄期までの歌舞伎界においては若女<sup>わかおんな</sup>方・若衆など、若くて美貌の歌舞伎  
9 若衆は、早朝から夕刻までは舞台を勤め、夜は茶屋で客の求めに応じて男色の相手をする、  
10 というのがしきたりであった。そういう職業的男色に対して、武家社会は戦国の余風とし  
11 て男色をたしなみ、しかも武士道における義理を男色のモラルとし、衆道（若衆道）と称  
12 するに至った。

13 (暉峻康隆『男色大鑑』解説)

14  
15 「男心に男が惚れて」（矢島龍児作詞・菊池博作曲『名月赤城山』）って知らないかな？  
16

17 そのかたわら美童を愛することも仕事の一つだった。

18 「女色に溺るるは怯懦に陥る。男色は忠臣を作るに利あり」

19 と、称した。綱吉は“人づくり”のために衆道（男色）を行なったことになっている。

20 綱吉にとって随一の忠臣・柳沢吉保はまだ館林時代に十七歳にして小姓組番衆となり、  
21 綱吉の閨のトギを勤めたが、その技拔群であったところから江戸城中へついていき、  
22 小納戸役から累進して松平姓まで許され、大老にまで昇っている。

23 (村松駿吉『話のタネ本日本史』「徳川綱吉」)

24  
25 「鎌倉・室町時代頃、貴人の側にはべって、男色の対象となった少年」（『日本国語大事典』  
26 「若気」）は〈にやける〉の語源。

27 『学生時代』（作詞・作曲：平岡精二）の主題は少女小説的レズビアンだ。

28  
29 ぼくら 離れ離れになろうとも

30 クラス仲間は いつまでも

31 (作詞・丘灯至夫：作曲・遠藤実『高校三年生』)

32  
33 「ぼくら」はゲイのようだ。しかし、作者は男同士の友愛に偽装して、男女の恋愛を暗示  
34 している。「ぼくら」には女生徒も含まれる。

35  
36 鼓を伴奏楽器とし、水干（すいかん）・立烏帽子（たてえぼし）を着し白鞘巻（しろさ  
37 やまき）を差して舞ったことから「男舞」と呼ばれ、女性の男装姿という点、物狂いの芸  
38 能であった点に興味があったと考えられる。寺院では女装姿の児（ちご）が舞ったが、こ  
39 れは女人禁制の寺院の中で僧侶の賞翫（しょうがん）に供されたものである。

40 (『日本歴史大事典』「白拍子」松尾恒一)

41  
42 もう、わけわかんね。  
43  
44  
45  
46  
47

- 1 5000 一も二もない『三四郎』
- 2 5300 BLぽいのが好き
- 3 5320 男組
- 4 5321 東西のゲイ

5  
6 日本の同性愛に関する伝統について、同性愛者を含め、二十一世紀の多くの日本人は無知らしい。だが、日本人はこの伝統に縛られている。その自覚がないだけだ。

7  
8  
9 同性愛は古今東西を問わず、あらゆる文化圏や民族集団にみいだされるが、その位置づけは時代や地域によって大きく異なる。

10 ユダヤーキリスト教的価値観のなかでは、生殖を伴わない性は罪悪としてとらえられ、同性愛もその中に含まれた。近代国家の出現により教会の権威が失墜するに従って、同性愛に対する宗教的嫌悪は世俗法に引き継がれ、同性愛者は死刑を含む過酷な処罰を受けた。

11  
12  
13  
14  
15 19世紀後半に同性愛の医学的研究が始まった。これは当時同性愛を刑法上の犯罪としていたドイツにおいて、同性愛者の精神鑑定が精神科医に委託されたことによる。フロイトによる精神分析学の確立により、同性愛はもっぱらその枠内で語られるようになった。フロイト自身は、同性愛は病気に分類されるものではないことを明言しているが、その後の分析家は同性愛を疾患としてとらえ、さまざまな病理モデルを提出した。

16  
17  
18  
19  
20 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「同性愛」)

21  
22 「ユダヤーキリスト教的価値観」と無縁だった日本には、〈男色〉という文化がある。

23  
24 日本では仏教渡来以後女犯を禁じられた僧院で始まったらしく、室町以後稚児(ちご)  
25 (喝食(かつしき))を愛する風が盛んとなり、戦国以降は尚武の気風から少年武士が男  
26 色の対象となった。江戸前期にも男色は流行し、若衆(わかしゅ)歌舞伎の発展に伴って陰間  
27 (かげま)も現れた。

28 (『百科事典マイペディア』「なんしょく【男色】」)

29  
30 「仏教渡来以後」は伝説だろう。ちなみに、「神社・寺院などの祭礼や法会に、天童に扮  
31 した稚児が練り歩くこと」(『広辞苑』「稚児行道」)というのがある。

32 日本男子は、基本的に同性愛者だ。男は男組から、なかなか、抜けられない。

33  
34 若者組の秩序は個人の能力や出自、財産などとは関係なく、ただ年齢と経験による序列を  
35 もって保持され、規律を破り、秩序を乱した者には制裁が加えられた。

36 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「若者組」竹田旦)

37  
38 Sの「罪」は、「若者組の秩序」を乱したこともかもしれない。

39 ちなみに、『トーマの心臓』(萩尾望都)などのいわゆるボーイズ・ラブものは、男色文化  
40 に属するのではなく、吉屋信子の少女小説などの変形だろう。

41 男色と女性蔑視は一体になっている。三輪明宏は許容されてきたが、相良直美は排除され  
42 た。『ガラスの城』(わたなべまさこ)では、レズが姉妹愛に偽装されている。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 3 0 0 B L ぽいのが好き  
3 5 3 2 0 男組  
4 5 3 2 2 男性恐怖

5  
6 西洋かぶれは〈L G B T差別者＝ウヨク〉と誤解している。辞書などに記載されている程  
7 度の知識もなしに人権云々を口にするのは、臭いものに蓋と同じ。

8  
9 陰間茶屋は天保（てんぽう）の改革で消滅するが、男色の風はなくなり、明治の学生や  
10 軍隊、また占領軍の兵士や復員兵によって新たな展開を示し、ホモセクシャルとして今日  
11 では広く認知されつつある。

12 （『日本歴史大事典』「なんしょく【男色】」鈴木章生）

13  
14 ゲイ差別を無知の所産のように言いたがる人は、男の男性恐怖について無知なのだ。

15  
16 エジプトの去勢奴隷たちは後宮の親衛隊士や、妻妾のオダリスク（閨房女）の奴隷とし  
17 て仕え、また王国貴族たちのベッドの性的奴隷となった。すなわちエクソレテとなった。  
18 鶏姦・フェラチオの奉仕者となり、つねに女装し、化粧までしていたという。

19 （福田和彦『世界性風俗じてん（上）』「古代エジプトの宦官たち」）

20  
21 「エクソレテ」は「男色の受動者のこと」（『世界性風俗じてん（上）』）だそうだ。

22  
23 オッパイの工事のあと、すぐに取りかかったのがタマ抜きでしてね。男と寝るとみんな  
24 すぐアソコに手を入れてきてチンチン握るとびっくり顔で、まだやってないのか、とちょ  
25 っと残念そうにいうのですね。

26 （いその・えいたろう『性女伝』「性転換ニューハーフの女讃歌」）

27  
28 この「タマ抜き」体験者は女になりたかったわけではない。ただし、この人は、ゲイでは  
29 なく、トランス・ジェンダーだったらしく、結果的には満足できたそうだ。後悔する人は少  
30 くないようだ。

31 「受動者」でありたくない人はどうするのか。

32  
33 「性の多様性」という言葉とともに社会に認知され始めたL G B Tですが、その言葉とは  
34 裏腹にゲイ・バイセクシュアル男性やゲイコミュニティにおいては、多様性が尊重されて  
35 いるとは残念ながら言えません。差別を恐れ本当の自分を隠し続け、ようやく<sup>たど</sup>辿り着いた  
36 本当の自分を出せる場所で当事者を待っていたのは、差別される者が自分より下を作っ  
37 て差別するという悲しい現実でした。

38 （牧園祐也『自分の性と向き合いはじめた、あなたへ』\*）

39  
40 私が警戒しているのは、性別のみならず、あらゆる場面で「下」を作りたがる傾向の男ど  
41 もだ。男は狼なのだ、女にとっても、男にとっても、子どもにとっても、S O S !  
42 中国の不本意な「下」について『さらば、わが愛／霸王別姫』（陳凱歌監督）参照。

43  
44 \* 『「こころの科学」HUMAN MIND SPECIAL ISSUE 2017 LGBT のひろば』所  
45 収。

46 （付記）フリードリッヒ・カルル・フォルベルグ『西洋古典好色文学入門』「第二章 男  
47 色について」参照。『ショーシャンクの空に』（ダラボン監督）参照。

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぽいのが好き  
3 5320 男組  
4 5323 『キタ・セクスアリス』

5  
6 私が批判しているのは、ゲイではない。男組だ。

7  
8 児島は生息子である。彼の性欲的生活は零である。

9 古賀は不断酒を飲んでぐうぐう寝てしまう。しかし月に一度位荒日がある。そういう日  
10 には、己は今夜は暴れるから、君はおとなしくして寝ろと云い置いて、廊下を踏み鳴らし  
11 て出て行く。誰かの部屋の外から声を掛けるのに、戸を閉めて寝ていると、拳骨で戸を打  
12 ち破ることもある。下の級の安達という美少年の処なぞへ這入り込むのは、そういう晩で  
13 であろう。

14 (森鷗外『キタ・セクスアリス』)

15  
16 「生息子」は〈生娘〉の対語。

17 主人公の金井は、古賀と児島とで「軟派」をいじめるために「三角同盟」(『キタ・セクス  
18 アリス』)を結ぶ。ゲイは、古賀だけ。私が批判している男組の一例がこの「三角同盟」だ。  
19 男組には異性愛者や性的無関心派などが含まれる。ゲイを含まないこともありそうだ。

20 安達は古賀にレイプされていた。彼は、同性愛者ではなかったようだ。

21  
22 奥山に小屋掛けをして興行している女の軽業師かるわざしがあって、その情夫が安達の末路であ  
23 ったそうだ。

24 (森鷗外『キタ・セクスアリス』)

25  
26 〈安達の自己責任〉みたいな口調だろう。

27 安達は、古賀にレイプされ続けた記憶を消したくて女色に耽り、消耗していったのではな  
28 かりょうか。そうした想像が、作者にはまったくできないらしい。

29 語り手の金井は異性愛者だが、ゲイに甘い。金井らが「美少年」だったら、彼らも安達と  
30 同じ目に遭っていたのかもしれない。金井の反省が足りない。

31  
32 若衆はまた陰間(かげま)とともに、衆道における江戸初期からの呼び名である。男色  
33 関係で若衆は特に17、8歳までの弟分をさし、兄分の念者とは義理を重視する間柄であ  
34 った。

35 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「若衆 わかしゅう」稲垣史生)

36  
37 「親の血をひく兄弟よりも かたいちぎりの義兄弟」(星野哲郎作詞・北原じゅん作曲『兄  
38 弟仁義』)と歌われる。義兄弟の場合、性行為は伴わないのだろう。だが、男女交際を罪惡  
39 視するのなら、男組の一種だ。

40 SとKは、義兄弟のような間柄だったのか。違う。Sは、ボッチであることを隠蔽するた  
41 めに、Kを利用していただけだ。Kはボッチに耐えようとしたが、堪えられなかった。男組以  
42 前だ。そういう怪しい関係の男たちが、Nの小説のほとんどに登場する。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぽいのが好き  
3 5330 硬派と稚児  
4 5331 ゲイ・バー

5  
6 1954年、チューリングは「同性愛の「治療」を強いられて服毒自殺をとげた」（『ブリタ  
7 ニカ』「チューリング」）という。『エニグマ』（アプテッド監督）参照。

8 欧米の映画で仲のいい男二人が出てくると、〈二人はゲイではない〉という暗示がなされ  
9 る。『最高の人生の見つけ方』（ライナー監督）参照。日本では、男組の成員は「義理と人情  
10 を秤にかけりゃ 義理が重たい男の世界」（矢野亮・水城一狼作詞・水城一狼作曲『唐獅子  
11 牡丹』または水城一狼・佐伯清作詞・菊池俊輔作曲）と、偉そうに歌う。

12  
13 日本にゲイバーがどのくらいあるのか、残念ながら、はっきりわからない。東京都内で  
14 二百軒ぐらいたらうか。ホモ人口の増加、それになまじっかなバーよりもずっときれいで  
15 やさしい女性がいるので、そのテの趣味のない人たちにも好かれて、どの店も盛況のよう  
16 である。

17 もともとホモは日本では珍しいことではなく、長い間、けっこう明るくたのしんできた  
18 ことである。これがヘンタイの最たるもののように白眼視されたのは、明治時代になって  
19 からである。ホモたちはネクラにならざるをえなかった。そして今日、ようやく復権しつ  
20 つかある。ケッコウなことである。

21 （淡野史良『江戸あへあへ草紙』「尻でつかむ一生の安楽 江戸のホモ」）

22  
23 ちなみに、〈ジェンダー〉という言葉を用いて文芸作品などについて論じる人がいる。私  
24 は、そんな人を私の読者として想定しない。

25 ● 「セックス」と「ジェンダー」の厳密な区別は難しい

26 27 しかし、より深く考えてみると、ジェンダーとセックスとの境界線をどこに引くか、何  
28 がジェンダーに含まれ、何がセックスに含まれるかという認識そのものも絶対的なもの  
29 ではなく、時代や地域、あるいは学問的立場によって変化する。そこで現在では、性別に  
30 関する知識や考え方全体を指して「ジェンダー」と呼ぶ用法が広まってきた。この観点か  
31 らは、生物学的な性差とみなされる要素だけを特別扱いしてセックスという別の語を割  
32 り振る必要はなからうということになる。それもまた、私達の社会が作りだしたものな  
33 だから。

34 （加藤秀一・石田仁・海老原暁子『ジェンダー』）

35  
36 この説明そのものが「難しい」のだ。意味不明。

37  
38 もっとたくさんの女性がエステやネイルサロン感覚でレズ風俗を利用するようになったら  
39 きっと楽しい社会になるはず！

40 （レズっ娘クラブ代表 御坊\*）

41  
42 性別を問わず、「風俗」のサービスを性感マッサージとして認めてはどうか。

43  
44 \* 『レズ風俗アンソロジー』（秋葉悠司・梅澤佳奈子編）帯紙より。

45  
46  
47  
48

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぼいのが好き  
3 5330 硬派と稚児  
4 5332 『稚児之草子』

5  
6 日本の封建時代の武士や僧侶の間では、ゲイが主流だった。

7  
8 詞書で見る限り、別に秘伝書でも指南書でもなく、当時の寺院での稚児と僧侶との交情  
9 のありさまを、それも小咄風に五話綴ったものである。その最初の書出しは、「仁和寺の  
10 開田の程にや、世おぼえいみじく聞え給貴僧おはしましけり。御歳長らるまゝに、三蜜  
11 の行法の薫修積りて、験徳ならびなくおはしけれども、なをもこの事をすて給はざりけり」  
12 とて、修行を積んだ高僧にしてもこの事（若衆道、男色）ばかりは捨てられないといっ  
13 ている。

14 この仁和寺の僧と稚児との関係は、当時評判であったらしく、『徒然草』（元徳二年、一  
15 三三〇以降）の五十四段にも「(仁和寺の)御室にいみじき児のありけるを、いかで誘ひ  
16 出して遊ばんと企む法師どもありて」などと書かれている。それより以前、『古今著聞集』  
17 (建長六年、一二五四)には、鳥羽院の第五皇子で、母が待賢門院であった覚性法親王  
18 (一一二九～一一六九＝仁和寺入道)に、千手という寵童がいたことを伝えている。「み  
19 めよく心ざまゆふなりけり。笛をふき、今様などうたひければ、御いとをしみ甚しかりけ  
20 る」ゆえ、「たへかねさせ給て、千手をいだかせ給て御寝所に入御ありけり」とのこと  
21 ある。

22 こうした時代背景のもとで、『稚児之草子』も生まれたわけで、その後の稚児物・男色  
23 物の文章や図様やらの著しい流行のさきがけとなった。

24 (白倉敬彦「日本最古の男色絵巻 稚児之草子」\*)

25  
26 明治の硬派にとって、稚児や若衆などは自分よりも一段低い存在だったらしい。

27  
28 私が中学生だった頃、未だ明治初年頃に地方の上京学生によってもたらされた少年趣  
29 味が残っていた。その時分、耳にしたのは、その大旨が伝説か、受け売りをしなかったよ  
30 うである。南方翁も、「攻玉塾のエピソード」として紹介しているが、それは学生が余所  
31 の寮か寄宿舎へ遊びに行つて「何をごちそうしようか。焼芋がいいか、少年がいいか」と  
32 尋ねられ、「少年を」と所望すると、早速、運動場から適当な下級生が引張つてこられて、  
33 客といっしょに布団蒸しにされる。暫く布団の下でござござがあつて、客は「どうもごち  
34 そう様」と挨拶して帰る例だと云うのだが、少年側に下地がない限り、そんな早業が出来  
35 たかどうか甚だ疑問である。しかしこの種の話は何処の中学校でも語り伝えられていた  
36 のである。「キミとボクとはやっこらやのや、硯の墨よ喃稚児さん、為れば為るほど濃ゆ  
37 くなる」だの、「好いた二世さんに謎かけられて脱がにゃなるまい半ズボン」だの、これ  
38 らの例に洩れない。

39 (稲垣足穂『男色考余談』)

40  
41 マゾの「下地」も必要だろう。  
42 こういう話をもっと知りたい人は、〈ストーム〉や〈ジンジロゲ〉で検索しなさい。

43  
44 \*白倉敬彦編『別冊太陽 肉筆春画』所収。

45  
46

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぼういのが好き  
3 5330 硬派と稚児  
4 5333 『幸せのポートレート』

5  
6 軽薄才子は、差別者の烙印を捺されるのが恐ろしいからか、弱者に同情してみせる。だが、  
7 そんな偽善的な態度は事態をかえって混乱させてしまう。

8 『幸せのポートレート』(ベズーチャ監督)では、〈息子をゲイに育てた〉と自慢する母親  
9 が登場する。息子を差別から守るための冗談のようだが、実は母親としての責任を問われま  
10 いとするための防衛だ。彼女のたちの悪い冗談のせいで、同性愛者ではない子どもたちは自  
11 分の生き方を選べなくなった。当のゲイの息子さえ、自信が持てないで育った。この母には、  
12 息子とは関係なく、虚勢を張らねばならない理由が別にあった。この一家は、ゲイ不信のコ  
13 ミュ症の女性をいじめる。〈多様性〉という言葉は表現の自由を奪うために用いられる。

14  
15 異性愛が「正常」で、同性愛が「異常」だなどというのは、近代以降の社会が作り上げ  
16 た考え方にすぎないのです。しかも、稚児の場合、単純に同性愛とはいいきれない複雑な  
17 問題を抱えているのです。「愛は平等」という近代的な恋愛観に縛られていた人は、「愛の  
18 かたち」がさまざまあること、しかしそれは常に対等なものではなく、時には搾取者と被  
19 搾取者の関係になりうるということを、心の片隅に刻んでおいて頂きたいと思います。

20 (田中貴子『性愛の日本中世』「第一章 中世の性愛と稲荷信仰」)

21  
22 「近代以降」は〈日本の「近代以降」〉のこと。

23  
24 十九世紀のイギリスにおいても、同時期のフランスと同様、そしてまたこれは古今東西、  
25 こんにちでもなお変わらないことであるが、同性愛とは社会的混合が現出するきわめつ  
26 けの場なのである。同性愛者の小世界では、被抑圧少数者の場合にしばしばみられるのと  
27 おなじように、階級の違いは殆ど考慮されない。各人は相手の身分を気にかけることなく、  
28 快楽を求めるのである。そこで、金持ちの実業家がカフェのボーイとつきあったり、売れ  
29 っ子の作家が地位の低い電報配達人と食事をしたり、大学教授が場末の不良少年と寝  
30 たり、枢要の地位にある大臣が新聞売り子と関係したりすることになるわけだ。

31 (モーリス・ルヴェ『オスカー・ワイルド裁判』\*)

32  
33 『オスカー・ワイルド』(ギルバート監督)参照。

34  
35 或る人問ふ。弥治郎兵衛・喜多八は、原何者ぞや。答へて曰く、何でもなし。弥治唯の  
36 親仁なり、喜多八これも駿州江尻の産、尻食観音の地尻にて、生まれたる因縁によりて  
37 か、旅役者、花水多羅四郎が弟子として、串童となる。されど尻癖わるく、其所に尻すは  
38 らず、尻の仕廻は、尻に帆をかけて、弥治に随ひ出奔し、俱に戯気を尽す而已。

39 (十返舎一九『東海道中膝栗毛』「累解」)

40  
41 どこまでが本気か、作者の意図はよくわからない。だが、弥治喜多を、笑いものにはして  
42 も、悪人扱いしている様子はない。

43  
44 \*ジョルジュ・デュビー他『愛とセクシュアリテの歴史』所収。

45  
46  
47

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぽいのが好き  
3 5340 潜在意識の共有  
4 5341 副次的自我

5  
6 西洋では、「男色や獣姦・少年愛など」(『広辞苑』『ソドミー』)が一緒くたにされていた。

7  
8 多くの若者たちは自分たちを同性愛者だと信じています。友人という自分の副次的自  
9 我を失った深い悲しみのなかにあるとき、彼らには鏡となるような、二重唱を歌えるよう  
10 な相手はもう誰もいません。そして彼らは自分たちが同性愛者ではないかと考えて恐ろ  
11 しくなるのです。

12 たとえばある男の子は、自分が女たらしの男性に夢中になっているために、自分を同性  
13 愛者と考えるようになるでしょう。若者たちはそういう恐れをあえて誰にも相談しませ  
14 せん。しかし作用しているのは、幼年時代に端を発した同性愛の欲動にたいする羞恥心なの  
15 です。ところでこの子どもの同性愛は、「エディプス」の衰退期に、情動の面で欠くこと  
16 のできないものです。それはちょうど、思春期にいたるまで理想化された異性愛が不可欠  
17 であると同様です。思春期になってはじめて、男の子は現実には女の子が存在することを  
18 発見するのです。女の子の場合も同じです。それまで男の子は、たとえば父親の理想化さ  
19 れたものを、最初の友だちに向けていました。彼が友だちのなかにあるものを見ていたこ  
20 とを、その友だちは示すことができるのです。そのあるものが、友だちを実際以上に見せ  
21 ていたわけです。もっとも、同性愛というわけではありませんが。

22 (フランソワーズ・ドルト『子どもの無意識』「8 思春期について」自殺のファンタ  
23 スム：理想自我は消えなければならない)

24  
25 Kは、Sの「副次的自我」だったようだ。ちなみに、〈alter ego〉には〈代役・親友・も  
26 う一人の自分〉(『ランダムハウス英和大辞典』より)という三つの意味がある。

27  
28 おまえのこと 好きだった!! でも、もう おまえとは友だちには なれないんだ  
29 っ!! おまえがいると、ほかの人と 友だちに なれないのっ!! おまえは、ぼくが作  
30 ったんだっ!!

31 (楳図かずお『ねがい』)

32  
33 「おまえ」は人形。性別は不明だが、男だろう。  
34 「ほかの人」は少女。

35  
36 僕は知りたいのです、自分がだれかを、なにかを、だれかが僕を知っているのを僕は知  
37 りたいのです。あなたの返事をほしいと思います。あなたからの手紙がくるまで、僕は  
38 つまでも待とうと思います——手紙をください。

39 アレン・ギンズバーグ  
40 (ウィリアム・パロウズ+アレン・ギンズバーグ『麻薬書簡』)

41  
42 ギンズバーグは自分をゲイだと思い込んでいたらしい。  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぼいのが好き  
3 5340 潜在意識の共有  
4 5342 「あッ悟った」

5  
6 三四郎は、広田や与次郎の稚児のような存在だった。

7  
8 詳しいことは他の機会にして、こうして祈禱には行者と験者とがあり、若い験者は行者  
9 と同性愛関係があって、それでないと祈禱がうまく進まぬという。女の祈禱師、つまり先  
10 生は若い男の助教を連れてがるが、これも同じく性的関係が緊密でないと、うまいこと祈  
11 禱が進まぬといい、いわゆる阿吽の息を合わせるには確かに理由もあった。

12 (赤松啓介『宗教と性の民俗学』「I 民間信仰と性の民俗」)

13  
14 美禰子は、広田と同様、「先生」であり、三四郎は彼女の「助教」候補かもしれない。そ  
15 う思うと、「禰」の字が怪しげに見えてくる。美禰子のような紅一点は、男にとっての異性  
16 として集団に参加しているのではなく、一種の男であり、男たちの同僚なのだ。『ウルトラ  
17 マン』(TBS)のフジ隊員はマニッシュで、「マドンナ」のようではない。

18 SはKの稚児だったのだろう。見下されたSは「復讐」の機会を伺っていたようだ。  
19 学生時代のNは稚児だったらしい。

20  
21 空の澄み切った秋日和などには、能く二人連れ立って、足の向く方へ勝手な話をしながら  
22 ら歩いて行った。そうした場合には、往来へ塀越に差し出た樹の枝から、黄色に染まった  
23 小さい葉が、風もないのに、はらはらと散る景色を能く見た。それが偶然彼の眼に触れた  
24 時、彼は「あッ悟った」と低い声で叫んだ事があった。唯秋の空に動くのを美しいと観  
25 ずるより外に能のない私には、彼の言葉が封じ込められた或秘密の符徴として怪しい響  
26 を耳に伝えるばかりであった。「悟りというものは妙なものだな」と彼はその後から平生  
27 のゆったりした調子で独言のように説明した時も、私には一口の挨拶も出来なかった。

28 (夏目漱石『硝子戸の中』九)

29  
30 「それが」何か、不明。「偶然」かどうか、Nにわかるわけがない。「偶然」から語られる  
31 時間が変わる。変だ。「彼」は「O」(『硝子戸の中』九)と呼ばれている。

32 「黄色に染まった小さい葉」から、Kの墓のある「大きな銀杏」(上五)が連想される。

33 「空に動く」は意味不明。〈Oに「能」がある〉という証拠はない。誰が「封じ込め」る  
34 のか。「秘密の符徴」は意味不明。〈「符徴として」～「伝える」〉は意味不明。「怪しい」は  
35 意味不明。「響」系の言葉は夏目語らしい。

36 「悟りというものは妙なものだな」で、何かを「説明した」ことになるのだろうか。「妙  
37 な」は意味不明。「悟り」も「勝手な話」の一種だろう。「時も」の「も」は唐突。〈説明し  
38 た〉ことに対して「挨拶」をする〉というのはいちきつは意味不明。「挨拶」は禅語か。

39 Oは、後にNを訪ねる。『ころ』のKのモデルが自分だと思ったのではないか。Nは、  
40 ことあるごとに彼を笑いものにする。親しみの表れのように語るが、「挨拶」つまり〈仕返  
41 し〉だろう。彼の死をさえ願っているようだ。彼を「雪と氷に鎖ざされた北の果に」(『硝子  
42 戸の中』十)封じ込めた。Nは自己欺瞞をしている。

43  
44  
45  
46

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』
- 2 5 3 0 0 B L ぽいのが好き
- 3 5 3 4 0 潜在意識の共有
- 4 5 3 4 3 『エンジェル・ウォーズ』

5  
6 青年Nは、友人Oが口にした「悟り」系の言葉の「怪しい響」に魅せられた。Nが弟分だ  
7 ったからだ。「悟り」はOの自分語だったはずだが、それがあ程度の効果を上げたのは、  
8 Nが弟分だったからだ。このとき、Oの自分語は睦言として成功している。

9 意味ありげなだけの自分語は、本来、母子関係や性的関係などで、睦言として容認される  
10 ものでしかない。ところが、男色文化では、肉体関係のない男同士でも、自分語が睦言とし  
11 て通じる。いや、通じたような錯覚が起きる。このとき、自分語は暴力として働いている。  
12 言葉によるイジメだ。言葉の暴力に喜んで屈服するマゾ男が弟分になる。その結果、おかし  
13 なことに、兄分までが気分を通じさせたように錯覚してしまうわけだ。

14 性的関係では、言葉によるやりとりで先立ち、〈二人の世界〉が生じる。言葉はその世界  
15 でのみ意味があるように用いられる。また、その世界を維持するために用いられる。

16 『乙女の祈り』(ジャクソン監督)では、レズビアン少女が二人きりでいると、風景が  
17 変質し、彼女たちにとって都合のいい空間が広がる。綺麗。

18 『ダイアナの選択』(パールマン監督)は、災害などの生存者が死者に対して抱く後ろめた  
19 さ、サバイバーズ・ギルトを主題としている。邦題は『ソフィーの選択』(パクラ監督)を  
20 思わせてネタバレと思われるが、もともとは続きがあったのにそれがカットされたみ  
21 たいだ。偽悪的な少女は、友人の偽善的な行為によって自分が救われたことを悟る。そして、  
22 偽善をも善と認める。その瞬間、イエスの犠牲の死を追体験する。

23 『エンジェル・ウォーズ』(スナイダー監督)では、二人の少女の潜在意識が重なる。スイ  
24 ートピーという少女は〈自分たちは精神病院で役割演技法の治療を受けている〉と思ってい  
25 る。ベイビーdollという少女は〈自分たちは妓楼でダンスを習っている〉と思っている。  
26 二人は、互いが異なる現実認識をしていることに気づかない。ところが、二人は他の少女た  
27 ちをも巻き込み、生きのびるために共闘する。

28 共闘の世界は、彼女たちの〈自分の物語〉のどちらの世界でもない。彼女たちの潜在意識  
29 が重なる異次元の戦場だ。

30

|    | 物語             | 場所 | 役割 |
|----|----------------|----|----|
| 31 |                |    |    |
| 32 | I スイートピーの物語    | 病院 | 患者 |
| 33 | II ベイビーdollの物語 | 妓楼 | 遊女 |
| 34 | III 少女たちの共闘の物語 | 戦場 | 戦士 |

35  
36 最初、Iの世界が現実のように思える。だが、次第に怪しくなる。たとえば、ここに、II  
37 の世界に属するはずの奇妙な人物が登場するからだ。この人物が実在するのなら、『エンジ  
38 ェル・ウォーズ』はファンタジーだろう。

39 IIの世界のヒロインであるベイビーdollは、ダンサーだ。彼女が踊り出すと、少女たち  
40 全員がIIIの世界にワープする。

41 IIIの世界の出来事は、IとIIに反映する。たとえば、IIIにおける戦死者は、IでもIIでも、  
42 その物語の世界にふさわしい死に方をする。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぽいのが好き  
3 5350 隠れ軟派  
4 5351 「羽二重の胴着」

5  
6 明治に、バタ臭い同性愛差別が輸入された。戦後には、バタ臭い反差別が輸入される。

7  
8 さて一方、珍娘いいなづけの許嫁ふていきょうの傳貞郷せいちよくは、生れつき正直な男で、年は十八。早くも翰林の遺風いふうにそまりまして、竜陽りゅうようにしたしむこと漆うるしのごとく膠にかわのごとしというありさまで、女色のほうは、穴の中から蛇をつつき出すようにきらうのでございます。

10  
11 (駒田信二『好色の勧め 「杏花天」の話』「前門と後庭」)

12  
13 西洋かぶれを嫌う蛮カラの学生は、ゲイを装った。

14  
15 その癖硬派たるが書生の本色で、軟派たるは多少影護うしろめたい処があるように見えていた。紺足袋小倉袴は硬派の服装であるのに、軟派もその真似をしている。只軟派は同じ服装をしていても、袖をまくることが少い。肩ママを怒らすことが少い。ステッキを持っててもステッキが細い。休日ママに外出する時なんぞは、そっと絹物を着て白足袋はを穿いたり何かする。  
18 (森鷗外『キタ・セクスアリス』)

19  
20  
21 鎌倉で、Pはどんな服装をしていたらう。Sは裸だったから、正体不明。

22  
23 私の友達に横浜あきんどの商人か何かで、宅うちは中々派出ほでに暮しているものがありました。其所へある時羽二重の胴着みんが配達で届いた事があります。すると皆ながそれを見て笑いました。その男はずは耻かしがって色々弁解しましたが、折角の胴着こうりを行李の底へ放り込んで利用しないのです。それを又大勢が寄ってたかって、わざと着せました。すると運悪くその胴着しらみに蝨しらみがたかりました。友達は丁度幸いとでも思ったのでしょう。評判の胴着をぐるぐると丸めて、散歩の出た序に、根津の大きな泥溝どぶの中へ棄すててしまいました。

28  
29 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十七)

30  
31 この「友達」はSのDだ。〈私の友だちがさあ〉の、あの〈友だち〉だね。「胴着」は〈異性愛〉の隠喩。「宅」から「届いた」それは、Sの従妹に相当する。未来の夫を愛していない。そんな「女を嫁に貰って嬉しがって」(下三十四)いたら「耻かし」い。「丁度幸い」にも、叔父の醜聞が聞こえてきた。「蝨」は醜聞。これを口実にSは従妹を「棄てて」しまう。

34  
35 硬派気取りのSに、静の母は「着物を拵こしらえろ」(下十七)と勧める。つまり、〈静にプロポーズしなさい〉と暗示したわけだ。彼は静母子と外出し、「御嬢さんの気に入るような帯か反物を買って」(下十七)与えることにする。外出は、ごっことしての婚約披露だった。静母子のままごと、青年Sの妄想、作者の虚構が混交している。

36  
37 「帯か反物」は〈結納〉の予行演習。

38  
39 婚約披露を、Sは誰かに承認されたかった。だから、SのDが「級友の一人」(下十七)に化身し、現れた。Dは、その場では声をかけない。翌々日、学校に現われ、「何時妻を迎えたのか」(下十七)と、Sをからかう。Dは、婚約を承認すると同時に非難するわけだ。

40  
41  
42  
43  
44

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぼういのが好き  
3 5350 隠れ軟派  
4 5352 「何でも話し合える中」

5  
6 与次郎の「与」は、〈与次郎は三四郎に妻を与える〉という物語の虚偽の暗示だ。三四郎  
7 は三男で、「母」が産めなかった四男の代わりもする。長男は死んだか。次男は養子にやら  
8 れたか。この長男の霊が与次郎に憑依したか。彼は、「母」を含め、女性不信だ。

9 Kは〈兄〉の音読みだが、〈KはSに静を与える〉という物語の暗示ではない。作者にす  
10 ら自覚できない願望の露呈だ。この物語に先立ち、〈Kは静を所有する〉という物語がなけ  
11 ればならないわけだが、勿論、そんな物語があっては困る。Sが困るのではなく、作者が困  
12 るのだ。作者は、創作に失敗したのではなく、自分が小説によって何をしているのか、わか  
13 らなくなってしまうのだろう。

14  
15 Kと私は何でも話し合える中<sup>マ</sup>でした。

16 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二十九)

17  
18 「何でも」は妄想的。真相は、次のどれかだろう。

19  
20 I 〈「Kと」 S 「は何でも話し合える中でした」〉

21 II 〈「Kと私は何でも話し合える中」だと、私は独り決めしていたの「でした」〉

22 III 〈「Kと私は何でも話し合える中」だと、二人で話し合っていたの「でした」〉

23  
24 本文は、Iの書き換え。原典は青年Sの〈自分の物語〉だ。この語り手Sは、神のように  
25 万能のつもりだ。幼見的。

26 Sの〈自分の物語〉がIIのように語られていたら、青年Sに反省の機会が訪れていたろう。  
27 そして、「遺書」の語り手Sは、自分の独善を反省することができたろう。

28 IIIの場合、Kが嘘をついていた。あるいは、SがKに騙されていた。そうした可能性が考  
29 えられる。彼らがゲイでなければ、早晚、殺しあうことになるはずだ。

30 「話し合える」の真相は〈話を合わせられる〉のようだ。〈語り合える〉が適当か。ただ  
31 し、〈語らえる〉というほど打ち解けた関係ではなかったようだ。

32 〈話す〉と〈語る〉は違う。〈英語を話す・話せばわかる・内緒話〉とはいっても、〈英語  
33 を語る・語ればわかる・内緒語り〉とはいわない。逆に、〈語り継ぐ・語り口・語るに落ち  
34 る〉とはいいが、〈話し継ぐ・話し口・話すに落ちる〉とはいわない。

35 〈語る〉は「(うちとけて親しげに「語る」ことから)安心させてください」(『広辞苑』「騙  
36 る」)という意味にもなる。〈語る〉が調子づく〈歌う〉になり、自分の声を自分の耳に聞  
37 かせて自己満足できる。〈歌う〉は「白状することをいう、てきや、盗人仲間の隠語」(『日  
38 本国語大辞典』「うたう」)でもある。

39 〈話し合う〉のは、相談や議論をすることであり、結論が出るものだ。結論が出なければ、  
40 話し合いは失敗したことになる。一方、〈語り合う〉のは、互いの自説を披露するだけで成  
41 り立つ。両者の自己完結的コミュニケーションに終始し、結論は出なくてもいい。

42 語り手Sは〈話す〉の意味をよく知らない。Nが知らないのだ。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5300 BLぽいのが好き  
3 5350 隠れ軟派  
4 5353 「個性の一致」は観察不能

5  
6 Nは、ゲイではないのに、ゲイのように考えていたらしい。あるいは、バイだったか。

7  
8 「先生今日は大分俳句が出来ますね」

9 「今日に限った事じゃない。いつでも腹の中で出来てるのさ。僕の俳句における造詣と  
10 云ったら、故子規子も舌を捲いて驚ろいた位のものさ」

11 「先生、子規さんとは御つき合でしたか」と正直な東風君は真率な質問をかける。

12 「なにつき合わなくっても始終無線電信で肝胆相照らしていたもんだ」と無茶苦茶を  
13 云うので、東風先生はあきれて黙ってしまった。

14 (夏目漱石『吾輩は猫である』十一)

15  
16 「俳句における造詣」は、門外漢には、「滅茶苦茶」に思える。

17  
18 個性の発展というのは個性の自由と云う意味だろう。個性の自由とおれは  
19 おれ、人は人と云う意味だろう。その芸術なんか存在出来る訳がないじゃないか。芸術が  
20 繁昌するのは芸術家と享受者の間に個性の一致があるからだろう。君がいくら新体詩家  
21 だって踏張っても、君の詩を読んで面白いと云うものが一人もなくっちゃ、君の新体詩も  
22 御気の毒だが君より外に読み手はなくなる訳だろう。鴛鴦歌をいく篇作ったって始まら  
23 ないやね。

24 (夏目漱石『吾輩は猫である』十一)

25  
26 「発展」を「自由」と、このように「意味」をすりかえていくのが、Nのスタイル。

27 「個性の一致」は観察不能で、屁理屈の類。〈小説〉は〈ノベル〉で、新奇なものだ。自  
28 分の「個性」と違う情報を求めて読む。「一致」があり過ぎたら、退屈。

29 普通の「芸術家」に「読み手」は実在しなくていい。彼らの心の中には、素敵な敵の〈聞  
30 き手〉がいるからだ。むしろ、未知の「享受者」を呼ぶために歌うのだ。

31 「鴛鴦歌」は、まだ見ぬ恋人に贈ることができる。恋人が出現したら、言葉は要らない。  
32 『ウェストサイド物語』(ワイズ+ロビンズ監督)の体育館の場面を参照。

33  
34 われわれはお互いの目の奥を見つめた。〈よく分りました〉と彼はいった。そして人々  
35 の前でわれわれは兄弟愛の口づけをした。

36 ユダヤ教徒とキリスト教徒の間に介在している状況から起った論議は、キリスト教徒  
37 とユダヤ教徒の間の連帯に変わった。この変様の中で対話は成就した。意見は解消して、  
38 事実的なものが、血肉をともなって生じたのである。

39 (マルティン・ブーバー『対話』「第一部 記述」「意見と事実」)

40  
41 Nの小説に「兄弟愛」は描かれていない。「連帯」は起きない。その理由は簡単だろう。  
42 「対話」がなされないからだ。

43  
44 (付記) 松尾剛次『[増補] 破戒と男色の仏教史』参照。

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 1 0 「<sup>ストレイ</sup>迷える子——解って？」  
4 5 4 1 1 和製英語や学生言葉

5  
6 美禰子は、三四郎に対して何事かを仄めかし続ける。私には意味不明。

7  
8 「<sup>ストレイ</sup>迷える子——解って？」

9 (夏目漱石『三四郎』五)

10  
11 美禰子が三四郎に聞いてきた。

12 話し言葉である「迷える子」に「ストレイ シープ」と振ってある。ホーミーかね。主音  
13 声と副音声を同時に流すようなものだ。ホラー映画では悪魔が二種の声で語ることがある。  
14 本文は〈美禰子は魔女だ〉という表現か。不明。

15  
16 和製英語は明治（とくに後半）からみえ（オールバック、リヤカーなど）、大正から昭  
17 和初期に大量につくられ（モダンボーイ、バックシャン）第二次大戦後、さらに増えた（イ  
18 メージアップ、コストダウン、ベッドタウン、アフターサービスなど）。これら造語の背  
19 景には造語し受容できる外国語教育の普及と英語をはじめとする外国語への憧憬（しよ  
20 うけい）がある。

21 (『日本歴史大辞典』「和製英語」米川明彦)

22  
23 「ストレイ シープ」は、和製英語ではない。だが、これは「迷える子」の英訳でもない。  
24 だから、和製英語のようなものだろう。「ストレイ シープ」は「まよえる羊」（『日本国語  
25 大辞典』「まよえる羊」と訳するのが普通だ。また、「迷える子」は〈迷ってしまった子〉な  
26 どとまったく同じ意味ではなかろう。美禰子の魂胆は不明。

27 疑うべきは三四郎の耳だろう。作者の耳でもある。パイリンガル、トリリンガルの耳だ。  
28 ただし、母語を含め、何語にも自信がない人の耳だ。言語的故郷喪失者の耳。

29 三四郎は、〈「母」の「世界」〉の方言を用いない。内言ですら、用いない。その理由は不  
30 明。また、三四郎が東京語を習得しようとする様子もない。つまり、江戸っ子と親しもうと  
31 する様子がない。地方出身の学生は、活字としての、しかも非日常的な標準語によって、交  
32 流していたろう。ただし、彼は男色文化の「第二の世界」の学生言葉を使いこなすには至っ  
33 ていない。

34 ちなみに、広田はいい年をして学生言葉が抜けきらない軽薄才子だ。異性愛の「第三の世界」  
35 の言葉は、睦言以外になかったろう。「第三の世界」の敷居が高いのは「第三の世界」  
36 の言語を習得していないせいなのだが、三四郎はそのことに気づかない。作者はどうだろう。  
37 かなり怪しいのではないか。読者も怪しいわけだ。

38 結局、「ストレイ シープ」の意味は明らかにならない。意味ありげではあるが、確かな  
39 意味はないのだ。〈「ストレイ シープ」の物語〉の原典が共有できているのなら、二人の会  
40 話にも意味がありそうに思える。だが、その原典は不明なのだ。作者は、どんな原典を暗示  
41 しているのだろう。不明。何も暗示していない可能性がある。つまり、雰囲気だけ。

42 作者は何をしているのだろう。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 1 0 「迷える子——解って？」  
4 5 4 1 2 「一種の屈辱」

5  
6 「ストレイ シープ」というカタカナ語は美禰子の自分語であり、他人には意味不明のものだ。「迷える子」も自分語だろう。二重の自分語になっているわけだ。

8  
9 美禰子は三四郎を見た。三四郎は上げかけた腰を又草の上に卸した。その時三四郎はこの女にはとても叶わない様な気が何処かでした。同時に自分の腹を見抜かれたという自覚に伴う一種の屈辱をかすかに感じた。

10  
11 「迷子」

12 女は三四郎を見たままでこの一言を繰返した。三四郎は答えなかった。

13 「迷子の英訳を知っていらして」

14 三四郎は知るとも、知らぬとも云い得ぬ程に、この問を予期していなかった。

15 「教えて上げましょうか」

16 「ええ」

17 「迷える子——解って？」

18 三四郎はこう云う場合になると挨拶に困る男である。

19  
20 (夏目漱石『三四郎』五)

21  
22 この場面は『夢十夜』『第十夜』の反復。美禰子と三四郎は道に迷い、「大きな迷子」(『三四郎』五)になっている。この展開は、でき過ぎ。彼らが別個に企み、偶然に一致したようでもあり、作者の稚拙な企画のようでもある。

23  
24 「叶わない様な気」の真意は、〈逃げ出したくても逃げ出せない「様な気」〉か。「何処かで」は意味不明。

25  
26 「腹」の中身は、〈三四郎は美禰子と二人きりになりたかった〉という物語か。「一種の屈辱」は普通の意味の「屈辱」ではない。Nの小説に一貫する隠蔽された主題だろう。

27  
28 二人は、実際、「迷子」になった。ただし、彼女がこのありふれた日本語で暗示しているのは〈「迷子」のような気分〉だろう。ところが、彼女は補足や説明を試みない。

29 「見たままで」は意味不明。

30  
31 「答えなかった」は意味不明。答える必要があるのか。あるとすれば、前の文の「繰返した」は〈答えを促すために「繰返した」〉の不当な略か。

32 「知るとも、知らぬとも云い得ぬ程に」は意味不明。知っていたのか、知らなかったのか。

33  
34 「迷子の英訳」は〈ロスト・チャイルド〉だろう。「失われた人の子」(『虞美人草』二)だ。しかし、日本語の「迷子」の場合、誰かが子を失ったのではなく、子が辿るべき道を失ったのだろう。

35 「問を予期して」は不可解。なぜ、「予期して」おかねばならないのか。

36 「教えて上げましょうか」の含意は、〈ロスト・チャイルドではありませんよ〉か。

37 「解って？」は、〈私の言いたいことがあなたに「解って」いますか「？」〉の略。

38  
39 「こう云う場合」がどういう「場合」なのか、不明。三四郎は、〈よくわかりません〉と答えない。その理由がこの後にごちゃごちゃと書いてあるが、意味不明。

40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 1 0 「迷える子——解って？」  
4 5 4 1 3 「解らないようでもある」

5  
6 定説では、美禰子が口にした、あるいは三四郎が耳にした「ストレイ シープ」の出典は  
7 『新約聖書』の「失われた羊の譬」とされる。

8  
9 『マタイによる福音書』18章12～14、『ルカによる福音書』15章3～7にあり、罪人に  
10 対する神の限りない愛を主題としたもので、神を羊飼いにたとえ、羊飼いは見失った1匹  
11 の羊のためには、他の99匹を野山に残して探しに行き、見出したときは迷わない99匹  
12 よりもその1匹のために喜ぶとしている。

13 (『ブリタニカ国際百科事典』「失われた羊の譬」)

14  
15 「罪人に対する神の限りない愛」と『三四郎』の関係は不明。美禰子は〈自分や三四郎が  
16 神によって救われる〉とでも信じていたのだろうか。

17 『リーダーズ英和辞典』の〈stray〉には「a stray sheep」について「迷える羊 (Isa 53:6  
18 ))」とある。ただし、『HOLLY BIBLE』の当該箇所には「a stray sheep」はない。

19  
20 わたしたちは羊の群れ  
21 道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。  
22 そのわたしたちの罪をすべて  
23 主は彼に負わせられた。

24 (『イザヤ書』第53章6節)

25  
26 美禰子と三四郎は「罪」を犯したのだろう。ただし、どんな罪なのか、不明。

27  
28 迷える子という言葉は解った様でもある。又解らない様でもある。解る解らないはこ  
29 の言葉の意味よりも、寧ろこの言葉を使った女の意図である。三四郎はいたずらに女の顔  
30 を眺めて黙っていた。すると女は急に真面目になった。

31 「私そんなに生意気に見えますか」

32 その調子には弁解の心持がある。三四郎は意外の感に打たれた。今までは霧の中にいた。  
33 霧が晴れば好いと思っていた。この言葉で霧が晴れた。明瞭な女が出てきた。晴れたの  
34 が恨めしい気がする。

35 (夏目漱石『三四郎』五)

36  
37 三四郎は何について「解った」ことにしているつもりだろう。

38 三四郎は何について「解らない」ことにしているつもりだろうか。

39 「女の意図」の「意図」の意味は〈意図〉と解釈して、わかったことにしておく。

40 「そんなに」の指すものは不明。

41 「心持」を付度するから、まともな会話ができない。

42 読者にとって「霧」は晴れていない。作者は当てずっぽうで言葉を並べているのだろう。

43  
44  
45  
46  
47

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 2 0 どっちもどっち  
4 5 4 2 1 「我が罪は常に我が前にあり」

5  
6 美禰子は、最後まで怪しげな物言いを続ける。

7  
8 女はややしばらく三四郎を眺めた後、聞兼る程の嘆息をかすかに漏らした。やがて細い  
9 手を濃い眉の上に加えて云った。

10 「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」

11 聞き取れない位な声であった。それを三四郎は明かに聞き取った。三四郎と美禰子は  
12 斯様にして分れた。下宿へ帰ったら母からの電報が来ていた。開けて見ると、何時立つと  
13 ある。

14 (夏目漱石『三四郎』十二)

15  
16 美禰子が結婚することを知って、三四郎が彼女に聞いた。彼女は肯う。

17 「女」は美禰子。「聞兼る程」は意味不明。

18 「手」は〈手首〉か。「加えて」は意味不明。

19 彼女の最後の言葉は『詩篇』からだが、三四郎はそうとは知らずに彼女の意図のみを察し  
20 たらしい。奇跡だ。

21  
22 あなたに背いたことをわたしは知っています。

23 わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。

24 あなたに、あなたのみわたしは罪を犯し

25 御目に悪事と見られることをしました。

26 あなたの言われることは正しく

27 あなたの裁きに誤りはありません。

28 (『詩篇』 51)

29  
30 美禰子の「我が罪」とは、〈二人は恋をしていると三四郎に勘違いさせたこと〉らしい。  
31 ただし、動機において彼女は無罪だ。〈美禰子は三四郎を愛する〉という物語は、三四郎の  
32 〈自分の物語〉に属するのであり、彼女の〈自分の物語〉に属するのではないからだ。「罪」  
33 を犯したのは、実在する彼女ではなく、あくまで〈三四郎の物語〉の「主人公」である三四  
34 郎が夢想していた「第三の世界」の住人である美禰子だ。

35 「聞き取れない位な声」の真相は幻聴だろう。

36 「斯様にして」がどのようにしてか、不明。「分れた」だと男女交際をしていたみたいだ  
37 が、そんな事実はまったくない。彼女は交際が始まらないことを確認しただけだ。語り手は、  
38 〈始まらないこと〉を〈終わったこと〉に偽装している。三四郎は「第三の世界」から排除  
39 されたのではない。そこに参入することがかなわなかったのだ。将来もかなうまい。語り手  
40 は三四郎の被愛妄想を事実として語ろうとしたが、失敗している。

41 改行なしで、ラスボスの「母」による攻撃について語られる。「母」はお光と彼の仮祝言  
42 をあげさせるつもりかもしれない。

43

44

45

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 2 0 どっちもどっち  
4 5 4 2 2 「<sup>ストレイ</sup>迷<sup>シーブ</sup>羊」

5  
6 「ストレイ シープ」の本来の意味は「正道から外れた人」（『オーレックス英和辞典』  
7 「sheep」）だ。美禰子がキリスト教徒だとすれば、彼女の犯した「罪」は神に対するもので  
8 なければならない。だが、彼女は三四郎に対して〈何か勘違いさせちゃったみたいで、ごめんね〉と謝っているらしい。彼女の真意、あるいは虚偽の暗示の意味は、不明。しかも、三  
9 四郎が聞き取ったつもりの意味も不明。作者は何をしているのだろう。

10  
11  
12 明治を代表する青春小説の一つで、青春を「迷える羊（ストレイ・シーブ）」の季節と  
13 見る漱石の老成した目が、作品に奥ゆきを添えている。

14 (『近現代文学事典』「三四郎」)

15  
16 「明治を代表」は意味不明。「青春」は「季節」か？ 美禰子は、〈青春時代は道に迷うも  
17 のなのよ——「解って？」〉と尋ねたのか？ では、彼女は「老成し」ていることになりそ  
18 うだ。「老成した目」って老眼？ 「奥行きを添えて」は意味不明。

19 美禰子は、神に見出されるために神から逃げたのか。あるいは、三四郎を翻弄するために、  
20 三四郎を避けていて、『聖書』はそうした真相を隠蔽するためのモザイクか。

21 広田から「<sup>とら</sup>囚われちゃ駄目だ」（『三四郎』一）と釘を刺されていたのに、三四郎は被愛妄  
22 想に囚われて美禰子のストーカーになってしまった。彼女は彼から逃げたかったのだが、あ  
23 からさまに〈あんたなんか、嫌いよ。ツーン〉とやると、後で何をされるか、わからない。  
24 逆に、〈ツーン〉をツンデレとツンと取られたら、面倒なことになる。だから、気障な言葉  
25 によって自分の嫌悪と恐怖を相手に通じさせようと努力していた。インテリっぽい言葉で  
26 三四郎の虚栄心をくすぐっておけば、恨まれずにすむ。

27 ところが、語り手は〈三四郎は美禰子に囚われた〉という虚偽の暗示を続ける。

28  
29 <sup>ストレイ</sup>迷<sup>シーブ</sup>羊。<sup>ストレイ</sup>迷<sup>シーブ</sup>羊。雲が羊の形をしている。

30 (夏目漱石『三四郎』十二)

31  
32 これは三四郎の内言。作者は、何をしているのだろう。

33 三四郎は、ぼけちゃったみたいだ。作者がとぼけているのだろう。

34 三四郎が「迷羊」の典拠として想像しているのは多岐亡羊の故事かもしれない。

35  
36 [列氏（説符）]（逃げた羊を追ううち、道が幾筋にも分かれていて、羊を見失った故事  
37 から）学問の道があまりに多方面に分かれていて真理を得がたいこと。転じて、方針が多  
38 すぎてどれを選んでよいか迷うこと。

39 (『広辞苑』「多岐亡羊」)

40  
41 この場合、「羊」が迷っているのではない。迷っているのは「羊」を探す人だ。

42 三四郎は、「三つの世界」に至る三差路の分岐点で動けないままらしい。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 2 0 どっちもどっち  
4 5 4 2 3 『東京ラブストーリー』

5  
6 〈美禰子は家族制度や世間の偏見に負けて政略結婚の犠牲になった〉みたいに誤読できる。  
7 三四郎も〈「母」の「世界」〉の桎梏から逃れられなかったように想像できる。

8 しかし、そういう話にはならない。読者は、〈三四郎は「国から母を呼び寄せて、美しい  
9 細君を迎えて、そして身を学問に<sup>ゆだ</sup>委ねる」(『三四郎』四)〉といった結末を予想するはず  
10 だ。そうなるのかもしれない。だが、そうなる<sup>と</sup>決まってもいない。「母」は登場しないま  
11 ま、作品は終わってしまう。『虞美人草』の小野が小夜子を裏切れなかったように、三四郎  
12 もお光を裏切れ<sup>ない</sup>のかかもしれない。だが、そんな結末もない。『東京ラブストーリー』(フ  
13 ジテレビ)が大受けした時代でさえ、日本男児は被愛願望の強すぎる「新しい女」から逃げ  
14 る。一方、〈美禰子は被愛願望の強すぎる三四郎に失望した〉と誤読できる。そうなる<sup>と</sup>、  
15 どっちもどっちだ。勿論、語り手はそんなふうに語っていない。何も表現できていないのだ。

16 作者は「新しい女」の犠牲者およびその候補者に警告を<sup>発</sup>した<sup>か</sup>った<sup>の</sup>だ<sup>ら</sup>う<sup>だ</sup>。だが、「新  
17 しい女」に惚れられた気になる森田草平のような〈新しい男〉に嫉妬をしていた<sup>の</sup>でも<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>  
18 だ。読者に自分の嫉妬を悟られ<sup>たく</sup>なくて<sup>言</sup>葉<sup>を</sup>弄<sup>り</sup>回<sup>し</sup>て<sup>し</sup>ま<sup>っ</sup>た<sup>よ</sup>う<sup>だ</sup>。

19 『三四郎』の作者は「三つの世界」の<sup>緋</sup>い<sup>交</sup>ぜ<sup>に</sup>失<sup>敗</sup>した。その<sup>ど</sup>れ<sup>一</sup>つ<sup>を</sup>も<sup>利</sup>用<sup>で</sup>き<sup>な</sup>  
20 かった。三四郎が<sup>利</sup>用<sup>で</sup>き<sup>な</sup>かった<sup>の</sup>では<sup>な</sup>い。『三四郎』の<sup>語</sup>り<sup>手</sup>は、<sup>作</sup>中<sup>人</sup>物<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>三  
21 四郎の<sup>思</sup>想<sup>の</sup>未<sup>熟</sup>さを<sup>皮</sup>肉<sup>に</sup>することによって、<sup>作</sup>者<sup>の</sup>技<sup>能</sup>の<sup>未</sup>熟<sup>さ</sup>を<sup>隠</sup>蔽<sup>し</sup>て<sup>い</sup>る。

22  
23 I 「迷える子」という古い和語が流通する「世界」の「主人公」は、前近代的な考<sup>え</sup>の  
24 古<sup>い</sup>女<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>「母」だ。三四郎は、「母」の<sup>い</sup>る「国」に<sup>戻</sup>り、<sup>教</sup>師<sup>か</sup>役<sup>人</sup>など<sup>に</sup>な<sup>り</sup>、「母」  
25 の<sup>お</sup>気<sup>入</sup>り<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>お<sup>光</sup>を<sup>妻</sup>に<sup>す</sup>る。た<sup>だ</sup>し、<sup>東</sup>京<sup>の</sup>「<sup>第</sup>二<sup>の</sup>世界」や「<sup>第</sup>三<sup>の</sup>世界」を<sup>思</sup>  
26 き<sup>る</sup>こと<sup>は</sup>で<sup>き</sup>ず、〈<sup>上</sup>京<sup>し</sup>よう<sup>か</sup>。離<sup>婚</sup>し<sup>よう</sup>か〉など<sup>と</sup>、<sup>ず</sup>つ<sup>と</sup>悩<sup>み</sup>続<sup>け</sup>る。この<sup>場</sup>合<sup>、</sup>  
27 三<sup>四</sup>郎<sup>は</sup>「<sup>母</sup>」の<sup>犠</sup>牲<sup>者</sup>だ。

28 II 「翻訳」という奇妙な<sup>作</sup>業<sup>が</sup>必<sup>要</sup>な「<sup>第</sup>二<sup>の</sup>世界」の「<sup>主</sup>人公」は、<sup>イン</sup>テ<sup>リ</sup>崩<sup>れ</sup>で  
29 呪<sup>術</sup>師<sup>の</sup>広<sup>田</sup>だ。彼<sup>は</sup>三<sup>四</sup>郎<sup>に</sup>「<sup>な</sup>る<sup>べ</sup>く<sup>御</sup>母<sup>さん</sup>の<sup>言</sup>う<sup>事</sup>を<sup>聞</sup>か<sup>な</sup>け<sup>れ</sup>ば<sup>不</sup>可<sup>な</sup>い」(『三  
30 四郎』七)と<sup>命</sup>じ<sup>た</sup>。与<sup>次</sup>郎<sup>に</sup>「<sup>よ</sup>し<sup>子</sup>さん<sup>を</sup>貫<sup>わ</sup>ない<sup>か</sup>」(『三四郎』九)と<sup>斡</sup>旋<sup>さ</sup>れて、三  
31 四郎<sup>は</sup>彼<sup>女</sup>と<sup>結</sup>婚<sup>し</sup>、郷<sup>里</sup>の<sup>学</sup>校<sup>の</sup>教<sup>師</sup>に<sup>な</sup>る。生<sup>徒</sup>に<sup>東</sup>京<sup>の</sup>思<sup>い</sup>出<sup>を</sup>開<sup>化</sup>の<sup>漢</sup>語<sup>で</sup>語<sup>り</sup>続<sup>け</sup>  
32 ける。広<sup>田</sup>先<sup>生</sup>の「<sup>記</sup>憶<sup>を</sup>呼<sup>び</sup>起<sup>す</sup>ご<sup>と</sup>に」(上<sup>一</sup>)淡<sup>い</sup>幸<sup>福</sup>感<sup>を</sup>味<sup>わ</sup>う。広<sup>田</sup>に<sup>褒</sup>め<sup>て</sup>も  
33 ら<sup>え</sup>そ<sup>う</sup>な<sup>著</sup>作<sup>を</sup>試<sup>み</sup>る<sup>が</sup>、う<sup>ま</sup>く<sup>い</sup>か<sup>な</sup>い。焦<sup>燥</sup>の<sup>日</sup>々。与<sup>次</sup>郎<sup>は</sup>東<sup>京</sup>で「<sup>偉</sup>人」(『三  
34 四郎』四)に<sup>な</sup>る。三<sup>四</sup>郎<sup>は</sup>、広<sup>田</sup>の<sup>犠</sup>牲<sup>者</sup>だ。

35 III 「ストレイ シープ」という<sup>意</sup>味<sup>不</sup>明<sup>の</sup>カ<sup>タ</sup>カ<sup>ナ</sup>語<sup>が</sup>流<sup>通</sup>する「<sup>第</sup>三<sup>の</sup>世界」の「<sup>主</sup>  
36 人公」は「<sup>新</sup>しい<sup>女</sup>」に<sup>憧</sup>れ<sup>て</sup>い<sup>る</sup>だ<sup>け</sup>の<sup>オ</sup>シ<sup>ャ</sup>レ<sup>な</sup>美<sup>禰</sup>子<sup>だ</sup>。彼<sup>女</sup>は『<sup>青</sup>鞆』の<sup>同</sup>人<sup>に</sup>な<sup>り</sup>  
37 た<sup>が</sup>る<sup>が</sup>、「<sup>ス</sup>ト<sup>レ</sup>イ シ<sup>ィ</sup>ー<sup>プ</sup>」的<sup>な</sup>自<sup>分</sup>語<sup>を</sup>並<sup>べ</sup>る<sup>の</sup>で<sup>相</sup>手<sup>に</sup>さ<sup>れ</sup>ない。彼<sup>女</sup>は、夫<sup>の</sup>  
38 ある<sup>身</sup>で<sup>あ</sup>り<sup>な</sup>が<sup>ら</sup>、三<sup>四</sup>郎<sup>を</sup>翻<sup>弄</sup>し<sup>続</sup>ける。彼<sup>は</sup>女<sup>性</sup>不<sup>信</sup>の<sup>ま</sup>ま、広<sup>田</sup>の<sup>よ</sup>う<sup>な</sup>独<sup>身</sup>で<sup>老</sup>  
39 いる。ス<sup>キ</sup>ヤ<sup>ン</sup>ダ<sup>ル</sup>ま<sup>み</sup>れ<sup>の</sup>美<sup>禰</sup>子<sup>も</sup>老<sup>い</sup>る。町<sup>で</sup>す<sup>れ</sup>違<sup>う</sup>が、互<sup>い</sup>に<sup>気</sup>づ<sup>か</sup>ない。

40  
41 いつ<sup>か</sup>、「<sup>母</sup>」は<sup>死</sup>ぬ。三<sup>四</sup>郎<sup>は</sup>後<sup>を</sup>追<sup>う</sup>よ<sup>う</sup>に<sup>死</sup>に、「<sup>母</sup>」の<sup>墓</sup>に<sup>入</sup>る。彼<sup>は</sup>、や<sup>り</sup>た<sup>い</sup>  
42 こと<sup>が</sup>何<sup>一</sup>つ<sup>で</sup>き<sup>な</sup>か<sup>っ</sup>た。自<sup>殺</sup>さ<sup>え</sup>で<sup>き</sup>な<sup>か</sup>っ<sup>た</sup>。お<sup>し</sup>ま<sup>い</sup>。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5400 「ストレイ シープ」  
3 5430 「迷える子」と「迷<sup>ストレイシープ</sup>羊」  
4 5431 「森の女」

5  
6 『三四郎』は三四郎の惑いを描いた青春小説ではない。作者の惑いを露呈した模擬作品だ。  
7 三四郎の夢想を描いた小説ではない。小説のようなNの夢想の叙述だ。だから、明瞭な意味  
8 はない。恐ろしく恐ろしげな「意味」ならあるが、その「意味」は私に通じない。

9 普通の〈意味〉は、通じたようで、本当は通じていない。だが、通じたことにしてしまう。  
10 通じていないことが明らかになるまで、通じない部分は放置してある。情報を発信する側にも、  
11 それを受信する側にも、ある種の諦めがある。厳密に定義をすれば難しくなり、通じない。  
12 〈意味を調べてもリンク地獄に陥るだけ〉と知れている。

13 言葉には意味がある。ある言葉は、その意味を越えた何かによって言葉として認知される。  
14 その意味を成り立たせる何かがあるわけだが、その何かは何なのか、誰も知らない。知れば、  
15 それも言葉になる。それはあらかじめ知られているような事柄ではないのだ。それは、対話  
16 を含めた共同作業によって共有される。そして、作業が終わると同時に無用となり、忘れら  
17 れる。それを〈理性〉と呼ぼうか。あるいは、〈社会性〉や〈友愛〉や〈神〉と呼ぼうか。  
18 何と呼ぼうと、呼ぶと同時に、それは言葉になり、意味が生じる。

19 夏目語の「意味」は、逆だ。通じなさそうだからこそ通じた気になる。〈通じる〉をも含  
20 めた言葉のあらゆる意味は、意味不明の「意味」によって制圧される。

21 常識的に解釈すれば、「ストレイ シープ」の美禰子的意味は、三四郎に通じていない。  
22 彼が通じたことにしてしまっているだけだ。一人合点。

23 美禰子をモデルにした「森の女」という題の絵の前で、与次郎が三四郎に問う。

24 「どうだ森の女は」

25  
26 「森の女と云う題が悪い」

27 「じゃ、何とすれば好いんだ」

28 三四郎は何とも答えなかった。ただ口の内<sup>ストレイ シープ</sup>で迷<sup>ストレイ シープ</sup>羊、迷<sup>ストレイ シープ</sup>羊と繰返した。

29 (夏目漱石『三四郎』十三)

30  
31 なんちゃって。

32 三四郎は、ナンチャッテ・ロマンスの主人公を気取っている。語り手は、まことしやかに  
33 語る。作者は、嘘つきの語り手を支持している。『三四郎』そのものがナンチャッテ・ロマ  
34 ンスなのだ。三四郎の妄想恋愛を、作者は真実のように暗示している。

35 美禰子の自分語である「迷<sup>ストレイ シープ</sup>羊」の「意味」と三四郎の自分語である「迷<sup>ストレイ シープ</sup>羊」の「意  
36 味」が重なるとき、広田の自分語である「ラヴ」が成り立つ。自分語を共有する者だけが  
37 「第三の世界」で出会うことになっている。

38 なんちゃって。

39 「ラヴ」は夏目語だろう。作者は読者に向って、〈君ももしかして与次郎?〉と暗に問  
40 うている。〈違う〉と答えるのが夏目宗徒だ。しかし、Nこそが「ラヴ」を知らないのだ。  
41 Nは性愛に関する自分の無知を隠蔽するために『三四郎』を書いた。

42 大量の夏目語の「意味」をNと共有できたように錯覚した人が夏目宗徒になる。

43  
44  
45  
46  
47

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 3 0 「迷える子」と「迷羊」  
4 5 4 3 2 『蒟蒻問答』

5  
6 美禰子と三四郎は、蒟蒻問答をやっていたようだ。

7  
8 にわか坊主になったこんやく屋の主人が旅僧に禅問答をしかけられ、口と耳が不自由な  
9 ぶりをしていると、無言の行ととりちがえされるおかしさを、見立て落ちとしぐさ落ちで  
10 結ぶ。

11 (『日本国語大辞典』「蒟蒻問答」)

12  
13 「とんちんかんな問答」(同)と意味で用いられることもあるが、正しくない。「とんちん  
14 かん」だと思うのは第三者だ。

15 アンジャッシュが蒟蒻問答的コントをよくやる。たとえば、二人の男がある女について話  
16 をしている。ただし、その女は同姓同名の別人だ。ところが、そのことに二人は気づかない。  
17 観客には二人の勘違いと知れているので、笑えるわけだ。

18  
19 それから主人は鼻の膏を塗抹した指頭を転じてぐいぐいと右眼の下瞼を裏返して、俗  
20 に云うべっかんこうを見事にやって退けた。あばたを研究しているのか、鏡と睨め競をし  
21 ているのかその辺は少々不明である。気の多い主人の事だから見ているうちに色々にな  
22 ると見える。それどころではない。若し善意を以て蒟蒻問答的に解釈してやれば主人は  
23 見性自覚の方便として斯様に鏡を相手に色々な仕草を演じているのかも知れない。

24 (夏目漱石『吾輩は猫である』九)

25  
26 「それから」は無視。

27 「あばた」はNの恥部でもある。「鏡と」は〈「鏡」に映る自分「と」〉の略か。

28 「色々になる」は意味不明。

29 「それ」の指すものが不明。

30 「蒟蒻問答的」の「的」が怪しい。「見性自覚」は「自己の本性を悟ること」(『吾輩は猫  
31 である』新潮文庫注解)だそうだが、意味不明。「自覚」は不要だろう。「鏡を」は〈「鏡」  
32 に映る自分「を」〉の略か。

33  
34 二世。前身は托善という禅僧で、「野ざらし」「こんにやく問答」などの作者といわれる。

35 (『日本国語大辞典』「林家正蔵」)

36  
37 正蔵は、落語を「方便」と考えていたのかもしれない。

38 「こんにやく屋」は蒟蒻の製造や販売に携わるうち、自ずと悟りの境地に達していた。「旅  
39 僧」はそのことを鋭く察した。だから、第三者が彼に「話のかみ合わない会話」と教えてや  
40 っても、「旅僧」は承知せず、かえって凡人を見下す。

41 ワガハイは『蒟蒻問答』を、このように解釈していたのかもしれない。また、Nの解釈も  
42 同じだったのかもしれない。

43  
44  
45  
46

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 3 0 「迷える子」と「迷羊」  
4 5 4 3 3 野狐禪

5  
6 『チャンス』(アシュビー監督)のチャンスは庭師で、ぼけ気味の老人だ。質問されると、  
7 何であれ、園芸に関する話をする。聞いた人は、それを訓話や予言として解釈し、勝手に信  
8 じる。蒟蒻問答だ。ところが、彼を信頼すると成功する。信頼しないと成功しない。チャン  
9 スは池の上を歩く。イエスが湖を渡る話(『マタイによる福音書』14)が連想される。

10  
11 「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとしてあなたがたのところに来る  
12 が、その内側は貪欲な狼である。あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶ  
13 どうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。すべて良い木は良い実を結び、悪い木は  
14 悪い実を結ぶ。良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともで  
15 きない。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。このように、あな  
16 たがたはその実で彼らを見分ける。」

17 (『マタイによる福音書』7)

18  
19 チャンスは「偽預言者」だろうか。

20 「実」の寓意は不明。

21 ワガハイは一種の「偽預言者」だろう。だが、作者の意図は不明。

22  
23 禅宗用語。野狐とは「のぎつね」の精のこと。悟ってもいないのにいかにも悟ったふり  
24 をして人を欺き、奇異な言動をする禅の修行者のこと。

25 (『ブリタニカ国際大百科事典』「野狐禪」)

26  
27 広田は三四郎に「良い実」を与えたのか。こんな問題は成り立たない。本文が意味不明だ  
28 からだ。広田が本物の思想家なのか、野狐禪なのか、わからない。

29 「ストレイ シープ」の美禰子的意味と三四郎の意味が二人の心の深層で共有されてい  
30 たとしよう。だったら、いつの日か、二人は再会し、『それから』みたいに、やけぼっく  
31 に火がつきそう。だったら、『三四郎』は尻切れ蜻蛉だろう。逆に、尻切れ蜻蛉ではなく  
32 て、そして、再会がありえないとしたら、「ストレイ シープ」の「意味」は〈結婚したと  
33 しても「淋しさ」を抱いて生きるしかない変人〉といった、ありがちな暗い喜劇になりそう  
34 だ。その場合、三四郎が「ストレイ シープ」と呟けば、与次郎にだって了解できてしま  
35 そうだ。だったら、三四郎が呟かない理由は不明。

36 「ストレイ シープ」の「意味」は、広田のいう「露悪家」と同じだろうか。同じなら、  
37 なぜ、その言葉を三四郎は用いないのか。「ストレイ シープ」が「露悪家」よりも深い洞  
38 察に基づくのなら、三四郎は広田を追い抜いたことになる。この場合、広田は野狐禪だっ  
39 たことになる。逆に、「ストレイ シープ」の「意味」が「露悪家」以下なら、三四郎が野狐  
40 禪で、そして、『三四郎』は尻切れ蜻蛉ということになる。

41 「美禰子の使ったstray sheepの意味がこれで漸く判然した(『三四郎』六)と語られて  
42 いるが、私にはちっとも「判然し」ない。

43  
44  
45

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 4 0 小生意気な女  
4 5 4 4 1 天探女と天邪鬼

5  
6 「美禰子に愛されるという事実その物」に三四郎が固執するのは、彼が彼女を愛していない  
7 いかからだ。常識的には、愛する人に愛されたいものだ。しかし、三四郎は、美禰子を愛して  
8 いるのではない。愛されたいだけだ。愛されないことを恐れている。彼女が「あの女」に似  
9 ているからだ。「あの女」はお光に似ていて、お光は「母」のお気に入りだ。ただし、「母」  
10 の目には、美禰子はお光に似ていないのかもしれない。

11 三四郎は美禰子とともに生きたいのか。生きたくない。むしろ殺したい。Sは静とともに  
12 生きたいのか。生きたくない。むしろ殺したい。この気分を作者は必死になって隠蔽してい  
13 る。だから、作品として竜頭蛇尾になってしまった。

14 三四郎は、小生意気な女を見かけると「母」を連想し、相手に近づきたくなる。「母」を  
15 愛しているからではない。「母」にいじめられた体験が蘇るからだ。彼は、恐ろしい女に向  
16 かって、防衛のために近づく。被愛願望は被害妄想的気分の裏返しだ。相手は自分が愛されて  
17 いないことを察し、嫌がる。相手が嫌がれば嫌がるほど、彼は防衛のために近づかなければ  
18 ならなくなる。近づきたいのではない。だが、その仕分けができない。作者にもできない。  
19 被害妄想的気分の裏返しとして被愛願望を表現することができない。

20  
21 こけこっこうとにわとり 鶏がまた一声鳴いた。  
22 女はあっと云って、緊めた手綱を一度にゆる 緩めた。馬は諸膝を折る。乗った人と共にまども 真向  
23 へ前へのめった。岩の下は深い淵であった。

24 蹄の跡あとはいまだに岩の上に残っている。鶏の鳴く真似まねをしたものは天探女である。この  
25 蹄の痕あとの岩に刻みつけられている間、天探女は自分の敵かたきである。

26 (夏目漱石『夢十夜』「第五夜」)

27  
28 夜の開けるまでに「女」に会わないと、「自分」は殺されることになっている。「天探女で  
29 ある」は憶断。

30 本来、天探女と天邪鬼は違う。〈あまのさぐめ〉は、「表面には表われていない意味を探り  
31 だすのに長じている女神」(『日本国語大辞典』「天探女」)だ。神道系の世界に住む。〈あまの  
32 じゃく〉は、「仁王や四天王に踏みつけられている小悪鬼」(『日本国語大辞典』「天邪鬼」)で、  
33 仏教系の世界に住む。「自分」が住むのは、この二つのどちらの世界でもない。

34  
35 MIYUKI You are my angel  
36 MIYUKI You are my devil  
37 気まぐれは君の魅力の一つさ

38 (作詞：阿木燿子 作曲：鈴木キサブロー『100%の雨予報』)

39  
40 『夢十夜』の「あまのじゃく」は鬼女だろう。一方、「女」は「自分」の気分を察してく  
41 れる女神つまり「天探女」のようだ。「自分」は真相を知らないが、語り手は〈女〉は「敵かたき」  
42 という物語を露呈している。

43  
44  
45  
46

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5400 「ストレイ シープ」  
3 5440 小生意気な女  
4 5442 女菩薩と女夜叉

5  
6 「外面<sup>げめん</sup>如菩薩内心如夜叉」という。Nは、女夜叉の「人間の心」が女菩薩であることを願  
7 った。女菩薩は永遠の少年と遊んでくれる。だが、玄人ではない。

8  
9 御前は僕を北野の天神様へ連れて行くと言って其日断りなしに宇治へ遊びに行つてし  
10 まつたぢやないか。あゝいふ無責任な事をすると決していゝおくひは来ないものと思つ  
11 て御出で。

12 (夏目漱石 磯田多佳宛て書簡 大正4年五月三日)

13  
14 Nは〈「僕を北野の天神様へ連れて行く」か〉と問い、磯田多佳は〈へえ、そら、よろし  
15 ゅおすな〉とでも応じたのだろう。『漱石悶々』(NHKエンタープライズ)参照。

16  
17 手短かにいふと、私があなたをそらとぼけてみるといふのが事実でないとするとは  
18 悪人になるのです。夫からもし夫が事実であるとする、反対にあなたの方が悪人に変化  
19 するのです。そこが際どい所で、そこを互に打ち明けて悪人の方が非を悔いて善人の方に  
20 心を入れかへてあやまるのが人格の感化といふのです。然し今私はあなたが忘れたと云  
21 つてもさう思へないやつぱりごま化してみるとしか考へられないのだから、あなたは私  
22 をまだ感化する程の徳を私に及ぼしてみないし、私も亦あなたを感化する丈の力を持つ  
23 てみないのです。私は自分の親愛する人に対してこの重大な点に於て交渉のないのを大  
24 変残念に思ひます。是は黒人たる大友の女将の御多佳さんに云ふではありません普通  
25 の素人としても御多佳さんに素人の友人なる私が云ふ事です。女将の料簡で野暮だとか  
26 無粋だとか云へば夫迄ですが、私は折角つき合い出したあなたに対してさうした黒人向  
27 の軽薄なつき合をしたくないから長々とこんな事を書きつらねるのです。私はあなたの  
28 先生でもなし教育者でもないから冷淡にいゝ加減な挨拶をしておれば手数が省ける丈で  
29 自分の方は楽なのですが私はなぜかあなたに対してさうしたくないのです。私にはあな  
30 たの性質の底の方に善良な好いものが潜んでみるとしか考へられないのです。それで  
31 是の事を野暮らしく長々と申し上げるのですからわるく取らないで下さい、又真面目に  
32 聞いて下さい。

33 (夏目漱石 磯田多佳宛て書簡 大正4年五月十六日)

34  
35 「そらとぼけてみるといふのが事実でないとする」とNは妄想家ということになる。  
36 善悪が問題なのではない。「黒人」<sup>(くろうと)</sup>(同書簡)に対する好悪が問題なのだ。  
37 夏目語の「悪人」は〈甘やかしてくれない人〉だろう。「悪人」を許せるのが「徳」だろ  
38 う。なぜ、許せないのか。愛していないからだ。

39 「人格の感化」は意味不明。

40 「ごま化してみるとしか考へられない」のを相手のせいにするのは、筋違い。

41 「親愛する人」は〈敬愛してもらえると信じたから「親愛する人」〉の略。

42 「善良な好いもの」は買い被りだ。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 4 0 小生意気な女  
4 5 4 4 3 「ポアンカレの説によると」

5  
6 美禰子は心変わりをしたのだろうか。怪しい。

7  
8 「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう変わるか分らない。そうしてその  
9 変るところを己は見たのだ」

10 (夏目漱石『明暗』二)

11  
12 「同じ事」は〈「肉体」(『明暗』二)の「界」と「同じ事」の略。  
13 「変る」のは心。「分らない」は「変る」という前提が正しいときにしか意味がない。  
14 〈津田は自分に対する清子の恋心が「変るところ」を「見た」〉という物語はない。

15  
16 彼の<sup>ため</sup>に「偶然」の意味を説明して呉<sup>くれ</sup>たその友達は彼に向ってこう云った。

17 「だから君、普通世間で偶然だ偶然だという、所謂<sup>いわゆる</sup>偶然の出来事というのは、ポアンカ  
18 レの説によると、原因があまりに複雑過ぎて一寸<sup>ちよっと</sup>見当が付かない時に云うのだね。ナポレ  
19 オンが生れるためには或特別の卵と或特別の精虫<sup>ある</sup>の配合が必要で、その必要な配合が出  
20 来得るためには、またどんな条件が必要であったかと考えて見ると、殆んど<sup>ママ</sup>想像が付か  
21 ないだろう」

22 (夏目漱石『明暗』二)

23  
24 「彼」は津田。作者は〈突然〉と「偶然」を混同しているらしい。

25  
26 その時分の清子は津田と名のつく一人の男を信じていた。だから<sup>すべて</sup>凡ての知識を彼から  
27 仰いだ。あらゆる疑問の解決を彼に求めた。自分に解らない未来を挙げて、彼の上に投げ  
28 かけるように見えた。従って彼女の眼は動いても<sup>しずか</sup>静であった。何か訊こうとするうちに、  
29 信と平和の輝きがあった。彼はその輝きを一人で専有する特権を有<sup>も</sup>って生れて来たよう  
30 な気がした。自分があればこそこの眼も存在するのだとさえ思った。

31 (夏目漱石『明暗』百八十八)

32  
33 「その時分」は、清子が結婚する前。彼女は津田を「一人の男」としてではなく、生き字  
34 引として「信じていた」のだろう。彼女が利用した男は複数いたろう。だが、津田を利用し  
35 た女は清子だけだったのだろう。津田は受身。彼女を愛したことがあるのか？

36 「だから」は不適當。因果関係が逆だ。「すべての知識」は誇張が過ぎる。

37 「あらゆる疑問の解決」など、あり得ない。「疑問」の実例は示されない。したがって、  
38 「解決」の実例も示されていない。

39 「自分に解らない未来を挙げて、彼の上に投げかける」は意味不明。

40 津田のことを恋人未満と思っていたから「彼女の眼は動いても<sup>しずか</sup>静であった」のだ。

41 「専有する特権」は津田の妄想の産物。「気がした」というだけのこと。

42 「とさえ思った」は、被愛妄想の露呈。

43  
44  
45  
46

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5400 「ストレイ シープ」  
3 5450 原典『眼医者 of 女』  
4 5451 井上メイサ

5  
6 Nは幼兒的な被愛願望を死ぬまで持ち続けた。普通の少年なら、〈女に好かれない〉とは  
7 思わない。〈女を専有したい〉とさえ思わない。ひととき、女を人形のように弄って遊びた  
8 いだけだ。相手の気持ちを気遣うようになるのは、弄った女子に叱られてからだろう。  
9 大学を出た頃、Nは、ある女性との結婚を望んだ。彼女が母性的に思えたかららしい。

10  
11 その寺から、トラホームをやんでいて、毎日のように駿河台の井上眼科にかよっていた  
12 そうです。すると始終そこの待合で落ちあう美しい若い女の方がありました。背のすらっ  
13 とした細面の美しい女で——そういうふうの女が好きだとはいつも口癖に申ししておりま  
14 した——そのひとが見るからに気立てが優しくて、そうしてしんから深切でして、見ず知  
15 らずの不案内なお婆さんなんかが入って来ますと、手を引いて診察室へ連れて行ったり、  
16 いろんなめんどろを見てあげるといふふうで、そばで見ていると本当に気持ちがよかつ  
17 たと後でも申ししていたくらいでした。いずれ大学を出て、当時は珍しい学士のことですか  
18 ら、縁談なんぞもちらほらあったことでしょう。そんなことからあの女ならもらってもい  
19 いと、こう思いつめて独りぎめをしていたものと見えます。

20 (夏目鏡子・松岡譲『漱石の思い出』「一 松山行」)

21  
22 「その寺」はNの下宿。「やんで」いたのはNだ。  
23 「落ちあう」はNの言葉か。  
24 「そういうふうの」は〈母性的な〉だろう。  
25 「独りぎめ」をしたのは、Nが被愛妄想を抱いたからだろう。

26  
27 ところがそのひとの母というのが芸者あがりの性悪の見栄坊で、——どうしてそれが  
28 わかったのか、そのところは私にはわかりませんが——始終お寺の尼さんなどを回し者  
29 に使って一挙一動をさぐらせた上で、娘をやるのはいいが、そんなに欲しいのなら、頭を  
30 下げてもらいに来るがいいといふふうに言わせます。

31 (夏目鏡子・松岡譲『漱石の思い出』「一 松山行」)

32  
33 「芸者あがり」は女夜叉の比喩。「性悪の見栄坊」は、Nの養母の性格。母性的な女を見  
34 て被愛願望が生じると、反射的にママゴンの記憶が蘇り、被害妄想的になるわけだ。そして、  
35 加害者を妄想的に捏造する。「私」は夏目鏡子。「わかりませんが」は、Nの妄想である可能  
36 性の示唆。「尼さん」は女菩薩の比喩であり、「美しい若い方」の別人格だ。「回し者」はN  
37 のDだろう。「一挙一動をさぐらせた」事実は誰にも確認できまい。この頃のNは「追跡狂  
38 という精神病の一種」(『漱石の思い出』一)に罹っていたとされる。

39 「娘をやるのはいいが」という台詞は怪しい。「頭を下げて」は、男としての自信のなさ  
40 を自覚したくなくて、Nが他人の言葉として想像したものだ。

41 青年Nのこの妄想は〈小説〉と呼べる。この小説はNのほとんどの小説の原典だ。タイト  
42 ルは『眼医者 of 女』としよう。ヒロインの名は、〈井上メイサ〉でどうだ。

43  
44  
45  
46

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 5 0 原典『眼医者 of 女』  
4 5 4 5 2 被愛願望と自惚れ

5  
6 メイサの母は、どうやってNのことを知ったのだろう。メイサが母にNのことを告げたと  
7 しか考えられない。ただし、〈メイサとNは交際していた〉とは考えられない。だから、考  
8 えられるのは、一つだけだ。〈メイサはNに片思いをしていた〉という物語だ。では、Nは、  
9 自分に対するメイサの片思いを、どうやって知ったのだろう。知れるわけがない。

10 〈好きな人に好かれない〉とは、誰しも思うことだろう。〈好きな猫に好かれない〉とも  
11 思う。だが、〈愛車に好かれない〉とは思えない。いや、思いようがない。無生物に欲情す  
12 る人はいる。だが、〈無生物に欲情してもらえない〉とは思えない。思うのかな。

13 好きな人には好かれないものだが、逆は常に真ではない。〈好かれない人のことが好き〉  
14 とは限らない。〈好かれない〉という思いは、〈嫌われたくない〉という思いと裏表の関係に  
15 ある。嫌われると何をされるか、わからない。怖い。だから、とりあえず、好かれない。あ  
16 る種の被愛願望は、被害妄想的気分と裏表の関係にある。〈自分の好きな人には自分は好か  
17 れるものだ〉といった自惚れとは違う。自惚れられないからこそ、被愛願望を抱くのだ。

18 『眼医者 of 女』の場合、Nはメイサに好感を抱いたが、そのことを自覚できない。彼は、  
19 愛する主体として自分を想像することができないのだ。〈Nは彼女を愛する〉という物語を  
20 作れない。突然、ロマンスが生まれる。つまり、〈メイサとNは愛しあう〉という物語が浮  
21 ぶ。この物語の前段階には、当然、〈メイサはNを愛する〉という物語がある。

- 22  
23 I a Nはメイサを愛する。  
24 I b メイサはNの愛を受け入れる。  
25 I c メイサとNは愛しあう。  
26 I d メイサの母はNに試練を与える。  
27 I e Nは試練を乗り越える。

28  
29 ほとんどのロマンスは、このように作られている。ところが、Nの場合、a と b が入れ替  
30 わる。すると、次のようになる。

- 31  
32 II a メイサはNを愛する。  
33 II b Nはメイサの愛を受け入れる。  
34 II c メイサとNは愛しあう。  
35 II d Nの母はメイサに試練を与える。  
36 II e メイサは試練を乗り越える。

37  
38 Nは、この物語を作れなかった。その理由は簡単だ。Nがメイサを愛しているのなら、N  
39 は自分の母と戦わなければならなくなるからだ。自分の母との対決を、Nは恐れた。この恐  
40 れがメイサの母を妄想的に作り出したのだ。

41 言うまでもなく、I系の物語とII系の物語は、同時に進行しうる。Nは、二種の物語の世  
42 界の緋い交ぜに失敗し続けた。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 4 0 0 「ストレイ シープ」  
3 5 4 5 0 原典『眼医者の女』  
4 5 4 5 3 メイサと再会

5  
6 後年、Nは井上メイサを見かける。いや、見かけたと思い込んだ。  
7

8 たしか亡くなる四、五年前のこと、高浜きよし虚子さんに誘われて九段にお能みを観にまいりますと、その昔の女が来ていたそうです。二十年ぶりに偶然顔を見たわけですが、帰ってま  
9 いてから、

10  
11 「今日会って来たよ」とそのことを私に話しますので、

12 「どんなでした」とたずねますと、

13 「あまり変わっていなかった」と申しまして、それから、

14 「こんなことを俺が言っているのを亭主が聞いたら、いやな気がするだろうな」と穏や  
15 かに笑っておりました。私にはこの話は実在のようでもあり架空のようでもあって、まこ  
16 とにつかまえてころのない妙な話に響くのですが、兄さんはその女の方の名前を御存知  
17 のはずです。私も伺ったのですが忘れてしまいました。とにかく得えたい体の知れない変な話で  
18 ございます。

19 そんなわけからか急に東京を捨てて松山へゆくことにしたらしいのですが、そうした  
20 出しぬけの話を持ちだされて、加納治五郎かのうじごろうさんあたりが引き止め役で、東京に口がないじ  
21 ゃなし、現にその時は高等師範で月給四十円とかもらって教師をしながら大学院で勉強  
22 していたことではあり、なにも物好きに松山くんたりまで落ちのびなくともと骨折って  
23 くださったそうですが、まったくめちゃくちゃな駄だ々だ見ぶりで、手がつけれなかった  
24 とか申すことです。

25 松山へ行っても、先ほど申しましたとおり、宿の神さんや何かが廻し者にみえていて、  
26 あまり愉快ではなかったようです。

27 この発作はその後数年たってからひどく起こってまいりましたが、いったいにずいぶ  
28 んと病気の昂こじている時でも、遠い人には案外よくって、近い人ほどいけないのですから、  
29 始末におえません。だもんでそれで私が困り話なんかをしましても、知らない方は、あの  
30 謹厳な夏目がと本気になさいませぬのです。

31 (夏目鏡子・松岡譲『漱石の思い出』「一 松山行」)  
32

33 「亡くなる四、五年前」のNは「強度の神経衰弱」(新潮文庫『ころ』年譜 大正二年)  
34 に悩まされていたという。

35 「顔を見た」程度で「会って来たよ」は、おかしい。〈パンダに「会って来たよ」〉と同じ  
36 用法か。Pが「何処かで先生を見たように思うけれども」(上三)と言ったとき、Sは「ど  
37 うも君の顔には見覚みおぼえがありませんね」(上三)と答えている。〈見られた人は見た人を見る〉  
38 と、Nは信じていたのかもしれない。夏目語の〈会う〉は〈目と目が合う〉の〈合う〉と同  
39 じ意味かもしれない。で、〈お見合い〉になる。〈雨に遭う〉の〈遭う〉とも同じか。

40 「亭主が聞いたら、いやな気がする」というのは、変。Nは、〈メイサに未練があるのは  
41 メイサに愛され続けているせいだ〉と勘違いしていたか。ただし、Nが実際に見たのは、記  
42 憶の中の若いメイサに似た別人だろう。あるいは、まったくの幻覚だったかもしれない。  
43  
44  
45  
46  
47

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 1 0 「表面にあらわれ易い事実」  
4 5 5 1 1 「昔の事」  
5

6 『三四郎』に、おかしなアジテーターが登場する。彼は無名の学生だ。「麦酒」(『三四郎』  
7 六)に酔っている。自分の言葉にも酔っている。作者も酔っているみたいだ。

8  
9 政治の自由を説いたのは昔の事である。言論の自由を説いたのも過去の事である。自由  
10 とは単にこれ等の表面にあらわれ易い事実の為に専有されべき言葉ではない。吾等新時  
11 代の青年は偉大なる心の自由を説かねばならぬ時運に際会したと信ずる。

12 (夏目漱石『三四郎』六)

13  
14 「政治の自由」は意味不明。「昔」とは、いつか。〈今は「政治の自由」が完全に保証され  
15 ているので、それを説く必要はない〉という意味か。

16 「過去」は、いつまでか。〈現在は「言論の自由」が完全に保証されているので、それを  
17 説く必要はない〉という意味か。

18 「単に」の被修飾語が不明。「表面」と「事実」と「専有」は意味不明。〈「専有され」て  
19 いた〉という「事実」は示されない。誰によって「専有され」ているのかも不明。

20 「新時代」は「1859～62年にわたるプロシア王国の相対的自由化の時期」(『ブリタニカ』  
21 「新時代」と関係があるか。「説かねばならぬ」は唐突。何かを「説いた」のが「昔の事」  
22 や「過去の事」だとしても、それらの「事」が、今、現在、別の何かを「説かねばならぬ」  
23 理由にはならない。「時運」は「運」であり、「際会」は「事件や機会などにたまたまであ  
24 ること」(『広辞苑』「際会」)だ。したがって、「昔」や「過去」との因縁で「説かねばならぬ」  
25 理由など、ありはしない。「偉大なる心の自由」は意味不明。「偉大なる」の被修飾語が決ま  
26 らない。「偉大なる」は広田に関する「偉大なる暗闇」という言葉と関係がありそうだが、  
27 よくわからない。「偉大なる心」あるいは〈「偉大なる」～「自由」〉のどちらでも意味不明。  
28 「偉大なる心の自由」は〈「表面にあらわれ」難い「事実」〉だろうか。あるいは、「事実」  
29 ではなく、空想か。「説かねば」と言うが、どこにも説かれていない。「信ずる」は自説に何  
30 の根拠もないことを自ら暴露しているようなものだ。

31  
32 天より等しく受けた人権(天賦人権(てんぷじんけん))を実現し発展させようという思想。  
33 自由民権運動のなかで深められた。自由の語は中国からの伝来で、随意だけでなく権力か  
34 からの自由、人間としての自由権の意味を持つようになった。民権の語はオランダ留学後の  
35 津田真道(つだまみち)が1868年(明治元)『泰西国法論(たいせいこくほうろん)』で国民の権  
36 利の意味で初めて用いた。自由民権思想の核となる民主主義思想は西欧諸国から流入し  
37 たが、百姓一揆にみられる自由の要求、民衆宗教の人間平等観等が受容の下地になった。

38 (『日本歴史大事典』「自由民権論」江村栄一)

39  
40 〈「政治の自由」や「言論の自由」について説くこと〉は自由民権論のことだろうか。そ  
41 うだとしたら、なぜ、この語を用いないのだろう。

42 作者は、過度の自由を警戒し、虚偽を暗示しているのだろう。  
43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 1 0 「表面にあらわれ易い事実」  
4 5 5 1 2 「政治の自由」

5  
6 『三四郎』の作者は、〈政治の季節は終わった〉と暗示しているのか。

7  
8 若し平八郎が、人に貴賤貧富の別あるのは自然の結果だから、成行の儘に放任するが好  
9 いと、個人主義的に考へたら、暴動は起きなかつたらう。

10 若し平八郎が、国家なり、自治団体なりにたよつて、当時の秩序を維持してみながら、  
11 救済の方法を講ずることが出来たら、彼は一種の社会政策を立てただらう。幕府のために  
12 謀ることは、平八郎風情には不可能でも、まだ徳川氏の手<sup>に</sup>に帰せぬ前から、自治団体とし  
13 て幾分の発展を遂げてみた大阪に、平八郎の手腕<sup>を</sup>を揮はせる余地があつたら、暴動は起ら  
14 なかつたらう。

15 この二つの道が塞がつてみたので、平八郎は当時の秩序を破壊して望<sup>のぞ</sup>を達せようとし  
16 た。平八郎の思想は未だ醒覚せざる社会主義である。

17 未だ醒覚せざる社会主義は、独り平八郎が懐抱してみただけではない。  
18 (森鷗外『大塩平八郎』「附録」)

19  
20 「社会主義」が「醒覚」したのは「昔の事」か。

21  
22 「さうすると文学の本に発売禁止を食はせるのは影を捉へるやうなもので、駄目なの  
23 だらうかね」

24 木村が犬塚の顔を見る目はちよいと光った。木村は今云つたやうな犬塚の詞を聞く度  
25 に、鳥さしがそっと覗<sup>うかが</sup>ひ寄って、糲<sup>もちぎ</sup>竿<sup>を</sup>の尖をつと差し附けるやうな心持がする。そして  
26 かう云つた。

27 「併し影を見て動くものもあるのですから、影を消すのが全く無功ではないでせう。只  
28 僕は言論の自由を大事な事だと思つてみますから、発売禁止の余り手広く行はれるのを  
29 歎かしくは思ふ丈です。勿論政略上<sup>や</sup>已むことを得ない場合のあることは、僕だつて認めて  
30 みます」

31 (森鷗外『食堂』)

32  
33 『三四郎』に「鳥さし」は登場しない。だが、「糲<sup>もちぎ</sup>竿<sup>を</sup>」はある。それは、アジテーターに  
34 向けられたものではなく、作者に向けられたものだ。読者は、ひやりとする。

35  
36 斯くて今や我々青年は、此の自滅の状態から脱出する為に、遂にその「敵」の存在を意  
37 識しなければならぬ時期に到達しているのである。それは我々の希望や乃至其の他の理  
38 由によるのではない、実に必至である。我々は一斉に起つて先ずこの時代閉塞の現状に宣  
39 戦しなければならぬ。自然主義を捨て、盲目的反抗と元禄の回顧とを罷<sup>や</sup>めて全精神を明日  
40 の考察——我々自身の時代に対する組織的考察に傾注しなければならぬのである。

41 (石川啄木『時代閉塞の現状』)

42  
43 意味不明。隠語か、暗号か、自分語か。私が無知なだけか。うんざりだ。

44  
45  
46

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 1 0 「表面にあらわれ易い事実」  
4 5 5 1 3 リバタリアン

5  
6 〈自由〉には二種類ある。

7  
8 本書のテーマは、いわゆる意志の自由ではない。本書で論じるのは、誤解されやすい哲  
9 学用語でいう必然にたいしての意志の自由ではなく、市民的な自由、社会的な自由につい  
10 てである。逆にいえば、個人にたいして社会が正当に行使できる権力の性質、およびその  
11 限界を論じたい。

12 (ジョン・ステュアート・ミル『自由論』「第1章 はじめに」)

13  
14 「政治の自由」や「言論の自由」が「市民的な自由、社会的な自由」のことだとすると、  
15 『三四郎』の内部の世界において『自由論』などに学ぶ必要はなくなっているのだろう。

16  
17 「お前が得意になって妾に喋<sup>しゃべ</sup>ってたヤマトダマシイは、〈東洋の精神文明〉は、どうし  
18 たの？」

19 「クララ。自由平等や男女同権を定めた日本の憲法は、占領軍が作って与えたんです。  
20 人権自由は日本人が独自に考え出したものじゃない。植民地の独立運動を支えた諸民族  
21 平等の理念だって、東洋にはなかった。人類社会の指導理念と言えるような大思想はみん  
22 な西洋の、白人文化の産物です」

23 (沼正三『家畜人ヤプー』「第四十九章 無条件降伏」)

24  
25 日本語の〈自由〉という言葉が自由に操るのは難しい。

26  
27 Four Freedoms

28 1941年1月アメリカ大統領F. D. ルーズヴェルトが議会への教書で述べたもの。彼は  
29 四つの基本的な人間的自由、すなわち、(1) 言論と意志表明の自由(2)、信教の自由、  
30 (3) 欠乏からの自由、および(4) (侵略などの) 恐怖からの自由、が全世界で実現され  
31 ることへの希望を表明した。なお、この考えは大西洋憲章にも採り入れられ、日本国憲法  
32 にも影響を与えた。

33 (『山川 世界史小辞典』「四つの自由」)

34  
35 「四つの自由」以前に「人間的自由」がある。

36  
37 移民や他宗教、LGBTQ(性的少数者)、人工中絶などに寛容なリバタリアンの姿勢はリベ  
38 ラル派のそれに近い。しかし、銃規制や公的医療保険制度などをめぐる立場は正反対。「政  
39 府は自由にとっての障壁」と見なすリバタリアンと「政府は自由のための手段」と見なす  
40 リベラル派の意識の裂け目はあまりに大きい。

41 (渡辺靖『リバタリアニズム』「第1章 リバタリアン・コミュニティ探訪」)

42  
43 「裂け目」は悪くない。

44  
45  
46  
47  
48  
49

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 2 0 「麦酒と珈琲」  
4 5 5 2 1 「自由」の価値

5  
6 「自由」は開化の漢語だ。

7  
8 一般に liberty は政治的自由をさし、freedom は主に精神的自由をさすが、後者が政治  
9 的自由をさすこともある。

10 (『日本国語大辞典』「自由」)

11  
12 「偉大なる心の自由」は「精神的自由」だろうか。

13  
14 freedom 抑圧・制限・妨害などが無いことを表す最も広義の語  
15 liberty 拘束・抑圧・隷属などからの解放の結果としての自由  
16 license (堅) 行動・言論などの無責任な過度の自由・放縦

17 (『オーレックス和英辞典』「自由」)

18  
19 〈自由国家〉は〈free country〉だ。「×a liberal [liberalist] country とは言わない」  
20 (『ジーニアス和英辞典』「自由」) そうだ。

21 なお、〈フリーダム〉や〈リバティ〉には「放縦」の意味もある。

22  
23 行動の自由は内面的自由または意志の自由を認めない決定論の立場と必ずしも相反し  
24 ないが、その行動を決定する意志が、一つの行動(目的)と他の行動(目的)をひとしく  
25 選択し得るか否かにかかる。西洋にあって通常、自由の問題は、初め神(絶対者)の前で  
26 の人間の自由として取り上げられ、中世・近世を通じて神学的な命題の一つであったが、  
27 カント以来、自然の必然性に対する自由が問題とされるようになるとともに、近代政治社  
28 会の担い手たる個人の侵すべからざる権利として考えられるようになった。フランス革  
29 命の標語〈自由・平等・友愛〉にそれが典型的に示されている。日本では1862年、堀達  
30 之助の《英和对訳袖珍辞書》で〈自由〉を freedom の訳としているが、〈専恣横暴〉とい  
31 う負の評価を含む漢語の伝統もあった。

32 (『百科事典マイペディア』「自由」)

33  
34 「偉大なる心の自由」に「負の評価」は含まれていないはずだ。

35  
36 「イブセンの人物に似ているのは里見の御嬢さんばかりじゃない。今の一般の女性<sup>にょしょう</sup>は  
37 みんな似ている。女性<sup>にょしょう</sup>ばかりじゃない、苟くも新しい空気に触れた男はみんなイブセン  
38 の人物に似た所がある。ただ男も女もイブセンの様に自由行動を取らないだけだ。腹のな  
39 かでは大抵かぶれている」

40 (夏目漱石『三四郎』六)

41  
42 この「自由行動」の「自由」には「負の評価」が含まれているのだろう。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 2 0 「麦酒と珈琲」  
4 5 5 2 2 「囚われたる心」

5  
6 尾崎豊のものまねで、こういうのがあった。芸人の名前は忘れた。

7  
8 おでんの中で昆布巻きが叫んでいるよ。「もう縛られるのはいやだ！」

9  
10 昆布巻きは干瓢に縛られている。三四郎は何に縛られているのだろう。  
11 『三四郎』のアジテーターは続ける。

12  
13 吾々は旧き日本の圧迫に堪え得ぬ青年である。同時に新しき西洋の圧迫にも堪え得ぬ  
14 青年であるという事を、世間に発表せねばいられぬ状況の下に生きている。

15 (夏目漱石『三四郎』六)

16  
17 少し前は「我等」(『三四郎』六) だったのが「吾々」に変わっている。「旧き日本の圧  
18 迫」は意味不明。これは「昔の事」や「過去の事」ではないらしい。「堪え得ぬ」の真意は  
19 〈「堪え得」なくなった〉だろう。「ある事を」は〈「ある」。その「事を」〉とやりなさい、  
20 「新しき西洋の圧迫」も意味不明。〈「新しき西洋の」教師による「圧迫」〉の略か。

21  
22 我々は西洋の文芸に囚われんが為に、これを研究するのではない。囚われたる心を解脱  
23 せしめんが為に、これを研究しているのである。この方便に合せざる文芸は如何なる威圧  
24 の下に強いらるるとも学ぶ事を敢てせざるの自信と決心とを有している。

25 (夏目漱石『三四郎』六)

26  
27 「吾々」が「我々」に変わっている。「文芸に囚われ」は意味不明。何かに「囚われ」て  
28 いる様子は語られない。

29 「解脱」の方法その他は不明。酔っ払いの戯言なのだが、酔っているのは作者だろう。読  
30 者も酔わねばなるまい。

31 「この方便に合せざる文芸」は意味不明。「威圧」は「圧迫」と同じか。「学ぶ」は「研究  
32 する」の類語か。「あえてせざるの自信」は意味不明。〈「あえてせざるの」～「決心」〉なら、  
33 わからなくもない。

34  
35 神が事実でない。義務が事実でない。これはどうしても今日になつて認めずにはあられ  
36 ないが、それを認めたのを手柄にして、神を瀆す。義務を蹂躪する。そこに危険は始て生  
37 じる。行爲は、勿論、思想まで、さう云ふ危険な事は十分撲滅しようとするが好い。併し  
38 そんな奴の出て来たのを見て、天國を信ずる昔に戻さう。地球が動かずにゐて、太陽が巡  
39 回してゐると思ふ昔に戻さうとしたつて、それは不可能だ。

40 (森鷗外『かのやうに』)

41  
42 つまらない話だが、『三四郎』にはこの程度の話もないのだ。

43  
44  
45  
46

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 2 0 「麦酒と珈琲」  
4 5 5 2 3 第四の世界

5  
6 「偉大なる心の自由」は、迷わない羊の自由だろう。広い草原で羊飼いに可愛がられる羊  
7 の自由だろう。牧場を実力行使によって広げてしまうのが「政治の自由」だろうか。〈牧場  
8 を広げるべきだ〉と説くのが「言論の自由」だろうか。

9 「偉大なる心の自由」は「日本より頭の中の方が広いでしょう」という広田の戯言と関係  
10 がありそうだ。

11  
12 ぼくはくるみのからの中うごに閉じこめられても、無限に広い大宇宙うちゅうの王と自分を考える  
13 こともできるたちなのだ——ただぼくが悪い夢さえ見なければ。

14 (ウィリアム・シェイクスピア『ハムレット』第二幕第二場)

15  
16 自嘲か。あるいは、ドラマティック・アイロニーか。

17 「偉大なる心の自由」の境地を目指すには、「三つの世界」を脱却した〈第四の世界〉を  
18 構想する必要があるはずだ。そのことに作中の誰も気づいてない。語り手は、どうか。

19 戯言は続く。

20  
21 社会は烈しく揺うごきつつある。社会の産物たる文芸もまた揺きつつある。揺く勢いに乗じ  
22 て、我々の理想通りに文芸を導くためには、零碎れいさいなる個人を団結して、自己の運命を充実  
23 し発展し膨張しなくてはならぬ。今夕の麦酒と珈琲は、かかる隠れたる目的を、一步前に  
24 進めた点に於て、普通の麦酒と珈琲よりも百倍以上の価ある貴たつとき麦酒と珈琲である。

25 演説の意味はざっとこんなものである。演説が済んだ時、席に在った学生は悉ことごとく喝采かつさい  
26 した。三四郎は尤も熱心なる喝采者の一人であった。

27 (夏目漱石『三四郎』六)

28  
29 「社会」の実情について、何も語られていない。

30 「社会の産物たる文芸」は意味不明。反映論みたいだが、だったら、もったきちんとした  
31 説明が必要だ。

32 「勢い」は意味不明。〈「乗」ずる〉にはマイナスの価値がある。「我々の理想」の内容は  
33 不明。「文芸を導く」は〈創作する〉ではなさそうだ。〈小説家を「導く」〉のなら、編集者  
34 か批評家にでもなるのか。「零碎れいさいなる個人」は意不明。「個人を団結し」は意味不明。この後、  
35 サークルでも作ろうというのか。そんな展開はない。「運命」は唐突。「運命を充実し」は意  
36 味不明。〈「運命を」～「膨張し」〉は意味不明。

37 「隠れたる目的」は意味不明。〈「目的を」～「進めた」〉は意味不明。「一步」は不可解。  
38 たった「百倍」か？ 「百倍以上」だから、何万倍でもいいのだろうが、比較の問題ではあ  
39 るまい。冗談にすらなっていない。

40 「麦酒と珈琲」が〈焼酎と番茶〉なら、アジテーターは出現しなかったのかもしれない。  
41 『牛肉と馬鈴薯』(国木田独歩)なら、どうか。「意味」は〈趣意〉と解釈する。

42 「喝采かつさいした」という、その理由は不明。

43  
44  
45  
46  
47

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 3 0 「自由行動」  
4 5 5 3 1 「無分別に」  
5

6 「演説の意味」(『三四郎』六)は語り手の要約によるものだ。勿論、三四郎も同様の要約  
7 をしたのだろう。だから、「演説」そのものが意味不明ではなかった可能性は、あることは  
8 ある。しかし、その場合、作者の意図が疑わしくなる。なぜ、作者は、「意味」でなく、「演  
9 説」そのものを提示しなかったのだろう。不明。

10 翌日は運動会だった。

11  
12 どうしてああ無分別に走れる気になれたものだろうと思った。然し婦人連は悉く熱心  
13 に見ている。そのうちでも美禰子とよし子は尤も熱心らしい。三四郎は自分も無分別に走  
14 けてみたくなった。一番に到着したものが、紫の猿股さるまたを穿はいて婦人席の方を向いて立っ  
15 ている。能く見ると昨夜の親睦会で演説をした学生に似ている。

16 (夏目漱石『三四郎』六)  
17

18 「無分別」は「自由」の類語かもしれない。「走れる」のは男子学生たち。「なれた」は〈な  
19 れる〉が適当だが、揶揄かもしれない。「思った」のは三四郎。

20 「然し」が機能するためには、たとえば、「然し婦人連は」そんなことは思わないらしく、  
21 「悉く熱心に見ている」ようだ)などとすべき。「婦人連」は観客席にいる。「悉く」が三四  
22 郎の印象を表すとしたら、彼はやや正気を失っているのだろう。

23 「よし子」にも三四郎は気がある。「熱心らしい」と思うのは、三四郎が二人のことしか  
24 知らないからだだろう。ただし、語り手の意図は不明。

25 「無分別」は「自由行動」(『三四郎』六)の類語だろう。「偉大なる心の自由」の発露で  
26 はなかろう。三四郎は、昨夜のアジのせいで「無分別」に憧れるようになったらしい。では、  
27 アジの「自由」には「無分別」といったマイナスの価値も含まれていたのか。そうではある  
28 まい。三四郎は誤解したのかもしれない。ただし、自分が誤解していることに気づいていな  
29 いらしい。けれども、そうした文芸的表現になってはいない。

30 三四郎は妄想的になっているらしい。「紫の猿股さるまたを穿はいて婦人席の方を向いて立っている」  
31 という姿は「偉大なる心の自由」の発現なのか。そうではあるまい。だが、「偉大なる心の  
32 自由」を獲得すれば、無邪気に「無分別に」なれそうに思えたか。

33 「似ている」が、しかし、三四郎の錯覚らしい。「無分別に」行動できる体育会系男子の  
34 雄姿と、「昨夜ゆうべ」のアジテーターの雄姿が重なったようだ。しかし、そうした文芸的表現に  
35 なっているとは考えにくい。作者は何をしているのだろう。

36 この後、三四郎は美禰子らと連れ立って歩き、そして、むなしく別れる。すると、「与次  
37 郎と昨夕の会で演説をした学生」(『三四郎』六)を見かける。「昨夜」が「昨夕ゆうべ」になっ  
38 ている。時間が早まっているわけだ。三四郎は記憶を偽造したのか。作者自身、記憶を偽造し  
39 てしまったか。三四郎は彼らと合流しなかったようだが、そうだとしたら、その理由が不明。  
40 この二人の男子学生は、美禰子らを、いわば反転させたもので、三四郎の幻想だろう。三四  
41 郎は、いや、作者は、男女を対称的な存在のように勘違いしているのだろう。勿論、そうし  
42 た文芸的表現が試みられている様子はない。

43  
44  
45  
46

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 3 0 「自由行動」  
4 5 5 3 2 気ままとわがまま

5  
6 本来、人間に自由意志は備わっているのか。

7  
8 自分の行為を自由に決定できる自発性があること。哲学史上、これを肯定する非決定論  
9 と否定する決定論との間で論争がある。

10 (『広辞苑』「意志の自由」)

11  
12 『三四郎』の作者は、この「論争」をスルーしているらしい。

13  
14 周囲の事情を顧みない「自由奔放」と異なり、さまざまな事情に柔軟に対応できる心の  
15 広さをいう場合に用いられる。

16 (『大修館 四字熟語辞典』「自由闊達」)

17  
18 「自由奔放」は、必ずしもマイナスの価値ではない。

19  
20 この僧都、みめよく力強く、大食にて、能書、学匠、辯舌、人にすぐれて、宗の法  
21 燈なれば、寺中にも重く思はれたりけれども、世を軽く思ひたる曲者にて、万自由にし  
22 て、大方、人に従ふといふ事なし。

23 (吉田兼好『徒然草』「第六十段 真乘院に、盛親僧都とて」)

24  
25 「この僧都」の言動は、「寺中」では〈闊達〉のようなプラスの評価を与えられていた。  
26 一方、寺の外の「大方」では〈放恣〉といったマイナスの評価を受けていたか。

27  
28 今日用いる「自由」は、liberty, freedomの訳語に由来する。しかし、本来の「自由」  
29 はわがまま・奔放の意味であったため、訳語として採用することに異論もあったという。  
30 [鈴木丹士郎]

31 (『古語大辞典』「じ-いう【自由】」)

32  
33 「わがまま・奔放」も、必ずしもマイナスの価値ではない。

34  
35 「気まま」は、自分の気持ちを重んじ、その気持ちの向くままに行動すること。「わが  
36 まま」は、それが他人の気持ちや都合とぶつかっても、なお自分の思いどおりにしようと  
37 すること、または、そのような性格の人。「気まま」は、自分の気持ちだけが問題である  
38 が、「わがまま」は他人との関係が問題になる。

39 (『類語例解辞典』203—35)

40  
41 夏目語の「自由」には、プラスとマイナスの評価が入り混じっているようだ。

42  
43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5000 一も二もない『三四郎』  
2 5500 「偉大なる心の自由」  
3 5530 「自由行動」  
4 5533 「たいへんなまちがい」

5  
6 〈自由〉という日本語の意味を、日本人は共有していない。

7  
8 民主主義は、国民を個人として尊重する。したがって民主主義は、社会の秩序および公  
9 共の福祉と両立するかぎり個人にできるだけ多くの自由を認める。各人が生活を経営し、  
10 幸福を築きあげてゆくことは、他人に譲り渡すことのできない自然の権利であるとみる。

11 しかし、持ちつ持たれつこの世の中では、そうした自由および権利と照応して、社会  
12 の一員として守るべき義務があることは当然である。民主主義は、ひろく個人の自由を認  
13 めるが、それをもって気ままと混同するのは、たいへんなまちがいである。

14 (文部省『民主主義』「第一章 民主主義の本質」「四 自由と平等」)

15  
16 〈「民主主義は」～「尊重する」〉は意味不明。文部省は日本語を使えない。

17 「したがって」は機能してない。どこの誰が「両立する」と認めるのか。「かぎり」とい  
18 う話は邪魔。「できるだけ」は笑止千刀。

19 「幸福を築きあげて」は意味不明。「ゆくことは、他人に譲り渡す」は意味不明。

20 「自然の権利」は〈自然権〉が妥当。なぜ、文部省はこの言葉を用いないのか。

21  
22 すべての人間が生まれながらに持っているといわれる権利。近代の自然法論によれば、こ  
23 の権利は国家以前に存し、国家によって人為的に与えられたものではないから、国家はこ  
24 れを侵害し得ないとされる。天賦人権。人権。

25 (『広辞苑』「自然権」)

26  
27 文部省は、「国家以前に存し」という考えをできるだけ薄めようとして、意味不明の言葉  
28 を並べてみた。だが、うまくいかなかった。だから、次の段落の「しかし」で居直り、馬脚  
29 をあらわすことになる。

30 文部省は根本的に間違っている。「自由および権利」というように並べてはいけない。「自  
31 由」に「照応して」いるものなど、何もないからだ。「自由」は絶対的だ。「義務」に「照  
32 応して」と言えそうなのは「権利」だが、「義務」と「権利」は出所が異なる。それらを「照  
33 応して」いるようにするため、国家は法律を拵える。文部省は、〈政権は自然権を制限でき  
34 る〉と明言すべきなのだ。その政権を選択するためのシステムが民主主義だ。というのは、  
35 無論、絵に描いた餅。民主主義は衆愚政治に墮す危険性を常に孕んでいる。常識。

36 出典不明の開化の漢語と俗語の和語を「混同するのは、たいへんなまちがい」だ。「か  
37 かって気まま」は、必ずしもマイナスの価値で用いられる語ではない。「かって気まま」をマイ  
38 ナスの価値で用い、「自由」をプラスの価値で用いて、両者を並べるのは、詭弁ですらない。

39 〈「自由」と「かって気まま」は違う〉というのは、〈自由には良い自由と良くない自由があ  
40 って、良い自由は良いが、良くない自由は良くない〉というのと同じことだ。無意味。

41 「わがまは男の罪 それを許さないのが女の罪」(作詞・作曲：財津和夫『虹とスニー  
42 カーの頃』)ということで、休憩。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 4 0 個人の主義  
4 5 5 4 1 「自我とか自覚とか」

5  
6 Nは、自由が放埒に墮落しないための方法を熟知しているつもりでいたようだ。

7  
8 近頃自我とか自覚とか唱えていくら自分の勝手な真似をしても構わないという符徴に  
9 使うようですが、その中にははなはだ怪しいのが沢山あります。彼らは自分の自我をあく  
10 まで尊重するような事をいいながら、他人の自我に至っては毫も認めていないのです。い  
11 やしくも公平の眼を具し正義の観念を有つ以上は、自分の幸福のために自分の個性を発  
12 展して行くと同時に、その自由を他にも与えなければ済まん事だと私は信じて疑わない  
13 のです。我々は他が自己の幸福のために、己れの個性を勝手に発展するのを、相当の理由  
14 なくして妨害してはならないのであります。

15 (夏目漱石『私の個人主義』)

16  
17 「自我」には「自分自身の興味や資質などにのみかかわり合い(自己中心的)、もっぱら  
18 自分自身の安寧をはかろうとする(利己的)過程などが含まれる」(『ブリタニカ』「自我」)  
19 とされる。この場合、「真なる自己認識をもとにして、自己のおかれた状況のなかで適切な  
20 態度決定をすることが自覚の本義である」(『ブリタニカ』「自意識」)とすると、「自覚」と「自  
21 我」を並べるのは無意味だろう。したがって、「自我とか自覚とか唱えて」いるのが誰であ  
22 るようと、その人は混乱していることになる。では、「自我」を「唱えて」いる人と「自覚」  
23 を「唱えて」いる人は別人なのだろうか。その場合、「自我」は「自己中心的」で「利己的」  
24 だから、「自我」を「いくら自分の勝手な真似をしても構わないという符徴に使う」のは間  
25 違ってない。間違っているのであれば、Nはこの「自我」を「自覚」と同様にプラスの価  
26 値で用いていることになる。この場合、「唱えて」いる人は同一人物でいい。また、「自我と  
27 か自覚とか」は、後に出てくる「自由」しかもプラスの価値のその類語と解釈できる。「そ  
28 の中」の「そ」の指すものは不明だが、「その中には」とある以上、Nは〈「いくら自分の勝  
29 手な真似をしても構わない」という考えは基本的に正しい〉と考えていることになる。する  
30 と、「符徴」にこめたはずの皮肉が利かなくなる。あるいは、皮肉でもないか。

31 「彼ら」は〈「符徴に使う」人々〉と解釈する。「自分の自我」は〈「自分」の自由〉と読  
32 む。「自分の自我をあくまで尊重するような事」は正しいのだろう。だったら、「他人の自  
33 我」を尊重しないような「事」も正しいはずだ。この「ながら」は〈同時〉という意味合  
34 いになる。しかし、逆接的に用いられているらしい。逆接的に用いるのであれば、「自分の」  
35 を削って、〈万人の「自我をあくまで尊重するような事をいいながら、」実際には「自分の自  
36 我」だけを尊重し、「他人の自我に至っては」などとやらねばならない。「彼ら」が「自分  
37 の自我をあくまで尊重する」から「他人の自我に至っては毫も認めていない」のなら、筋は  
38 通る。「彼ら」は、「怪しいの」ではない。「怪しいの」はN自身だ。「認めていないのです」  
39 は駄々っ子みたい。〈「認めていない」から駄目な「のです」〉などとすべきだ。

40 「いやしくも」は意味不明。「公平の眼」は意味不明。なぜ、「公平の眼や正義の観念を有  
41 つ」ことになっているのだろう。「信じて」いるのなら、夏目宗だろう。

42 「相当の理由」と判断する自由を行使する「我々」こそ「怪しいの」だろう。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 4 0 個人の主義  
4 5 5 4 2 入我我入

5  
6 『私の個人主義』は〈私個人の主義〉でしかない。いや、「主義」ですらない。

7  
8 ①〔仏〕密教で、如来の身口意（しんくい）の三密が我に入り、我の身口意の三業が如来  
9 に入り、一切諸仏の功德をわが身に具足すること。

10 ②（汝が我か、我が汝かの意から）どちらとも解されること。不得要領または無茶苦茶の  
11 意に用いる。

12 (『広辞苑』「入我我入」)

13  
14 Nは、私には意味不明の①の「不得要領または無茶苦茶」と俗語の②の「具足すること」  
15 と混同していたのではないか。つまり、①と②の混交だ。

16  
17 彼はこの講演で、イギリス留学中に「自己本位」の思想に達したと語り、個性の発展を  
18 図る個人主義を説くが、しかし、「自己の個性の発展を仕遂（しと）げようと思うならば、  
19 同時に他人の個性をも尊重しなければならない」とする。個人主義は「道義上の個人主義」  
20 でなければならず、「もし人格のないものが無暗（おやみ）に個性を発展しようとする、  
21 他人を妨害する」結果になる。彼はまた「常住坐臥（ざが）国家の事以外を考へてはなら  
22 ない」といった偏狭な国家主義を批判するが、前述の個人主義が真の国家主義と矛盾しな  
23 いことも主張する。なぜなら、国家存亡の際に、「人格の修養の積んだ人は、個人の自由  
24 を束縛しても国家の為（ため）に尽すようになるのは天然自然」だからである。漱石のこ  
25 うした考へに、ヨーロッパの個人主義の反映をはっきりみることができよう。

26 (『日本大百科全書（ニッポニカ）』「個人主義」宇都宮芳明)

27  
28 この項に出てくる人名は、プロタゴラス、パークリー、シュティルナー、エピクロス、カ  
29 ント、そして、Nだ。たった一個の講演記録によって、Nはこうした世界的有名人と肩を並  
30 べることになった。しかも、『私の個人主義』に関する記述が二割ほどを占める。

31 「この講演」は『私の個人主義』だ。「自己本位」は意味不明。夏目語だろう。

32 「道義」にもいろいろあろう。ちなみに、『野分』の「道義」も意味不明。「人格」も意味  
33 不明。「人格」の有無や高低などを、誰がどうやって判定するのか。

34 「常住坐臥（ざが）」同じことばかり考へているのは、「偏狭」ではなくて、偏狂だろう。

35 「真の国家主義」は意味不明。だから、「矛盾しないこと」になるわけだ。

36 どんな場合が「国家存亡の際」か、Nが判定するのか。誰を「人格の修養を積んだ人」か、  
37 Nが判定するのか。「人格の修養の積んだ人」以外の、たとえば徴兵忌避者や犯罪者などは  
38 「国家の為（ため）に尽す」義務を免除されるのだろう。「天然自然」は愚かしい。ちなみ  
39 に、一八九二年、Nは「徴兵を免れるため分家し」（新潮文庫『こころ』「年譜」）ている。  
40 日清戦争の二年前だから、〈今はまだ「国家存亡の際」ではない〉と、青年Nは判断したの  
41 だろう。賢い。

42 N式個人主義は「ヨーロッパの個人主義」よりも優れているのか。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 4 0 個人の主義  
4 5 5 4 3 空想的個人主義

5  
6 N式でない普通の個人主義は、次のようなものだ。

7  
8 個人の自由と人格的尊厳を立脚点とし、社会や集団も個人の集合と考え、それらの利益  
9 に優先させて個人の意義を認める態度。

10 (『広辞苑』「個人主義」)

11 「社会や集団」と対立しないのなら、空想的個人主義だろう。いや、主義ですらない。

12  
13 一体何々主義という事は私のあまり好まない所で、人間がそう一つ主義に片付けられ  
14 るものではあるまいとは思いますが、説明のためですから、ここには已<sup>やむ</sup>を得ず、主義とい  
15 う文字の下に色々の事を申し上げます。ある人は今の日本はどうしても国家主義でなけ  
16 れば立ち行かないようにいい振ら視<sup>ま</sup>したそう考えています。しかも個人主義なるもの  
17 を蹂躪<sup>じゅうりん</sup>しなければ国家が亡びるような事を唱道するものも少なくはありません。けれど  
18 もそんな馬鹿気たはずは決してありようがないのです。事実私共は国家主義でもあり、世  
19 界主義でもあり、同時にまた個人主義でもあるのであります。

20  
21 個人の幸福の基礎となるべき個人主義は個人の自由がその内容になっているには相違  
22 ありませんが、各人の享有するその自由というものは国家の安危に従って、寒暖計のよう  
23 に上ったり下ったりするのです。

24 (夏目漱石『私の個人主義』)

25  
26 〈「何々」～「という文字の下に色々の事を申し上げ」る〉のがNのスタイルだ。

27 貧乏人は「国家主義」を利用せねばならない。なぜなら、不当な暴力から貧乏人を守って  
28 くれるのは国家だけだからだ。Nは「説明のため」国家主義者になりすまさなければならな  
29 かった。「馬鹿気た」ことを言っているのはNなのだ。

30 「寒暖計」の比喻は不適切。

31 意味不明のN式個人主義から日本国民が尊重すべき「日本国憲法」的個人主義までをひっ  
32 くるめた個人主義を特別扱いし、プラスの評価を与える。そして、マイナスの評価を与えら  
33 れる個人主義を〈利己主義〉と呼ぶ。そうすれば、話は簡単になりそうだが、どうだろう。

34  
35 彼は自分ひとりのこと、——世の鑑<sup>かがみ</sup>にもたどうべき自分のことしか、考えなかった。そ  
36 して他人が、彼のことを同じように心から考えてくれない場合には、本当に腹を立てた！  
37 と同時に彼は、自分をエゴイストとは思わず、——何よりもエゴイストを非難し、エゴイ  
38 ズムを攻撃した！——むりもない！ 他人のエゴイズムは自分のエゴイズムの邪魔にな  
39 るのだ。

40 (ツルゲーネフ『散文詩』「エゴイスト」)

41  
42 「自分のエゴイズム」を攻撃する〈もう一人の自分〉も「エゴイスト」だろう。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』
- 2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」
- 3 5 5 5 0 「現実よりたしかな夢」
- 4 5 5 5 1 積極的自由と消極的自由

5  
6 自由には二種ある。積極的自由と消極的自由だ。両者は、〈「自由」対「かってきまま」〉  
7 のように、〈一方がプラスで、もう一方がマイナス〉という関係にあるのではない。

8  
9 みずからが思いどおりに主体的選択をしようとする事。「～への自由」として定式化  
10 することができる。

11 (『ブリタニカ国際大百科事典』「積極的自由」)

12  
13 「～への自由」の反対は〈～からの自由〉だろう。

14  
15 と云って、進まぬものを貰いましょうと云うのは今代人として馬鹿気ている。

16 (夏目漱石『それから』十三)

17  
18 「進まぬものを貰いましょう」と言わないのが消極的自由だ。

19  
20 多くの自由主義思想家たちは、この自由の概念こそが唯一の「自由の名による自由の抑  
21 圧」につながらない最小限の自由の本質であるとみなしているが、自由が他者の自由と衝  
22 突し放埒に墮落しないために、どこまで強制を認めるかで見解が分れる。

23 (『ブリタニカ国際大百科事典』「消極的自由」)

24  
25 「自由が他者の自由と衝突し」ないための公式みたいなものは、ないはずだ。

26  
27 フランス革命によって平等は自由と並んで民主主義の基本理念となり、19世紀中頃ま  
28 では自由と平等は矛盾しないと考えられてきた。なぜならば、ブルジョワは自由を経済活  
29 動の自由と考え、平等を概念的平等ないし権利行使の平等と考えていたからである。しか  
30 し次第に、このような自由は社会的、経済的不平等をもたらすことがわかってきたため、  
31 19世紀以降社会の不平等是正が先進国の大きな政治的課題となった。

32 (『ブリタニカ国際大百科事典』「平等」)

33  
34 「大きな政治的課題」を軽視するN式個人主義への隷従は個人の自由だ。

35  
36 **戦争は平和なり**

37 **自由は隷従なり**

38 **無知は力なり**

39 (ジョージ・オーウェル『一九八四年』)

40  
41 〈「罪悪」は「神聖」なり〉と宣言したつもりなら、Sは自己矛盾に陥っている。自己矛  
42 盾ですらないのなら、「気が狂った」(下五十六)と見なすべきだ。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 5 0 「現実よりたしかな夢」  
4 5 5 5 2 『不如帰』

5  
6 「偉大なる心の自由」は意味不明だが、解釈は考えられる。それは〈愛する義務からの消  
7 極的自由〉だろう。〈誰かを愛するための積極的自由〉ではない。

8 明治になって〈恋愛結婚〉という考えが輸入された。だが、恋愛結婚が主流になるのは、  
9 いわゆるトレンドイ・ドラマが流行した 1980 年代ではなかろうか。やがて、結婚を前提  
10 としない恋愛が普通になった。〈初恋の人同士で結婚する〉なんてのは、二十一世紀の日本  
11 では、困難というより、世間知らずみたいに思われているのかもしれない。

12 〈自由恋愛〉という言葉は明治にもあった。しかし、それは「恋愛を放縦なものとして言  
13 った語」(『広辞苑』「自由恋愛」)であり、〈淫乱〉の同義語だった。性行為を伴わなくても、道徳  
14 的には「罪悪」だ。昭和の恋愛は、いくら奔放のようでも、結婚を前提としたものだった。  
15 そうではない恋愛は、『同棲時代』(上村一夫)で描かれたように、異常なものと思われてい  
16 た。〈元カレ〉などという言葉が女性が平気で口にするようになったのは、二十一世紀に入  
17 ってからではなかろうか。

18  
19 片岡陸軍中将の娘浪子(なみこ)は、海軍少尉川島武男(たけお)と結婚したが、結核  
20 にかかり、家系の断絶を恐れる姑(しゅうとめ)のお慶(けい)によって武男の留守中に  
21 離縁される。2人の愛情はとだえなかったが、救われるすべのないまま、浪子は、もう女  
22 なんぞ生まれはしないと嘆いて死ぬ。

23 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「不如帰 ほととぎす」吉田正信)

24  
25 明治の常識では、自由恋愛は不良のすることだった。しかし、三四郎は、そうした常識の  
26 せいで恋愛に踏み切れないのではない。彼は、自分のために準備されている「第三の世界」  
27 から拒まれているように感じているのだ。不合理だろう。

28 三四郎が「ラブ」をどのようなものと考えているのか、よくわからない。「細君一人を  
29 知って甘んずるのは、進んで自己の発達を不完全にする様なものである」(『三四郎』四)と  
30 いう文が意味不明だからだ。この「細君」はお光と決まっています、〈結婚後も、妻以外の女  
31 性と自由恋愛をしたい〉という含意がありそうだ。しかし、独身の三四郎にこんなことを考  
32 える余裕はなかろう。〈複数の女性と自由恋愛をしてから、その中の一人と結婚したい〉と  
33 いうように誤読できなくもないが、この場合でもまだ余裕がある。普通の若者なら、〈相手  
34 は誰でもいいから、とにかく一度は自由恋愛を試してみたい〉と願うのではなかろうか。

35  
36 先月大磯へ行ったものに両三日前東京で逢うなどは神秘的でいい。所謂<sup>いわゆる</sup>霊の交換だね。  
37 相思の情の切な時にはよくそう云<sup>ママ</sup>う現象が起るものだ。一寸聞くと夢の様だが、夢にして  
38 も現実より<sup>たし</sup>慥かな夢だ。

39 (夏目漱石『吾輩は猫である』六)

40  
41 頑張れば、夢は現実になる。だが、「現実より<sup>たし</sup>慥かな夢」をあえて「現実」に変える動機  
42 はなかろう。「第三の世界」が拒んでいるのは〈夢よりも不確かな現実〉の誰かだろう。

43  
44  
45  
46  
47

1 5 0 0 0 一も二もない『三四郎』  
2 5 5 0 0 「偉大なる心の自由」  
3 5 5 5 0 「現実よりたしかな夢」  
4 5 5 5 3 「他本位」対「自己本位」

5  
6 「自己本位」は夏目語らしい。Nにとって特殊な意味があるのではなくて、確かな意味が  
7 ないようだ。

8  
9 その時の彼は他の事を考える余裕を失って、悉く自己本位になっていた。

10 (夏目漱石『門』十七)

11  
12 「他の事を考える余裕を失って」いるだけであり、悪意や害意はなかりう。

13  
14 私はこの自己本位という言葉をも自分の手に握ってから大変強くなりました。

15 (夏目漱石『私の個人主義』)

16  
17 〈「言葉を」～「握って」〉は意味不明。「自分の」は不要。どう「強く」か。

18  
19 吾々の書生をしている頃には、する事為す事一として他を離れた事はなかった。凡てが、  
20 君とか、親とか、国とか、社会とか、みんな他本位であった。それを一口にいうと教育を  
21 受けるものが悉く偽善家であった。その偽善が社会の変化で、とうとう張り通せなくなっ  
22 た結果、漸々自己本位を思想行為の上に輸入すると、今度は我意識が非常に発達し過ぎて  
23 しまった。

24 (夏目漱石『三四郎』七)

25  
26 広田が語っている。三四郎が聞かされている。読者は読まされている。私はつらい。

27 「他を離れ」は意味不明。

28 「他本位」は意味不明だが、この逆が「自己本位」だ。

29 「それは「他本位」か。「教育を受けるものが悉く偽善家であった」は〈「教育を受ける  
30 ものが悉く偽善家」になってしまうの「であった」〉の略と解釈する。

31 「社会の変化」の内容は不明。「思想行為の上に輸入すると」は意味不明。「輸入すると」  
32 とあるから、「自己本位」を英語に戻すと、〈エゴイズム〉だろう。しかし、〈エゴイズム〉  
33 にはいろんな意味があるので、この語を睨んでも埒はあかない。「我意識」は意味不明。

34 広田は「自己本位」を批判している。では、彼はNの論敵か。不明。

35 英国留学中、Nにコペルニクスの転回が起きたように思われる。だが、「主観が客観に従  
36 うのではなく、逆に客観が主観に従い、主観が客観を構成する」(『広辞苑』「コペルニクス  
37 的転回」というふうに変ったのではない。三四郎の「世界」は、「現実」を空想する三四  
38 郎自身のために仮設されたものだ。

39 「我々は西洋の文芸に囚われんが為に、これを研究するのではない。囚われたる心を解脱  
40 せしめんがために、これを研究しているのである」(『三四郎』六)という意味不明の宣言  
41 によって、作者は虚偽の暗示を試みているはずだ。〈「文芸」は享受者である自分を「解脱せ  
42 しめんが為に」発信されている〉という被愛妄想を下手に語ったものだろう。

43  
44  
45  
46

1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51

第六章

「どうです、王さま。ろうやの中では、なにをしても自由です。なにをしなくても自由です」

(寺村輝夫『王さまきえたゆびわ』)

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6110 『君たちはどう生きるか』  
4 6111 『私たちの望むものは』

5  
6 『君たちはどう生きるか』（吉野源三郎）というリベラリストの免罪符みたいなものが漫  
7 画になって、よく売れたらしい。タイトルからおかしい。〈<sup>そもぎん</sup>怎麼生〉の和訳か。  
8 「どう生きるか」の真意は〈こう生きろ〉だ。あからさまに、〈君たちはこう生きろ〉と  
9 命令されたら、「君たち」は賛成、反対が言える。また、〈言われた通り、こう生きたら失敗  
10 したので、責任を取ってください〉と、クレームをつけることもできる。

11 「君たちはどう生きるか」という問題に対する正しい解答の形式は、〈私たちはこう生き  
12 る〉というものだ。〈こう〉がどうしても、集団主義的な答え方しかできない。この形式を無  
13 視して、〈私だけはこう生きる〉と答えたら、話にならない。〈こう〉がどうであれ、ナンセ  
14 ンスだ。日本語を重んじるなら、解答者は集団主義者にならざるをえない。汚いトリックだ。

15  
16 私たちの望むものは 決して私たちではなく  
17 私たちの望むものは 私であり続けることなのだ  
18 (作詞・作曲 岡林信康『私たちの望むものは』)

19  
20 意味不明の問題に答えてしまう人は、何主義者であれ、混乱している。単に愚かなのでは  
21 ない。〈「向上心」のある「馬鹿」〉だ。Kの同類。

22 君が〈私たち〉という主語を用いるのなら、君は「君たち」の代表者などを紹介しなけれ  
23 ばならない。社員の失敗は社長が責任を取る。さて、「君たち」の代表者は君の失敗の責任  
24 を取ってくれるのか。そもそも、どうやって代表者を決めたのか？

25 君が「君たち」の代表者だとしよう。そして、「君たちはどう」かして「生きる」と決め  
26 たとしよう。では、義勇軍を作って戦地で死ぬのか。赤紙を燃やして拷問されて死ぬのか。  
27 暴君を殺して死刑になるのか。だったら、〈「どう」死ぬか〉という問題になる。

28 When 平和な時代？ 存立危機事態？ 就職まで？ 定年退職まで？ 不定？

29 Where 大日本帝国？ 大東亜共栄圏？ 普通の国なら、どこへでも移住？

30 Who 「君たち」は少国民だが、女子は入るのか。無理に日本人にされた人は？

31 What 「生きる」とは、何を「どう」することなのか？

32 Why なぜ「生きる」のか。「君たち」に共通の目的や理想、敵、障害、その他は何か。

33 How 「どう」って、たとえば、どう？ 目的が違ってても方法さえ同じなら、大丈夫か。

34  
35 私たちの望むものは あなたと生きることでなく  
36 私たちの望むものは あなたを殺すことなのだ  
37 (作詞・作曲 岡林信康『私たちの望むものは』)

38  
39 私の望むことは「君たち」を殺すことなのだ。「君たち」は「良い子でいたい お利口さ  
40 ん」（岡林信康『今日を越えて』）だ。ただし、実際に皆殺しにすることはできない。できた  
41 としても、「君たち」のイメージが頭の中に巣食っていたら、何にもならない。逆に言うと、  
42 「君たち」のイメージをごみ箱に入れることができれば十分なのだ。黙殺！

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6110 『君たちはどう生きるか』  
4 6112 日馬富士と貴ノ岩

5  
6 『君たちはどう生きるか』は、あたかも全体主義に対する最後の防波堤だったように誤読  
7 されている。だが、実際には、全体主義に対する白旗なのだ。

8 あらすじ。学内の旧秩序を後輩に強制する黒川たちが新秩序を提唱する北見たちを殴る。  
9 本田は傍観。北見たちの父兄がモンスター・ピュアレンツになって学校に抗議し、黒川たち  
10 は「譴責」を受ける。本田は北見らのシンパにさせてもらう。そして、おしまい。

11 この話は、〈真面目な日馬富士が生意気な貴ノ岩を殴った〉という話に似ている。互いの  
12 言い分をちゃんと聞いてやって、冷静に吟味しないと、真相は解明できない。ところが、語  
13 り手は、主人公の見方でしか語らない。依怙鼻息をしている。

14 黒川は北見に服従したのか。あるいは、両者は仲直りをして、仲間になったのか。以後、  
15 学内で争い事はなくなったのか。そういうことがきちんと語られていない。だから、物語と  
16 して未完成だ。つまり、確かな意味がない。こんな中途半端なものを読んで、何事かを悟っ  
17 たつもりになるとしたら、「君たち」はおっちょこちょいだ。

18 本田は、北見と黒川の対立に関わらなかった。そのことは、偉くもないが、悪くもない。  
19 ところが、彼は「ほんとに、ほんとにいくじがなかった」と恥じて、死にたくなる。ただし、  
20 反省はしない。なぜ、「いくじ」がなかったのか。ないのが普通だからだ。〈浦川を守るとい  
21 う口実で北見は黒川と対立する〉という物語に、本田の出番はなかった。彼は、そのことが  
22 まったく反省できていない。イジメは、学校という閉鎖的な社会だから起きた。そのことを、  
23 作中の誰も指摘しない。学校がなければ、あるいは、学校が社会に対してもっと開かれてい  
24 れば、生徒間の対立の質は違っていたろう。

25 当時の国際情勢の比喩として読んでみよう。黒川は米国で、手下たちは英国、中国、オラ  
26 ンダなどの象徴になる。北見は大日本帝国で、いじめられっ子の浦川は東南アジアの植民地、  
27 水谷は満州国の象徴で、本田は従軍記者。モンスター・ピュアレンツは神風か。この異本は  
28 大東亜戦争肯定論になってしまう。

29 二十一世紀に当てはめれば、黒川は北朝鮮だ。その仲間はロシアと中国。浦川は南朝鮮(サ  
30 ウス・コリア)で、北見は米国。水谷は自衛隊トップ。本田は、マスゴミコメンテーター。  
31 モンスター・ピュアレンツは国連。この異本の作者は、北朝鮮の暴走を期待している。

32 『君たちはどう生きるか』には種本があったようだ。

33

34 ある日、僕がうんどう場<sup>ママ</sup>へ出て見ると、中村君が泣いておりました。聞けば級のものが二  
35 人で、中村君を生き<sup>なま</sup>だといつて、いぢめたのださうです。

36 僕は

37 「君しつかりしたまへ。日本の男は泣くものではない。」

38 といつて、力をつけてやりました。

39

(『国語読本巻五 第二課』\*)

40

41 偉そうな「僕」は「中村君」をさらに「いぢめた」のだが、その自覚がない。

42 本田は、北見たちにいじめられるのが怖くて交際を復活したのに違いないのだ。

43

44 \* 『いま日本人に読ませたい「戦前の教科書」』(日下公人)より再引用。

45

46

47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6110 『君たちはどう生きるか』  
4 6113 八紘一宇

5  
6 『君たちはどう生きるか』の原典は『坊っちゃん』だ。北見が「山嵐」で、黒川が「赤シ  
7 ャツ」に相当する。ただし、態度の硬軟は逆。浦川は「うらなり」で、ウラ繋がり。本田は  
8 「五分刈り」で、共通点は「弱虫」のところ。「マドンナ」は、かつ子だ。  
9 本田は吊るし上げを食うのが怖くて、勝利者に尻尾を振る。許された彼は、もう、反省が  
10 できなくなってしまう。そして、意味不明の総括をする。

11  
12 僕は、すべての人がおたがいによい友だちであるような、そういう世の中が来なければ  
13 いけないと思います。人類は今まで進歩して来たのですから、きっと今にそういう世の中  
14 に行きつくだらうと思います。そして僕は、それに役立つような人間になりたいと思いま  
15 す。

16 (吉野源三郎『君たちはどう生きるか』「十. 春の朝」)

17  
18 「すべての人」に媚びるから、媚びる君は身動きが取れなくなるのだ。「おたがい」で  
19 なければ、一方的に「よい友だちであるような」関係もあるのか。「よい友だち」とは、具  
20 体的にどんな関係か。「いけない」と誰が決めたのか。「それ」はどれ？

21  
22 「世界を一つの家にする」を意味するスローガン。第2次世界大戦中に日本の中国、東  
23 南アジアへの侵略を正当化するためのスローガンとして用いられた。

24 (『ブリタニカ国際大百科事典』「八紘一宇」)

25  
26 口先だけの〈多様性〉や本田の「そういう世の中」の思潮は、八紘一宇と区別できない。

27  
28 「世界は一家、人類はみな兄弟、仲よくしましょう……」  
29 あれにはじめて接した時、私はきもをつぶした。異次元にでも飛びこんだような気分  
30 におちいった。いつ中止になるかわからないので、注のかわりに書いておく。競艇を主催す  
31 る日本船舶振興会の流しているものである。

32 (星新一『できそこない博物館』「薬など」)

33  
34 『君たちはどう生きるか』ブームは、私には「異次元」の出来事のようなのだ。  
35 友愛と「進歩」は、両立するのか。両立しないとき、どちらを優先させるのか。

36  
37 コンドルセの《人間精神の進歩》(1795年)がそのマニフェストである。しかし技術と  
38 産業のもたらした人間疎外や公害、科学知識の普及に伴う生命軽視の風潮や道徳的危機  
39 は、進歩の観念に深い疑いをだかせるにいたっている。

40 (『百科事典マイペディア』「進歩」)

41  
42 「君たち」は、イエスや釈迦よりも「進歩して」いるつもりなのか。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6120 アンパンチ！  
4 6121 詭弁

5  
6 骨董屋は、騙されたふりをして、平然と贋物を売りつける。

7  
8 最後に亡き吉野さんの霊に一言申します。この作品にたいして、またこの作品に凝集さ  
9 れているようなあなたの思想にたいして「甘ったるいヒューマニズム」とか「かびの生え  
10 た理想主義」とか、利いた風の口を利く輩には、存分に利かせておこうじゃありませんか。  
11 (丸山真男『君たちはどう生きるか』をめぐる回想)

12  
13 「霊」の返事はない。丸山の空想する返事もない。「霊」が冗談なら、「回想」も冗談だろ  
14 う。全体的に冗談口調なのが気に障る。

15 〈「作品に凝集されているような」～「思想」〉は意味不明。「ような」は怪しい。  
16 丸山らの敵は「利いた風の口を利く輩」と呼ばれることに決まっているらしい。

17  
18 私自身の選択についていうならば、大日本帝国の「实在」よりも戦後民主主義の「虚妄」  
19 の方に賭ける。

20 (丸山真男『増補版 現代政治の思想と行動』「増補版への後記」)

21  
22 丸山は賭博師でもあったようだ。

23  
24 選択肢は、本当に二つしかないのでしょうか。つまり、戦後民主主義を選択しなければ、  
25 大日本帝国に戻るしかないのかということです。

26 (香西秀信『レトリックと詭弁 禁断の議論術講座』)

27  
28 香西は、他にも丸山の「詐術」(『レトリックと詭弁』)を挙げて批判している。

29  
30 地政学も、いうまでもなく、いくつかの仮説群から構成される地理科学、もしくは政治  
31 科学の一分野であるが、そのテーゼは、確かに国際的な政治戦略を策定する上で強力な武  
32 器として役立つ。したがって、地政学を知る者と、知らない者とは、国際政治学への理  
33 解度において雲泥<sup>うんでい</sup>の差が生じてくるであろう。

34 それゆえ、人間という愚かな生きものに対する洞察<sup>とうさつ</sup>の浅い軽薄な人間は、地政学のとり  
35 こになりやすい。「たとえ、地政学が虚構論理であろうとも、これに賭ける<sup>か</sup>」などという  
36 者が出現する。これが戦前のドイツや日本の一部の指導者がおちいった<sup>かんせい</sup>陥穽なのである。  
37 戦後になると丸山真男氏のように、「たとえ戦後民主主義が虚構であろうとも、それに賭ける」  
38 という人が現われた。いずれも、科学の仮説性をわきまえていない小善人たちの自己陶醉と  
39 いうべきであろう。

40 (倉前盛通『悪の論理』「地政学とは何か」)

41  
42 この「虚構」は「虚妄」が適切か。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6120 アンパンチ！  
4 6122 バベルの塔

5  
6 人それぞれ、善悪に関する考えが違うのに、どうして仲良くできよう。

7  
8 ノアの大洪水後、人々が築き始めた天に達するような高塔。神は人間の自己神格化の傲慢を憎み、人々の言葉を混乱させ、その工事を中止させたという。

9  
10 (『広辞苑』「バベルの塔」)

11  
12 人は、どんなとき、ある種の人を排除したくなるのか。話が通じないときだ。

13  
14 ここにきて、おじさんは「人間分子の関係」は、この言葉のあらわしているように、  
15 まだ物質の分子と分子との関係のようなもので、人間らしい人間関係にはなっていない」  
16 と正論を語っています。なぜもっと早くにそのことをコベル君に伝えなかったのかと思  
17 いますが、それはおじさん自身がうまく理解できていない事柄だったからです。というの  
18 もおじさん自身、「人間らしい人間関係」がどういうものであるかうまく言い当てるこ  
19 とができていないからです。おじさんは確かに「人間は、いうまでもなく、人間らしくな  
20 くっちゃあいけない。人間が人間らしくない関係の中にあるなんて、残念なことなんだ。」  
21 とも言っていましたが、そのうまくわからない原因について、「これは、人類が今まで進  
22 歩して来て、まだ解決の出来ないでいる問題の一つなんだ」というふうに、人類の課題に  
23 してしまっています。

24 私は、それは人類の課題なのではなく、おじさんの思考法の欠点から来ているのだ、と  
25 指摘したいと思います。その欠点とは、「人間の偉大さ」を「上から見る目」にしか置け  
26 ていない、という欠点です。

27 (村瀬学『君たちはどう生きるか』に異論あり！ 「人間分子観」について議論しましょう)  
28 「三 ニュートンの林檎と粉ミルク——「網目の法則」は「取り換え」がきく人間関係」

29  
30 Kだったら、〈媚びる君の「おじさん」も村瀬のおじさんも、〈この人間らしいという言  
31 葉のうちに〉～「自分の弱点の凡てを隠している」(下三十一)〉と一蹴することだろう。

32 おじさんたちが認めているとおり、「人間らしい人間関係」という言葉は意味不明なのだ  
33 から、「人間は、いうまでもなく、人間らしくなくっちゃあいけない」という文は、「いうま  
34 でもなく」無意味で、これは「解決の出来ないでいる問題」ではなく、どんな「問題」でも  
35 なくて、だから、「うまくわからない原因」などといったものもない。「課題」はないのだから  
36 「思考法」もない。「人間の偉大さ」などにも、確かな意味はない。

37  
38 人間は、人間的という言葉に呪縛されてはならない。人間の悪を非人間的と呼んで、人  
39 間から切り離し、自分を人間的と呼んで、それとは無縁なものを見なしてはならない。

40 (なだいなだ『人間、この非人間的なもの』「それでも、私は人間」)

41  
42 『君たちはどう生きるか』に、確かな意味はない。だから、「異論」は無駄口。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6 0 0 0 『それから』から『道草』まで  
2 6 1 0 0 『それから』の「減らず口」  
3 6 1 2 0 アンパンチ！  
4 6 1 2 3 『向上心』と『人はなんで生きるのか』

5  
6 Kは、「向上心」の意味を、他の人々と共有していなかったらしい。Sは、「向上心」のK  
7 的意味を知らなかった。知らないということを軽視していた。Kは、「向上心」のK的意味  
8 がSに知られていないことに気づかなかった。こうした反省がSにはできない。

9  
10 包容力が豊かで健全な人たちはみな、希望に満ちていると同時に朗らかである。彼らが  
11 示した手本には伝染力があり、近づいてその影響を受けた人たちを元気づけ明るくする。  
12 この朗らかさの基礎となるのは、愛と希望と忍耐力である。

13 愛は愛を呼び覚まし、慈悲を生む。愛は惜しみなくやさしくそして誠実であり、善悪を  
14 見きわめるものである。愛は物事を明るく変え、常に幸福を追求する。愛は明るい考え方  
15 を育て、朗らかな雰囲気の中に宿る。

16 愛は無料だが、その価値ははかり知れない。愛は愛を持つ者を祝福し、そうでない人た  
17 ちの胸にもあり余るほどの幸福を育てるからである。悲しみさえも愛があれば喜びにつ  
18 ながり、流す涙も甘い露の味がする。

19 (サミュエル・スマイルズ『向上心』「第1章 自分を大きく育てる」)

20  
21 「朗らかさ」の足りない憂い顔の「君たち」は混乱している。

22  
23 「今こそわたしは、ひとが自分で自分のことを考える心づかいによって生きているよ  
24 うに思うのは、それはただ人間がそう思うだけにすぎなくて、じっさいはただ、愛の力だ  
25 けによって生きているのだということが、わかりました。愛によって生きているものは、  
26 神さまの中に生きているもので、つまり神さまは、そのひとの中にいらっしゃるのです。  
27 なぜなら、神さまは愛なのですから」

28 (レフ=ニコラエビチ・トルストイ『トルストイ民話集 人はなんで生きるのか』)

29  
30 敵を愛することができない「君たち」の善意は独裁を準備する。

31  
32 なにがきみのしあわせ なにをしてよろこぶ  
33 わからないまま おわる そんなのはいやだ  
34 わすれないで ゆめを こぼさないで なみだ  
35 だから きみはとぶんだ どこまでも  
36 そうだ おそれないで みんなの ために  
37 あいと ゆうきだけが ともだちさ

38 (作詞：やなせたかし 作曲：三木たかし『アンパンマンのマーチ』)

39  
40 「あいと ゆうき」が足りないくせに「ともだち」収集が趣味の「君たち」は、ばいきん  
41 まんと一緒なんだよ。一生、ドキンちゃんに嫌われてろ。

42 アンパンチ！  
43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6130 「国家社会のために」  
4 6131 『正義派』

5  
6 Nの小説に出て来る男あるいは牡は軽薄才子だ。

7  
8 ファシズム化がますます進行するなかで、トップにたつ支配層と密着して末端におい  
9 てファシズムの社会的担い手になった町工場主、小売店主、学校教員、下級官僚、僧職、  
10 神官などを、丸山真男（まさお）は「擬似インテリゲンチャ」と名づけているが、本来の  
11 知識階級は、ほぼ体制維持派を除けば、閉塞（へいそく）的状況に置かれたとあってよい。  
12 （『日本大百科全書（ニッポニカ）』「インテリゲンチャ」鈴木幸寿）

13  
14 「ファシズム化」を実際に進めるのは、異常な独裁者ではなく、正常な軽薄才子だ。裸の  
15 王様だって、取り捲きがいるから王様でいられる。「学校教員」は「擬似」か。「本来の知識  
16 階級」とその他を分けるのは差別だろう。

17  
18 読・書・算（スリーアールズ）を中心に教えるドリルマスターの系譜をひく大衆子弟向  
19 けの学校に現れた教師と、人文主義的な教育を施すキュンストラの系譜をひく選良子  
20 弟向けの学校に現れた教師の2系譜（学校体系）が各国にあり、その統一が問題になって  
21 いる。

22 （『百科事典マイペディア』「教員」）

23  
24 「キュンストラ」は調べられなかった。

25  
26 文学と政治を正面から論じた文学史上先駆的な評論として位置づけられる。

27 （『日本歴史大事典』「時代閉塞の現状」中丸宣明）

28  
29 「文学と政治を」は意味不明。『時代閉塞の現状』（石川啄木）も意味不明。

30  
31 そして彼等は何か知れぬ一種の愉快的興奮が互の心に通い合っているのを感じた。彼  
32 等は何故かいつもより巻舌で物を云いたかった。擦れ違ひの人にも「俺達を知らねえか！」  
33 こんな事でも云ってやりたいような気がした。

34 「べら棒め、いつまでいったって、悪い方は悪いんだ」

35 （志賀直哉『正義派』下）

36  
37 正義派や自粛警察どもは、不倫を種に騒ぎたてて人から仕事を奪う。万引の顔をネットで  
38 晒す。お玉をお股に当てた程度のことで、店の冷蔵庫に入った程度のことで、大騒ぎをする。  
39 痴漢を追っかけて死なす。巨悪はほったらかし。公害企業や軍需産業などは無視。正義派こ  
40 そが社会の混乱を増大させ、さらなる悲惨へと導く。

41 『M』（ラング監督）および『カリガリからヒトラーへ ドイツ映画 1918-33 における集  
42 心理の構造分析』（クラカウアー）参照。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6130 「国家社会のために」  
4 6132 「頭の中の世界と、頭の外の世界」

5  
6 Nの小説に出てくるインテリっぽい男たちは、ことごとく自滅する。

7  
8 「国家社会の為に尽して、金が御父さん位儲かるなら、僕も尽しても好い」  
9 (夏目漱石『それから』三)

10  
11 代助の発言。「国家社会」は意味不明。

12  
13 社会の主要な形態の一つ。国家はあらゆる社会を包括する全体社会であるとする一元  
14 的国家論(国家主義的)に対して、国家は人間の集団的生活の様々な形態のうちの一つの  
15 部分社会を形成するものであるとする多元的国家論(民主主義的)の立場からとらえた国  
16 家。

17 (『日本国語大辞典』「国家社会」)

18  
19 この辞典は、先の代助の発言を引用し、これに含まれた「国家社会」について、「国家と  
20 社会、国と世の中」と説明する。意味不明。

21  
22 社会はいかなる状態にあっても歓迎される。だが国家は、この上なく健全な状態にあっ  
23 ても必要悪にすぎない。

24 (トマス・ペイン『コモン・センス』)

25  
26 代助は非常識ですらない。彼を旧友の平岡が次のように酷評する。

27  
28 僕は僕の意志を現実社会に働き掛けて、その現実社会が、僕の意志の為に、幾分でも、  
29 僕の思い通りになったと云う確証を握らなくっちゃ、生きていられないね。そこに僕と云  
30 うものの存在の価値を認めるんだ。君はただ考えている。考えるだけだから頭の中の世界  
31 と、頭の外の世界を別々に<sup>こんりゅう</sup>建立して生きている。この大不調和を忍んでいる所が、す  
32 で無形の大失敗じゃないか。

33 (夏目漱石『それから』六)

34  
35 平岡は、まだ代助を買いかぶっている。代助は「頭の中の世界と、頭の外の世界を別々に  
36 <sup>こんりゅう</sup>建立して」はいない。彼は夢想家としてさえ「大失敗」をしているのだ。

37 意味不明の「国家社会」発言によって、代助は自分の能力の限界を露呈している。彼は、  
38 父の生き方とは違った、自分なりの生き方を構想できない。「金」が要らないのなら、皮肉  
39 は成り立つ。要るのなら、〈自分は父と同じ生き方を選ぶ〉と宣言したことになる。

40 彼の発言を皮肉ととった場合、〈父は「国家社会の為に尽して」いない〉という含意が生  
41 じる。だが、この含意の真偽は不明だ。むしろ、虚偽に近い。なぜなら、金が儲かって納税  
42 額が増えれば、貧困者より「国家社会の為に尽して」いることになるからだ。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6130 「国家社会のために」  
4 6133 社会のような家族

5  
6 「国家社会」の真意は〈社会のような家族〉だろう。代助は〈父は子に尽くすべき労力や  
7 時間などを金儲けのために使った〉と非難したくてもできなくて皮肉に逃げたが、不発。

8  
9 従つて私的なものは、即ち悪であるか、もしくは悪に近いものとして、何程かのうしろ  
10 めたさを絶えず伴っていた。営利とか恋愛とかの場合、特にそうである。そうして私事の  
11 私的性格が端的に認められない結果は、それに国家的意義を何とかして結びつけ、それ  
12 よつて後ろめたさの感じから救われようとするのである。漱石の「それから」の中に、代  
13 助と嫂とが、

14 「一体今日は何を叱られたのです」

15 「何を叱られたんだか、あんまり要領を得ない。然し御父さんの国家社会の為に<sup>ママ</sup>尽くす  
16 には驚いた。何でも十八の年から今日迄のべつに<sup>ママ</sup>尽くしているんだつてね」

17 「それだから、あの位に御成りになつたんじやありませんか」

18 「国家社会の為に<sup>ママ</sup>尽くして、金がお父さん位儲かるなら、僕も<sup>ママ</sup>尽くしても好い」(傍点丸  
19 山)

20 という対話を交す所があるが、この漱石の痛烈な皮肉を浴びた代助の父は日本の資本  
21 家のサンプルではないのか。こうして「栄え行く道」(野間清治)と国家主義とは手に手

22 をつなぎ合つて近代日本を「躍進」せしめ同時に腐敗せしめた。「私事」の倫理性が自らの  
23 内部に存せずして、国家的なるものとの合一化に存するというこの論理は裏返しにす  
24 れば国家的なるものの内部へ、私的利害が無制限に侵入する結果となるのである。

25 (丸山真男『増補版 現代政治の思想と行動』「第一部 現代日本政治の精神状況」)

26 意味不明。堂々巡りのようだ。

28 「私的なもの」に「うしろめたさ」が伴うのは自明だろう。傍点を打つ意図は不明。その  
29 後、「後ろめたさ」となっている。その理由も不明。

30 「私事の私的性格」はナンセンス。

31 「この漱石の痛烈な皮肉」は、「傍点」を考慮すれば「何でも」以下を指すようだが、よ  
32 くわからない。代助の「皮肉」は、作中の誰にも通じていない。

33 「「私事」の倫理性」は意味不明。「倫理性が自らの内部に」も意味不明。

34 〈「この論理は裏返しにすれば」～「結果となるのである」〉は意味不明。

35 丸山は、「倫理性」が個人の「内部」に自然発生するとても信じているのだろうか。

36  
37 そして寛容の精神は、社会関係の円滑な運行に都合のよいもののみを保持する一方、主  
38 観的信念は、「個人の自由」として公的<sup>パブリック</sup>な議論から排除しようとした。その結果実質的な  
39 道徳は「私的<sup>プライベート</sup>」なものとなった。

40 (『現代哲学事典』「個人主義と全体主義」塚本明子)

41  
42 意味不明。「ものとなった」は〈「寛容の精神」が「ものと」した〉ということか。

43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6140 スローガン  
4 6141 ヒステリック

5  
6 代助の「減らず口」(『それから』十七)の文体と、丸山の文体と、丸山が批判する人々の  
7 文体、この三つは、私には同質のように思える。

8  
9 ともあれこうした曖昧なポーズが日本語——といてもとくに漢語——のもつ特有の  
10 ニュアンスによつて一層拍車をかけられて法廷を当惑させたことは看過してならない事  
11 であろう。言霊のさきわう国だけあつて「陛下を擁する」「皇室の御安泰」「内奏」「常時  
12 輔弼」「積極論者」こういった模糊とした内容をもつた言葉——とくに皇室関係に多いこ  
13 ことに注意——がどれほど判事や検察官の理解を困難にしたか分らない。こうした言葉の  
14 魔術によつて主体的な責任意識はいよいよボカされてしまう。「大アジア主義」の語義が  
15 論争になつたとき判事側が「われわれは行動というものに対して関心をもっているので  
16 あつて、言葉には興味をもっていない」(No.176)といつたのは尤もな次第である。まづた  
17 く弁護側のいうように八紘一宇がUniverasal Brotherhoodを意味し、皇道が「デモクラ  
18 シーの本質的概念と一致する」という風に変転自在の理念ではたまつたものではないか  
19 らである。

20 しかしこうした戦犯者たちは単に言葉で誤魔かしてその場を言い逃れていたとばかり  
21 はいえない。被告を含めた支配層一般が今度の戦争において主体的責任意識に希薄だとい  
22 うことは、恥知らずの狡猾とか浅ましい保身術とかいつた個人道徳に帰すべくあまり  
23 に根深い原因をもっている。それはいわば個人の墮落の問題ではなくて後に見るように  
24 「体制」そのもののデカダンスの象徴なのである。

25 (丸山眞男『増補版 現代政治の思想と行動』「第一部 現代日本政治の精神状況」)

26  
27 「漢語」に限定するのはおかしい。「漢語のもつ特有のニュアンス」は舌足らず。

28 「主体的な責任意識」は不敬だろう。「常時輔弼」は、「主体的」でなく、つまり献身的「責  
29 任意識」に基づく行為だったのかもしれない。何とでも言える。どっちもどっち。

30  
31 だから同じくヒステリックな症状を呈し、絶望的な行動に出る場合でも日本の場合には  
32 はいわば神経衰弱が嵩じたようなもので、劣等感が常に基調をなしている。

33 (丸山眞男『増補版 現代政治の思想と行動』「第一部 現代日本政治の精神状況」)

34  
35 「同じく」は、「ナチ権力者」(『現代政治の思想と行動』)と「同じく」の略。

36 「ナチ権力者」は「神経衰弱」や「劣等感」と無縁だったのか。

37  
38 かれのパスナリティは劣等感、人生にたいする嫌悪、禁欲主義、人生を享楽している  
39 ものにたいする嫉妬などのために、サド・マゾヒズム的衝動の土壌となっている。

40 (エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』「第六章 ナチズムの心理」)

41  
42 「かれ」はヒトラーだ。

43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6140 スローガン  
4 6142 おんぶに抱っこ

5  
6 明治の初期には、「一身独立して一国独立すること」（福沢諭吉『学問のすゝめ』第三編）  
7 というスローガンがはやったらしい。この「一身」と「一国」の関係は、明瞭ではない。個  
8 人と国家の関係がおんぶに抱っこになっている。

9  
10 親爺の頭の上に、<sup>まこと</sup>は<sup>てん</sup>の<sup>みち</sup>なり<sup>ママ</sup>と云う額が麗々と掛けてある。先代の旧藩主に書いて  
11 貰ったとか云って、親爺は尤も珍重している。代助はこの額が甚だ<sup>きらい</sup>嫌である。第一字が  
12 <sup>いや</sup>嫌だ。その上文句が気に喰わない。誠は天の道なりの後へ、<sup>ママ</sup>人の道にあらずと付け加えたい  
13 様な心持がする。

14 (夏目漱石『それから』三)

15  
16 「先代の旧藩主」ではなく、誰なら、許せるのか。語り手は、〈代助は「親爺」から「珍  
17 重して」もらいたい〉という物語を隠蔽している。

18 代助は「この額」に嫉妬している。

19 「第一」は嘘だろう。「字」がどうのこうのというのは、八つ当たり。

20 「誠は天の道なり」の後には「誠之者人之道也」（『中庸』第二十章）だ。代助は『中庸』を  
21 嘲笑していることになるが、その自覚はあるのか。作者の意図が不明。

22  
23 代助は父に対する毎に、父は自己を<sup>いんべい</sup>隠蔽する<sup>ぎくんし</sup>偽君子か、もしくは分別の足りない愚物か、  
24 何方か<sup>どっち</sup>でなくてはならない様な気がした。そうして、そう云う気がするのが厭でならな  
25 かった。

26 と云って、父は代助の<sup>てぎわ</sup>手際で、どうする事も出来ない男であった。代助には明らかに、  
27 それ分っていた。だから代助は未だ<sup>かつ</sup>曾て父を矛盾の極端まで追い詰めた事がなかった。  
28 (夏目漱石『それから』九)

29  
30 「自己を<sup>いんべい</sup>隠蔽する<sup>ぎくんし</sup>偽君子か、もしくは分別の足りない愚物か」という二者択一は不合理。  
31 そもそも、父は「何方<sup>どっち</sup>」でもないはずだ。また、そのことを代助は知っているはずだ。彼は  
32 第三の選択肢を<sup>いんべい</sup>「隠蔽する」軽薄才子だ。代助は自身の「矛盾」を「父」に擦り付けている。  
33 勿論、彼には、その自覚がない。また、彼の自己欺瞞に、語り手は気づいていない。作者も  
34 気づいていない。だから、読者も気づかない。

35 「厭でならなかった」という理由を、作者は説明できまい。

36 代助は「父」が〈慈父〉になってくれないのを恨んでいる。「父は代助の<sup>てぎわ</sup>手際で」という  
37 部分は〈代助は父の「手際で」〉と置き換えられる。彼の「父」に対する不満は、自分自身  
38 の無力感の投影だ。だから、彼には「父を矛盾の極端まで」追い詰めることはできない。代  
39 助は、「父」に、経済的に依存しているだけでなく、精神的にも依存している。彼は、彼の  
40 「<sup>てぎわ</sup>手際」で「父」を〈慈父〉に改造したがっている。彼は権威主義者だ。ただし、隠れ権威  
41 主義者だ。彼には、自分を褒めてくれる権威が必要なのだが、「父」にはその権威がないの  
42 で、いらついている。ただし、そうした文芸的表現にはなっていない。

43  
44  
45

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6140 スローガン  
4 6143 『ドイツの悲劇』あるいは『茶の湯』

5  
6 代助のような軽薄才子が全体主義的風潮を準備する。その思想的傾向などとは無関係だ。  
7 いや、彼らにきちんとした思想など、ない。思想家ぶって語り、書き散らす。

8  
9 ここではただ、かつて数年前にあるすぐれた観察者がわたしに気づかせてくれたとく  
10 に典型的な一つの場合を、述べることにしたい。なぜならこれは、ヒトラーの人間性にお  
11 いてしばしば繰り返されるある種の特徴を理解させるからである。

12 第三帝国に先だつ時代のこの観察者は、次のように語った。大学でりっぱな専門教育を  
13 うけてきた技術家、技師等々は、十年ないし十五年間は自己の職業にまったく献身的に専  
14 念し、脇目もふらずにひたすら有能な専門家になろうとする場合が、現在非常に多い。や  
15 がてしかし、三十代の中ごろないし終わりのころになると、かれらが以前にはけっして知ら  
16 なかったあるもの、かれらが職業教育を受けたさいにもかれらにはまったく近づかなか  
17 ったもの——おさえつけられた形而上的要求と呼んでもよいもの——が、かれらのなか  
18 で目をさます。そしていまやかれらは、なにかある特殊な精神的な仕事に、すなわち、国  
19 民のあるいは個人の幸福にとってとくに重要であると自分に思われるところの、ちょう  
20 ど流行しているなにかある事柄に——それは禁酒論でも、土地改革でも、優生学でも、神  
21 秘学でもよい——はげしい食欲をもって身を投ずる。そのとき、従来 of 分別ある専門家は、  
22 一種の予言者に、熱狂家に、あるいはそれどころが狂信家や偏執狂に変化する。世界改革  
23 者の類型はこのようにして発生する、と。

24 ここにわれわれは、知性の一面的な訓練は、しばしば分業的な技術に導くこと、またか  
25 えりみられなかった非合理的な心の衝動にとつぜん反作用をおこさせるおそれがあるこ  
26 と、だがしかし、批判的な規律や創造的な内面性をそなえた真の調和をもたらすのではな  
27 く、いまや荒々しくかつ際限なく広がるあらたな一面性に導くことを、知るのである。

28 (フリードリヒ・マイネッケ『ドイツの悲劇』「V 理性人と工作人」)

29  
30 「荒々しく際限なく広がるあらたな一面に導く」原因などは何か。

31  
32 さあ、こうなると、もともと儉約なひとですから、茶の湯もいいが、こう羊かんやかんに金  
33 かかってはたまらない。なにか自分で菓子かしをこしらえようと、さつまいもを一俵買いまし  
34 て、よくふかしますと、きれいに皮をむいて、摺り鉢すりばちのなかへいれまして、黒砂糖と蜜を  
35 くわえて、摺り粉木すりこなでさかんさかんに摺ります。摺りあがったところで、手ごろな茶わんへぎゅ  
36 っとつめて、ぼんとぬこうとしたが、ぬけません。そうでしょう。一方が瀬戸物もので、  
37 一方がべっとりしたさつまいもですから、どうしてもぬけません。そこで、油をつけたら  
38 うまくぬけるだろうと気がつきましたが、あいにくごま油がありませんので、灯油ともしあぶらを綿  
39 へひたして、十分に茶わんへ塗って、そこへいもをつめますと、すぼんとうまくぬけます。

40 (古典落語『茶の湯』)

41  
42 「儉約なひと」がエスカレートするのかもしれない。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6140 スローガン  
4 6144 威張って使う代用品

5  
6 軽薄才子は、意味ありげなスローガンによって自他を欺瞞する。

7  
8 進め日の丸つづけ国民。護れ日の丸汚すな歴史。国に縋るな国を負え。国の矢となれ盾と  
9 なれ。我が子育てる心で興亜。尽せ銃後へ召されぬ体。遂げよ聖戦興せよ東亜。新秩序立  
10 つまで脱がず鉄兜。聖戦へ民一億の体当り。聖戦だ己れ殺して国生かせ。これからだこれ  
11 からだ。敵より恐い心のゆるみ。短気ちゃ勝てぬ長期戦。亜細亜興すは口より手足。戸毎  
12 戸毎が聖戦本部。増産は土の戦士の殊勲甲。この感激を増産へ。見たか戦果知ったか底力。  
13 屠れ米英われらの敵だ。臣道は一億民の突撃路。進め一億火の玉だ。子も馬も捧げて次は  
14 鉄と銅。鍛えて待たうお召の日。人の和で築け明るい大東亜。足らぬ足らぬは工夫が足ら  
15 ぬ。欲しがりません勝つまでは。すべてを戦争へ。働かぬ手に箸持つな。今日も決戦明日  
16 も決戦。み民いま立上る時は来た。ぼくらの心は弾丸だ。科学戦にも神を出せ。長びけば  
17 日増しに強し共栄圏。日の丸広げて世界を包め。日の丸で埋めよ倫敦紐育。米英を消して  
18 明るい世界地図。一億抜刀米英打倒。撃ちてし止まむ。遊んで聞けるか輝く戦果。切り詰  
19 めて米英陣を切り崩せ。もう一段暮しを下げてもう一艦。意気、和気、根気、総決起。決  
20 戦だ身体鍛へて二人分。恥ぢよ贅沢護国の霊に。一億がみんな興亜へ散る覚悟。忠孝の華  
21 咲き乱れ薫る国。贈答品より慰問品。贅沢品こそ興亜の廃品。美食装飾銃後の恥辱。国債  
22 は総力戦の従軍証。国債はアジアを護る福のカミ。粗食に興亜の真剣味。興亜の宿題減私  
23 で解かう。働けば何でもうまい興亜食。節米へ興亜の主婦の腕試し。私腹肥やすな国肥や  
24 せ。仰げ英霊労われ遺族。国が第一私は第二。国策へ理屈は抜きだ実践だ。家憲の一条公  
25 益優先。不平は出世の行止り。古釘も生れ代れば陸奥長門。一億の心に染めよ日章旗。一  
26 億皆兵心の武装。一億一列一步調。まだまだ足りない辛抱努力。職場も戦場死守する覚悟。  
27 みんなで分け合へ御国の苦勞。導く民の自覚持て。国債は愛国心の証明書。アジアは一家  
28 日本は柱。大和心をアジアへ根分け。新体制代用品の衣食住。科学に輝け日本精神。無職  
29 はお国の寄生虫。導く民の自覚持て。よい児殖やして興亜をリレー。真剣は銃後にかざす  
30 日本刀。励め蟻さえ協力一致。大日本一億にして一家族。二人して五人育てて一人前。晴  
31 れるまで征くぞ正義の大日本。働かう英霊の分兵の分。草の根をかむとも倒せ米と英。起  
32 て撃て忍べ勝て興せ。負けるな敵の少年工に。宿敵米英今ぞ撃つ時。忠魂に合わせらねぬ  
33 ぞ懐手。職場でも米英相手の生産戦。皆労だ女子も職場の華と咲け。勝に踊るな歓呼に酔  
34 ふな。万歳の手で絞め直せ兜の緒。敵もねばるぞ勝つても緊まれ。牙城貫きとどめは本土。  
35 征け米英にとどめ刺すまで。次々に牙城を抜いて本土まで。今ぞ目指すは米英本土。侵略  
36 の地に共栄の日章旗。ツギ当ても銃後誉れの弾痕だ。買溜めは米英の手先。勇んで出征進  
37 んで納税。伸ばせ国力延ばすな納税。税で後押せ興亜の偉業。税で報国身で護国。手近な  
38 臣道税から実践。科学の誇り代用品。国策へ代用品で御奉公。威張って使へ代用品。代用  
39 品を愛用品へ。代用品これぞ興亜の常用品。

40 (駕籠真太郎『輝け！大東亜共栄圏』表紙・裏表紙より)

41  
42 「明治の精神に殉死する」なんてのも、こけおどしのスローガンだ。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6150 恋愛と友情  
4 6151 「議論はいやよ」

5  
6 「智に働けば角が立つ」という文の真意は、〈会話が苦手で困る〉だろう。

7  
8 「両方とも云われる事は云われますが、この場合は私の方が正しいのです」

9 「議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空の盃さかずきでよくああ飽  
10 きずに献酬けんしゅうが出来ると思いますわ」

11 奥さんの言葉は少し手痛てひどかった。

12 (夏目漱石『ころろ』「上 先生と私」十六)

13

14 Pと静の会話。〈Sは静を愛しているのか〉というのが問題。「両方」は、〈Pの意見と静  
15 の意見の「両方」〉の略。Pは肯定。静は懐疑的。「云われる」は、〈理屈が合う〉といった  
16 意味だろうが、怪しい。「両方とも云われ」ないかもしれない。「この場合」は無視。Pは何  
17 の証拠も示さずに「私の方が正しいのです」と決めつけた。甘えたつもりらしい。

18 二人はまだ「議論」を始めていない。だから、「議論はいやよ」は〈「議論」をするの「は  
19 いやよ」〉の略。彼女の考える「議論」は〈口喧嘩ごっこ〉らしい。「議論」は夏目語かもし  
20 れない。「議論だけ」が駄目なら、「男の方」は「議論」プラス何をなさればいいのかしら。  
21 「面白そうに」が駄目なら、〈「面白」くなさ「そうに」〉なら大丈夫か。女の方々は、何を  
22 なさるのかしら。また、男と女は何をなさるのかしら。

23 「空の盃」は意味不明。「盃」に満たすべきなのは実意などだろうが、不明。「ああ」が指  
24 すものは不明。Pには想像できたのかもしれないが、私には想像できない。「飽きもせず」  
25 が駄目なら、〈飽き飽きしながら〉なら大丈夫か。「思いますわ」に、静の育ちの悪さが表わ  
26 れているが、そういう文芸的表現のつもりではなさそうだ。読みづらい。

27 「少し」と「手痛てひどかった」は合わない。

28 作者はこの「議論」によって何事かを暗示しているらしいが、私には何も察せない。

29

30 「そうすると、君の様な身分のものでなくっちゃ、神聖の労力は出来ない訳だ。じゃますます  
31 遣る義務がある。なあ三千代」

32 「本当ですわ」

33 「何だか話が、元へ戻っちまった。これだから議論は不可ないよ」と云って、代助は頭を  
34 掻かいた。議論はそれで、とうとう御仕舞になった。

35 (夏目漱石『それから』六)

36

37 代助と、その学生時代の友人だった平岡と、その妻の、三人のおしゃべり。

38 代助は自分がニートであることを正当化しようとした。平岡はビジネスマン。学生時代な  
39 ら、いわば出世払いみたいに、相手の大言壮語を大目に見てやるのだろう。代助は「空の盃」  
40 によって旧交を温めようとしたらしい。ところが、忙しい平岡はさっさと「議論」で代助を  
41 負かしてしまう。マナー違反だ。そのことが、三千代にはわからない。

42 三千代は、何事かを察しているらしい。それは代助の彼女に対する恋慕だろうか。

43

44

45

46

47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6150 恋愛と友情  
4 6152 「愛の炎を見出さない事はなかった」

5  
6 『それから』に関するありふれた誤読。

7  
8 思索を重んじ、父兄から経済的援助を受けて「高等遊民」として生きてきた長井代助（な  
9 がいだいすけ）は、かつて親友に譲った女性、三千代（みちよ）に再会する。  
10 （『近現代文学事典』「それから」）

11  
12 「思索」は独善。「譲った女性」は愚かしい。代助に三千代の所有権はない。代助が「譲  
13 った」のは、三四郎の「第三の世界」における予約席に類する何かだ。  
14 〈代助は三千代のことをずっと前から好きだった〉と誤読できる。しかし、この物語は、  
15 代助の妄想なのだ。勿論、作者は、そのように表現していない。

16  
17 代助は二人の過去を順次に<sup>さかの</sup>遡ぼってみて、いずれの断面にも、二人の間に燃る愛の炎  
18 を見出さない事はなかった。  
19 （夏目漱石『それから』十三）

20  
21 「二人」は、三千代と代助。  
22 この時点で、代助は「過去」の恋愛妄想を偽造したらしい。

23  
24 僕はあなたが僕に厚意を持ち出したこと<sup>ママ</sup>を感じたので、僕がいてはいけないと思って、  
25 日本を去ることにしたのです。僕さえいなくなればあなたは当然、野島を愛して下さると  
26 思ったのです。  
27 （武者小路実篤『友情』下篇四）

28  
29 「僕」は大宮で、「あなた」は杉子。〈大宮は杉子に愛される権利を野島に譲ろうとした〉  
30 と言える。勿論、彼女の心を軽んじた考えであり、また、実現もしなかった。  
31 代助は、『シラノ・ド・ベルジュラック』（ロスタン）のシラノに似ている。シラノは彼の  
32 片思いの女性と友人との仲を取り持つが、彼女のことを死ぬまで諦められない。ただし、シ  
33 ラノは自分の恋情を自覚していたが、代助は違う。変なのだ。

34  
35 僕は 愛されてることを 感じる能力が 欠如しているんだ  
36 （古屋兎丸『女子高生に殺されたい』）

37  
38 『それから』の語り手は、代助の「能力」の欠如を隠蔽している。欠如の由来をも隠蔽し  
39 ている。欠如を補填するのが、記憶を偽造する能力、つまり妄想癖だ。

40 作者は、〈妄想にすぎない恋愛〉と〈自覚できなかった被愛感情〉の仕分けができないよ  
41 うに仕組んでいる。作者は何かを隠蔽しているが、それは不明だ。ただし、隠蔽された何か  
42 は、性愛に類するもののように誤読できてしまう。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6100 『それから』の「減らず口」  
3 6150 恋愛と友情  
4 6153 『泣いた赤おに』

5  
6 『それから』は〈友情と恋愛のどちらが貴重か〉という二者択一として誤読できてしまう。  
7 〈男は彼にとって大切なものを親友に譲る〉という男色文化の物語が流布されているせい  
8 だろう。

9  
10 「まあ、きけよ。うんと、あばれているさいちゅうに、ひょっこり、きみが、やってく  
11 る。ぼくをおさえて、ぼくのあたまをぼかぼかなぐる。そうすれば、人間たちは、はじめ  
12 て、きみをほめたてる。ねえ、きっと、そうなるだろう。そうなれば、しめたものだよ。  
13 安心をして、あそびにやってくるんだよ。」

14 「ふうん。うまいやりかただ。しかし、それでは、きみにたいして、すまないよ。」  
15 「なあに、ちっとも。水くさいことをいうなよ。なにか、ひとつの、めぼしいことをや  
16 りとげるには、きっと、どこかで、いたい思いか、損をしなくちゃならないさ。だれかが  
17 ぎせいに、身がわりに、なるのでなくちゃ、できないさ。」

18 (浜田廣介『泣いた赤おに』)

19  
20 『泣いた赤おに』なんかを子供に読ませて、嘘つきに育てる気か。  
21 人助けのためなら、嘘も方便で許されよう。だが、「赤おに」が「人間たち」を騙すのは、  
22 「人間たち」のためではない。自分のためだ。「赤おに」は、「人間たちのなかま」になった  
23 後も、真相を「人間たち」に告げることができない。〈いつ、ばれるか〉と、はらはらしな  
24 がら生きていかねばならない。しかも、犠牲になってくれた「青おに」に報いてもやれない。  
25 こうした不安や後ろめたさに、「赤おに」は一生耐えねばならないのだ。

26  
27 わたし あかおに あおおに 私 おに が『泣いた赤鬼』の青鬼 おに だったら、悪い鬼 おに の役なんてしないで、人間たちに、やさ  
28 しい鬼 おに だということを伝えたい。人間たちが喜 よろこ ぶことをして、認めてもらい、村の人、  
29 そして大親友 あかおに の赤鬼 おに と一緒に いっしょ 楽しく暮 く らしていけると思うのです。

30 (倉持よつば『桃太郎は盗人なのか? —「桃太郎」から考える鬼の正体—』「まとめ」)

31  
32 小学生でも「思う」程度のことが、国語科教師には思えないらしい。なぜか。

33  
34 夢心地の中から かす 灰かに眼を開けて見ると、男は片膝を立てて、煙草 す を喫っていました。  
35 妾も急に起きて、陰部などの始末をする意気地もなく、立ち上りますと、

36 「お嬢さん、どうでした。嬉 うれ しかったでしょう。今晚の事を忘れてはいけませんよ。私  
37 はあんたを手に入れる為に、随分苦勞したのです。実は私は血桜団 かしら の頭 あな です。今晚 あな 貴嬢  
38 を襲撃したのは、私が団員に頼んだのです」

39 (緑雨山人『肉体の洗礼』「五 わなに落ちた小鳥」)

40  
41 「男」は本当のことを告白しているから、「赤おに」よりましだろう。違うのか。どうせ  
42 「妾」を騙すなら、騙し続けるべきなのか。「血桜団」は不良グループの名称。

43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6210 必要な罪悪感  
4 6211 空っぽの物語

5  
6 『門』を読んだ人は少なからう。読んでも内容を記憶している人は少なからう。

7  
8 友人を裏切って、その妻お米と結ばれた宗助が、都会の片隅でひっそりと暮らしつつ、  
9 過去の記憶に脅かされ、生存の根を求めて苦しむありさまを描く。

10 (『広辞苑』「門」)

11  
12 「友人」の名は安井という。「裏切って」は不正確。安井は、彼の妻だった御米を、「僕の  
13 妹だ」(『門』十四)と宗助に紹介した。友人の妹と恋愛をするのは、当時の流行だったの  
14 かもしれない。「過去の記憶」は意味不明。「記憶に脅かされ」や「生存の根」は意味不明。

15 宗助は、意味不明の「記憶」ではなく、安井の復讐を恐れているようだ。復讐の動機や方  
16 法は不明。宗助は元「友人」と対峙しないで、妻を置き去りにし、寺に独りで逃げ込む。そ  
17 の理由は不明。結局、安井は登場しない。ただし、いつかやって来そうだ。その理由は不明。  
18 で、おしまい。おしまいになる理由は不明。例によって、尻切れ蜻蛉。

19  
20 前期3部作の第3作で、「それから」で提示された「自然」なる自我と「社会」との対  
21 立をさらに追及し、個人の良心の相克(そうこく)を顕在化させた。

22 (『近現代文学事典』「門」)

23  
24 「自然」が括弧でくくられているのは、『それから』の本文における「自然」が意味不明  
25 だからだろう。「自然」が意味不明だから、それと「対立」をする「社会」も意味不明で、  
26 当然、「対立」は意味不明。「良心の相克(そうこく)」は意味不明。

27  
28 精神分析では、神経症的な無意識の罪悪感が注目され、罰を求める要求が仮定される。  
29 一般には非難されるべきことを犯したという意識から罪悪感が生じるが、むしろ罪悪感  
30 がゆえに罪を犯すというように考えざるをえない病理的ケースがみられるからである。  
31 こうしたタイプの犯罪者は、無意識の空想的犯罪からおこる罪悪感から逃れるために現  
32 実に罪を犯し、その罪悪感を甘受する。現実に処罰されることによって無意識の罪悪感を  
33 現実の罪悪に置き換えることができるので、心理的には解放感を得ることができると考  
34 えられる。こうした罪悪感はその場合、自我と超自我の葛藤(かっとう)によるものが  
35 多く、罪悪感はその超自我に対する自我の不安であるといわれる。すなわち、自我は超自我の  
36 命令に従うことができないと自ら罰を受けようとする。これが無意識の処罰欲求とよば  
37 れるものである。

38 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「罪悪感」外林大作/川幡政道)

39  
40 宗助と御米は姦通したことになっている。だが、その物語は空っぽ。宗助の妄想のようだ。  
41 彼は原因不明の不安から逃れるために姦通の物語を捏造しているらしい。母子相姦の物語  
42 の変形か。妻にさえ「友人」の来訪の可能性について語らない。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6210 門外漢の『門』  
3 6210 必要な罪悪感  
4 6212 「厭世的<sup>えんせい</sup>の影」

5  
6 安井は作品の内部の世界に実在したのだろうか。

7  
8 私の胸にはその時分から時々怖ろしい影が閃<sup>ひら</sup>めきました。

9 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十四)

10  
11 安井は、この「恐ろしい影」と区別できない。

12  
13 分裂病者では、前に説明したように、同調的な<sup>ママ</sup>暖かい心が枯れて、冷たく凝固した心が  
14 次第にはびこってゆくのが一般であるが、この気持は病者自身によっては自分の気持と  
15 感じられないで、外から自分の中に入ってくると感じられる。本当は自分の感情であり考  
16 えであるが、しかし病者自身がみれば、その考えは自分の外から自分をあざわらったり、  
17 そしたったり、おとしめたり、おびやかしたりする「声」となって響いてくる。普通の人で  
18 も、何か秘密をかくして、これを人に知られては大変だと思っているようなときには、  
19 外の人の方が自分を見張ったり、尾行したりしていると感じられる。自分の反感的な気持  
20 が外に投射されて、逆に外から入ってくるのである。分裂病ではこのメカニズムが常人の  
21 考えもつかないほど析はずれな実感をもって迫る。

22 (島崎敏樹『病める人間像』「自殺にいたる病」)

23  
24 「冷たく凝固した心」から、「恐ろしさの塊り」(下三十六)という言葉が思い出される。  
25 正体不明の「男の声」を、青年Sは聞いた。その体験を「私の神経は震えるというよりも、  
26 大きな波動を打って私を苦しめます」(下十六)と、Sは回想している。  
27 語り手Pは「常よりは晴やかな調子」(上三十一)だったSについて回想している。

28  
29 その眼、その口、何処にも厭世的<sup>えんせい</sup>の影は射<sup>さ</sup>していなかった。

30 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」三十一)

31  
32 このとき、Sは自殺の覚悟ができていたのだろうか。妙にすっきりしていた。

33  
34 彼の表情にうかんでいる冷たい不動の微笑の奥にどんな気持が動いているのか、私ど  
35 もは想像にとまどってしまう。ある娘は、親戚の家をたずねてお世辞笑いをとりつくろい  
36 ながら一通りの世間話をして、帰る途中、ある橋にきかかったとき、その袂から脇へつた  
37 って河べりにおりて、持物と下駄を水際に揃え、そのまま入水して流れて行ってしまった。  
38 ある青年は、病院に入って治療をうけていたが、治療が大分進んで、多少明るい顔が見え  
39 るようになった頃、或日便所のなかで首を吊って死んでいた。

40 (島崎敏樹『病める人間像』「自殺にいたる病」)

41  
42 彼らの微笑は、絶望の極地における諦めの表出だろう。逆説的なSOSかもしれない。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6210 必要な罪悪感  
4 6213 『真景累ヶ淵』

5  
6 「恐ろしい影」の正体は不明だ。意図的に曖昧にされているのではない。

7  
8 <sup>きつね</sup>狐にばかされるということはあるわけのものでないから、神経病、また天狗にさらわ  
9 れるということもないからやっぱり神経病と申して、なんでも怖いものはみな神経病に  
10 おっつけてしまいますが、現在ひらけたえらいかたで、幽霊は必ずないものと定めても、  
11 鼻の先へ怪しいものが出ればアッと行ってしりもちをつくのは、やっぱり神経がちと怪  
12 しいのでございましょう。ところがある物知りのかたは、「いやいや西洋にも幽霊がある。  
13 けっしてないとはいわれぬ。必ずあるに違いない」とおっしゃるから、わたくしどもは「へ  
14 え、そうでございませうか。幽霊はやっぱりありますかな」と言うと、またほかの物知りの  
15 かたは「なに、けっしてない。幽霊なんというはあるわけのものではない」とおっしゃる  
16 から、「へえ、さようでございませうか、ないというほうがほんとうでげしょう」とどちら  
17 へも寄らずさわらず、ただ言うなり次第に、ないといえばない、あるといえばある、と言  
18 っておればすみませんが、

19 (三遊亭円朝『真景累ヶ淵』一)

20  
21 怪談『真景累ヶ淵』は、心理小説《神経重ねが不治》に作りなおせる。

22 Dが「狐」や「天狗」や「幽霊」の類なら、まじないなどの対処法もあろう。Dが「神経  
23 病」による幻覚なら、「医者」に診てもらおう。占い師と医者の方々に診てもらうこともで  
24 きる。ところが、本文ではどちらとも決まらない。だから、処置なし。

25 どちらでもありそうで、どちらともつかないのは幻想文学だろう。

26  
27 諸現象の合理的かつ必然的秩序という科学的概念が勝利を収め、因果の連累に厳密な  
28 決定論が認知されていなければ、幻想小説はあらわれえない。つまり、幻想小説とは、多  
29 かれ少なかれ誰もが奇蹟の不可能であることを納得した時代になって、はじめて生まれ  
30 るものなのである。

31 (ロジェ・カイヨワ『妖精物語からSFへ』第一部)

32  
33 『こころ』は、幻想文学ではない。出鱈目なのだ。

34  
35 これらの遺産を経由して、アメリカのポー、フランス象徴派の優れた運動が展開された。  
36 さらに現実社会における自然科学圧制と近代物質中心利潤合理主義に対する人間性の拠  
37 点を、改めて幻想性に求める動きが、トルストイからトーマス・マンまでの19世紀型大  
38 リアリズム長編小説の枯渇への反定立として出てくるのが、シュルレアリスム、ダダイズ  
39 ム、表現主義その他ポップスである。

40 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「幻想文学」由良君美)

41  
42 勿論、不条理でもない。普通に意味不明。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6220 落花狼藉  
4 6221 コキュあるいは神

5  
6 次のくだりは、〈御米と宗助は禁断の恋に落ちた〉と誤読できるように語られている。

7  
8 事は冬の下から春が頭を擡げる時分に始まって、散り尽した桜の花が若葉に色をかえ  
9 る頃に終わった。凡てが生死の戦であった。青竹を炙って油を絞る程の苦しみであった。  
10 風は突然不用意の二人を吹き倒したのである。二人が起き上がった時は何処も彼所も砂  
11 だらけであったのである。彼らは砂だらけになった自分達を認めた。けれども何時吹き倒  
12 されたかを知らなかった。

13 世間は容赦なく徳義上の罪を背負わした。然し彼等自身は徳義上の良心に責められる  
14 前に、一旦茫然として、彼らの頭が確であるかを疑った。彼等は彼等の眼に、不徳義な男女  
15 として恥ずべく映る前に、既に不合理な男女として、不可思議に映ったのである。其所に  
16 言訳らしい言訳が何にもなかった。だから其所に云うに忍びない苦痛があった。彼等は残  
17 酷な運命が氣紛に罪もない二人の不意を打って、面白半分 穽 の中に突き落したのを無  
18 念に思った。

19 (夏目漱石『門』十四)

20  
21 「事」は空っぽだから、「始まって」や「終わった」は意味不明。「冬の下」や「春が頭」や  
22 「桜の花」も意味不明。〈落花狼藉〉が連想される。つまり、強姦だ。

23 何の「凡て」か。「生死の戦」は意味不明。誰が誰と戦ったのか。

24 「大風」は意味不明。「突然」や「不用意」は不図系。「二人」は、宗助と御米。

25 「起き上がった」や「砂」は意味不明。

26 「吹き倒された」は意味不明。

27 どうやって「世間」が知ったか。姦通は「徳義上の罪」である前に〈法律上の「罪」〉だ。

28 「茫然として」は不図系。「頭が確」は意味不明。

29 「不合理な男女」は意味不明。「不可思議に映った」は意味不明。

30 「其所」の指すものがない。「言訳らしい言訳」の具体例が不明。

31 「だから」は機能していない。この「其所」の指すものもない。「云うに忍びない苦痛」  
32 の中身は空っぽ。ありもしない「苦痛」は「云うに」事を欠く。

33 「残酷な運命」や「氣紛」は意味不明。「不意を打って」は不図系。「面白半分」の具体例  
34 が不明。「穽」は意味不明。

35 語り手は濡れ場にモザイクをかけたのか。違う。モザイクによって濡れ場を暗示したのだ。

36  
37 こういう民俗は、今まで述べてきた、神の嫁となる話でもあり、これから述べようとす  
38 る成年式にも関連してくるが、同時に「初夜権」の問題をもふくんでいる。結婚した花嫁  
39 の初夜の権利は誰が持っているかということで、それは当の相手の花婿ではない。

40 (池田弥三郎『おとこ・おんなの民俗誌』「八 初夜の権利」)

41  
42 安井は「神」なのだ。ただし、その事実を、作者が文芸的に暗示しているのではない。

43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6220 落花狼藉  
4 6222 「尋常の言葉」

5  
6 『門』の恋愛の物語は、前作の『それから』のそれよりも具体性を欠く。

7  
8 しばらく黙然<sup>もくねん</sup>として三千代の顔を見ているうちに、女の頬から血の色が次第に退<sup>ママ</sup>ざいて行<sup>ママ</sup>って、普通よりは眼に付く程蒼白<sup>ママ</sup>になった。その時代は三千代と差向<sup>ママ</sup>で、より長く坐<sup>ママ</sup>っている事の危険に、始めて気が付いた。自然の情合から流れる相互の言葉が、無意識<sup>ママ</sup>のうちに彼等を駆<sup>ママ</sup>って、準<sup>ママ</sup>繩<sup>ママ</sup>の埒<sup>ママ</sup>を踏<sup>ママ</sup>み超<sup>ママ</sup>えさせるのは、今二三<sup>ママ</sup>分の裡<sup>ママ</sup>にあった。  
9  
10  
11  
12 (夏目漱石『それから』十三)

13  
14 「女の頬」の変化は、強引な代助に対する恐れ<sup>ママ</sup>の表われとも解釈できる。

15  
16 彼は西洋の小説を読むたびに、そのうちに出て来る男女<sup>なんにょ</sup>の情話が、あまりに露骨<sup>ママ</sup>で、あまりに放肆<sup>ほうし</sup>で、かつあまりに直線的<sup>ママ</sup>で濃厚<sup>ママ</sup>なのを平生から怪<sup>ママ</sup>んでいた。原語で読めばとにかく、日本には訳し得<sup>ママ</sup>ぬ趣味<sup>ママ</sup>のものと考<sup>ママ</sup>えていた。従<sup>ママ</sup>って彼は自分と三千代との関係を発<sup>ママ</sup>展<sup>ママ</sup>させる為<sup>ママ</sup>に、舶来<sup>せりふ</sup>の台詞<sup>ごう</sup>を用<sup>ママ</sup>いる意志<sup>ママ</sup>は毫<sup>ママ</sup>もなかつた。少なくとも二人の間では、尋常<sup>ママ</sup>の言葉で充分<sup>ママ</sup>用<sup>ママ</sup>が足りたのである。が、其所<sup>ママ</sup>に、甲<sup>ママ</sup>の位<sup>ママ</sup>位<sup>ママ</sup>から、知らぬ間<sup>ママ</sup>に乙<sup>ママ</sup>の位置<sup>ママ</sup>に滑<sup>ママ</sup>り込<sup>ママ</sup>む危険<sup>ママ</sup>が潜<sup>ママ</sup>んでいた。

17  
18  
19  
20  
21  
22 (夏目漱石『それから』十三)

23  
24 「西洋の小説」ではなく、〈東洋の「小説」〉ならば、どうか。「直線的」は意味不明。  
25 「日本」は、〈近代「日本」語〉と〈近代「日本」社会〉の混交。  
26 「関係」は〈恋愛「関係」〉の略<sup>ママ</sup>だろうが、それが成立<sup>ママ</sup>した証<sup>ママ</sup>拠<sup>ママ</sup>はない。  
27 「尋常の言葉」とは、どんな「台詞」だろう。

28  
29 さらに、小説家の夏目漱石が英語教師をしていたとき、生徒の一人が「I love you」  
30 の一文を「我君を愛す」と訳したのを聞き、「日本人はそんなことを言わない。月が綺麗  
31 ですね、とでも訳しておきなさい」と言ったという、有名な逸話<sup>ママ</sup>が残<sup>ママ</sup>っている。  
32 (戸田智弘『ものの見方が変わる 座右の寓話』「第8章 科学技術と社会の関わり」)

33  
34 “Fly Me to the Moon”つまり”In Other Words”参照。

35  
36 またわれわれが若い婦人と散歩をしている時に、彼女が、  
37 「いい月ねえ」  
38 と、言ったら、その調子で、気象学的<sup>ママ</sup>観<sup>ママ</sup>察<sup>ママ</sup>をしているのか、それとも接吻<sup>ママ</sup>してもらいた  
39 がっているのかわかる。

40 (S. I.ハヤカワ『思考と行動における言語』「5 社会的結びつきの言語」)

41  
42 代助は「調子」を聞き分けることができなかつたのだろう。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6220 落花狼藉  
4 6223 困難な-恋愛小説

5  
6 『門』の作者は、〈恋は本質的に罪のようなものだ〉という考えを〈罪のような恋の物語〉  
7 によって表現している。〈困難な-恋愛小説〉を〈困難な恋愛-小説〉に偽装している。

8  
9 少女のローラ姫はある黒幕の人物の手によってアメリカに渡り、ライフ誌の表紙とも  
10 なり、かつ「神秘の国ストーン国王の妃きさきとなって」という大ベストセラーのヒロインにも  
11 なりました。それが、どんな内容かと申しますと、  
12 「そのとき、私たちは積木細工べいじをしていました。すると、王様が近づかれ、あたちにさわ  
13 って、……（以下五頁空白）……あたちは嬉うれしくって……（以下三頁空白）……王様は  
14 あたちの髪をなで、ローラ、おまえって、ほんとに可愛かわいいねえ……（以下十頁空白）……  
15 ローラ、もう眠い？ いいえ、あたり、おねむじゃないの、もっとおイタをしたい。する  
16 と王様は……（以下二十頁空白）……」

17 というような、およそ活字の少ない本なのですが、これがどうしたものか、バカな読者  
18 の特別貧弱な空想しげきを刺戟して、売れに売れました。あまりに売れたため、いかがわしい箇  
19 所があると訴えられもしましたが、（真相は出版社側が手をまわして自らの手で訴えさせ  
20 たのです）その裁判にもわざと辛うじて勝ってしまい、評判はますます高まり、著者とエ  
21 ージェントはごっそり儲けました。その架空の著者とエージェントとは誰あろう、実は総  
22 理大臣その人なのでした。

23 この本は当然、映画化もされましたが、これも映像が映っているところはごくわずかで、  
24 あとはまったく暗闇くらやみのままでした。ところが、暗闇というのがドライブイン劇場などに集  
25 まる観客に受けて、ロングランをつづけました。

26 （北杜夫『さびしい王様』「第七章 オレンジからオッパイへ」）

27  
28 文豪伝説が支配的な社会では、人は「バカな読者」にならなければならないのだろう。

29  
30 「なまじいカにおもうの、親友だのといわれて見れば私わたくしは……どうも……どうあっても  
31 思い……

32 「アラ月が……まるで竹の中から出るようですよ ちよっと御覧なさいヨ

33 庭いちごうの一隅うえこに栽ともど込んだ十竿なよたけばかりの織竹の葉を分けて出る月のすずしさ

34 （二葉亭四迷『浮雲』「第一篇 第三回 よほど風ふう変がわりな恋の初峯はつみねいり入 下」）

35  
36 文三とお勢との会話。彼は、お勢が「思い」を受け入れてくれたものと勘違いする。いや、  
37 勘違いではないのかもしれない。『浮雲』は意味不明。

38  
39 月夜よよし夜よよしと人につげやらば来こてふに似たり待たずしもあらず

40 （『古今和歌集』卷十四 恋歌四）

41  
42 『浮雲』の作者にさえ、お勢の真意は不明だろう。お勢自身にもかな。

43  
44  
45  
46

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6230 相互監視  
4 6231 不倫は文化

5  
6 恋愛を自然現象にたとえることはできる。だが、恋愛は自然現象ではない。石田純一は「不  
7 倫は文化だ」と言ったとか言わないとかでバッシングを受けたが、不倫は立派な文化だ。後  
8 に、彼は国会前で「戦争は文化じゃない」とアジったが、戦争は文化だ。

9 『人はなぜ不倫をするのか』（亀山早苗8）や『はじめての不倫学 「社会問題」として  
10 考える』（坂爪真吾）および『男と女の快樂大全』（成田アキラ）などを参照。

11  
12 不義の結婚により、社会の片隅にひっそりと生きる宗助、お米夫婦のわびしい生活を通  
13 し、人生の深淵を描く。

14 (『日本国語大辞典』「門」)

15  
16 「不義の結婚」や「社会の片隅」は意味不明。「わびしい」はおセンチ。宗助は月給取り  
17 だから、「人生の深淵」は〈貧乏のどん底〉ではない。〈不幸のどん底〉でもない。むしろ、  
18 彼は不安になじんでいる。自分が恐れているものの正体を知りたくないからだろう。

19 『門』の語り手は、二人が恋に落ちる経緯にモザイクをかけている。二人の恋愛が人知を  
20 超えた出来事だったように偽造しているのだ。しかし、お米にとって、姦通が偶然だったは  
21 ずはない。彼女と安井の夫婦生活は、すでに破綻していたのだろう。『テレーズ・ラカン』  
22 (ゾラ)のテレーズは、嫌いな男と結婚させられ、夫の友人を愛するようになる。その友人  
23 が夫を殺し、彼女は共犯者になる。宗助は安井を精神的に殺したのかもしれない。宗助は、  
24 安井の生霊に怯えているようなものだ。

25  
26 或る<sup>まち</sup>市にみし頃の事として、  
27 友の語る  
28 恋がたりに嘘<sup>うそ</sup>の交<sup>まじ</sup>るかなしさ。\*

29 (石川啄木『悲しき玩具』)

30  
31 この「友」は、「嘘<sup>うそ</sup>」が見え見えの「恋がたり」によって、真相を伏せたまま、窮状を伝  
32 えようとした。そんな遠慮がちな甘えに、歌人は「かなしさ」を覚えたいらしい。

33  
34 ルカー わしが知っている！ 平気だよ！ わしが信じている！ エナメル靴をは  
35 いていたんだね？ いや、なるほどなるほど！ それで、お前さんの方でもその人を――  
36 愛していたんだね？

37 (マクシム・ゴーリキー『どん底』第三幕)

38  
39 『門』の読者は、ルカーのように寛大でなければならないのか。

40 文豪伝説で〈後期三部作〉と呼ばれる『彼岸過迄』『行人』『ころ』の語り手たちは、嘘  
41 としか思えない物語を語る。これらに先立つ〈前期三部作〉と呼ばれる『三四郎』『それか  
42 ら』『門』では、主人公の〈自分の物語〉と作品の語り手が混交していて、意味不明。

43  
44  
45  
46  
47  
48

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6230 相互監視  
4 6232 『テレーズ・ラカン』  
5

6 御米と宗助は、それぞれ、過去の物語を自分自身に対して密かに語り続けている。そして、  
7 二つの物語が同一であるように思っている。ただし、その事実を、彼らは確認しあっていない。  
8 ところが、語り手は、それらが同一のように語る。その根拠は不明。語り手は混乱して  
9 いるのだ。作者は、語り手の混乱を文芸的に表現しているのではない。

10 〈道徳的な罪悪感のせいで夫婦は苦しんでいる〉という物語は、彼らが共有している欺瞞  
11 の物語だろう。真相は、〈罪悪感の共有演技以外に夫婦生活を続ける理由がない〉といった  
12 ものだろう。語り手は、こうした真相を隠蔽するために詭弁を弄し、気障な美文を濫造して  
13 いるのに違いない。作者は、勿論、語り手の企画に加担している。

14  
15 いまではふたりは、同じひとつのおののきに身をふるわせていた。ふたりの胸は、いた  
16 ましいえにしに結ばれた兄妹のように、同じひとつの苦悩に締め付けられていた。そのと  
17 きからふたりは、楽しむときにも、苦しむときにも、ただひとつの肉体しかもたなかった  
18 し、ただひとつの靈魂しかもたなかった。こうした共有の現象、こうした相互浸透の現象  
19 は心理学と生理学のみとめる事実であり、しばしば、強烈な神経の動揺からはげしく衝突  
20 しあうふたりの人間のあいだに起こるものだ。

21 (エミール・ゾラ『テレーズ・ラカン』18)  
22

23 「ふたり」はテレーズとローラン。「おののき」が亡霊を作り出した。疑心暗鬼を生ず。  
24 『門』では、前夫は死なず、あたかも亡霊のように近づいてくるようだ。しかし、何事も  
25 なく終わる。ロマンチックなことは一切起きない。  
26 共犯関係にあった夫婦の相互監視について、次のように語られる。

27  
28 二人の精神を組み立てる神経系は、最後の繊維に至るまで、互に抱き合って出来上って  
29 いた。彼等は大きな水盤の表に滴<sup>した</sup>たった二点の油の様なものであった。水を弾<sup>はじ</sup>いて二つが  
30 一所に集まったと云うよりも、水に弾かれた勢で、丸く寄り添った結果、離れる事ができ  
31 なくなると評する方が適当であった。

32 彼等は<sup>ほうごう</sup>この<sup>うち</sup>抱合の中に、尋常の夫婦に見出し難い親和と飽満と、それに伴う<sup>けんたい</sup>倦怠とを兼  
33 ね<sup>そな</sup>具えていた。そうしてその倦怠の<sup>ものう</sup>慵い気分<sup>ものう</sup>に支配されながら、自己を幸福と評価する  
34 事だけは忘れなかった。

35 (夏目漱石『門』十四)  
36

37 「二人の精神を組み立てる神経系」は意味不明。作者にも像は見えていないはずだ。  
38 Sの場合、「自己を幸福と評価する事」はできない。「私達は最も幸福に生れた人間の一对  
39 であるべき筈<sup>はず</sup>」(上十一)と語るのだから精一杯だ。なぜなら、静はSの共犯者ではないからだ。

40 『門』の語り手は「尋常の夫婦」の「<sup>ほうごう</sup>抱合」を何度も「見出し」てきたらしい。豆男か。  
41 「<sup>ほうごう</sup>抱合」の様子を見せてくれる「夫婦」は「尋常」だろうか。

42 「自己」は「彼ら」の一人一人か。  
43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6230 相互監視  
4 6233 「天罰」

5  
6 S夫妻に子はいない。〈Sは罪悪感のせいで陰妻になった〉という解釈があるが、不適切。

7  
8 「子供は何時まで経ったって出来っこないよ」と先生が云った。  
9 奥さんは黙っていた。「何故です」と私が代りに聞いた時先生は「天罰だからさ」と云  
10 って高く笑った。

11 (夏目漱石『ころ』「上 先生と私」九)

12  
13 静が黙っていた理由は不明。

14 「代りに」は不可解。「天罰」は意味不明。「天に代わって誅戮<sup>ちゅうりく</sup>を加える夜遊び」の「天」  
15 は冗談だろう。「天罰」も冗談のようだが、どうだろう。

16  
17 「貴方<sup>きつ</sup>先刻<sup>さつき</sup>小供がないと淋<sup>さび</sup>しくって不可<sup>いけ</sup>ないと仰<sup>おつ</sup>しゃってね」

18 宗助はこれに類似の事を普遍的<sup>マ</sup>に云った覚は慥<sup>ま</sup>かにあった。けれどもそれは強<sup>あな</sup>がちに、  
19 自分達の身の上に就て、特に御米の注意<sup>ひ</sup>を惹く為に口にした、故意の観察でないのだから、  
20 こう改まって聞き糺<sup>ただ</sup>されると、困るより外なかった。

21 (夏目漱石『門』十三)

22  
23 御米は、易者に、「あなたは人に対してすまない事をした覚<sup>おぼえ</sup>がある。その罪<sup>た</sup>が崇<sup>た</sup>っている  
24 から、子どもは決して育たない」(『門』十三)と言われた。易者の指摘が作品の内部の世界  
25 における真実であるのなら、『門』はオカルト小説だろう。

26  
27 胎児は出る間際まで健康だったのである。けれども臍<sup>さい</sup>帯<sup>たい</sup>纏<sup>てん</sup>絡<sup>らく</sup>と云って、俗に云う胞<sup>えな</sup>を頭<sup>くび</sup>  
28 へ捲<sup>ママ</sup>き付けていた。

29 (夏目漱石『門』十三)

30  
31 『門』における流産に相当するような出来事は、『ころ』に出てこない。

32 冗談でも〈「天罰」の物語〉が成り立つのなら、子をなさない静もKに崇<sup>た</sup>られていること  
33 になりそうだ。しかも、その種の事柄を、静は察知していることになる。〈静は「遺書」の  
34 物語を知っているが「黙っていた」〉と誤読する自由はある。

35  
36 つまり妻が中間に立って、Kと私を何処までも結び付けて離さないようにするのです。  
37 妻の何処にも不足を感じない私は、ただこの一点に於<sup>おい</sup>て彼女を遠ざけたがりました。

38 (夏目漱石『ころ』「下 先生と遺書」五十二)

39  
40 静にも、この「K」が見えているのか。

41 この「たがり」は誤用。〈たがる〉は「自分以外の者がある事柄を望んでいる意を表す」  
42 (『広辞苑』「たがる」)からだ。Nには、自他の欲求の区別ができなかったのかもしれない。

43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6240 『門』と『道草』  
4 6241 破れ鍋に綴じ蓋

5  
6 『門』は、〈御米と宗助は愛しあっているながら、過去のことを気に病んで幸せになれない〉  
7 と総括できる。だが、常識的には、〈二人が幸せになれないのは愛しあっていないからで、  
8 その事実を否認するために過去のことにと泥して無駄に苦しんで現実逃避をしている〉と  
9 推測できる。この推測を否定できる証拠は見当たらない。

10  
11 小康はかくして事を好まない夫婦の上に落ちた。

(夏目漱石『門』二十三)

12  
13  
14 「小康」だから、「事」は処理できていない。〈「小康は」～「落ちた」〉は意味不明。

15 この語り手は、昔話の語り手に似ている。〈王子様とお姫様は幸せに暮らしましたとき〉  
16 といった伝聞の調子が感じられるわけだ。「かくして」の真意は〈隠して〉かな。

17 作者は、〈御米と宗助は、破れ鍋に綴じ蓋で、それなりに幸せになりましたとき〉と暗示  
18 するのか。逆に、〈悪い男女は死ぬまで苦しみ続けることでしょう〉と暗示するのか。

19  
20 若い方が、今朝始めて <sup>ママ</sup> 鶯 <sup>うぐいす</sup> の鳴声を聞いたと話すと、坊さんの方が、私は二三日前にも  
21 一度聞いた事があると答えていた。

22 「まだ鳴きはじめだから下手だね」

23 「ええ、まだ充分には舌が回しません」

(夏目漱石『門』二十三)

24  
25  
26 「若い方」が悟りかけていて、「坊さん」が少し悟っている。宗助は、「若い方」と「坊さ  
27 さん」の間か。「小康」で満足か。「若い方」には悟る可能性がありそうだが、宗助にはなさそ  
28 うだ。だったら、「宗助」という文字を〈宗教によって助かる〉と読むのは間違いだ。企画  
29 倒れか。

30  
31 宗助は <sup>うちママ</sup> 家へ帰って御米にこの鶯の問答を繰り返して聞かせた。御米は障子の <sup>ガラス</sup> 硝子に映  
32 る <sup>うらら</sup> 麗かな日影をすかして見て、

33 「本当に難有いわね。 <sup>ありがた</sup> 漸 <sup>ようや</sup> くの事春になって」と云って、晴れ晴れしい眉 <sup>まゆ</sup> を張った。宗助  
34 は縁に出て長く延びた爪 <sup>つめ</sup> を <sup>き</sup> 剪りながら、

35 「うん、然し <sup>しか</sup> 又じき冬になるよ」と答えて、下を向いたまま <sup>はさみ</sup> 鋏を動かしていた。

(夏目漱石『門』二十三)

36  
37  
38 宗助が「この鶯の問答」を御米に聞かせたのは、「夫婦」の「小康」を暗示するためだ。  
39 しかし、彼女は、〈夫の精神状態を案じる必要がなくなった〉と解釈したはずだ。その種  
40 のことを、語り手は隠蔽している。作者の意図は不明。

41 「冬」つまり「事」は「またじき」やってくる。でも、どこから？  
42 で、おしまい。やれやれ。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6240 『門』と『道草』  
4 6242 『道草』の原型

5  
6 『門』の終わりと『道草』の終わりは似ている。

7  
8 「まあ好かった。あの人はこれで片が付いて」  
9 細君は安心したと云わぬばりの表情を見せた。  
10 「何が片付いたって」  
11 「でも、ああして証文を取って置けば、それで大丈夫でしょう。もう来る事も出来ない  
12 し、来たって構い付けなければそれまでじゃありませんか」  
13 「そりゃ今までだって同じ事だよ。そうしようと思えば何時でもできたんだから」  
14 「だけど、ああして書いたものを此方の手に入れて置くと大変違いますわ」  
15 「安心するかね」  
16 「ええ安心よ。すっかり片付いちゃったんですもの」  
17 「まだ中々片付きゃしないよ」  
18 「どうして」  
19 「片付いたのは上部だけじゃないか。だから御前は形式張った女だというんだ」  
20 細君の顔には不審と反抗の色が見えた。  
21 「じゃどうすれば本当に片付くんです」  
22 「世の中に片付くなんてものは殆んどありゃしない。一遍起った事は何時までも続く  
23 のさ。ただ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなるだけの事さ」  
24 健三の口調は吐き出す様に苦々しかった。細君は黙って赤ん坊を抱上げた。  
25 「おお好い子だ好い子だ。御父さまの仰る事は何かちっとも分りゃしないわね」  
26 細君はこう云い云い、幾度か赤い頬に接吻した。

27 (夏目漱石『道草』百二)

28  
29 「あの人は健三の元養父。  
30 「証文」は、健三に金をせびっていた元養父が健三と「向後一切の関係を断つ」(『道草』  
31 百二)という約束。有効性は疑わしい。  
32 「殆んど」は笑える。  
33 すぐ後で、ある「形に変わる」が、そのことに健三が気づいているかどうか、不明。  
34 『道草』は『門』の原典のようなものだ。あるいは、両者の原典は語られたことのないN  
35 の〈自分の物語〉であり、『道草』は『門』よりも原典に近づいたとも考えられる。  
36 『門』では、妻の元夫のイメージによって宗助は苦しむ。そのことを妻は知らない。妻は  
37 養子を疎んじる。夫の精神は小康を得る。妻もそのことを察して和むらしい。  
38 『道草』の健三は、元養父によって実際に苦しめられる。そのことを妻は知っている。妻  
39 は実子を溺愛する。彼女は夫の不安を察さない。  
40 宗助は加害者だが、健三は被害者だ。宗助は、自分が罪を犯したと思っている。一方、健  
41 三は、元養父に虐待されながらも彼に執着している。『道草』から逆算すると、〈宗助は何者  
42 かによる虐待を罰と思いこみ、罪を捏造した〉と解釈できる。

43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6240 『門』と『道草』  
4 6243 『現代人は愛しうるか』  
5

6 何四天王は被愛願望を隠蔽するために言葉を並べる。  
7

8 彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合うものは苦しめ合うのかを考えたりした。その  
9 間も何か気味の悪い二階の傾きを感じながら。

10 (芥川龍之介『或阿呆の一生』「三家」)  
11

12 「互に愛し合うもの」の真相は、〈互いに愛されたがるもの〉だ。  
13

14 個人は愛することができない。これを現代の公理とするがいい。近代の男女は個人として  
15 以外に自分自身のことを考ええないのだ。ゆえに、彼等のうちにある個性は、ついにお  
16 なじく自分たちのうちの愛し手を殺さねばやまぬ宿命にある。というのは、自分の愛する  
17 対象を殺すというのではない。おのおのが自己の個性を主張することによって、自己のう  
18 ちなる愛し手を殺すということなのだ。男も女もおなじである。キリスト教徒はついに愛  
19 しえない。愛はキリスト者的なもの、民主主義者、近代的なものを、要するに個人を殺し  
20 てしまう。個人は愛することができない。個人がひとたび愛するならば、もはや彼は純粋  
21 な個人ではなくなってしまう。そこで彼はふたたび自己をとりもどし、かくして愛するこ  
22 とをやめねばならないのだ。これこそ現代の教えるもっとも驚愕すべき教訓でなくして  
23 なるであろう。個人、キリスト教徒、民主主義者は愛しえぬというのだ。いや、愛してみ  
24 るがいい、そのとき人は一度さしだしたものをとりもどさねばならぬ、撤回せねばならぬ  
25 のだ。

26 (D・H・ロレンス『現代人は愛しうるか』)  
27

28 Sの「覚悟」(上十四)は、〈現代人は愛されえぬ〉というものだろう。  
29

30 現代人は愛されることがない。これを現代の公理とするがいい。近代の男女は個人として  
31 以外に自分自身のことを考えられないのだ。ゆえに彼らのうちにある個性は、ついに同じく  
32 自分たちのうちの愛され手を殺さねばやまぬ宿命にある。というのは、自分を愛する主体を  
33 殺すということではない。各々が自己の個性を主張することによって、自己のうちなる愛さ  
34 れ手を殺すということなのだ。男も女も同じである。近代的なものは、要するに個人は、被  
35 愛願望を殺してしまう。個人はついに被愛感情を得ることがない。個人がひとたび愛される  
36 ならば、もはや彼もしくは彼女は純粋な個人ではなくなってしまう。そこで彼もしくは彼女は  
37 ふたたび自己を取り戻し、かくして愛されることをやめねばならないのだ。これこそ現代  
38 の教えるもっとも驚愕すべき教訓でなくして何であろう。現代人は愛されえぬというのだ。  
39 いや、愛されてみるがいい、そのとき人は一度差し出されたものを取り戻させねばならぬ、  
40 撤回させねばならぬのだ。

41  
42 Pの得た「教訓」(上三十一)は、〈現代人は愛されえぬ〉といったものかもしれない。  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6250 「父母未生以前本来の面目」  
4 6251 「少しばかり学問をしたもの」

5  
6 宗助は『菜根譚』を読んでいない。なぜだろう。

7  
8 多情の女は男狂いの果てに尼になり、のぼせやすい男は思いつめて仏道にはいる。かく  
9 して神聖なるべき寺院が、いつもみだらな女やよこしまな男どもの集まる巢窟くつとなるこ  
10 とは、このような次第である。

11 (洪自誠『菜根譚』「菜根譚後集」一三〇)

12  
13 次のように告げる「老師」は「よこしまな男ども」の一人ではないのか。

14  
15 「まあ何から入っても同じであるが」と老師は宗助に向って云った。「父母未生以前本来  
16 の面目は何だか、それを一つ考えてみたら善かろう」

17 (夏目漱石『門』十八)

18  
19 〈人を見て法を説く〉という言葉がある。

20 宗助はこの公案に対して「単に頭から割り出した、あたかも画にかいた餅もちの様な代物しろもの  
21 (『門』十九)を「老師」に示した。だが、その「代物しろもの」を、語り手は明示しない。その理  
22 由は不明。

23  
24 「もっと、ぎろりとしたところを持って来なければ駄目だ」と忽たちまち云われた。「その位な  
25 事は少し学問をしたものなら誰でも云える」

26 (夏目漱石『門』十九)

27  
28 「駄目」なのは「老師」だろう。こんな冷評ぐらい、「誰でも云える」さ。「ぎろりとした  
29 ところ」の例を、作者は想像しているのだろうか。ただのお洒落みだ。

30  
31 なんとも不思議な感動というか、うずくような痛みが、足の先から頭の天頂てっぺんまで走るの  
32 を感じました。突然肉体から解放されたとでもいうか、純粹無垢の精神になって、それま  
33 で考えたこともないような美しさに同化してしまったような気持ちになりました。なに  
34 か人間以上の知にでも充たされたような気がして、いままで混乱してた一切のものが、す  
35 っかり明瞭になり、いままでわからなかったものが、すべて説明されたような感じでした。  
36 幸福感のあまり、それはむしろ苦しいような気持ちで、なんとかしてそれから逃れ出そう  
37 ともがくくらい。というのは、これ以上もう一瞬間でもつづけば、死んでしまうんじゃないか  
38 かって気さえたからでした。そのくせ、その恍惚感というのは、これをいま棄てるくらい  
39 なら、むしろこのまま死んだ方がいいといった気持ちでもあったのでした。

40 (サマセット・モーム『かみそりの刃』)

41  
42 この「不思議な感動」を「老師」が聞いたら、どう答えたろう。

43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで

2 6200 門外漢の『門』

3 6250 「父母未生みしよう以前本来の面目」

4 6252 『兵法家伝書』

5

6 公案に定説みたいな答えはないはずだ。

7

8 禅の問答は、時と所を異にして第三者のコメントがつくのがふつうで、はじめになにも  
9 答えられなかった僧にかわる代語や、答えても不十分なものには別の立場から答えてみ  
10 せる別語など、第2次・第3次の問答をうみだした。

11 (『山川 日本史小辞典』「公案」)

12

13 こういうやりとりは、『門』でやられていない。その理由は不明。

14

15 本心と云ふは、本来ほんらいの面目めんもく、父母未生みしよう以前よりそなはりて、かたちなければ、生しょうずると云ふ事なし、滅めつする事なし。

16

17 (柳生宗矩『兵法家伝書』「活人剣 下」)

18

19 宗助に「学問」があるのなら、こんなふうに答えることができたはずだ。「老師」は、こ  
20 んなふうにに答えられたら、どのように対応したろう。私には何も想像できない。

21

22 禅ぜんは此心を伝へたる宗旨しゆうし也と承うけたまはる所也。又相似そうじの禅ぜんとて、似たる事をいひて真まことの  
23 道みちにあらぬ人多ければ、禅者ぜんしゃとて一箇いちずにあらぬと也。

24

25 (柳生宗矩『兵法家伝書』「活人剣 下」)

26

27 「老師」は柳生宗矩をどのように評価したろう。「老師」が「似たる事をいひて真まことの道みちに  
28 あらぬ人」ではないという証拠はあるか。ない。

29

30 「道は近きちかにあり、却ってこれを遠きに求むという言葉があるが実際です。つい鼻の先に  
31 あるのですけれども、どうしても気が付きません」と宜道はさも残念そうであった。

32

33 (夏目漱石『門』二十一)

34

35 この「道」は仏の道か。

36

37 孟子曰く、道は邇ちかきに在り、而しかるに〔人〕諸これを遠きに求む。事は易やすきに在り、而しかるに、  
38 〔人〕之これ（諸）を難かたきに求む。人人其の親を親とし、其の長を長とせば、而すなわ（則）ち天  
39 下平らかなり。

40

41 (『孟子』「卷第七 離婁章句上」一一)

42

43 最初から時間制限があつて、宗助は山門を去ることになる。別れ際、「老師」は「少しま  
44 も手掛りが出来てからだ」と、帰ってたあとも楽だけれども。惜しい事で(『門』二十一)と、  
45 無責任なことを言う。「惜しい事」をしたのは、「老師」自身のはずだ。

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6200 門外漢の『門』  
3 6250 「父母未生以前本来の面目」  
4 6253 「チーン」

5  
6 『かみそりの刃』(モーム)は嘘っぽい。『門』は嘘っぽくすらない。

7  
8 彼は門を通る人ではなかった。又門を通らないで済む人でもなかった。要するに、彼は  
9 門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった。

10 (夏目漱石『門』二十一)

11  
12 「門」という言葉の比喩するものは、明瞭ではない。だから、「門を通る」も、「門を通ら  
13 ないで済む」も、意味不明。〈「通る」かつ「通らないで済む」〉は無意味。

14 「要するに」とあるが、何も要約していない。「日の暮れる」の比喩する事柄も不明。「待  
15 つべき」宗助は、待たずに帰る。もう、わけがわからない。

16 語り手は怪しいことをしている。物語は二種あるはずだ。

17  
18 I 「老師」は、お約束通り、「不幸な人」宗助を救う。

19 II 「老師」は軽薄才子なので、「不幸な人」宗助を救えない。

20  
21 普通の作品はIのように展開する。宗助は「面目」を悟る。その悟りを「老師」がどのよ  
22 うに評価しようと、話としてはけりがつく。『門』の主題がIIなら、誰かが「老師」の正体  
23 を暴くことになる。実際には、どちらでもない。『門』の作者は、『門』の前で「立ち竦んで」  
24 いるのだ。つまり、未完。

25  
26 それでも我慢して凝と坐っていた。堪えがたい程切ないものを胸に盛れて忍んでいた。  
27 その切ないものが身体中の筋肉を下から持上げて、毛穴から外へ吹き出よう吹き出よう  
28 と焦るけれども、何処も一面に塞がって、まるで出口がない様な残刻極まる状態であった。

29 その内に頭が変になった。行燈も蕪村の画も、畳も、違棚も有って無い様な、無くっ  
30 て有る様に見えた。と云って無はちっとも現前しない。ただ好加減に坐っていた様である。  
31 ところへ忽然隣座敷の時計がチーンと鳴り始めた。

32 はっと思った。右の手をすぐ短刀に掛けた。時計が二つ目をチーンと打った。

33 (夏目漱石『夢十夜』「第二夜」)

34  
35 「第二夜」の末尾。

36 主人公は「もし悟れなければ自刃する」(『夢十夜』「第二夜」)と思い詰めて、「朱鞘の短  
37 刀」(『夢十夜』「第二夜」)を準備していた。そんな思いで「無」がどうのこうのという現象  
38 は起きそうにない。ところが、『ユメ十夜』の「第二夜」(市川崑監督)では、「和尚」が自  
39 殺を止めに入り、「それでいいのだ」と、バカボンのパパみたいなことを言って終わる。

40 一方、宗助の「妄想」(『門』十八)は詳述されないが、安井を思い浮かべはした。安井こ  
41 そが宗助の今の「面目」つまりDなのだ。宗助は、自分と安井を切り離すことができない。  
42 ただし、そのような文芸的表現になってはいない。失敗作だ。

43  
44  
45

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6310 「意地の強い男で、また意地の弱い男」  
4 6311 自意識

5  
6 『彼岸過迄』に関する事典の説明は、読解の役に立たないばかりか、邪魔でさえある。

7  
8 自意識が強く、自我に忠実に生きようとする須永(すなが)は、煩悶(はんもん)の末、  
9 苦悩を癒(い)やしに関西に旅立つ。そして、自然を「考えずに観(み)る」ことができ  
10 る調和的心境に至る。エゴイズムの問題を追究した後期3部作の第1作。

11 (『近現代文学事典』「彼岸過迄」)

12  
13 「自意識が強く」や「自我に忠実に」は意味不明。須永の下の名は市蔵という。「苦悩を」  
14 は「苦悩」を味わい、それ「を」の不当な略だろう。

15 「自然」は怪しい。「考えずに観(み)る」ことは「心を一つの対象に集中させて雑念  
16 を止め(止)、正しい智慧によって対象を観察すること(観)」(『広辞苑』「止観」)のようだ  
17 が、「対象」が「自然」だと曖昧。「調和的心境」は意味不明だが、それが穏やかな「心境」  
18 なら、「至る」は間違い。須永は「至る」ことを願っただけだ。

19 「エゴイズムの問題」は意味不明。「後期三部作」は伝説。

20 「自意識」とは何だろう。

21  
22 自分自身がどうであるか、どう思われているかについての意識。

23 (『広辞苑』「自意識」)

24  
25 「自分自身がどうであるか」は、よくわからない。「どう思われているか」は、〈自分が他  
26 人に「どう思われているか」〉の略だろう。だったら、他人に教えてもらおう。自分でわか  
27 るのなら、〈自分が他人に「どう思われている」と自分は思う「か」〉の不当な略だろう。「ど  
28 う思われているか」という問題の答えは「自分自身がどうであるか」という問題に反映しそ  
29 うだ。たとえば、自画像を描くとき、他人の描いた自分の肖像画を参考にするようなものだ。  
30 この説明では、「自意識が強く」は理解できない。

31  
32 普通には自己の活動や体験、あるいはそれらの自我との関係の意識として現象し、さら  
33 に進んでは自己を独自の同一的存在としてとらえるが、それはむしろ自己認識の性格が  
34 つよい。自意識は内に向けられたさめた意識であり往々非活動性を招き、病的に高じると  
35 孤独感と結びつく。

36 (『ブリタニカ国際大百科事典』「自意識」)

37  
38 「普通」が普通に思えない。用いられている漢語のすべてが、よくわからない。「自我」  
39 は意味不明。「意識として現象し」は難しすぎる。「独自の同一的存在」は意味不明。〈「自己  
40 を」～「とらえる」〉は意味不明。「それ」の指す言葉が見当たらない。

41 「内」は意味不明。「さめた意識」は意味不明。「病的に高じる」は意味不明「孤独感」は  
42 意味不明。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6310 「意地の強い男で、また意地の弱い男」  
4 6312 自意識過剰

5  
6 「自意識が強く」なったら〈自信過剰〉みたいだが、〈自意識過剰〉かもしれない。

7  
8 意識の中で、いつも自分を中心にすえて考えないわけにいかないような性向の強いこ  
9 と。特に、欲求不満が起こっている自我意識には、阻止された欲求の意識と、その欲求を  
10 阻止されている自我が意識され、さらにそのような状態の中にある自我が意識されると  
11 いうように、無限に意識が増大していくこと。

12 (『日本国語大辞典』「自意識過剰」)

13  
14 珍紛漢紛。「自我意識」について調べてみる。

15  
16 [心] (self-consciousness) 自己について持っている意識。  
17 (『広辞苑』「自我意識」)

18  
19 「自我意識」は心理学用語らしいが、こんなのは説明になっていない。

20  
21 [哲] (self-consciousness) 自己自身に関する意識。諸体験の統一的・恒常的・自己  
22 同一的主体としての自我の意識。自意識。自覚。

23 (『広辞苑』「自己意識」)

24  
25 この「自己意識」は哲学用語で、『近現代文学事典』の「自意識」は文芸用語らしい。  
26 一つの英単語が、日本語では別々の言葉になる。日本のインテリゲンチヤは縦割りだ。  
27 「自我」を、さっさと始末したい。

28  
29 心理学における自我 ego の概念は、かならずしも明確なものではなく、また多様な意味  
30 に使われている。一般には、いろいろなものを感じたり、考えたり、行動したりする自分  
31 というものを自覚するが、この意識したり行動したりする自分の主体を自我という。しか  
32 し、自我という概念は、このほかにも特定の意味をもつものとして使われている。

33 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「じが self」青木豊)

34  
35 「特定の意味」の一例。

36  
37 フロイトの精神分析では、自我 (エゴ) を、本能的衝動の充足を要求するイド (エス)  
38 と道徳的規範の厳格な遵守を要求する超自我の間に立って人格全体を統合し、現実外界  
39 に適応した思考と行動をつかさどるものとした。

40 (『百科事典マイペディア』「自我」)

41  
42 フロイト的には、「自我に忠実に」という言葉に意味はなさそうだ。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6310 「意地の強い男で、また意地の弱い男」  
4 6313 「母が僕を生んでくれた事」

5  
6 須永は次のように自己紹介する。  
7

8 こう云っても人には通じないかも知れないが、僕は意地の強い男で、又意地の弱い男な  
9 のである。

10 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」十三)

11  
12 「こう」は「僕は」以下を指す。「意地」は須永の自分語だろう。「僕は」虚栄心「の強  
13 い男で、また」自尊心「の弱い男なのである」と誤読できる。須永の物語は二種あり、一  
14 つの物語の主人公は「意地の強い男」で、もう一つの物語の主人公は「意地の弱い男」だ。  
15

16 僕がこんな煩瑣くだくだしい事を物珍ママらしそうに報道したら、叔父さんは物数奇ものずきだと云って定  
17 めし苦笑なさるでしょう。然しこれは旅行の御蔭おかげで僕が改良した証拠しやうこなのです。僕は自由  
18 な空気と共に往来する事を始めて覚えたのです。こんな詰らない話を一々書く面倒いとを厭  
19 わなくなったのも、つまりは考えずに観るからではないでしょうか。考えずに観るのが、  
20 今の僕には一番楽だと思います。僅かの旅行で、僕の神経だか性癖だかが直ったと云った  
21 たら、直り方があまり安っぽくて恥ずかしい位です。が、僕は今より十層倍じっそうばいも安っぽく母が  
22 僕を生んで呉れた事を切望やして已まないのです。

23 (夏目漱石『彼岸過迄』「松本の話」十二)

24  
25 須永から松本へ送った手紙。この前に、旅先で見聞きした「話」が記されている。  
26 「改良した」ことはしたが、全快したのではない。

27 「つまりは」の後は「改良した証拠しやうこなのです」といった文言が繰り返されるべきだ。「考  
28 えずに観るから」なんて飛躍。全快していない「証拠しやうこ」だ。

29 「母が僕を生んで呉れた事」は仮想。「母」は継母だ。「神経だか性癖だか」は「母」の育  
30 て方が悪かったせいに違いないのだが、作者はそっちの方へ話を進めない。

31 「煩瑣くだくだしい話」を一刀両断すれば、「意地の」悪い「男」の「話」だろう。  
32

33 「なある程、それをゴージアンママ、ノットと云うんだね。そうか。その結目ノットををアレキサ  
34 ンダーが面倒臭いといって、刀を抜いて切っちゃったんだね。うん、そうか」

35 (夏目漱石『虞美人草』三)

36  
37 意地っ張りの意気地なしなんか、「面倒臭いといって」切っちゃう。  
38

39 なにか古代に関係のあるものらしい。ギリシャ人のネクタイの締め方のことか。

40 (ギユスターヴ・フロベール『紋切型辞典』「ゴルディオスの結び目」)

41  
42 「なある程」ね。  
43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6320 長すぎる春  
4 6321 須永市蔵の物語

5  
6 『彼岸過迄』は、「風呂の後」「停留所」「報告」「雨の降る日」「須永の話」「松本の話」そ  
7 して「結末」から成る。

8  
9 大学出の田川敬太郎は、就職の必要から、友人須永市蔵の叔父の実業家田口要作を知り、  
10 さまざまな奇妙な経験を重ね、須永、田口、もう一人の叔父の資産家松本恒三ら、その親  
11 族関係を知る。田川の冒険と探偵とを通じて、友人須永市蔵と許婚者田口千代子との関係  
12 に近づき、その実相を明らかにすることで、本編の主題に入っていく。須永は真実千代子  
13 を愛しながら、自我に忠実に生きようとするかぎり、諸種の事情に妨げられ、精神的孤独  
14 と寂寞に陥り、手足を出すこともできぬ。「恐れる男」と「恐れない女」との奇妙な関係、  
15 須永の孤独な内面の悲劇を理解できるものはいない。実は須永には出生の秘密があり、煩  
16 悶のすえ、苦悩を癒やしに関西に旅立つ。そして自意識過剰な彼も、自然を「考へずに観  
17 る」ことのできる調和的な心境に達したと思う。しかし人間の心の深淵に深く探りを入れる  
18 ことで、作者はいよいよ暗い眼をして迫っていかねばならぬ。

19 (『日本近代文学大事典』「夏目漱石」瀬沼茂樹)

20  
21 意味不明。面倒だから、細かく検討しない。

22 「本篇」とは〈市蔵の物語〉だろうが、これは「須永の話」と「松本の話」から成る。全  
23 体のほぼ三分の一。

24 「須永は真実千代子を愛しながら」は、完全な誤読。「達したと思う」は正しい。つまり、  
25 達してはいないのだ。この点を誤読する人は少なくない。

26  
27 辰野隆は東京帝大法科の学生として、毎日この小説を読んだ経験を反省して、次のよう  
28 に云っている。

29 僕は毎朝この小説を読むのが無上の楽しみだった。……僕は異常な親しみをもって青  
30 年須永市蔵を愛し始めたのであった。明治末期インテリゲンチヤの消極的個人主義は須  
31 永の裡にその代表的存在を牢固として基きあげている。須永が法科の卒業受験生であり  
32 ながら、すでに夙く、社会生活の夢や青雲の志や富への憧憬をまったく放下して、狭い  
33 ながら、自我の奥に人世探求の耿々たるひとみを据えたところは、当年の法科の秀才より  
34 むしろ文科の人材に往々に見受けた貴い型であった。

35 このように、自我しかもたぬ須永の性格の設定は、近代文学の特色を大きくうち出した  
36 ことになり、作品としての出来、不出来は別として、漱石の思想的な深さを証明する一要  
37 因であろう。

38 (吉田精一「過渡期に位置する作品群」\*)

39  
40 「この小説」は『彼岸過迄』だ。

41 「異常な親しみ」について反省すべきだ。「往々」と「貴い」は合わない。

42 「自我しか持たぬ」なんて、もう、突っ込んであげない。

43  
44 \* 「夏目漱石全集6」(ちくま文庫)所収。

45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6320 長すぎる春  
4 6322 「必死の緊張の下に」

5  
6 叔父の松本は須永のことを心配している。お芝居だが、作者の虚構と区別できない。

7  
8 僕は誰にでも明言して憚らない通り、一切の秘密はそれを開放した時始めて自然に  
9 復る落着<sup>かえ</sup>を見る事が出来るという主義を抱いているので、穏便とか現状維持とかいう言  
10 葉には一般の人ほど重きを置いていない。従って今日までに自分から進んで、市蔵の運命  
11 を生れた当時に<sup>さかのぼ</sup>遡<sup>おやこ</sup>って、逆に照らしてやらなかったのは僕としては寧ろ不思議な手落と  
12 云っても可い位である。今考えて見ると、僕が市蔵に呪われる間際まで、何故この事件を  
13 秘密にしていたものか、その意味が殆んど分らない。僕はこの秘密に風を入れた所で、彼  
14 等母子の間柄が悪くなるうとは夢にも想像し得なかったからである。

15 市蔵の太陽は彼の生れた日から既に曇っていたという僕の言葉の裏に、どんな事実が  
16 含まれているかは、彼と交りの深い君の耳で聞いたら、既に具体的な響となって解<sup>わか</sup>っている  
17 かも知れない。一口でいうと、彼等は本当の母子ではないのである。猶誤解のないよう  
18 に一言付け加えると、本当の母子よりも遥かに仲の好い<sup>ママ</sup>継母と<sup>ママ</sup>継子なのである。彼等は血  
19 を分けて始めて成立する通俗な親子関係を軽蔑しても<sup>さしつかえ</sup>差支ない位、情愛の糸で離れられ  
20 ないように、自然から確<sup>しつ</sup>かり括り付けられている。どんな魔の振る斧の刃でもこの糸を絶  
21 ち切る訳には行かないのだから、どんな秘密を打ち明けても怖がる必要は更<sup>おの</sup>にないのだ  
22 ある。それなのに姉は非常に恐れていた。市蔵も非常に恐れていた。姉は秘密を手握った  
23 たまま、市蔵は秘密を手握らせられるだろうと待ち受けたまま、二人して非常に恐れて  
24 いた。僕はとうとう彼の恐れるものの正体を取り出して、彼の前に他意なく並べて遣<sup>や</sup>った  
25 のである。

26 僕はその時の問答を一々繰り返して今君に告げる勇氣に乏しい。僕には固<sup>もと</sup>よりそれ程  
27 の大事件とも始から見えず、又成る可く平気を装う必要から、詰り何でも無い事の様に話  
28 したのだが、市蔵はそれを命懸<sup>いのちがけ</sup>の報知として、必死の緊張の下に受けたからである。唯  
29 前の続きとして、事実だけを一口に約<sup>つづ</sup>めて云うと、彼は姉の子ではなくって、小間使いの  
30 腹から生れたのである。

31 (夏目漱石『彼岸過迄』「松本の話」五)

32  
33 「僕」は松本で、「君」は敬太郎。松本は、なぜか、敬太郎に、須永市蔵の「秘密」を探  
34 らせた。敬太郎があらかたのことを知った後、松本はこんな話を始める。

35 「」は怪しい。

36 須永は、自分が継子であることを知ったのに、そのことを継母に知らさない。しかも、母  
37 の口から真実が告げられるのを恐れる。松本が語るとおり、須永の恐れはわかりにくい。自  
38 分の実母が「小間使い」だったことを恥じるわけではない。父を恨むのでもない。

39 「本当の母子よりも遥かに仲の好い<sup>ママ</sup>継母と<sup>ママ</sup>継子」という松本の評価に根拠はない。「軽蔑  
40 しても<sup>さしつかえ</sup>差支ない」は「軽蔑」されても「<sup>さしつかえ</sup>差支ない」を裏返したのか。

41 松本は、須永を騙してきたが、騙しきれなくなり、敬太郎を巻き込んだ。そんなふうに誤  
42 読できる。実際に騙されるのは読者だろう。

43  
44

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
 2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
 3 6320 長すぎる春  
 4 6323 「自分らしいもの」

5  
 6 Nの小説の世界はNの〈自分の物語〉だろうが、それに最も近いのが『道草』だ。『彼岸  
 7 過迄』の長すぎる春は、『門』の終わらない冬で、『道草』の日々。

8  
 9

|       | 『それから』 | 『彼岸過迄』 | 『ころ』 | 『道草』  | 『明暗』 |
|-------|--------|--------|------|-------|------|
| 10 立役 | 代助     | 須永     | S    | 健三    | 津田   |
| 11 探偵 | —      | 敬太郎    | P    | —     | 延子   |
| 12 宿敵 | 平岡     | 高木     | K    | —     | 小林   |
| 13 愛人 | 三千代    | 千代子    | 静    | 妻     | 清子   |
| 14 保母 | —      | 須永の義母  | 静の母  | 健三の養母 | 吉川夫人 |

15  
 16 津田を袖にした清子は、『坊っちゃん』の清に通い、N夫人の鏡子にも通う。『彼岸過迄』  
 17 の「千代子」と『それから』の「三千代」はわかりやすい。名前の類似性は、二人の原型が  
 18 同一であることの露呈だ。二人の性格などは違うように思えるが、役割か何かが同じなのだ。  
 19 その何かがわかるまで、Nの小説は読解できない。〈キヨ≡チヨ〉であるような何かが隠蔽  
 20 されている。その何かは非文芸的象徴だろう。

21  
 22 三重吉の小説によると、文鳥は千代々々と鳴くそうである。その鳴き声が大分気に入っ  
 23 たと見えて。三重吉は千代々々千代を何度となく使っている。或は千代と云う女に惚れて  
 24 いた事があるのかも知れない。

25 (夏目漱石『文鳥』)

26  
 27 『ころ』の場合、二人の語り手がどちらも「私」という人称を用いるので、〈S≡P〉  
 28 だ。P文書の静と「遺書」の静の母はともに「奥さん」と呼ばれているので、同類だろう。

29  
 30 自分は凡て文壇に濫用される空疎な流行語を藉て自分の商標といたくない。ただ自分  
 31 らしいものが書きたいだけである。手腕が足りなくて自分以下のものができたり、衝気が  
 32 あって自分以上を装う様なものが出来たりして、読者に済まない結果を齎すのを恐れる  
 33 だけである。

34 (夏目漱石『彼岸過迄に就て』)

35  
 36 「すべて」は宙に浮いている。「濫用」や「空疎」や「商標」は無視。  
 37 「自分らしいもの」とは〈自分の物語〉を世界とする異本のことだ。「ただ」と「だけ」  
 38 は重複。松本は「その学者は現代の日本の開化を解剖して」(「松本の話」五)云々と語るが、  
 39 「学者」はN自身で、原典は『現代日本の開化』だ。Nは自分の小説の内部に生きていたわ  
 40 けだ。マンネリ。「開化の影響」のせいで「母子の間柄」(「松本の話」五)が危うくなるの  
 41 なら、「通俗な親子関係」(「松本の話」五)に設定すべきだ。男女関係も同様。

42 「自分以下」も「自分以上」も意味不明。ウルトラジブン! 「読者」の像が不明。

- 43  
 44  
 45  
 46

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6330 〈嫉妬〉の二つの意味  
4 6331 「私よりは優勢に」

5

6 「Kに対する嫉妬」(下二十七)の「嫉妬」は夏目語であり、明瞭な意味はない。

7

- 8 ① 自分よりすぐれた者をねたみそねむこと。「弟の才能に一する」「出世した友人を一す  
9 る」  
10 ② 自分の愛する者の愛情が他に向くのをうらみ憎むこと。また、その感情。りんき。や  
11 きもち。島崎藤村、葦草履「一は一種の苦痛です」。「妻の一」

12

(『広辞苑』「嫉妬」)

13

14 『こころ』の場合の「嫉妬」は①のような意味だ。

15

16 容貌もKの方が女に好かれるように見えました。性質も私のようにこせこせしていな  
17 ところが、異性には気に入るだろうと思われました。何処か間が抜けていて、それで何処  
18 かに確かにした男らしいところのある点も、私よりは優勢に見えました。学力になれば専  
19 門こそ違いますが、私は無論Kの敵でないと自覚していました。——凡て向うの好いところ  
20 だけがこう一度に眼先へ散らつき出すと、一寸安心した私はすぐ元の不安に立ち返る  
21 のです。

22

(夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二十九)

23

24 「容貌も」の「も」は不可解。「Kの方が女に好かれるように」思われる要素や出来事は  
25 語られていない。「容貌」に関して、標準を提示せずに比較するのは無駄話。もっと「女に  
26 好かれる」男が現れたら、どうしよう。「新しい世の中を見渡す便宜も生じて来る」(下十  
27 六)のだろう。つまり、自分から身を引くつもりだ。「女」には静の母も含まれる。

28

29 「女」の取り扱いについて「何処か間が抜けて」いる男は、JKに叱られる。「何処かに確  
30 かり」は矛盾めいている。「男らしいところ」は、あくまで男であるSの評価だ。男色文化  
31 に依拠するのだろう。「私よりは優勢」も無駄話。

31

32 「学力」なんかが、ここでどうして問題になるのか。男らしさの競争の場合でも、問題に  
33 なるまい。大卒の男は、死ぬまで「学力」の差を気にするのかもしれない。しかし、世間の  
34 評価は「専門」によって決まるはずだ。「敵でない」の含意は、〈男女関係では「敵」になれ  
35 る〉というものだ。Sは、Kとだけ、モテ競争をしたがった。Kに戦意はない。

35

36 「向うの好いところだけ」しか思い浮かばないのは、Sの同性愛的傾向の露呈だろう。「安  
37 心した私」は、「或時はあまりにKの様子が強くて高いので、私は却って安心した事もあり  
38 ます」(下二十九)という文を参考にすべきか。

38

39 Sの「嫉妬」は「第二の世界」における優劣の変形だ。嫉妬②とは違う。つまり、〈Sに  
40 対するKの愛情が静に「向くのをうらみ憎むこと」〉とは違う。Kが静に愛されるのを、羨  
41 み、ねたみ、憎み、恐れるのだ。

41

42 〈静はKを愛する〉という物語と〈静はSを愛する〉という物語は、混交している。ただ  
43 し、〈静はSとKの両方を同時に愛し、両者を比較する〉という物語はない。ややこしい。

43

44

45

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6330 〈嫉妬〉の二つの意味  
4 6332 意味不明の「嫉妬」

5  
6 『彼岸過迄』における「嫉妬」について、考える。

7  
8 「貴方は妾を御転婆の馬鹿だと思って始終冷笑しているんです。貴方は妾を……愛して  
9 いないんです。つまり貴方は妾と結婚なさる気が……」

10 「そりゃ千代ちゃんの方だって……」

11 「まあ御聞きなさい。そんな事は御互だと云うんでしょう。そんならそれで宜う御座んす。  
12 何も貰って下さいとは云いやしません。唯何故愛してもいず、細君にもしようと思ってい  
13 ない妾に対して……」

14 彼女は此所へ来て急に口籠った。不敏な僕はその後へ何が出て来るのか、まだ覚えな  
15 かった。「御前に対して」と半ば彼女を促がす様に問を掛けた。彼女は突然物を衝き破った  
16 風に、「何故嫉妬なさるんです」と云い切って、前よりは劇しく泣き出した。僕はさっと  
17 血が顔に上る時の熱りを両方の頬に感じた。

18 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」三十五)

19  
20 「僕」は須永市蔵。「千代ちゃん」は千代子。

21 千代子が生まれるとすぐに、須永の義母は「大きくなったら、この子を市蔵の嫁に呉れま  
22 いか」(「須永の話」五)と千代子の両親に頼んだ。ただし、確約を得たかどうか、不明。

23 千代子の質問に須永は答えない。彼の答えを、私は推測することができない。

24 「熱り」の原因について、語り手の須永は何も語らない。この問答の場面で「須永の話」  
25 は終わる。続く「松本の話」では、須永と義母の関係が主な話題になる。そして、「熱り」  
26 の原因は不明のまま、『彼岸過迄』は終わる。

27 千代子の言う「嫉妬」は嫉妬②だ。一方、須永の「嫉妬」は嫉妬①だ。だから、ここで問  
28 答は成り立っていない。また、千代子は浮気をしていないから、彼女の言うとおりに、須永が  
29 嫉妬②をする理由はない。須永の「嫉妬」の原因は、須永自身にも不明なのだろう。つまり、  
30 この「嫉妬」は意味不明なのだ。作者は何をしているのだろうか。

31 須永が千代子を愛していなくても、婚約者同然の千代子が別の男といちゃついたら、面子  
32 が潰れる。そういう話なら、わからなくもない。ただし、その場合、婚約を解消したらよか  
33 ろう。ところが、須永は、婚約解消に踏み切れない。継母の意思に逆らいたくないからだろ  
34 う。このあたりの機微が、うまく表現されていない。須永の〈自分の物語〉において、〈須  
35 永は千代子に「嫉妬」をする〉と須永自身が語っているとすれば、この「嫉妬」の意味は不  
36 明なのだ。嫉妬①でもなく、嫉妬②でもない。夏目語の「嫉妬」の意味の一つは〈見捨てら  
37 れる恐れ、その一歩手前の不安〉かもしれない。

38 千代子は、この質問によって、須永の精神的混乱を暗に指摘している。語られる須永は、  
39 千代子によって自身の混乱に気づかされたらしい。だが、「須永の話」の語り手である須永  
40 自身は、この言葉のこの場面における含意やこの言葉をぶつけられたときの衝撃などに  
41 ついて、ほとんど何も語らない。また、作者もきちんと表現していない。したがって、「嫉妬」  
42 という言葉の意味は、最後まで謎めいたままだ。

43  
44  
45

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6330 〈嫉妬〉の二つの意味  
4 6333 「血属」  
5

6 須永の「嫉妬」は次のように生じる。  
7

8 僕は初めて彼の容貌を見た時から既に羨ましかった。話をする所を聞いて、すぐ及ば  
9 ないと思った。それだけでもこの場合に僕を不愉快にするには充分だったかも知れない。  
10 けれども段々彼を観察しているうちに、彼は自分の得意な点を、劣者の僕に見せ付ける様  
11 な態度で、誇り顔に発揮するのではなかろうかという疑が起った。その時僕は急に彼を  
12 憎み出した。

13 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」十六)  
14

15 「彼」は高木。この「嫉妬」は嫉妬①であり、〈羨望〉と同じような意味だ。  
16 「及ばない」は、〈高木の才気や容貌などに自分のそれらは「及ばない」〉の略。  
17 「疑」の根拠は示されない。被害妄想的。  
18

19 嫉妬を定義する場合、羨望とはっきり区別する必要がある。日常生活ではしばしば混  
20 同して使われるが、心理学的には嫉妬と羨望はまったく異なる。羨望はふつう二者間で生  
21 ずる。羨望の念が強い人は、相手が所有するものを手に入れたいと望み、相手がそれを所  
22 有することを望まない。羨望の対象となるのは、相手の夫あるいは妻、よい関係、美や知  
23 性のような望ましい特性、財産、成功、人望などである。これにたいして、嫉妬はふつう  
24 三者間で生ずる。嫉妬深い人は、大切な関係への第三者からの脅威に気づくと反応を示す。  
25 この第三者が想像上の人物であっても同じことだ。

26 羨望と嫉妬は、人間存在のもっとも基本的な二つの状態に対応する。羨望は何かを持っ  
27 ていない時起こり、嫉妬は、持っている何かを脅かされた時起こる。  
28 (アヤラ・パインズ『ロマンチック・ジェラシー 嫉妬について私たちの知らないこと』)  
29

30 嫉妬①は「羨望」に、嫉妬②は「嫉妬」に相当するようだ。しかし、須永には区別でき  
31 ないようだ。作者が混乱しているのだろう。  
32

33 僕の前にいるものは、母とか叔母とか従妹とか、皆親しみの深い血属ばかりであるのに、  
34 それ等に取り捲かされている僕が、この高木に比べると、却って何処からか客にでも来たよ  
35 うに見えた位、彼は自由に遠慮なく、しかも或程度の品格を落す危険なしに己を取扱かう  
36 術を心得ていたのである。

37 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」十六)  
38

39 千代子は「血属」の一員だが、実は「母」の代理だ。〈高木は「血族」における須永の地  
40 位を奪う〉という物語を須永は恐れている。ただし、本当に恐れているのは、〈高木は「母」  
41 の愛を須永から奪う〉という物語のはずだ。〈高木に対する嫉妬①の物語〉は〈「母」に対す  
42 る嫉妬②の物語〉の異本ということになる。ただし、須永にその自覚はない。  
43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6340 「技巧なら戦争だ」  
4 6341 「僻み根性」

5  
6 『彼岸過迄』の「高木」という名前は、作者の高所恐怖症的気分の露呈だろう。

7  
8 もし千代子と高木と僕と三人が<sup>ともえ</sup>巴になって恋か愛か人情か<sup>つむじかぜ</sup>の旋風の中に狂うならば、  
9 その時僕を動かす力は高木に勝とうとする競争心でない事を僕は断言する。それは高い  
10 塔の上から下を見た時、恐ろしくなると共に、飛び下りなければいけない神経作用と同じ  
11 物だと断言する。

12 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」二十五)

13  
14 「飛び下りなければいけない」は〈「飛び下りなければ」なら「ない」〉という義務の表  
15 現と、〈「飛び下りな」いでは「いられない」〉という欲求の表現の混交だ。

16  
17 或時サローンに<sup>はい</sup>這入ったら派手な<sup>いしやう</sup>衣裳を着た若い女が向うむきになって、<sup>ピアノ</sup>洋琴を<sup>ひ</sup>弾い  
18 ていた。その傍に脊の高い立派な男が立って、唱歌を唄っている。その口が大変大きく見  
19 えた。けれども二人は二人以外の事にはまるで<sup>どんじゃく</sup>頓着していない様子であった。船に乗っ  
20 ている事さえ忘れていた様であった。

21 自分は<sup>ますます</sup>益つまらなくなった。とうとう死ぬ事<sup>ママ</sup>に決心した。それである晩、あたりに人の  
22 居ない時分、思い切って海の中へ飛び込んだ。ところが——自分の足が甲板<sup>はな</sup>を離れて、船  
23 と縁が切れたその刹那に、急に命<sup>おし</sup>が惜なくなった。心の底からよせばよかったと思った。け  
24 れども、もう遅い。自分は厭でも応でも海の中へ<sup>ママ</sup>這入らなければならぬと思った。只大  
25 変高く出来ていた船と見えて、身体は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。然  
26 し<sup>つか</sup>捕まるものがないから、次第々々に水に近づいて<sup>ママ</sup>来る。いくら足を縮めても近付いて来  
27 る。水の色は黒かった。

28 (夏目漱石『夢十夜』「第七夜」)

29  
30 〈「<sup>はい</sup>這入ったら」～「弾いてい」るのが見え「た」〉が正しい。「自分」が「若い女」にな  
31 ったみたいだ。「脊の高い立派な男」になれそうにないので、「自分」は<sup>ますます</sup>「益つまらなくな  
32 った」のだろう。「口」が象徴するのは〈愛の告白〉か。授乳の要求か。

33  
34 僕はよく人を疑<sup>ママ</sup>ぐる代りに、疑<sup>ママ</sup>ぐる自分をも同時に疑<sup>ママ</sup>がわずにはいられない<sup>たち</sup>性質だか  
35 ら、結局他に話をする時にも何方と判然した所が云い悪くなるが、若しそれが本当に僕の  
36 僻み根性だとすれば、その裏面には未だ凝結した形にならない<sup>しつと</sup>嫉妬が潜んでいたのであ  
37 る。

38 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」十六)

39  
40 「代りに」は「同時に」と矛盾する。「疑ぐる自分をも同時に疑がわずにはいられない<sup>たち</sup>性質」  
41 なら、誰をも疑わないはずだ。「それ」は高木の「誇り顔」(『須永の話』十六)に対する「疑」  
42 だ。この<sup>しつと</sup>「嫉妬」は意味不明。「僻み根性」は「明治の精神」の類語。

43  
44  
45

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6340 「技巧なら戦争だ」  
4 6342 コケットリー

5  
6 「嫉妬」が意味不明だから、それと対立するらしい「技巧」も意味不明だ。

7  
8 僕から云わせると、既に鎌倉を去った後猶高木に対しての嫉妬心がこう燃えるなら、そ  
9 れは僕の性情に欠陥があったばかりでなく、千代子自身に重い責任があったのである。相  
10 手が千代子だから、僕の弱点がこれ程濃く胸を染めたのだと僕は明言して憚らない。で  
11 は千代子のどの部分が僕の人格を墮落させるのだろうか。それは到底も分らない。或は彼  
12 女の親切じゃないかとも考えている。

13 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」三十)

14  
15 「鎌倉を去った後」には、高木と千代子は会わなくなった。

16 「僕の性情」とは、「競争心のない」(「須永の話」三十)こと)だろう。「男らしくない  
17 とも、勇気に乏しいとも、意志が薄弱だとも」(「須永の話」二十三)と評される。

18 「墮落させ」は高所恐怖症的。

19 「親切」が仇になる。

20  
21 高木の名前を口へ出さないのは、全く彼女の僕に対する好意に過ぎない。僕に気を悪く  
22 させまいと思う親切から彼女はわざとそれだけを遠慮したのである。

23 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」三十一)

24  
25 「彼女」は千代子。「過ぎない」は「過ぎない」のだろう)などが適當。

26 「遠慮したのである」も。「遠慮した」のだろう)が適當。

27 須永は自分が空想する千代子の「親切」を、「露悪家」に特有の「技巧」(「須永の話」三  
28 十一)と疑うようになる。被愛妄想的気分が被害妄想的気分に変換したらしい。須永は、女  
29 の男に対する「親切」に偽装した「技巧」という考えを導入することによって、男が男に  
30 抱く嫉妬①としての「嫉妬」と男が女に対して抱く嫉妬②としての「嫉妬」を区別する  
31 ことに成功した気になる。その目的は、被愛妄想的気分を自身に対して隠蔽することある。  
32 自己欺瞞。夏目語の「技巧」は「コケットリー」と誤読される。

33  
34 しかし、ココットを一般的興味を中心からひきずりおろしたのは、多くの人が想像する  
35 ように、有産階級のどこまでも押し通すきびしいモラルによってではなく、むしろ、こう  
36 いうココットにたいして、有産階級の女性の中に現われた大きな競争によっていた。ココ  
37 ットはうしろへ押しやられてしまった。なぜなら、これまでのココットたちの生活様式は、  
38 だんだんに、有産階級の女性たちにも、受け入れられたからである。

39 (エドゥアルト・フックス『風俗の歴史』「9 性の商品化時代」)

40  
41 「ココット」は「上流相手の売春婦」(『風俗の歴史』)のこと。

42 Sの空想する静は、玄人の真似をしていた。嫉妬②を煽るために男をなぶった。

43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6340 「技巧なら戦争だ」  
4 6343 惚れたら負け

5  
6 須永は千代子の「親切」の真意を疑うようになる。  
7

8 けれども若し親切を冠らない技巧が彼女の本義なら……。僕は技巧という二字を細か  
9 に割って考えた。高木を媒鳥に僕を釣る積か。釣るのは、最後の目的もない癖に、唯僕の  
10 彼女に対する愛情を一時的に刺戟して楽しむ積か。或は僕にある意味で高木の様になれ  
11 という積か。そうすれば僕を愛しても好いという積か。或は高木と僕と戦う所を眺めて面  
12 白かったという積か。又は高木を僕の眼の前に出して、こういう人がいるのだから、早く  
13 思い切れという積か。——僕は技巧の二字を何処までも割って考えた。そうして技巧なら  
14 戦争だと考えた。戦争ならどうしても勝負に終るべきだ。

15 僕は寐付かれないで負けている自分を口惜しく思った。

16 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」三十一)  
17

18 「親切」とは、「高木の名前を口へ出さないのは、全く彼女の僕に対する好意」と同じ意  
19 味だろう。「親切を冠らない」は〈邪気のある〉と解釈する。この「技巧」と静の「技巧」  
20 は同じだ。「彼女」は千代子。「本義」は、静の「人間の心」(下十八)と同じだろう。

21 〈「二字を」～「割って」〉は意味不明。したがって、「考えた」も意味不明。

22 高木は正体不明。彼の千代子に対する感情も、千代子の彼に対する感情も、どちらも不明。  
23 〈「媒鳥に」～「釣る」〉は意味不明。高木が「媒鳥」つまり「他の鳥獣を誘い寄せて捕らえ  
24 るための鳥獣」(『広辞苑』「おとり」)なら、須永にとって高木は友だちだろう。しかし、二  
25 人は交際していない。だから、ここは、友釣りの比喻が適當。〈友釣り〉とは、「自分の泳ぐ  
26 領域内に侵入する相手に対して闘争を挑むアユのなわばり意識の習性を利用する釣法」(『ブ  
27 リタニカ』「友釣り」)だ。語り手の須永の日本語はおかしい。

28 「最後の目的」は不明。だから、「ない」が〈ある〉でも、無駄話。〈「愛情を」～「刺戟  
29 して」〉は意味不明。

30 「ある意味」は、〈高木は千代子を略奪しそうだ〉という「意味」か。

31 須永も千代子も、〈愛されなければ愛さない〉というテーゼに囚われているらしい。この  
32 テーゼが〈エゴイズム〉などと誤解されてきたのだろう。これは、「極めて高尚な愛の理論  
33 家」(下三十四)のものだ。これは『こころ』で提示されるが、変に自嘲的で、やはりわかり  
34 にくい。『道草』では、このテーゼの無効性が明らかになる。

35 実際に、千代子が「技巧」を弄したのかどうか、わからない。無自覚に「技巧」を弄した  
36 のかどうか、また、須永以外の人に、どのように思えたのか、まったくわからない。

37 この「戦争」は、〈惚れたら負け〉あるいは〈惚れてもらえそうにないと思っただけなら  
38 負け〉だろうか。〈art of war〉は〈戦術〉のこと。「最上の戦」には一語も交うる事を許さ  
39 ぬ」(『虞美人草』二)の「戦」と同じで、自分を愛させる競争。

40 「勝負に終る」は意味不明。須永が「負けている」のは、千代子が彼の前で「高木の名前  
41 を口へ出さない」理由について考えてしまうからだろう。「出さない」であって、〈出す〉で  
42 はない。考えさせたが勝ちか。

43  
44  
45  
46

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6350 「黒い長い髪で縛られた時の心持」  
4 6351 正体不明の「叔父」

5  
6 須永の「僻み根性」は、継母に愛されなかったことが原因なのに違いない。だが、〈母は  
7 息子を愛さない〉という物語は、『彼岸過迄』において、徹底的に排除される。

8 三四郎の空想する異性愛の「第三の世界」には空席があった。ところが、「第三の世界」  
9 に三四郎は参入できない。なぜなら、その空席は三四郎その人のための空席ではないからだ。  
10 それは、彼の「母」が愛する息子のために用意したものだ。ただし、「第三の世界」は、三  
11 四郎の空想の産物だ。したがって、〈「母」は三四郎を愛する〉という物語を三四郎自身が信  
12 じることに成功すれば、「第三の世界」のドアも開きそうだ。〈美禰子は三四郎を愛する〉と  
13 いう物語の原典は〈「母」の「世界」〉なのに、そのことが自覚できなくて、三四郎は自身の  
14 恋慕などを処理しかねていただけだ。

15 一方、〈「母」は須永を愛さない〉という物語を、須永は空想してしまいがちだ。しかし、  
16 この物語は彼の〈自分の物語〉ではない。この物語は、「血族」全体で信じられているのか  
17 かもしれない。須永は、この可能性を矮小化し、〈「母」は須永を愛する〉という物語を信じさ  
18 えすれば安心できるように勘違いしている。この物語の形成に一役買ったのは、叔父の森本  
19 だ。Sの叔父は悪役だが、森本は正体不明。策略家に違いない。

20  
21 普段は厳格なタブーや慣習や法的制裁によって伝統のわく内におさめられている情熱  
22 が、犯罪や倒錯や変態、あるいは未開社会の単調な生活を時折ゆり動かす劇的なできごと  
23 の形で爆発するときには、これらの情熱は、母権制のもとにおける母方のおじへの憎しみ  
24 や姉妹への近親相姦的な欲望などをあらわにする。これらのメラネシア人の伝承もまた  
25 母系コンプレックスを映し出している。呪術の場合同様、神話やおとぎばなしや伝説など  
26 を検討してみれば、普通は伝統的な尊敬や連帯感によってつつまれている母方のおじへ  
27 の抑圧された憎しみが、白昼夢をモデルとし抑圧された願望によって導かれるそれらの  
28 物語の中に姿をあらわしているのがわかる。

29 (B・マリノフスキー『未開社会における性と抑圧』「第二部 伝承の鏡」)

30  
31 須永母子においては、物語としての母権制が機能していた。森本の指摘する「本当の母子  
32 より遙かに仲の好い継母と継子」の関係は、継子いじめを裏返したものだ。実際には、須永  
33 は陰湿ないじめを受けていて、森本はその隠蔽工作を任されていたのだろう。この物語は隠  
34 蔽されている。作者による文芸的暗示ではない。

35 「小間使い」の子である須永は、出生の秘密を知る人たちに軽んじられて育った。家系を  
36 存続するための、いわば駒として利用価値があったので、表面的には優遇されていた。須永  
37 は、自分の知らない〈「血族」の物語〉を世界とする、周囲の人々の言動の真意を正確に理  
38 解することができなかった。その結果、彼は「僻み根性」の持ち主になった。彼は、自分が  
39 被害妄想的であるかのように思っているが、すべてが妄想ではなさそうだ。

40 『ファミリー・シークレット』(ブラッドショー)や『血族』(山口瞳)を参照。

41 「母」こそが、もっとも須永を軽んじていた。彼女は継子に本心を知られまいとして、良  
42 い母を演じ、須永を甘やかして自分に依存させてきたわけだ。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6350 「黒い長い髪で縛られた時の心持」  
4 6352 髪のパワー

5  
6 「黒い長い髪に縛られた時」(上十三)の様子は、「遺書」のどこにも見当たらない。「縛  
7 られた」ようなことになっているように妄想する「時」の様子なら、見当たらずもない。

8  
9 そういう時には、私の心が妙に不安に冒されて来るのです。そうして若い女とただ差向  
10 いで坐っているのが不安なのだばかりは思えませんでした。私は何だかそわそわし出  
11 すのです。自分で自分を裏切るような不自然な態度が私を苦しめるのです。

12 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十三)

13  
14 「そういう時」は、〈静と二人きりになる「時」〉だ。「妙に」は意味不明。

15 「そうして」があるから、「思えませんでした」は〈「思え」なくなって「来るのです」〉  
16 などが適当。「若い女とただ差向いで坐っているのが不安」という「ばかり」でないのなら、  
17 何を「思え」たのだろう。

18 〈青年Sの「そわそわ」を観察して少女静は楽しんでいた〉と作文できる。だが、この物  
19 語が真実である証拠はない。真実だったとしても、程度の問題がある。

20 「自分で自分を裏切る」は意味不明。〈自分の「態度が私を苦しめる」〉は意味不明。だか  
21 ら、「不自然な態度」は不可解。Sの考える〈自然な態度〉とは、どのようなものだろう。

22  
23 磯女は髪に秘められた恐るべきパワーの最も凶暴な暗黒面を体現している。彼女が伸  
24 ばしっぱなしの黒髪をしている点に注目してしてほしい。加工された髪型の対極である  
25 伸ばしっぱなしのストレートヘアーは、文明と対極にある自然の力を象徴している。

26 闇をつかさどる魔女も光をつかさどる女神も、この点では変わりはない、彼女たちは自  
27 分を文化の枠組みに縛りつける結髪ゆいがみを拒絶して生きてきた。

28 (Book&Esoterica 第43号『姫神の本 聖なるヒメと巫女の霊力』)

29  
30 女の長い髪という、グリム童話の『ラプンツェル』が思い出されよう。『塔の上のラ  
31 プンツェル』(ハワード+グレノ監督)参照。

32  
33 妙な事を吹聴する様で可笑しいが、実をいうと僕は女の髪を上げる所あげを見ているのが好  
34 であった。母が乏しい髪を工面して、どうかこうか髷まげに結い上げる様子は、いくら上手が  
35 纏まとめるにしても、それ程見栄のある画えではないが、それでも退屈しのを凌かっこうぐには格好な慰みで  
36 あった。僕は髪結の手の動く間まに、自然と出来上ママって行く小さな母の丸髷まるまげを眺めていた。  
37 そうして腹の中で、千代子の髪を日本流に櫛くしを入れたらさぞ見事だろうと思った。千代子  
38 は色の美ママくしい、癖のない、長くて多過ぎる髪の所有者だったからである。

39 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」三十二)

40  
41 「母」を「女」と呼ぶのは「妙な事」だ。ただし、この「母」は継母だ。  
42 千代子は魔女あるいは女神で、その髪に「恐るべきパワー」が宿るのか。不明。

43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6300 僻み過ぎたまでの『彼岸過迄』  
3 6350 「黒い長い髪で縛られた時の心持」  
4 6353 「奥さん」と「母」

5  
6 魔術的な「髪」で須永を縛ったのは、千代子ではなく、彼の「母」だった。「黒い長い髪」  
7 でSを縛ったのも、静ではなく、静の母だったろう。「恋は罪悪」の「意味」は、〈被愛願望  
8 は男の恥〉みたいなものだろう。

9 〈静の母は母性的愛情をちらつかせてSの心を縛り、静と結婚するように仕向ける〉とい  
10 う物語と〈静は「技巧」によってSを玩弄し、自分を愛させようとする〉という物語が混交  
11 している。青年Sは、二種の物語を仕分けできなくて苦しんでいた。彼は仕分けに失敗し、  
12 Kを導入して、〈Kに対するSの「嫉妬」か、静の「技巧」か〉という不合理な二者択一を  
13 捏造し、「嫉妬」を肯定することによって「技巧」を否定し、静の「人間の心」を美化する  
14 ことにした。勿論、自己欺瞞だが、作者の意図は不明。作者は、こうしたSの自己欺瞞ない  
15 しは妄想を文芸的に表現しているのではない。だらだらと漏洩しているだけだ。だから、『こ  
16 ころ』は意味不明なのだ。

17  
18 こうして—— 私は何度、恋したことだろう しかし、長い毛の女たちは…… ママの  
19 ように私を愛してはくれませんでした

(笠間しろ『美しき毛獣』)

20  
21  
22 「ママ」は「義母」(『美しき毛獣』)だ。「義母」は、実母と異性の中間か。

23  
24 その後… 私の夢に出てくる女は みんなノッペラボウなのです。毛だけがフサフサ  
25 と波打って 時折、その暗黒の中に真っ赤な口が パックリと開くのです……

(笠間しろ『美しき毛獣』)

26  
27  
28 『ころ』の読者にとって、静は「ノッペラボウ」だ。彼女は、その母の「若い女の影」  
29 として登場した。「美しいという印象」(上八)という文字があるだけだ。

30 語り手Sは、〈静の「愛」に対する疑惑〉が〈静の母の「金」に対する疑惑〉から派生し  
31 たように語る。しかし、実際には、青年Sが〈静の母の「愛」に対する疑惑〉を〈静の「愛」  
32 に対する疑惑〉と混同したのだ。そして、両者を区別するために、「金」の話題を持ち出し  
33 た。また、そのために叔父一家との確執を利用した。あるいは、妄想した。

34  
35 私は母に対して反感を抱くと共に、子に対して恋愛の度を増して行ったのですから、三  
36 人の関係は、下宿した始めよりは段々複雑になって来ました。

(夏目漱石『ころ』「上 先生と遺書」十四)

37  
38  
39 「母」は〈静の「母」〉だが、「奥さん」と表記されていないことに注意。漠然とした「母」  
40 に対する「反感」が原因で、個人としての静に対する「恋愛の度」が結果だ。逆ではない。  
41 語り手Sは、〈静の母は婿を愛する〉という物語を隠蔽している。Kがライバルになるのは、  
42 静が二人を天秤に掛けるからではない。天秤に掛けるのは静の母なのだ。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6410 呪術的あるいは超心理学的  
4 6411 嫉妬妄想

5  
6 『行人』という題名は意味不明だ。読み方さえ、わからない。〈こうじん〉か、〈ぎょうに  
7 ん〉か。〈ゆくひと〉かもしれない。

8  
9 ゆくひと  
行人は浄土の春の花見哉  
10 おちゆく おくびょうかせ  
落行は臆病風か花いくさ

11 (『犬子集』)

12  
13 『行人』は途中で主人公が変わる。次のあらすじは、後半のものだ。

14  
15 長野一郎は妻を愛しつつも信じきれない。弟の次郎は兄夫婦を和(なご)ませようと尽力  
16 するが、兄の苦悩は死か発狂か宗教か、いずれかを選択するまで追いつめられていく。人  
17 間存在の不安と人間不信に悩みながら、容易に動けない知識人の孤独が描かれている。  
18 (『近現代文学事典』「行人」)

19  
20 「妻」の名は「直なお」という。「信じきれない」は〈自分が妻に愛されていると「信じきれ  
21 ない」〉の略のはずだが、この事典はそのように解釈していないようだ。

22 「次郎」は「二郎」の間違い。彼が前半の主人公だ。選択できる「死」なら、〈自殺〉と  
23 書くべきだ。「発狂」を「選択する」ことはできまい。〈「宗教」～「を選択する」〉は意味不  
24 明。〈「苦悩は」～「追いつめられて」〉は、日本語になっていない。

25 「人間存在」や「人間不信」や「知識人」や「孤独」などは意味不明。

26  
27 「死ぬか、気が違うか、それでなければ宗教に入るか。僕の前途にはこの三つのものしか  
28 ない」

29 (夏目漱石『行人』「塵勞じんろう」三十九)

30  
31 一郎の発言。聞いているのはHだ。この発言を、Hは二郎に書き送るつもりでいる。

32 「死ぬか」って、人は必ず死ぬよ。「死ぬ」は〈自殺する〉のつもりか。「気が違うか」だ  
33 と、まだ違ってないわけだが、どうかな。「宗教に入る」は意味不明。「特定の宗教・宗派  
34 に帰依すること」(『広辞苑』「入信」)といった説明も意味不明。そもそも、日本人のほとん  
35 どは仏教徒だろう。そういう話じゃないの？へえ。じゃあ、どういう話？

36 一郎は被愛願望を満たせなくて、お直の不貞を疑う。その相手は、弟の二郎だ。

37  
38 夫、あるいは妻が浮気をしているにちがいないという妄想。まったくなんでもない出来  
39 事とその証拠となり、相手方を監視下に置いて絶えず自白を強いるようになる。

40 (『精神科ポケット辞典[新訂版]』「嫉妬妄想」)

41  
42 一郎の嫉妬は妄想だろう。ただし、お直の気持ちは不明。二郎の気持ちは無関係。

43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6410 呪術的あるいは超心理学的  
4 6412 「夫に責任の過半を譲るつもりか」

5  
6  
7  
8  
9  
10  
11

『行人』は、「友達」「兄」「帰ってから」「塵労」の四章から成る。「塵労」の後半はHの手紙で、これが終わると同時に『行人』も終わる。例によって尻切れ蜻蛉。

最初の「友達」の章は、二郎がその「友達」である三沢について語る。ただし、その前に、二郎の遠縁にあたる岡田とその妻の話がある。ほとんど無駄なような話なのだが、作者にとっては一つの峠なのだろう。これを越さないと、三沢の話に進めないらしい。

12  
13  
14  
15  
16  
17

もう晩飯<sup>ばんめし</sup>の用意も出来たから帰ろうじゃないかと云って、二人帰路についた時、自分は突然岡田に、「君とお兼さんは大変仲が好いようですね」といった。自分は真面目な積<sup>つもり</sup>だったけれども、岡田にはそれが冷笑<sup>ひやかし</sup>のように聞えた<sup>ママ</sup>と見えて、彼はただ笑うだけで何の答えもしなかった。けれども別に否<sup>いな</sup>みもしなかった。

(夏目漱石『行人』「友達」四)

18  
19  
20

このあたりは、Pが花見で新婚夫婦について「冷評<sup>ひやかし</sup>」をする場面に似ている。Nの小説はネタの使い廻しなのだ。文芸的技法ではなく、似たような夢を見るのに似ている。

21  
22  
23  
24  
25  
26

|     |        |                |                  |
|-----|--------|----------------|------------------|
| 『門』 | 『彼岸過迄』 | 『行人』「友達」(一～十一) | 『行人』「友達」(十二～三十三) |
| 宗助  | 須永     | 岡田             | 三沢               |
| お米  | 千代子    | お兼             | 「あの女」と「看護婦」      |
| 安井  | 高木     | 二郎             | 二郎               |
| —   | 須永の義母  | —              | 洗い髪の年増           |

27  
28  
29  
30

「年増<sup>としま</sup>」(「友達」十八)は、出てきて、すぐいなくなる。岡田夫妻には子がいない。『門』や『ころ』の夫婦の場合と同じ。二郎は、その理由を知りたがる。変な話だろう。岡田夫妻と二郎の物語を、作者は隠蔽している。つまり、構想できなかった。

31  
32  
33  
34  
35  
36

それで又「奥さんは何故<sup>なぜ</sup>子供が出来ないんでしょう」と聞いた。するとお兼さんは急に赤い顔をした。自分はただ心易<sup>こころやす</sup>だてで云ったことが、甚<sup>はなは</sup>だ面白くない結果を引き起したのを後悔した。けれどもどうする訳にも行かなかった。その時はただお兼さんに気の毒をしたという心だけで、お兼さんの赤くなった意味を知ろうなどは夢にも思わなかった。

(夏目漱石『行人』「友達」六)

37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46

「赤くなった意味」は不明。〈性行為をやり過ぎると妊娠しない〉という俗説の暗示か。あるいは、お兼は、『それから』の三千代のように、二郎に対して未練があつて、夫との性行為を拒否していたか。二郎は、どちらも想像したのか。どちらも想像しなかったのか。作者は、何をしているのだろうか。何かの伏線のつもりだったか。

『門』や『ころ』の場合、妊娠しない理由として呪術的なことが語られる。ただし、それが作品の内部の世界における真実とは考えにくい。

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6410 呪術的あるいは超心理学的  
4 6413 『趣味の遺伝』

5  
6 S夫妻に子がいない理由は、不明。

8 余が平生主張する趣味の遺伝と云う理論を証拠立てるに完全な例が出て来た。ロメオ  
9 がジュリエットを一目見る、そうしてこの女に相違ないと先祖の経験<sup>のち</sup>を数十年の後に認  
10 識する。エレーンがランスロットに始めて逢う、この男だぞと思ひ詰める、矢張り父<sup>ふも</sup>  
11 未生<sup>みしょう</sup>以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔てて脳中に再現する。

12 (夏目漱石『趣味の遺伝』)

13  
14 作中で『ラブ・レイン』(韓国KBS)みたいな話が語られる。  
15 「ロメオ」や「ランスロット」は無関係。こじつけでしかない。

16  
17 日本における催眠・超心理学の先駆者。東京帝大助教授のとき、1910年(明治43年)  
18 から御船千鶴子(みふねちづこ)(1886—1911)らについて透視・念写の実験的研究を始  
19 め、1913年(大正2)『透視と念写』を著し、それらが事実であると発表した。

20 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「福来友吉」大谷宗司)

21  
22 『行人』の読者は超心理学的解釈を試みるべきなのかもしれない。

23  
24 その話によると、兄はこの頃テレパシーか何かを真面目<sup>まじめ</sup>に研究しているらしかった。彼  
25 はお重を書斎の外に立たして置いて、自分で自分の腕を抓った後「お重、今兄さんは此処  
26 を抓ったが、お前の腕も其処が痛かったろう」と尋ねたり、又は室の中で茶碗の茶を自分  
27 一人で飲んで置きながら、「お重お前の咽喉<sup>のど</sup>は今何か飲む時のようにぐびぐび鳴りやしない  
28 いか」などと聞いたりしたそうである。

29 (夏目漱石『行人』「塵勞」十一)

30  
31 この「理論」が真実でも、通じる話になるとは限らない。

32  
33 「御父さん、その杉の根の処だったね」

34 「うん、そうだ」と思わず答えてしまった。

35 「文化五年辰年だろう」

36 成程文化五年辰年らしく思われた。

37 「御前がおれを殺したのは今から丁度百年前だね」

38 (夏目漱石『夢十夜』「第三夜」)

39  
40 Nは、〈自分とメイサの恋愛を互いの親に邪魔された〉という妄想を抱いていた。彼は、  
41 この妄想を処理するための、たとえば〈自分とメイサの恋愛を親が応援する〉といった物語  
42 を構想できなかった。代りに「趣味の遺伝と云う理論」をでっち上げた。

43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6420 「看護婦」たち  
4 6421 「興味」

5  
6 Nの小説の隠蔽された主題は、〈「女の価値」は男に「安心」を与えるところにある〉とい  
7 ったものだ。Nの理想の女は、『坊っちゃん』の清と『明暗』の清子が合体したような女だ  
8 ろう。Nの小説は、鏡子夫人に読ませるための『じゃじゃ馬ならし』（シェークスピア）だろ  
9 う。ただし、成功しなかった。

10  
11 「市さんには大人しくって優しい、親切な看護婦みた様な女が可いでしょう」

12 「看護婦みた様な嫁はいないかって探しても誰も来手はあるまいな」

13 僕が苦笑しながら、自ら嘲ける如くこう云った時、今まで向うの隅で何かしていた千代  
14 子が、不意に首を上げた。

15 「妾行って上げましょうか」

16 僕は彼女の眼を深く見た。彼女も僕の顔を見た。けれども両方共其所に意味のある何物  
17 をも認めなかった。

18 (夏目漱石『彼岸過迄』「須永の話」七)

19  
20 「看護婦」の真意は〈乳母〉だろう。原型は井上メイサだ。

21 「両方共」は不気味。

22  
23 付添の看護婦は暑いせいか大概はその柱にもたれて外の方ばかり見ていた。それが又  
24 看護婦としては特別器量が好いので、三沢は時々不平な顔をして人を馬鹿にしているな  
25 どと云った。

26 (夏目漱石『行人』「友達」二十二)

27  
28 「あの女」の「付添の看護婦」だ。三沢は入院中。「あの女」とは、入院の直前に知り合  
29 った。彼女も入院してきたが、三沢は、なぜか、彼女を見舞わない。彼女の方は、彼が入院  
30 していることを知らないらしい。

31 三沢は「あの女」に対して、また、二郎は「看護婦」に対して、意味不明の「興味」なる  
32 ものを抱く。

33  
34 自分が已むを得ず興味という妙な熟字を此処に用いるのは、彼の態度が恋愛でもなけ  
35 れば、又全くの親切でもなく、興味の二字で現すより外に、適切な文字が一寸見当らない  
36 からである。

37 (夏目漱石『行人』「友達」二十五)

38  
39 「興味」は「妙な熟字」ではない。その意味がこちらの文脈にそぐわないだけだ。「恋愛」  
40 の真意は〈思慕〉か。「親切」の真意は〈憐憫〉か。「興味」の真意は〈獵奇〉か。

41 「興味」は二郎の自分語であり、その真意が聞き手に理解されるはずはない。また、読者  
42 にも理解できまい。「興味」は夏目語らしい。

43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6420 「看護婦」たち  
4 6422 「わがままと嫉妬」

5  
6 三沢が奇妙な「興味」を抱く「あの女」を、二郎が初めて見る場面。

7  
8 あの女というのは三沢があの子あの子と呼ぶから自分もそう呼ぶのである。

9 あの子はその時廊下の薄暗い腰掛の隅に丸くなって横顔だけを見せていた。その傍に  
10 は洗髪を櫛巻にした脊の高い中年の女が立っていた、自分の一瞥はまずその女の後姿の  
11 上に落ちた。そうして何だか其処に愚図々々していた。するとその年増が向うへ動き出し  
12 た。あの子はその年増の影から現われたのである。

13 (夏目漱石『行人』「友達」十八)

14  
15 「を見せて」は〈が見えて〉が適当。語り手はわざと変な言葉遣いをしている。  
16 「何だか」は変。髪フェチだからだろう。

17  
18 自分の「あの子」に対する興味は衰えたけれども自分はどうしても三沢と「あの子」と  
19 をそう懇意にしたくなかった。三沢も又、あの美しい看護婦をどうする<sup>りょうけん</sup>簡もない癖に、  
20 自分だけが段々彼女に近づいて行くのを見て、平気である訳には<sup>ママ</sup>行かなかった。其処に自  
21 分達の心付かない暗闘があった。其処に持って生れた人間の我儘と嫉妬<sup>しつと</sup>があった。其処に  
22 調和にも衝突にも発展し得ない、中心を欠いた興味があった。要するに其処には性の争い  
23 があったのである。そうして両方共それを露骨に云う事が出来なかったのである。

24 自分は歩きながら自分の卑怯<sup>ひきょう</sup>を恥<sup>はじ</sup>た。同時に三沢の卑怯<sup>にく</sup>を悪んだ。けれども浅間しい人  
25 間である以上、これから先何年交際を重ねても、この卑怯を抜く事は到底出来ないんだと  
26 という自覚があった。自分はその時非常に心細くなった。かつ悲しくなった。

27 (夏目漱石『行人』「友達」二十七)

28  
29 「「あの子」に対する興味」を抱いた理由が、まず、わからない。髪フェチと関係がある  
30 らしいが、文芸的表現になっていない。「あの子」について、「恐ろしい何物かが潜んでいる  
31 様に思われて、それが甚だ不快であった」(「友達」十八)と、二郎は語る。

32 「三沢も又」と、どうやって二郎は知ったのか。妄想だろう。

33 「其処」の指すものは不明。「持って生れた」は不可解。〈三沢に対する二郎の「嫉妬」〉  
34 と〈Kに対するSの「嫉妬」〉は、同じ情感だろう。ただし、いずれも複雑。

35 「中心」は意味不明。SとKの「中心」は静か。

36 「性の争い」は意味不明。「嫉妬」は同性愛的なものではなさそうだ。

37 「両方共」と、どうやって二郎は知ったのか。

38 「これから先何年交際を重ねても」は、「男同志で永久に話を交換しているならば」(下二  
39 十五)と似た意味だろう。Sは、男の友情が「調和」に「発展し」ていくのを願って、静を  
40 利用しようとした。ところが、実際には「衝突」に「発展し」たか。

41 KやSの自殺の動機は、「心細くなった。かつ悲しくなった」みたいなものだろう。ただ  
42 し、「心細く」は舌足らずだ。

43  
44  
45

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6420 「看護婦」たち  
4 6423 略奪婚

5  
6 〈お姫様抱っこ〉や〈壁ドン〉などをされたがる女子は、略奪婚に憧れているはずだ。

7  
8 戦争その他を媒介として捕えた女性を妻とする婚姻形態。このような風習はインド、アラビア、ヨーロッパ、スラブの諸民族の口頭伝承や古文書、法典その他に記載されている  
9 だけでなく、アフリカ、オーストラリア、ラテンアメリカの諸民族の間にも、婚姻儀礼としてその模倣行為が伝えられている。

10  
11  
12 (『ブリタニカ国際大百科事典』「略奪婚」)

13  
14 『キルギスの誘拐結婚』(林典子) 参照。

15  
16 「ここにいろ。俺のそばにいろ」そう言うと瀬名は、突然南を胸に引き寄せて抱きしめた。

17  
18 「もう、どこにも行くな」抱きしめられながら、南の胸は、ドキーン！ と高鳴った。  
19 (北川悦吏子『ロング バケーション』4)

20  
21 女が抵抗すれば、男一人での略奪は難しい。

22  
23 多くは宿仲間の男たちが加担し、女を盗む旨を宣言して連れ出す。

24 (『広辞苑』「嫁盗み」)

25  
26 代助は、平岡の「宿仲間」のような役割を果たしたのかもしれない。また、Sは、Kに「宿  
27 仲間」の役目をさせたくて下宿に連れてきたのかもしれない。

28  
29 嫁入り婚の普及する過程で、「家」を考える家長の立場と、なおも若者組による婚姻統  
30 制を捨てきれぬ若者たちの立場とが衝突して成立したものである。

31 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「嫁盗み」竹田旦)

32  
33 「二人は相思の仲」(『ニッポニカ』「嫁盗み」)という。代助は、三千代の意思を確認した  
34 のか。

35  
36 Yは「最近ではあんまりないんだけど、このKがどうしても島の昔ながらのやり方で君  
37 と結婚したいということで、私と友人とで協力させてもらったわけだ」と、まるですべて  
38 が粋なはからいだったかのように言って、自分が私を犯したことについても「習わしだから」と  
39 悪びれた様子もないのです。

40 (性実話研究会『人妻禁断告白 日本の淫らな風習』)

41  
42 「宿仲間」は、おこぼれに預かれるらしい。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6430 「露骨に云う事」  
4 6431 「義侠心」  
5

6 「略奪婚の先に幸せはあるのか？」（新潮文庫版『門』裏表紙）の「略奪婚」は誤用だろ  
7 う。ちなみに、平成の俗語では、女が既婚の男に離婚させて自分と再婚させることらしい。

8  
9 その他多くの慣行が、想像力にとむ著述家によって掠奪婚の残存とみなされてきた。た  
10 とえば、花嫁を抱き上げて玄関の敷居をまたぐこと、花嫁にヴェールをかけること、結婚  
11 式のときに指輪をはめること、旅にでかける新郎新婦めがけて靴を投げること、舅姑に対  
12 する〔夫の〕回避<sup>アポイダンス</sup>、あるいはまたハネムーンの間「新郎が自分の花嫁を彼女の親族や友  
13 人から隔離しつづける」ということ——である。

14 (E・A・ウェスターマーク『人類婚姻史』「第五章 掠奪婚」)

15  
16 私は「想像力にとむ」人々の拵えた物語を探しているところだ。実証不要。

17  
18 「平岡、僕は君より前から三千代さんを愛していたのだよ」

19 平岡は茫然<sup>ぼうぜん</sup>として、代助の苦痛の色を眺めた。

20 「その時の僕は、今の僕ではなかった。君から話を聞いた時、僕の未来を犠牲にしても、  
21 君の望みを叶えるのが、友達の本分だと思った。それが悪かった。今位頭が熟していれば、  
22 まだ考え様があったのだが、惜しい事に若かったものだから、余りに自然を軽蔑<sup>けいべつ</sup>し過ぎた。  
23 僕はあの時の事を思えば、非常な後悔の念に襲われている。自分の為ばかりじゃない。  
24 実際君の為に後悔している。僕が君に対して真に済まないと思うのは、今度の事件より寧  
25 ろあの時僕がなまじいにやり遂げた義侠心<sup>ぎきょうしん</sup>だ。君、どうぞ勘弁してくれ。僕はこの通り自  
26 然に復讐<sup>かたき</sup>を取られて、君の前に手を突いて詫ま<sup>あや</sup>まっている」

27 (夏目漱石『それから』十六)

28  
29 どっちが「前」か、誰にわかろう。

30 「苦痛の色」は意味不明。

31 「未来を犠牲に」は意味不明。

32 「それ」の指す言葉はない。

33 「頭が熟して」は意味不明。

34 「若かった」というが、「三年前」(『それから』十六)だ。〈気が「若かった」〉の略か。

35 「義侠心<sup>ぎきょうしん</sup>」は男色文化の美德。「男伊達」(『日本国語大辞典』「義侠」)だ。「世間体」(下  
36 四十八)や「明治の精神」などの類語だろう。騎士道精神とは異なる。

37 「自然」は意味不明。真意は〈被愛妄想的気分〉か。

38 「宿仲間」では嫁候補を共有する「義侠心<sup>ぎきょうしん</sup>」の風習があった。いや、そうした妄想を二郎  
39 は抱いていて、しかし、それを明瞭に自覚することができなかつたのではないか。

40 二郎は、二人の女が欲しかった。「あの女」は「母」の「若い影」のような女で、「看護婦」  
41 は母性的かもしれない女だ。前者は静に相当し、後者は静の母に相当する。Sは「宿仲間」  
42 に仕立てるためにKを下宿に連れ込んだ。その真相を語り手Sは隠蔽している。

43  
44  
45

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6430 「露骨に云う事」  
4 6432 「色情狂」

5  
6 三沢は「精神に異状がある」（「友達」三十三）という女性について語る。

7  
8 「君に惚れたのかな」と自分は三沢に聞きたくなくなった。

9 「それがさ。病人の事だから恋愛なんだか病気なんだか、誰にも解る筈がないさ」と三沢  
10 は答えた。

11 「色情狂ってというのは、そんなもんじゃないのかな」と自分は又三沢に聞いた。三沢は厭  
12 な顔をした。

13 「色情狂と云うのは、誰にでも枝垂れ懸るんじゃないか。その娘さんはただ僕を玄関まで  
14 送って出て来て、早く帰って来て頂戴ねと云うだけなんだから違うよ」

15 「そうか」

16 自分のこの時の返事は全く光沢がなさ過ぎた。

17 「僕は病気でも何でも構わないから、その娘さんに思われたいのだ。少くとも僕の方では  
18 そう解釈していただきたいのだ」と三沢は自分を見詰めて云った。

19 (夏目漱石『行人』「友達」三十三)

20  
21 「色情狂」は意味不明。

22 「解釈して」は意味不明。

23  
24 性愛行動には、年齢、性別、時代、地域による個人差があり、正常・異常の区別は困難  
25 な場合がある。時には犯罪と関係することがある。

26 (『百科事典マイペディア』「異常性欲」)

27  
28 三沢は自分の被愛願望を満たせるような「解釈」をしたいのだろう。ちなみに、〈被愛妄  
29 想〉は「色情狂と訳されたこともある」（『ブリタニカ』「被愛妄想」）という。

30  
31 「あの女の顔がね、実はその娘さんに好く似ているんだよ」

32 三沢の口元には解ったろうと云う一種の微笑が見えた。

33 (『行人』「友達」三十三)

34  
35 こうして「性の争い」は終止符を打つ。不可解。私の読解力では、どうにもならない。

36 三沢は二郎に「嫉妬」をしていなかったのか。三沢が「嫉妬」をしないのなら、二郎も「嫉妬」  
37 をしないのか。「看護婦」に対する二郎の「興味」は演技だったのか。

38  
39 自分は「あの女」の為に、又「その娘さん」の為に三沢の手を固く握った。

40 (『行人』「友達」三十三)

41  
42 何の話か、全然、わからない。二つの「為に」が意味不明。

43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6430 「露骨に云う事」  
4 6433 「物を偷まない巾着切」  
5

6 三沢に関する話は不意に終わる。彼が被愛願望を吐露したからか。  
7

8 彼の正義感は、葉隠四誓願の一つであり、そのまま校訓の一つともなっていた「大慈悲」  
9 の精神と結びついていて、彼をして、半ば無意識のうちに「愛せられる喜び」から「愛す  
10 る喜び」へと、その求める心を転ぜしめていた。

11 (下村湖人『次郎物語』第三部「一運命の波」)  
12

13 「彼」は次郎。次郎が「半ば」意識したのは、彼の不幸が「半ば」だったからだろう。  
14

15 幼稚な愛は「愛されているから愛する」という原則にしたがう。成熟した愛は「愛する  
16 から愛される」という原則にしたがう。未成熟の愛は「あなたが必要だから、あなたを愛  
17 する」と言い、成熟した愛は「あなたを愛しているから、あなたが必要だ」と言う。

18 (エーリッヒ・フロム『愛するということ』「第2章 愛の理論」)  
19

20 被愛願望は、被愛妄想と被害妄想の混交だ。  
21

22 おれは物を偷まない巾着切みたようなものだ、私はこう考えて、自分が厭になる事さ  
23 えあったのです。

24 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十二)  
25

26 「物を偷まない」の含意は〈愛を奪う〉だ。盗みは「罪悪」だから「恋は罪悪」だろう。  
27

28 彼は自分にたよるものを要求していた。自分を信じ、自分を賛美するものを要求してい  
29 た。そして今や、杉子自身にその役をしてもらいたくなくなった。杉子は彼のすることを絶対  
30 に信じてくれなければならなかった。世界で野鳥程偉いものはないと杉子に思ってもら  
31 いたかった。彼の仕事を理解し、賛美し、彼のうちにある傲慢な血をそのままぶちまけて  
32 もたじろがず、かえって一緒によろこべる人間でなければならなかった。

33 (武者小路実篤『友情』上篇五)  
34

35 「傲慢な血」は意味不明。  
36

37 あなたを差し向ける私はベアトリーチェ。  
38 戻りたいと強く願っているあの場所から降りてきました。  
39 愛こそが私を動かし、話をさせるのです。

40 (ダンテ・アリギエリ『神曲 地獄篇』第二歌)  
41

42 野鳥は、杉子をベアトリーチェに仕立てようとしたらしい。  
43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6440 パオロとランスロット  
4 6441 「自然の法則」

5  
6 なぜ、「恋」は「神聖」なのか。  
7

8 「己はこう解釈する。人間の作った夫婦という関係よりも、自然が醸した恋愛の方が、  
9 実際神聖だから、それで時を経るに従って、狭い社会の作った窮屈な道徳を脱ぎ棄て  
10 て、大きな自然の法則を嘆美する声だけが、我々の耳を刺戟するように残るのではなから  
11 うか。尤もその当時はみんな道徳に加勢する。二人のような関係を不義だと云って咎める。  
12 然しそれはその事情の起った瞬間を治める為の道義に駆られた云わば通り雨のようなも  
13 ので、あとへ残るのはどうしても青天と白日、即ちパオロとフランチェスカさ。どうだそ  
14 うは思わんかね」

15 (夏目漱石『行人』「帰ってから」二十七)

16  
17 思わんね。「パオロとフランチェスカ」は地獄に堕ちたのだよ。

18 「己」は一郎で、聞かされているのは二郎。一郎は、『神曲』の中の「パオロと云うのは  
19 フランチェスカの夫の弟で、その二人が夫の眼を忍んで、互に慕い合った結果、とうとう夫  
20 に見付かって殺されるという悲しい物語り」(「帰ってから」二十七)について述べている。  
21 この物語を読んだせいで、一郎は妻と二郎の関係を疑うようになったらしい。「こう解釈す  
22 る」は、「何故肝心な夫の名を世間が忘れてパオロとフランチェスカだけ覚えているのか」  
23 (「帰ってから」二十七)という自分の出した問題に対する答えだ。「肝心」は意味不明。

24 「この件にはダンテの虚栄心が窺えます」(ボルヘス『七つの夜』「第一夜 神曲」)とい  
25 うことだが、一郎の台詞には作者の「虚栄心」が窺える。

26 「夫婦という関係」と「恋愛」の比較は無意味。(恋愛結婚)はどっち? 「自然が醸し  
27 た」は意味不明。(「自然」だから「神聖」)は不可解。「自然」は野蛮だろう。「それで」は  
28 (だから)と解釈するが、ソ系語の濫用。「時を経るに従って」は不可解。「狭い社会」の  
29 対義語は(広い個人)か。「日本より頭の中の方が広いでしょう」(『三四郎』一)と広田は  
30 語った。「道徳」は「窮屈な」ものと決まっているらしい。「大きな自然」の対義語は「小さ  
31 い自然」(『明暗』百四十七)か。「恋愛」が「自然の法則」に従うのなら、発情だろう。「大  
32 きな自然の法則を嘆美する声」や「刺戟するように残る」も意味不明。「自然」は夏目語。  
33 論理が破綻しそうなときに用いるらしい。

34 「道徳に加勢する」は意味不明。

35 「西欧における情熱恋愛概念の淵源(えんげん)をなす中世の物語」(『ニッポニカ』「トリ  
36 スタンとイゾルデ」)の主題は不倫だった。トリスタンとイゾルデは、どうして恋に落ちたの  
37 か。誤って媚薬を飲んだからだ。パオロとフランチェスカの場合、媚薬を飲んだのではない。  
38 何となく惹かれあう気持ちが恋愛感情にまで高まったのは、媚薬に代わる何かが機能した  
39 からだ。一郎はその何かを読み落としている。いや、作者が読み落としているのだろう。N  
40 は、西洋の「ラヴ」について無知であるばかりか、読解力もかなり不足している。

41 「それはその事情」の「それ」の指すものがない。「瞬間」は誇張しすぎ。「どうしても」  
42 は意味不明。「青天と白日」は意味不明。(無罪)と言ったつもりか。面倒くさい。

43  
44  
45  
46

1 6 0 0 0 『それから』から『道草』まで  
2 6 4 0 0 どこへも行けない『行人』  
3 6 4 4 0 パオロとランスロット  
4 6 4 4 2 フランチェスカは語る

5  
6 『神曲』の中のダンテは、フランチェスカの魂に向かって次のように語りかけた。

7  
8 それから二人のほうを向き、こう語りかけながら、  
9 私は話した。「フランチェスカ、あなたの劫罰は  
10 痛ましくて哀れで涙が止まらない。

11  
12 けれども私に教えて欲しい。切なくため息をつくばかりだった頃、  
13 どんな折にどのように愛が許して  
14 不確かな互いの想いを知ったのか。

15 (ダンテ・アリギエリ『神曲 地獄篇』「第五歌」)

16  
17 彼らは「劫罰」を受けているのに、「神聖」(「帰ってから」二十七)か?  
18 フランチェスカは答えた。

19  
20 ある日、私達は気晴らしに  
21 あのランスロットを愛がどうやって服従させたのかを読んでいた。  
22 私達は二人きりで何の心配もしていませんでした。

23  
24 物語が何度も私達の目を  
25 そそのかし、目が合って私達は顔色を失いました。  
26 けれども私達が負けてしまったのはあの瞬間。

27  
28 あのあこがれの微笑みが、  
29 勇気にあふれた恋人に口づけされるのを讀んだその時、  
30 この人は、その後で私から離れることはなくなるのですが、

31  
32 全身をぶるぶると震わせながら私の口に口づけたのです。  
33 その本と、その作者が、仲立ちことガレオーでした。  
34 あの日はもうその先を読むことはありませんでした」

35 (ダンテ・アリギエリ『神曲 地獄篇』「第五歌」)

36  
37 「私達」は、パウロとフランチェスカ。

38 一郎の「自然が醸<sup>かも</sup>した恋愛」という「解釈」が誤りなのは明白だろう。「仲立ち」をした  
39 のは、「自然」ではなく、アーサー王伝説の中の〈「ランスロット」の物語〉だった。

40 「ガレオー」は「妃の付き人。彼は、高貴な身分の既婚婦人が身分の低い騎士の奉仕を受  
41 ける宮廷恋愛を成立させるのに必要な見届け人を務め、物語の顛末をしたためたことにな  
42 っている」(原基品による注)という。

43  
44  
45  
46  
47  
48  
49

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6440 パオロとランスロット  
4 6443 エレーナとグネヴィア

5  
6 学生の代助は、安井のガレオーだった。しかし、ニートの代助にガレオーはいない。その  
7 代替物であるはずの〈「自然」の物語〉はなく、だから、その語り手のガレオーもない。  
8 宗助のガレオーの代替物は〈「父母未生以前」の物語〉つまり『趣味の遺伝』で語られた  
9 ような因縁だろう。作者は、こうした話を隠蔽しているわけだ。

10 二郎と三沢は、〈友人をガレオーに仕立てる〉という競争をしていたのかもしれない。

11  
12 実を云うとマロリーの写したランスロットは或る点に於て車夫の如く、ギネヴィアは  
13 車夫の情婦の様な感じがある。この一点だけでも書き直す必要は充分あると思う。

14 (夏目漱石『菴露行』)

15  
16 『菴露行』のヒロインは「可憐なるエレーン」(「三 袖」)だが、マロリーのエレーンは  
17 「色情狂」(『行人』「友達」三十三)みたいだ。ランスロットは「この人の私への愛は、  
18 あまりにも激しすぎたのです」(マロリー『アーサー王の死』)と語った。

19 グネヴィアはエレーンとランスロットの仲を疑っていた。

20  
21 王妃はランスロットを呼び、いわれもなく腹を立てていたことをわびた。

22 「いわれないお腹立ちをなさったのは、これがはじめてではございませんね。しかし、  
23 私はいつも王妃さまをゆるさないではいられないのです。そのために私がどれほど悲し  
24 みをなめようと、かまいません」とランスロットが言った。

25 (サー・トマス・マロリー『アーサー王の死』「ランスロット卿と王妃」20)

26  
27 「王妃」は嫉妬深い。

28 パオロとフランチェスカを讃えながら、その「ガレオー」を貶すのは、矛盾だ。矛盾でも  
29 いいが、Nは矛盾に気づいていたろうか。西洋文学における重要な物語を、Nは根本から理  
30 解できなかったらしい。

31  
32 騎士階級のより所である円卓の騎士の物語は、16世紀初め『ドン・キホーテ』という  
33 過激な作品によって風刺されたとき、その使命を終えることとなった。

34 (『ブリタニカ国際大百科事典』「円卓の騎士」)

35  
36 ちなみに、エレーンは小夜子(『虞美人草』)の原型だ。小野は、ランスロットと違い、  
37 小夜子とその父にほだされて藤尾から去る。また、エレーンは、『行人』で「色情狂」と疑  
38 われる「娘」の原型だろう。『三四郎』の冒頭に出てくる女は「色情狂」らしい。『草枕』の  
39 那美も、『三四郎』の美禰子も、「色情狂」かもしれない。

40 『行人』の隠された主題は〈兄妹相姦と母子相姦の混交〉だ。二郎の理想の「愛人」は、  
41 優しい母のような、あどけない妹のような異性で、両者を混交したのが嫂だろう。『行人』  
42 の場合、一郎の妻だ。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6450 被愛感情  
4 6451 『狂気の愛』

5  
6 Nの小説が無駄にややこしいのは、作者が被愛願望を隠蔽しつつ、その気分を読者に伝染  
7 させようと頑張るからだ。

8  
9 ママ果てな今時分人に呼ばれる訳はないが誰だろうと水の面をすかして見ましたが暗くて  
10 何にも分かりません。気のせいに違いない早々帰ろうと思って一足二足あるき出すと、又微  
11 かな声で遠くから私の名を呼ぶのです。

12 (夏目漱石『吾輩は猫である』二)

13  
14 この体験をもって、富子の母親は、〈寒月は富子に「恋着した」(『吾輩は猫である』三)〉  
15 と仄めかす。言いがかりにしても、おかしい話だ。

16 〈被愛妄想=「<sup>れんちやく</sup>恋着〉という公式のようなものがあるらしい。しかも、男から被愛妄想  
17 を抱かれた女は穢されたことになるらしい。私にはよくわからない話だ。

18  
19 カフェにとびこんで来た女性——彼女もまた前夜、手紙を書き、わたしは、それがすぐ  
20 に、それがわたし宛ての手紙だったにちがいないという空想にひたって、彼女から手紙が  
21 届くのを待っている自分におどろいた。もちろん、そのようなことがありうべくもなかつ  
22 た。五月二十九日の七時半、再びカフェで手紙を書きはじめた彼女は、眼を天井にやり、  
23 ペンを走らせ、壁に視線をあつめ、再び天井に眼をやって、ついぞわたしと視線が<sup>ママ</sup>会うこ  
24 とがなく、わたしは徐々にいらだってきた。わたしがほんのすこし身動きをしても、天井  
25 を見上げた彼女の眼はまばたきもせず、ほとんど何らの表情も示さなかった。ほんの数メ  
26 ートル先のところで、その眼は長い炎のような光を放ち、眼に見えぬ乾いた雑草に向かっ  
27 て投げられ、この世ならぬ優雅なバストが、周囲の不動性に君臨しはじめていた。わたし  
28 はだんだんこうして互いに無言の状態をつづけていることに、自分がこの場にそぐわな  
29 いのではないかという内心の苦痛を如何ともしがたく感じていた。手をのばせば、チャン  
30 スはすぐそこにあったというのに。

31 (アンドレ・ブルトン『狂気の愛』)

32  
33 Sの「信仰に近い愛」(下十四)は「狂気の愛」として描かれていない。だから、不可解。  
34 「信仰」そのものである「愛」は、たとえば、次のように歌われる。

35  
36 わが妻はいたく恋ひらし飲む水に<sup>かこ</sup>影さへ見えてよに忘れず

37 (『万葉集』巻第二十 4322)

38  
39 妻の靈魂が離脱して夫の前に現われた。そのように、夫は信じている。当時の人々はこう  
40 いう現象が起きると信じていたのだろう。現代人なら、勿論、夫の幻覚と考える

41 Nの小説では、なぜ、被愛願望は隠蔽されがちなのか。被愛感情について、作者が表現で  
42 きないからだ。分離不安や女性恐怖その他が混雑しているからだ。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6450 被愛感情  
4 6452 妄想ではない被愛感情

5  
6 『浮雲』が中断した原因は、文三の被愛感情を作者がきちんと描けなかったからだ。お勢  
7 の心理がきちんと描かれなかったからではない。

8  
9 「余 <sup>あんまり</sup>だから <sup>い</sup>宜い……人の感情を弄んだの本田に見返ったのといろんな事を云って  
10 <sup>さんぼう</sup>讒謗して……自分の <sup>うぬぼれ</sup>己惚で如何な夢を見ていたって人の <sup>しつこ</sup>知た事 <sup>こ</sup>ちゃありゃしない……

11 (二葉亭四迷『浮雲』「第十二回 いすかの <sup>はし</sup>嘴」)

12  
13 お勢の台詞。聞いているのは文三。「人」は文三だ。本田は、文三の友人。  
14 文三の抱いた被愛感情は「夢」つまり妄想だったのだろうか。だが、そのように読むと、  
15 『浮雲』は作品として解体する。お勢が本音を口にしてしているのか、強がって嘘をついている  
16 のか、私にはわからない。作者にもわからなくなったらしく、『浮雲』はこの回で中断する。  
17 自覚できない恋愛感情は、次のように表現される。

18  
19 「今夜きっと、パティエの夢を見るわ」アンがいった。「どうしてかしら、なんだかわ  
20 たし、この家の人間のような気がするの。いつかそのうち、家の中を見るチャンスがある  
21 んじゃないかしら」

22 (L. M. モンゴメリー『アンの愛情』「アン、パティエの家に出会う」)

23  
24 次は被愛感情に浸る場面。

25  
26 自分のマンションに戻ると、南は電気もつけないまま、床にドスンとバッグを置いた。  
27 突然、涙があふれてきた。南はおもいきり泣き出した。ソファにだきついて、声を上げ  
28 て泣いてしまった。

29 瀬名はひとり、コーヒーをいれて飲んでいた。ソファに座ると、電話と花火が目に入っ  
30 て来た。

31 しばらく何かを考えていた瀬名は、突然立ち上がった。ボタンとドアを開け、鍵もかけ  
32 ずに玄関から飛び出していく。表通りまで出ると、タクシーを探した。空車を見つけ、必  
33 死に手を挙げる。せっかく乗り込んだタクシーは、すぐ渋滞に巻き込まれてしまった。イ  
34 ライラしている瀬名に、運転手が気の毒そうに話しかけてくる。「金曜日だからねえ……  
35 混むんだよね……」

36 「ここでいいです」タクシーを降りると、瀬名はひたすら夜の街を走っていった。

37 南は、クッションを抱いたまま、ソファにぐったりと坐っていた。頬には涙の跡がある。  
38 目を泣きはらしたまま、ぼんやりしていると、チャイムの音が鳴った。

39  
40 (北川悦吏子『ロング バケーション』9)

41  
42 映像とはちょっと違う。

43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6450 被愛感情  
4 6453 『エディプスの恋人』

5  
6 恋愛妄想を現実の出来事として表現すると、次のようになる。

7  
8 彼女からのメッセージはことばによってではなく、わたしの心に直接、直感として伝えてくるていのものでした。したがってそれは、ある意味でことばよりも明確ではあったのですが、反面それはことばとして再現しにくいものが大部分でした。読心能力者であるあなたに、私の心をお読み下さいと申しあげたのはこのところです。

9  
10  
11  
12 (筒井康隆『エディプスの恋人』)

13  
14 「彼女」は「わたし」の亡妻。「あなた」は主人公の七瀬で、テレパスという設定。

15  
16 ——自分はその程の影響をこの女の上に有しておる——三四郎はこの自覚のもとに一切の己れを意識した。

17  
18 (夏目漱石『三四郎』十)

19  
20 意味不明。

21 「普通の人から見ると、三四郎は少し迷信家の調子を帯びている」(『三四郎』十)と語られる。語り手は冗談めかして実状を隠蔽している、「普通の人」が読めば、「迷信家」は〈妄想家〉が適当。けれども、そのように解釈すると、『三四郎』は作品として解体する。

22  
23  
24  
25 それでいて御嬢さんは決して子供ではなかったのです。私の眼には能くそれが解っていました。能く解るように振舞って見せる<sup>こんせき</sup>痕迹さえ明らかでした。

26  
27 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十三)

28  
29 「それ」の指す言葉は不明。「子供」は意味不明。

30 「それ」は〈そのこと〉が適当。〈「眼には」～「解って」〉は駄目。

31 「<sup>こんせき</sup>痕迹」について具体的な話はない。この語は妄想幻想の暴露みたいだ。

32  
33 この症状<sup>やかかい</sup>の厄介な所は いくら 相手から つれなくされても 時に 否定さえ されても すべては 「自分は愛を 試されている」と考え 余計に 思いを深くして しまうところにあります

34  
35  
36 (中村卯月『被愛妄想』)

37  
38 Sは、静と結婚した後も、被愛願望を満たせないでいる。ただし、〈欲求不満の原因は、妻にではなく、自分にある〉と思いたかった。そのために、〈SはKを殺した〉という記憶を偽造した。あるいは、誇張した。〈静はSを嫌う〉という物語を自分自身に対して隠蔽するために、〈Kの自殺に関する罪悪感のせいでSは静を避けてしまう〉という物語を捏造したわけだ。作者はこの工作に加担している。

39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6400 どこへも行けない『行人』  
3 6450 被愛感情  
4 6454 勘違い野郎

5  
6 被愛妄想の一步手前。  
7

8 何とわたくしの心と愛情との深さを御存じ<sup>ママ</sup>のあなたさまが、よくまあわたくしを永久  
9 にお棄てになるお氣になり、さうして只新らしい<sup>ママ</sup>欲情の犠牲に供へるためびだけわたく  
10 しを思ひ出して居られるのではないだらうかなどと考へさせるやうな恐ろしい目にわたく  
11 しが逢はせるそんなお氣に、よくもおなりなされたものでございますね。

12 (佐藤春夫訳『ぼるとがるぶみ』)

13  
14 『フランス軍中尉の女』(ライス監督) 参照。

15  
16 「このどこかに確かにチュンサンがいる……。私は感じる。私に来るということを知っ  
17 てどこかに隠れてしまったんだ……。きっと、チョンアさんとキム次長がこの計画を立て  
18 たんだ……。そう、きっとそうだわ」

19 ユジンはこの近くにチュンサンが隠れていると思うと、全身にけいれんがおこったよ  
20 うに震え始めた。

21 (キム・ウニ+ユン・ウンギョン『もうひとつの冬のソナタ チュンサンとユジンのそ  
22 れから』第4章)

23  
24 SFでは次のようになる。

25  
26 彼女は明らかに自分の内に答を捜し求めているようだった。そして、答が見つかったと  
27 き、それは彼女自身にとっても発見だった。

28 「なんだか、いつもあなたの姿を見ていなければいけないような……。気がするの」

29 (スタニスワフ・レム『ソラリス』「ハリー」)

30  
31 ハリーは男の被愛願望が作り出した人格だ。

32 『惑星ソラリス』(タルコフスキー監督)と『ソラリス』(ソンダーバーグ監督)参照。

33 Nは、被愛感情がどのようなものか、想像できなかつたようだ。

34  
35 妄想を決して手放そうとしない相手の頑迷ぶりに、エリザベスは氣力が尽きた。言葉を  
36 返すのはあきらめ、そのまま挨拶<sup>あいさつ</sup>もなしで部屋を出た。何度断ってもミスター・コリンズ  
37 は女の媚態<sup>びたい</sup>としか受け取ってくれないのだから、これはもう、父に口を利<sup>き</sup>いてもらうしか  
38 あるまい。父なら例の調子<sup>ふた</sup>で身も蓋もなく断ってくれるだろうし、父の態度を社交上手の  
39 手練手管と勘違いするほどの間抜けはさすがにいないはずだ。

40 (ジェーン・オースティン『自負と偏見』第十九章)

41  
42 Nの小説に出てくる男たちは、コリンズ並みの勘違い野郎だろう。  
43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6510 毒親  
4 6511 「何だかちっとも分りゃしないわね」

5  
6 『道草』は『ころ』への近道だ。

7 S夫妻が「幸福な一対」になり切れない理由は隠蔽されている。一方、『道草』の夫婦の  
8 不和は養父との確執が原因であるように誤読できる。しかし、養父の出現によって不和が生  
9 じたわけではない。養父は夫婦喧嘩の種の一つではあっても、その全部ではない。健三は少  
10 年期に養母から精神的虐待を受け、女性不信になり、妻に対しても猜疑心を抱いていたのだ  
11 ろう。ただし、そのような文芸的表現になっているのではない。複数の物語が複雑に絡み合  
12 い、解決の糸口さえ見出せないまま、『道草』は終わる。健三が家庭人として非力だからで  
13 はない。作者がなすべき仕事を放棄しているからだ。

14 妻のお住が「御父さまの<sup>おとう</sup>仰る事は何だかちっとも分りゃしないわね」(『道草』百二)と  
15 「赤ん坊」に話しかけ、愛撫して、『道草』は終わる。読者にとっても、作者の書くことは  
16 「何だかちっとも分りゃしない」のだ。(お住はわがままだ)といった解釈をしてわかった  
17 つもりになることはできない。彼女の気持ちを明瞭に想像することはできないからだ。

18  
19 索漠とした健三、お住夫婦の生活を中心にその一家の間で起こる心理的トラブル、複雑  
20 な家庭生活の事情を反映した苦悩を描く。

21 (『日本国語大事典』「道草」)

22  
23 「索漠」は〈混迷〉などが適当。『道草』は、夫婦の物語と親子の物語に分裂している。  
24 両者を繋いでいるのは、ママゴンによって生じた健三の混乱だ。「一家の間」は意味不明。  
25 「家庭生活」に「反映した」のは健三の育ちの悪さだが、お住も育ちが悪そうで、ややこし  
26 いことになっている。「事情を反映した苦悩」は意味不明。

27 Sは、静が〈男を愛する女〉であることを願った。その女は〈慈母〉(『彼岸過迄』「須永  
28 の話」四)のような少女だ。その代り、Sは静の母に〈毒親〉の性格を与えた。

29  
30 「毒になる親」に育てられた子供は、大人になってからどのような問題を抱えることに  
31 なるのだろうか？ 子供の時に体罰を加えられていたにせよ、いつも気持ちを踏みにじ  
32 られ、干渉され、コントロールされてばかりいたにせよ、粗末に扱われていつもひとりぼ  
33 っちにされていたにせよ、性的な行為をされていたにせよ、残酷な言葉で傷つけられてい  
34 たにせよ、過保護にされていたにせよ、後ろめたい気持ちにさせられてばかりいたにせよ、  
35 いずれもほとんどの場合、その子供は成長してから驚くほど似たような症状を示す。どう  
36 いう症状かといえば、「一人の人間として存在していることへの自信が傷つけられており、  
37 自己破壊的な傾向を示す」ということである。そして、彼らはほとんど全員といっていい  
38 くらい、いずれも自分に価値を見いだすことが困難で、人から本当に愛される自信がなく、  
39 そして何をしても自分は不十分であるように感じているのである。

40 (スーザン・フォワード『毒になる親——生苦しむ子供』「はじめに」)

41  
42 〈静の母は娘を売って稼ぐ〉という物語は消滅する。その理由は、平明ではない。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6510 毒親  
4 6512 「鷹揚」と「寛大」

5  
6 Nの小説に登場する「母」のほとんどが正体不明だ。「母」が正体不明だから、女たちも  
7 正体不明なのだ。逆ではない。

8  
9 宅には相当の財産があったので、寧ろ鷹揚<sup>おうよう</sup>に育てられました。私は自分の過去を顧みて、  
10 あの時両親が死なずにいてくれたなら、少なくとも父か母か何方か、片方で好いから生き  
11 ていてくれたなら、私はあの鷹揚な気分を今まで持ち続ける事が出来たろうにと思いま  
12 す。

13 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三)

14  
15 「財産」と「鷹揚<sup>おうよう</sup>」の関係は不明。「鷹揚<sup>おうよう</sup>」の真意は〈過保護〉だろう。〈育児放棄〉の可  
16 可能性もある。

17  
18 然し健三に対する夫婦は金の点に掛けて寧ろ不思議な位寛大であった。

19 (夏目漱石『道草』四十)

20  
21 「寛大」と「鷹揚<sup>おうよう</sup>」は類語だろう。ただし、語り手Sにそうした意図があるわけではない。  
22 作者の混乱の露呈だろう。

23  
24 夫婦は健三を可愛<sup>かわい</sup>がっていた。けれどもその愛情のうちには変な報酬が予期されてい  
25 た。金の力で美しく<sup>ママ</sup>女を囲っている人が、その女の好きなものを、云うがままに買って  
26 くれるのと同じ様に、彼等らは自分達の愛情そのものの発現を目的として行動する事が  
27 出来ずに、ただ健三の歓心を得るために親切を見せなければならなかった。

28 (夏目漱石『道草』四十一)

29  
30 少年Sは、少年健三のような「小暴君」(『道草』四十) だったのである。だから、叔父  
31 一家だけでなく、親族一同に嫌われたようだ。ところが、作者は、そうした常識的な解釈の  
32 可能性を考慮していない。『こころ』の作者は、罪悪感を抱くことのできるSを美化してい  
33 る。だから、読者もSを最良しないと読みづらい。

34 静の母はSを「鷹揚<sup>ママ</sup>だと云って褒める」(下十二) が、語り手Sは「私は金銭にかけて、  
35 鷹揚<sup>ママ</sup>だったかも知れません」(下十二) と補足している。ただし、青年Sが静の母に対して  
36 そのことを述べた様子はない。述べなかったとしたら、その理由は不明。青年Sは、この時  
37 点では、いい気になっていたのだろう。この被愛感情が被害妄想的気分に変る。その変化の  
38 原因などについて、語り手Sは何も語らない。作者の意図は不明。作者に明確な意図はない  
39 ようだ。「歓心」は「得る」でなく、〈買う〉だろう。〈媚を売る〉とごっちゃになったか。

40 「あの時」が駄目なら、いつならよかったのか。「何方か、片方」は死んでくれていいの  
41 か。「あの鷹揚な気分」は、叔父一家のせいで「持ち続ける事」ができなかったらしい。だ  
42 が、本当だろうか。「気分」が「気性」(下十二) でないことに注意。

43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6510 毒親  
4 6513 「心得のある人」

5  
6 静の母は「鷹揚」という言葉を使ってSを褒めた。

7  
8 それのみならず、ある場合に私を鷹揚な方だと云って、さも尊敬したらしい口の利き方  
9 をした事があります。  
10 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十二)

11  
12 「さも尊敬したらしい口の利き方」には〈本心は違う〉という含意がある。「らしい」の  
13 せいだ。変な褒められ方をしたから青年Sは彼女を警戒し始めたのだろう。だが、そういう  
14 話にはならない。静の母に対するSの不信感の発生源は、明らかではない。

- 15  
16 I 静の母は、Sの自覚していない美質を察知した。  
17 II 静の母は、お世辞でSを励まそうとした。  
18 III 静の母は、お世辞でSを操ろうとした。  
19 IV 静の母は「露悪家」であり、「鷹揚な方」は嫌味だ。  
20 V 静の母に他意はなく、IからIIIの可能性はSの妄想だ。  
21 VI その他。

22  
23 これらのどれが真相なのか、私には推定できない。勿論、どれか一つだけが真相とは限ら  
24 ない。複数の物語が同時に成り立つことはあろう。

25  
26 奥さんは心得のある人でしたから、わざと私をそんな風に取り扱ってくれたものと思  
27 われますし、又自分で公言する如く、実際私を鷹揚だと観察していたのかも知れません。  
28 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十三)

29  
30 「心得」は皮肉っぽい。「わざと」が困る。「そんな」は、「僻んだ私の眼や疑い深い私の  
31 様子に、てんから取り合わなかった」(下十三)などを指す。「思われますし」の列举の「し」  
32 が一つというのは変。〈観察していたのかも知れませんし〉などと続けるべきだ。語り手  
33 Sは、静の母の本性に対する見解を示そうとしないばかりか、〈自分には見解を示せない〉  
34 といった事実を聞き手Pに対して隠蔽している。「又」の真意は、〈あるいは〉だろう。ただ  
35 し、二者択一とは限るまい。「鷹揚」は怪しい。「観察していた」は〈「観察して」信じかけ  
36 て「いた」〉などの不当な略だろう。

37 この文において、語り手Sは〈IIでなければIだろう〉という虚偽の暗示をしている。や  
38 がてIIIの可能性が浮び、青年Sは混乱する。選択肢が多いせいで混乱するのではない。Sが  
39 〈Iに収束させたい〉と無理に願ったからだろう。ただし、真相は不明。本文が意味不明だ  
40 からだ。本文が意味不明になってしまったのは、青年Sの静の母に対する被愛願望を語り手  
41 Sが始末できずにいて、しかも、そうした真相を自他に対して隠蔽しているせいだろう。実  
42 際に隠蔽しているのは作者だ。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6520 「行きづまり」  
4 6521 蘇る虐待の記憶

5  
6 『こころ』を書きながら、Nは自身の「黒い影」（下五十五）に気づいたらしい。自分の  
7 過去の虐待の記憶が蘇ったようだ。

8  
9 漱石は四歳の時に塩原昌之助のところへ養子にやられたが、養父が女をこしらえて家  
10 出したので、また連れ戻された。漱石の父は、漱石を復籍するに当って塩原の要求する養  
11 育料を支払ったが、その時漱石が塩原の要求によって、他人にはなっても今後不実なこ  
12 とはしないという一札を入れた。漱石はその後成人し、高等学校の教授として洋行し、帰  
13 と大学の講師となり、つづいて『吾輩は猫である』によって一躍文界の名士になった。塩  
14 原は、その頃零落し、貧窮のどん底にあって、かつての養子の成功を見ると、漱石が入れ  
15 た一札を利用することを思いつき、それを種にしきりに金をねだりに来て、ついにそれを  
16 売りつけた。この事件が殆どそのまま『道草』に使われている。その頃（三十六・七歳  
17 頃）の漱石は帰朝したばかりで、高い理想を持って非常な意気込みで研究に精進しようと  
18 していたが、周囲の事情から、研究が思うように進まないで、苛々していた。そこへ更に  
19 強請にも似た養父の事件が起ってきたりして、漱石は生活をますます掻き乱されて苛立  
20 ち、しぜん、性格的に合わない漱石夫婦の間にいらざる風波も加わったであろう。そして  
21 その結果夫婦はお互いを憎悪しないでいられなくなることもあったのであろう。『道草』  
22 における夫婦の相剋はそのまま漱石夫婦のそれであったであろう。

23 (本多顕彰『道草』新潮文庫解説)

24  
25 健三は養父を嫌いつつも彼に同情してしまう。そうした複雑な気分を、健三はお住に説明  
26 してやれない。だから、夫婦仲がこじれる。お住が夫の苦衷を付度できない理由は単純だ。  
27 彼女が夫を愛していないからだ。健三の気分を、語り手は表現できない。

28  
29 大学教授である主人公健三（けんぞう）が、世俗的社会に束縛されながら、孤独に生き  
30 るさまを描く。養父との確執を核に、自分の体験に素材を求めた自伝的作品。漱石が晩年  
31 こだわった自己本位の生の根拠を、人間と現実の内部に問おうとした。

32 (『近現代文学事典』「道草」)

33  
34 「世俗的社会」も「社会に束縛され」も意味不明。

35 「養父」の名は島田。「自分」は次の文の「漱石」のこと。「自分の体験に素材を求めた」  
36 は意味不明。〈「自分の体験」を「素材に」した〉と解釈する。

37 「こだわった」は怪しい。〈こだわる〉は「拘泥る」（『角川類語新辞典』「こだわる」）と書  
38 くぐらいで、マイナスの価値の言葉だ。この語を、この事典は、「本物の味にこだわる」（『日  
39 本国語大事典』「こだわる」）といった場合と同様のプラスの価値で用いているのかもしれな  
40 い。この使い方は、昭和四十年代に始まったものだろう。その頃は冗談めいた用法だったが、  
41 この事典の用法は不明。「自己本位」は意味不明。「生の根拠」は意味不明。「現実の内部」  
42 は意味不明。「人間と現実の内部に問おう」は意味不明。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6520 「行きづまり」  
4 6522 「自分の生命を両断しよう」  
5

6 『道草』の語り手は、健三の視点で語る。他人の思いを語るときも、その内容は健三の推  
7 測の域を出ない。語り手独自の見解ではなさそうだ。健三の思考の場合、もっとおかしなこと  
8 になる。語られる健三の言葉を語り手が代弁するのか、語り手が独自の考えを述べるのか、  
9 後日の語られる健三の言葉を語り手が代弁するのか、判別できないのだ。

10  
11 彼は自分の生命を両断しようと試みた。すると綺麗に切り棄てられべき筈の過去が、却  
12 って自分を追掛けて来た。彼の眼は行手を望んだ。然し彼の足は後へ歩きがちであった。  
13 (夏目漱石『道草』三十八)

14 「自分の生命を両断し」は意味不明。

15 自己の同一性、記憶・感覚などの正常な統合が失われる心因性の障害。心的外傷（トラ  
16 ウマ）に対する一種の防衛機制と考えられる。

17 (『広辞苑』「解離性障害」)

18  
19  
20  
21 先の本文に戻る。「すると綺麗に」の「すると」は、〈ところが〉と〈だから〉の混交を隠  
22 蔽する言葉だ。「綺麗」は意味不明。「過去」を「切り棄て」る様子は想像できない。「られ」  
23 が可能か、受身か、判断できない。「べき」は処置なし。「はず」は無用。彼自身の探索が「過  
24 去」氏による追跡として表現されている。「過去」氏の原型は養父だろう。〈「すると綺麗に  
25 切り棄てられ」たくない「過去が却って自分を追掛けて来た」〉なら、意味がありそうだ。  
26 「却って」は無駄。

27 「絵巻物」(下二)を見る健三の「眼」が「絵巻物」の中の健三の「眼」に変わる。「行手」  
28 は「絵巻物」の右側だ。彼はこちらを開かない。現在は「過去」とだけでなく、未来とも繋  
29 がっている。現在が未来の始まりでなければ、「過去」の終わりとしての現在はない。「望ん  
30 だ」は意味不明。これは〈将来の幸福を希望した〉と〈未来の物語を眺望した〉の混交らし  
31 い。「望んだ」は〈希望した。しかし、眺望できなかつた〉の不当な略だろう。

32 この「しかし」は、〈希望した。しかし〉の残滓であり、不要。「過去」氏が健三に近づい  
33 ているはずが、健三が「過去」に近づいているようでもある。両者が近づいているのではな  
34 かりょう。無茶苦茶。ファンタジーとしてさえ成り立たない。

35  
36 0 絶縁した養父が健三に復縁を迫るようだ。

37 I 「絵巻物」の中の「過去」氏は「絵巻物」の外の健三を追いかける。

38 II 「絵巻物」の中の健三は右を向いて後退し、少年になる。

39 III 「絵巻物」を見る健三は左を向いて前進し、少年健三に接近する。

40  
41 この四つの物語を、語り手は仕分けできていない。実際に仕分けできないのは、言うまで  
42 もなく、作者だ。

43  
44  
45  
46  
47

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6520 「行きづまり」  
4 6523 「家というものの経験と理解」

5  
6 『吾輩は猫である』の作者は、〈ワガハイの「過去」の物語〉を封印した。ワガハイが「過  
7 去」氏を排除したり無視したりしたのではない。Nは、彼の「過去」氏との関係を封印する  
8 ことによって、近代小説家に擬態したのだろう。

9  
10 彼の眼は行手を望んだ。然し彼の足は後へ歩きがちであった。

11 そうしてその行き詰りには、大きな四角な家が建っていた。家には幅の広い階子段のつ  
12 いた二階があった。その二階の上も下も、健三の眼には同じように見えた。廊下で囲まれ  
13 た中庭もまた真四角であった。

14 不思議な事に、その広い宅には誰も住んでいなかった。それを淋しいとも思わずにいら  
15 れる程の幼ない彼には、まだ家というものの経験と理解が欠けていた。

16 (夏目漱石『道草』三十八)

17  
18 「行き詰り」は変。「過去」は「行手」ではないからだ。「絵物語」の中の健三が「過去」  
19 の世界を逆行し、その「行きづまり」に「家」が出現したみたいだが、そんな物語は成り立  
20 たない。ファンタジーとしてさえ成り立たない。彼は後ろ向きに歩いているからだ。進むよ  
21 うで退くのか。ムーンウォークかな。複数の物語を、『道草』の語り手は仕分けできない。  
22 「行きづまり」は作者の気分の露呈だ。

23 「健三の眼」の持ち主は、少年のようでもあるが、実質的には中年だろう。

24 「不思議な事」と思うのは、語り手のようだが、中年健三でもあろう。「誰も」の真相は  
25 〈親しくなれそうな人は「誰も」〉だろう。「誰も住んでいなかった」は〈「誰も住んで」い  
26 ないようだった〉などと語るべきだ。その場合、〈親しくなれそうな〉といった条件は不要。

27 中年健三の「眼」が、いつしか、少年健三の「眼」に変わる。そんなふうに誤読できる。  
28 しかし、そんなスマートな転換が起きているのではない。語り手の「眼」と少年健三の「眼」  
29 と中年健三の「眼」のそれぞれに映る事物が乱雑に並んでいるだけなのだ。

30 「家というものの経験と理解」は意味不明。妻の「お住」という名前は〈住居←「家」〉  
31 の隠喩だ。「過去」の「家」に関する欠落感に妻に対する不信感と混交している。ただし、  
32 この混交は、作者による文芸的暗示ではない。

33  
34 「自分はその時分誰と共に住んでいたのだろう」

35 彼には何等の記憶もなかった。彼の頭はまるで白紙のようなものであった。けれども理  
36 解力の索引に訴えて考えれば、どうしても島田夫婦と共に暮したと云わなければならな  
37 かった。

38 (夏目漱石『道草』三十八)

39  
40 「白紙のようなもの」であるのは、島田夫婦に対する不快な「記憶」を、いつからか、健  
41 三が自分自身に対して封印してきたからだ。そのせいで、健三は養父に対する義理と人情の  
42 仕分けができない。作者にもできない。

43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』  
2 6500 近道の『道草』  
3 6530 「<sup>ひと</sup>独り<sup>こわ</sup>怖がった」  
4 6531 「<sup>ひら</sup>緋鯉」  
5

6 「白紙のようなもの」(『道草』三十八)であるはずの健三の「記憶」は徐々にあぶりださ  
7 れる。健三が誰かに語ることによって「記憶」がよみがえってくるのではない。不合理なこ  
8 とに、語り手の言葉によって語られる中年健三が思い出すのだ。この場合、語り手は健三自  
9 身だ。『道草』は第三人称だが、雰囲気は第一人称だ。蘇る「記憶」の内容は、健三の妄想  
10 のようだ。作者は、中年健三の妄想と想起や推定などを明確に区別することができないだけ  
11 でなく、〈健三の回想〉と〈作者の創作〉の仕分けができないのだ。〈健三の作者〉というこ  
12 とだ。

13  
14 或日彼は誰も<sup>うち</sup>宅にいない時を見計って、不細工な<sup>ほていちく</sup>布袋竹の先<sup>ママ</sup>へ一枚糸を<sup>ママ</sup>着けて、<sup>えさ</sup>餌と共  
15 に池の中に投げ込んだら、すぐ糸を引く気味の悪いものに脅かされた。彼は水の底に引っ  
16 張り込まなければ<sup>や</sup>己まないその強い力が二の腕まで伝った時、彼は恐ろしくなって、すぐ  
17 <sup>さお</sup>竿を放り出した。そうして翌日<sup>あくるひ</sup>静かに水面に浮いている一尺余りの<sup>みいだ</sup>緋鯉を見出した。彼は  
18 <sup>ひと</sup>独り<sup>こわ</sup>怖がった。……

19 「自分はその時分誰と共に住んでいたのだろうか」

20 (夏目漱石『道草』三十八)

21  
22 「誰も<sup>うち</sup>宅にいない時」は、「その<sup>うち</sup>広い宅には人が誰も住んでいなかった」(『道草』三十八)  
23 という語りと矛盾する。作者は混乱している。「見計らって」いたのは「誰」かの意に反す  
24 ることがわかっているからだが、そのあたりのことが朦朧としている。「布袋竹」は「観賞  
25 用」(『広辞苑』「布袋竹」)だから、健三がこれを勝手に切り取ったとすれば、悪戯はこの前  
26 から始まっていたことになる。悪戯の動機は不明。少年健三は「誰」かの前で堂々と悪戯を  
27 することができなかつたようだ。そのことに語り手は言及しないで、「気味の悪いもの」へ  
28 と話題を転じる。「投げ込んだら」は〈「投げ込んだ」。そうした「ら」〉とやってほしい。「投  
29 げ込んだら」のままなら、「脅かされた」で、ちょっと跳んで、〈「脅かされた」〉ので、「彼は  
30 恐ろしくなって、すぐ<sup>さお</sup>竿を放り出した」と続ける。「その強い力」の話は補足になる。しか  
31 し、少年健三にとって「その強い力」の方が重要なのだろう。主題が分裂。「脅かされ」は  
32 被害妄想的。

33 「水の底」は少年健三の空想。「引っぱり込まなければ<sup>ま</sup>己まない」は意味不明。  
34 「そして」は、機能していない。〈ところが〉で始まるはずの物語を、作者は封印して  
35 いる。少年健三は、自分の恐れを「誰」かと共有しようとしなかつたらしい。〈「池の中」に  
36 「気味の悪いもの」がいるよ〉と「誰」かに訴えなかつたようだ。そうだとしたら、なぜか。  
37 逆に、「気味の悪いもの」の像を想像しようとしなかつたらしい。そうだとしたら、なぜ  
38 か。「翌日」まで「水面」を見なかつたようだが、なぜか。

39 「<sup>ひと</sup>独り」なのは、なぜか。「怖がった」のは、変。「緋鯉」と知れたら安心するはずだ。  
40 少年健三は、玩弄されたり遺棄されたりして育つたようだ。苦しみながら死んだ「<sup>ひら</sup>緋鯉」  
41 は、彼自身の象徴だろう。だが、語り手は、そのように語らない。

42 「緋鯉」の話から『坊っちゃん』の「<sup>つり</sup>釣り」(『坊っちゃん』五)の場面が想起されよう。

43  
44  
45

- 1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6530 「ひとり怖がった」  
4 6532 「焼け出された裸馬」

5  
6 語り手は「大きな四角な家」（『道草』三十八）に関する健三の「記憶」を羅列する。語り  
7 手が健三の思いをそのまま再現しているようだ。語り手と回想する健三を区別することは  
8 できない。だから、作者の創作ではなく、Nの回想のように思える。

9  
10 彼は時々表二階へ上って、細い格子の間から下を見下した。鈴を鳴らしたり、腹掛を掛  
11 けたりした馬が何匹も続いて彼の目の前を過ぎた。

12 (夏目漱石『道草』三十八)

13  
14 「時々」とは、不在がちな父を思い出すときだろう。

15  
16 世の中が何となくざわつき始めた。今にも戦争が起りそうに見える。焼け出された裸  
17 馬が、夜昼となく、屋敷の周囲を暴れ廻ると、それを夜昼となく足軽共が犇きながら追  
18 掛けている様な心持がする。それでいて家のうちは森として静かである。

19 家には若い母と三つになる子供がいる。父は何処かへ行った。父が何処かへ行ったのは、  
20 月の出ていない夜中であつた。床の上で草鞋を穿いて、黒い頭巾を被って、勝手口から出  
21 て行った。その時母の持っていた雪洞の灯が暗い闇に細長く射して、生垣の手前にある古  
22 い檜を照らした。

23 父はそれきり帰って来なかった。母は毎日三つになる子供に「御父様は」と聞いている。  
24 子供は何とも云わなかった。しばらくしてから「あっち」と答える様になった。母が「何日  
25 御帰り」と聞いてもやはり「あっち」と答えて笑っていた。その時は母も笑った。そうし  
26 て「今に御帰り」と云う言葉を何遍となく繰返して教えた。けれども子供は「今に」だけ  
27 を覚えたのみである。時々は「御父様は何処」と聞かれて「今に」と答える事もあつた。

28 (夏目漱石『夢十夜』「第九夜」)

29  
30 「何となく」を受ける言葉がない。

31 「見える」は意味不明。

32 「焼け出された裸馬」は意味不明。「裸馬」なら、「鈴を鳴らしたり、腹掛を掛けたり」  
33 しないはずだ。「裸馬」と「足軽共」の関係は不明。「暴れ廻ると」～「追掛けている」  
34 は呼応しない。「犇きながら追掛けて」なんて、できるはずがない。

35 「それでいて」は変。「心持がする」のだから、「静かで」も構わない。

36 「父」は夜逃げをした。「裸馬」は「父」で、「足軽共」は借金取り。室内が「静か」な  
37 のは家人が息を潜めているからだろう。異様に「静か」なのだ。「家の中は何時もの通りひ  
38 っそりしていた」（上十四）という文と比べよう。この場面のPは、少年健三のような存在  
39 だ。Sは何かから逃げ出そうとしているようで、特殊な使命を帯びているようでもある。

40 「母」は「子供」に「父」は密命を帯びたなどと思わせたがっているらしい。

41 「暗い闇」の「暗い」は不要。

42 「母」は「子供」に暗示をかけている。「子供」は無知を装い、抵抗している。

43

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6530 「ひとり怖がった」  
4 6533 「すかして置いて」

5  
6 『夢十夜』の「第九夜」は、妙な終わり方をする。  
7

8 拝殿に括りつけられた子は、暗闇の中で、細帯たけの丈のゆるす限り、広縁の上を這い廻っ  
9 ている。そう云う時は母にとって、甚はなはだ楽な夜である。けれども縛った子にひいひい泣  
10 かれると、母は気が気でない。御百度の足が非常に早くなる。大変息が切れる。仕方のな  
11 い時は、中途ちゅうとで拝殿ママへ上って来て、色々すかして置いて、又御百度を踏み直す事もある。  
12 こう云う風に、幾晩となく母が気を揉んで、夜よの目も見ずに心配していた父は、とくの  
13 昔むかしに浪士ろうしの為ために殺されていたのである。

14 こんな悲い話を、夢ママの中で母から聞ママた。

15 (夏目漱石『夢十夜』「第九夜」)

16  
17 「拝殿」は「拝殿の欄干」(「第九夜」)の略。「母」は「夫」のために「拝殿」に来た。「母」  
18 は「子」の自由を奪う。〈「細帯」←サイタイ←臍帯〉だろう。〈サイタイ→妻帯〉も重なる。  
19 「ひいひい」がワガハイの「ニャーニャー」の原典だ。

20 「こう云う風」は、願掛け。「夜よの目も見ず」は意味不明。「気を揉んで」と「心配して」  
21 は重複。「とくの昔」は変。「子」が成長していないからだ。「浪士ろうし」は「子」だ。「母」の命  
22 令で「子」は「父」を殺した。

23 「夢の中」の「母」も「すかして」いる。彼女は、自分と「子」の犯した罪を隠蔽するた  
24 めに「父」を悲運の志士に仕立て上げた。

25  
26 I a 浪費家の父は借金を背負って夜逃げをした。生きているが、戻ることはできない。  
27 II a 立派な侍の父は密命を帯びて潜伏する。だが、悪人に殺された。

28  
29 「母」は、「子」に、IIの物語を語りながら、Iの物語を暗示していた。  
30 二つの物語は、次のようであればならない。

31  
32 I b 浪費家の父は借金を背負って夜逃げをした。母は父を呪う。  
33 II b 立派な侍の父は密命を帯びて潜伏する。やがて凱旋する。

34  
35 母が息子を縛る物語は、次のようなものだろう。

36  
37 父は別の女と暮らす。母は自分が捨てられたと思いたくなくて、自己欺瞞のために、子に  
38 嘘をつく。息子は母の嘘に騙されたふりをする。彼も自分が父に捨てられたと思いたくない  
39 からだ。母子は、互いの面子を保つために、父を美化する。だが、怨みは逆に募る。奔馬と  
40 無音の室内は、抑圧された怒りや恐れなどの隠喩。

41  
42 夏目語の「母」には、〈息子を共犯者に仕立てる女〉といった意味があるようだ。  
43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6540 「他人の生活に似た自分の昔」  
4 6541 テニス・ボール

5  
6 多くの人は次の場面の重要性に気づかないのだろう。

7  
8 「おれが死んだら、どうか御母さんを大事にして遣ってくれ」

9 私はこの「おれが死んだら」という言葉に一種の記憶を有っていた。東京を立つ時、先  
10 生が奥さんに向かって何遍もそれを繰り返したのは、私が卒業した日の晩の事であった。

11 (夏目漱石『こころ』「中 両親と私」十)

12  
13 しゃべっているのは、Pの父だ。

14 Pは次男だから、彼に「御母さん」が託されるのは、おかしい。Pは「父」に利用されて  
15 いるのだ。同様に、宿親のSにも利用されている。そのことに作者は気づかない。

16 『美しい人』(ガルシア監督)に、サマンサという哀れな少女が出てくる。彼女の両親は家  
17 庭内別居をしている。彼女は両親の間を行き来し、メッセージャーを務める。孝行娘を演じ  
18 て楽しんでいるのだ。空笑い。両親は、彼女に家を出て進学するように勧めるが、彼女は拒  
19 む。両親は〈娘を犠牲にする親〉といった世間の非難を免れたいのだろう。そんなことも、  
20 賢い彼女には付度できている。賢い自分が可愛い。

21  
22 平生食卓を賑やかにする義務を有っているとまで、皆なから思われていた自分が、急に  
23 黙ってしまったので、テーブルは変に淋しくなった。

24 (夏目漱石『行人』「帰ってから」二十三)

25  
26 「皆なから思われていた自分」は妄想的。「いた」は、〈いる〉が妥当。「自分」は二郎。  
27 「急に黙って」は意味不明。「食卓」が「テーブル」に変わる理由は不明。「変に」は変。

28  
29 彼女の家の家族構成は一つ屋根の下で、父、母、母の父、父の母、から出来上がって  
30 います。そして父親とその母親は、母親とその父親と対立しています。混合ダブルスなわけ  
31 です。彼女はそのゲームのボールだったのです。この比喩の正確さを示す一例をあげてみ  
32 ましょう。この二つのサイドはお互いに、時には数週間も、直接的にコミュニケーション  
33 をすることを止めていることさえありました。その間は、ジェーンを通してコミュニケー  
34 ションが行われました。食卓でもこの二組はお互いに直接話そうとはしなかったのです。  
35 母はジェーンに向かって「お父様に塩をとってくださるようになって」というのでした。  
36 ジェーンは父親に「お母さんが塩をとって下さいですって」というと、父親はジェーンに  
37 「お母さんに自分で取りなさいと言いなさい」というのです。ジェーンは母親に「お父さ  
38 んが自分で取りなさいですって」というのでした。

39 (R. D. レイン『家族の政治学』「第一部 エッセイ」)

40  
41 「ジェーンは単純型分裂病の症状を呈し」(『家族の政治学』) ていたという。

42 『こころ』の作者は〈幸福なテニス・ボール青年Pの物語〉を構想したらしい。

43  
44  
45  
46  
47  
48

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6540 「他人の生活に似た自分の昔」  
4 6542 「愛想を尽かされて」

5  
6 少年健三はママゴンの手先となり、養父の探偵をやらされたらしい。

7  
8 ある晩彼は健三と御藤さんの娘の御縫さんとを伴れて、賑かな通りを散歩した帰りに  
9 汁粉屋へ寄った。健三の御縫さんに会ったのはこの時が始めてであった。それで彼等は碌  
10 に顔さえ見合せなかった。口はまるで利かなかった。

11 宅へ帰った時、建三は御常から、まず島田に何処へ伴れて行かれたかを訊かれた。それ  
12 から御藤さんの宅へ寄りはないかと念を押された。最後に汁粉屋へは誰と一所に行っ  
13 たという詰問を受けた。健三は島田の注意に拘らず、事実を有のままに告げた。然し御  
14 常の疑いはそれでも中々解けなかった。彼女はいろいろな鎌を掛けて、それ以上の事実を  
15 釣り出そうとした。

16 「彼奴も一所なんだろう。本当を御云い。云えば御母さんが好いものを上げるから御云  
17 い。あの女も行ったんだろう。そうだろう」

18 彼女はどうしても行ったと云わせようとした。同時に健三はどうしても云うまいと決  
19 心した。彼女は健三を疑った。健三は彼女を卑しんだ。

20 「じゃあの子に御父ッさんが何と云ったい。あの子の方に余計口を利くかい。御前の方  
21 にかい」

22 何の答もしなかった健三の心には、ただ不愉快の念のみ募った。然し御常は其所で留ま  
23 る女ではなかった。

24 「汁粉屋で御前を何方へ坐らせたい。右の方かい、左の方かい」

25 嫉妬から出る質問は何時まで経っても尽きなかった。その質問のうちに自分の人格を  
26 会釈なく露わして頼り見ない彼女は、十にも足りないわが養い子から、愛想を尽かされて  
27 毫も気が付かずにいた。

28 (夏目漱石『道草』四十三)

29  
30 「彼」は養父の島田。「御藤」は藤尾と関係がありそうだ。「御縫」は健三と御藤を縫い合  
31 わせるためにいた。

32 「それで」は変。島田は、〈御縫と健三が親しめば、御常と別れるときに金蔓の健三を連  
33 れて行こう〉と考えたのだろう。島田の作為が感知され、子どもたちは緊張した。

34 「帰った時」は〈独りで「帰った時」〉の略か。「御常」は養母。この名前は「一遍起った  
35 事は何時まででも続くのさ」(『道草』百二)という述懐と無縁ではない。彼女は「色々な形に  
36 変る」(『道草』百二)のだ。養母に関連した物語が空想されがちなのだろう。

37 「島田の注意」とは〈今日のことは黙っているよ〉などだろう。ただし、何を隠すべきな  
38 のか、幼い健三にはわからなかったろう。だから、結果的に彼は養父を裏切り、養母の手先  
39 になってしまった。彼が以前から探偵だったからでもあろう。健三は〈自分は「父」を裏切  
40 って「母」の手先になった〉という後ろめたさを抱いて生きてきたのに違いない。

41 「愛想を尽かされて」は〈愛想を尽かされて「も」おかしくないような態度を自分がと  
42 っていることに〉などの異様な略であるはずだ。

43  
44

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6540 「他人の生活に似た自分の昔」  
4 6543 「自分の事とは思えない」

5  
6 やがて養父母は離婚した。少年健三は、軽蔑すべき養母に頼るしかなかった。  
7

8 間もなく島田は健三の眼から突然消えてなくなった。河岸を向いた裏通りと賑やかな表  
9 通りとの間に挟まっていた今までの住居も急に何処かへ行ってしまった。御常とたった  
10 二人ぎりになった健三は、見慣れない変な宅の中に自分を見出だした。

11 (夏目漱石『道草』四十四)

12  
13 「眼から」は「眼」の前「から」の略のようだが、「回想の「眼から」の略らしい。

14 「挟まって」だと、まるで「通り」が壁だったようだ。

15 「少年健三が「自分を見出だした」というのは変だ。〈回想する中年健三が少年健三を「見  
16 出だした」〉のだろう。二種の物語が混交しているわけだが、この混交が文芸的表現として  
17 通用するとは、私には思えない。作者の混乱の露呈のように思える。

18  
19 御常は会う人毎に島田の話をした。口惜しい口惜しいと云って泣いた。

20 「死んで祟ってやる」

21 彼女の権幕は健三の心をますます彼女から遠ざける媒介となるに過ぎなかった。

22 夫と離れた彼女は健三を自分一人の専有物にしようとした。また専有物だと信じてい  
23 た。

24 (夏目漱石『道草』四十四)

25  
26 「祟ってやる」という言葉が「御百度」(『夢十夜』「第九夜」)の素材だ。

27 健三は「母」の「専有物」ではないが、「拝殿に括りつけられた子」だった。〈「母」は「子」  
28 を「信じて」いる〉と、彼は思い込んだ。この思い込みが「細帯」だ。自縄自縛。

29  
30 「考えるとまるで他の身の上のようだ。自分の事とは思えない」

31 健三の記憶に上せた事相は余りに今の彼と懸隔していた。それでも彼は他人の生活に  
32 似た自分の昔を思い浮べなければならなかった。しかも或る不快な意味に於て思い浮べ  
33 なければならなかった。

34 (夏目漱石『道草』四十四)

35  
36 健三は、「今」の物語と「昔」の物語を切り離すことに失敗した。「懸隔して」いる  
37 ようでいて、実際には「不快な意味」において継続しているのだ。『道草』の最後で、その  
38 ことが仄めかされる。「不快な意味」は意味不明。

39 「今」の健三が「昔」の「事相」をあたかも「他の身の上」のように空想し、「記憶」を  
40 解体して組み立て直すことに成功したならば、「一遍起った事は何時までも続くのさ」(『道  
41 草』百二)と述懐することはなかったろう。健三にできないことが語り手にできていたら、  
42 健三のこの述懐は語り手による皮肉の表現となりえたらう。

43  
44  
45

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6550 男の「理窟」と女の「発作」  
4 6551 「忌み嫌う念」

5  
6 幼児の健三は、養母を実母と信じていた。だから、彼女に対する違和感などは第一反抗期  
7 の気分と区別できない。一方、Nは小説で「母」に執着する男を何度も小説に登場させてき  
8 た。依存と忌避が混交している。〈どちらがNの本音か〉というような問題を解くことはで  
9 きない。いや、解く必要がない。混交こそ実情なのだ。

10 お常は再婚する。その後の消息は知れない。健三には、養母と和解する機会が与えられな  
11 かった。逆に、彼女を憎み続けることもなかった。

12  
13 彼は御常の世話を受けた昔を忘れる訳には行かなかった。同時に彼女を忌み嫌う念は  
14 昔の通り変らなかった。要するに彼の御常に対する態度は、彼の島田に対する態度と同じ  
15 事であった。そうして島田に対するより一層嫌悪の念が劇しかった。

16 (夏目漱石『道草』四十五)

17  
18 「昔」は〈「昔」の恩〉などの不当な略。健三が言葉にしたくないことを、語り手は言葉  
19 にしない。非力な語り手だ。

20 「同じ事」ではない。異質なのだ。

21 「一層」ではない。異質なのだ。

22  
23 彼は退屈のうちに細いながら可なり鋭い緊張を感じた。その所為か、島田の自分を見  
24 る眼が、さっき擦硝子の蓋を通して油煙に燻ぶった洋燈の灯を眺めていた時とは全く変  
25 っていた。

26 「隙があったら飛び込もう」

27 落ち込んだ彼の眼は鈍い癖に明らかにこの意味を物語っていた。自然健三はそれに抵  
28 抗して身構えなければならなくなった。然し時によると、その身構えをさらりと投げ出し  
29 て、飢えたような相手の眼に、落付を与えて遣りたくなる場合もあった。

30 その時突然奥の間で細君の唸るような声が出た。健三の神経はこの声に対して普通の  
31 人以上の敏感を有っていた。彼はすぐ耳を峙だてた。

32 (夏目漱石『道草』四十九)

33  
34 「彼」は健三。〈「細い」～「緊張」〉や「鋭い緊張」は意味不明。

35 島田は金をせびりに来た。「さっき」健三は島田を「気の毒な人として眺めた」(『道草』四  
36 十八)のだった。健三が御常に対して島田に対するのと同種の同情をしたとは考えられない。

37 「意味を物語って」は困る。妄想と推量がごっちゃになっていることの露呈だろう。

38 「その時」は前文の「場合」とそぐわない。話の順序が通常と逆。

39 「細君」は男たちの様子を隣室から窺っていた。夫が金を出しそうになったので怒りや惑  
40 いなどのせいで発作が起きそうになった。何とか耐えて「奥の間」に来て、「声」を上げた  
41 のだろう。だが、作者は不思議なことを暗示しているつもりだ。

42 〈「神経は」～「敏感をもって」〉は意味不明。

43  
44  
45  
46

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6550 男の「理窟」と女の「発作」  
4 6552 「同じ道」

5  
6 Sの「覚悟」表明の前、Pは「恋」に関してSを詰問する。Pは静の意を受けている気だ  
7 ったらしい。彼は、少年健三のように、「母」の代わりに「父」の心境を探偵している。

8  
9 「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

10 先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答を避けた。

11 「私は私自身さえ信用していないのです。つまり、自分が信用出来ないから、人も信用で  
12 きないようになっているのです。自分を呪うより仕方がないのです」

13 「そうむずかしく考えれば、誰だって確かなものはないでしょう」

14 「いや考えたんじゃない。遣ったんです。遣った後で驚ろいたんです。そうして非常に怖  
15 くなったんです」

16 私はもう少し先まで同じ道を辿って行きたかった。すると襖の陰で「あなた、あなた」  
17 という奥さんの声が二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といった。

18 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十四)

19  
20 健三がSで、島田がPで、静が御住に対応する。

21 「奥さんも」は〈「奥さん」のこと「も」〉の略。

22 「不安な顔」は、〈静が盗聴しているから言えない〉という暗示だろう。ただし、Pに対  
23 する意図的な表現にはなっていない。盗聴を、作者は妄想的なものと誤解しているらしい。

24 「直接」は〈直截〉と解釈する。「避けた」のは、静の耳を慮ったからだ。

25 「信用」は意味不明。真意は〈信頼〉だろう。その場合でも、「私自身さえ信用」は意味  
26 不明。ちなみに、近頃の〈自分に自信〉も意味不明。

27 自分を信用しないのなら、〈自分を信用しない自分〉も信用しないはずだ。〈自分を信用し  
28 ない自分〉を自分が信用し過ぎているのだろう。「なっている」は意味不明。「運命」(下四  
29 十九)のせいかな。「出来」と「でき」の違いは何か。ないか。

30 「自分を呪う」は意味不明。したがって、その「仕方」の〈あり／なし〉も不明。

31 「むずかしく」は意味不明。「確かなもの」という話は唐突。

32 Pの質問の眼目は「むずかしく」だった。ところが、Sは重要ではない「考えれば」に引  
33 っ掛けて「考えた」と論点をすらし、さらにそれを自分で却下して、「遣った」という話を  
34 始める。かなり焦っているようだ。

35 さて、Sは何を「遣った」のだろう。〈SはKを殺した〉という事件が暗示されていると  
36 すれば、殺人事件と「信用」問題と、どういう関係にあるのだろう。

37 「同じ道」は意味不明。この「道」を語り手Pは明示していない。

38 「すると」は、具合が悪い。語られるPは幽体離脱をし、「襖の陰」に移動した。「あなた」  
39 が「二度」か。「あなた、あなた」が「二度」か。静は、SがKの話をしかけたのに気づい  
40 て、止めたのだろう。Kの話をすると、Sの精神状態がおかしくなるからだ。しかし、こん  
41 な解釈をしてしまうと、静を視点にした『こころ』の異本が必要になる。この異本は、『藪  
42 の中』の「清水寺に来れる女の懺悔」の段に相当する。

43  
44  
45  
46  
47

1 6000 『それから』から『道草』まで  
2 6500 近道の『道草』  
3 6550 男の「理窟」と女の「発作」  
4 6553 「緩和剤」

5  
6 健三は「母」から精神的に自立することができなかった。だから、妻を「母」のダミーと  
7 して利用した。妻は虐待され、精神に異常をきたす。

8  
9 細君の発作は健三に取<sup>ママ</sup>っての大きいなる不安であった。然し大抵の場合にはその不安の  
10 上に、より大きいなる慈愛の雲が曇<sup>たなび</sup>っていた。彼は心配よりも可哀相<sup>かわいそう</sup>になった。弱い憐れ  
11 なものの前に頭を下げて、出来得る限り機嫌<sup>きげん</sup>を取った。細君も嬉しそうな顔をした。  
12 (夏目漱石『道草』七十八)

13  
14 「慈愛」の真意は〈自愛〉だろう。作者は「妻に対するいたわりの情が、やはり高い見地  
15 から発せられていて、この作品の救いともなっている」(紅野敏郎『道草』新潮文庫注解)  
16 といった誤読を誘っているのだ。ただし、「救い」は意味不明。

17  
18 不幸にして細君の父と健三との間にはこういう重宝な緩和剤が存在していなかった。  
19 従って細君が本<sup>もと</sup>で出来た両者の疎隔は、たとえ夫婦関係が常に復した後<sup>あと</sup>でも、一寸埋める  
20 訳に行かなかった。それは不思議な現象であった。けれども事実に相違なかった。  
21 (夏目漱石『道草』七十八)

22  
23 「細君の父と健三との間」に作用する「緩和剤」とは、どのようなものか。舅にも「発作」  
24 を起こさせたいのか。  
25 健三の性格の悪さが「本<sup>もと</sup>」のはずだ。「むき」(『道草』七十九)だから失敗する。  
26 まったく「不思議な現象」などではない。語り手は変だ。  
27 健三は母子関係においてのみ通用する駄々が「夫婦関係」でも通用すると勘違いしていた。  
28 さらに、一般の対人関係でも通用することを期待していた。

29  
30 「そう頭からがみがみ云わないで、もっと解るように云って聞かして下すったら好いで  
31 しょう」

32 「解るように云おうとすれば、理窟<sup>りくつ</sup>ばかり捏ね返<sup>こ</sup>すっていうじゃないか」  
33 「だからもっと解り易い様に。私<sup>わたし</sup>に解らないような小むずかしい理窟<sup>りくつ</sup>は已めにして」  
34 「それじゃ、どうしたって説明のしようがない。数字を使わずに算術<sup>さんじゆつ</sup>を遣れと注文する  
35 のと同じ事だ」  
36 「だって貴夫<sup>あなた</sup>の理窟<sup>りくつ</sup>は、他<sup>ひと</sup>を捻<sup>ね</sup>じ伏せるために用いられるとより外<sup>ほか</sup>に考えようのない事  
37 があるんですもの」

38 (夏目漱石『道草』七十八)

39  
40 「緩和剤」を欲する彼は「理窟」を尊ばない。男の「理窟」は女の「発作」と同じ。  
41 「算術<sup>さんじゆつ</sup>」は話が違<sup>ちが</sup>う。「数字を使わずに」算盤や算木を使えばよかろう。  
42 健三の「理窟」は自他を「捻<sup>ね</sup>じ伏せるために用いられる」のだった。

43  
44  
45  
46

1 夏目漱石を読むという虚栄

2 ~第二部と第三部の間

3 (1/12)「僕が君の位置に立っているとすればだね」

4 『いろはきいろ』の夏目論の終わりの節〔#088 [世界] 先生と A (38)「怪人の正体」〕  
5 で、私は次のような引用をしている。

7 何でも冬に近い木曜日の夜、先生はお客と話しながら、少しも顔をこちらへ向けずに僕  
8 に「葉巻をとってくれ給え」と言った。しかし葉巻がどこにあるかは生憎僕には見当もつ  
9 かない。僕はやむを得ず「どこにありますか？」と尋ねた。すると先生は何も言わずに猛  
10 然と（こう云うのは少しも誇張ではない。）顎を右へ振った。僕は怯づ怯づ右を眺め、や  
11 っと客間の隅の机の上に葉巻の箱を発見した。

12 「それから」「門」「行人」「道草」等はいづれもこう云う先生の情熱の生んだ作品であ  
13 る。先生は枯淡に住したかったかも知れない。実際又多少は住していたであろう。が、僕  
14 の知っている晩年でさえ、決して文人などと云うものではなかった。まして「明暗」以前  
15 にはもっと猛烈だったに違いない。僕は先生のことを考える度に老辣無双の感を新たに  
16 している。が、一度身の上の相談を持ち込んだ時、先生は胃の具合も善かったと見え、こ  
17 う僕に話しかけた。——「何も君に忠告するんじゃないよ。唯僕が君の位置に立っていると  
18 すればだね。」……僕は実はこの時には先生に顎を振られた時よりも遥かに参らずには  
19 いられなかった。

20 (芥川龍之介『文芸的な、余りに文芸的な』17)

21 「先生」は夏目漱石、略してNだ。芥川はAと略す。

22 「老辣」は意味不明。(老練・辣腕)の略か。(老獠・悪辣)の略か。

23 Nは、人を「顎」で使うような高慢な人間だった。

24 「忠告」とは「まごころをもって他人の過失・欠点を指摘して戒め諭すこと」(『広辞苑』  
25 「忠告」)だから、「忠告」を否定したら、Nには「まごころ」がないことになる。本当にな  
26 かったのかもしれない。

27 「遥か」に注目。Aは、高慢なNと柔和なNを相対的なものと見なしている。普通は対立  
28 的に見るはずだ。たとえば、(Nは二重人格だ)など。ところが、Aは二つの人格を統合す  
29 る何かを空想して勝手に納得しているらしい。ただし、その何かを明示してはいない。

30 「怯づ怯づ」としたAの曖昧なスタイルは「参らず」で限界に達する。

31 ②相手に屈する。

32 ① 降参する。負ける。

33 ② 閉口する。「彼の毒舌には一・る」

34 ③ 弱る。へたばる。また、「死ぬ」を、やいやしめていう語。

35 ④ 心が奪われる。愛に溺れる。「彼女にすっかり一・っている」

36 (『広辞苑』「参る」から)

37 「参らず」は、②と④の混交らしい。後者に偽装した前者のようでもある。評価が逆なの  
38 に、一体のような、皮肉のような、自嘲のような、とにかく要を得ない。こういう気障な逃  
39 げ腰の多義的スタイルのせいで、Aは表現者として自滅することになる。

40 (2/12) 頭の体操

41 『文芸的な、余りに文芸的な』の後、次の文を引用している。

42 テレビの悩みの相談コーナーを見ていると、かならずといっていいほどカウンセラー  
43 が口にする言葉に「私だったら」というのがある。たとえば離婚問題で悩んでいる相談

1 者の現状をひと通り聞いたあと、カウンセラーは「私があなただったら、もうすこし我  
2 慢しますね」と言う。その言葉に相談者がわけなく従ってしまうのは、「私があなただつ  
3 たら」と言われて、「この人は、まるで自分のことのように私の悩みについて考えてくれ  
4 ている」と錯覚するからにはほかならない。そうした心理に陥ると、そのあとに続く助言  
5 は、たとえ自分にとって不利な話でも、自分のためになる話と思いつんで素直に聞き入  
6 れてしまうのである。

7 (多湖輝『こんな手口にご用心』55)

8  
9 夏目宗徒は、〈Nと「カウンセラー」は違う〉と主張することだろう。彼らは、Nと同様、  
10 頭の体操が苦手らしい。小学生レベルの思考力すら身に付いていないせいで、難解な語句を  
11 濫用して出鱈目な作文をものし、何事かを為し得たように装う。ただし、自己満足はできな  
12 いらしく、苛々した感じが伝わってきて、こっちまで苛々してくる。だから、読みたくない。

### 13 (3/12) 僭越かつ無責任

14 「私があなただったら」あるいは「僕が君の位置に立っているとすれば」と助言者が仮定  
15 するのは僭越だ。また、この後に続く助言に関して助言者は責任を取らずに済むから、無責  
16 任なのでもある。

17 相談者が助言に従って行動し、その結果失敗したとしよう。その場合、助言者に責任を取  
18 る義務があるのか。ない。〈こうしろ〉と命令したわけではないからだ。逆に、成功したと  
19 しよう。その場合、相談者は助言者に感謝する。どっちに転んでも助言者は損をしない。

20 Aは、Nのこの企みを察知したのに違いない。だから、その「老辣無双」のスタイルに「参  
21 らずにはいられなかった」のだ。

22 傲岸な「顎」と狡猾な「顎」を繋ぐ何かがある。その何かをAは察知し、そして驚嘆した  
23 のだろう。ただし、このように明示することは、彼にはできなかった。

24 〈あごを撫でる〉という。Nは、舌先三寸を用いてご満悦なのだ。Nは思いやりのある人  
25 格者を気取る人誑しだった。ただし、うまく誑せないときは化けの皮が剥がれ、傲岸になる。

26 Aは人格者を気取る人誑しに憧れていた。人誑しに成りたかったが、成れなかった。かと  
27 いて、人誑しの根性を疑うこともできなかった。だから、自殺に逃げるしかなかった。

### 28 (4/12) 文脈の共有

29  
30 いしだあゆみが「あなたならどうする」と歌っていた。〈私ならこうする〉という文句は、  
31 「あなたならどうする」と尋ねられた後に発せられるべきだ。そんなの、常識だろう？

32 ところが、少なくない人が、無責任な発言を尊重してしまうらしい。なぜ、無責任な発言  
33 を親切な助言と錯覚してしまうのだろう。

34 この問題が、ずっと解けなくて、私はもやもやしていた。

35 先日、あるドラマで、探偵にこんな質問をする客がいた。

36 〈あなたが私だったら、どうすべきだと思いますか。あなたの責任は問いませんから、  
37 忌憚ないご意見をお聞かせ下さい〉

38 なるほど、これだったか。

39 この客の友人は濡れ衣を着せられていて、客は友人を助けてくれるよう、探偵に頼んだ。  
40 探偵は断った。冤罪の証明が困難だったからだ。客は助言を欲しがらる。

41 〈私があなただったら〉といった仮定に基づく助言は、相手から〈あなたの責任は問わな  
42 い〉という条件を示された後にのみ安心して披露できる。普通はそうなのだ。ところが、N  
43 や「カウンセラー」は、あたかも相談者による許可が得られたかのような雰囲気醸し出し  
44 ている。その場には存在しない文脈を悪用しているわけだ。

45 知ったかぶりをする人はオレオレ詐欺の被害者になりやすいらしい。実は、この被害者は  
46 共犯者でもある。〔7321 「そんなの常識」〕(予定) 参照。

47 普通の会話を想定しよう。

1  
2 客 この問題を解いてください。  
3 主 それはあなたに特有の問題だから、私には解きようがない。  
4 客 では、あなたが私のような立場に追い込まれたら、どうなさいますか。  
5 主 私の方法をあなたが真似ても成功するとは限らないよ。  
6 客 結構です。失敗しても、あなたのせいにはしませんから、安心してください。  
7 主 成功しても、感謝してくれなくていいよ。  
8 客 ありがとうございます。  
9 主 さて、私があるなら……

10  
11 「僕が君の位置に立っているとすればだね」といった文句は、こうした会話の流れの中で  
12 出て来るものなのだ。

13 AとNは、こうした会話の流れ、つまり文脈を共有していなかった。だから、Nは高慢な  
14 のだ。そのことにNは思い当たらない。彼は優しい人間を演じているのであって、決して優  
15 しい人間ではない。だから、演技が相手に通用しないと、キレル。そして、嫌われる。そう  
16 した反省がNにはできない。

17 反省しないNに、Aは驚嘆した。そして、自分も反省しない人間に成ろうと頑張った。だ  
18 が、成れなかった。成れないのが普通だ。

19 Nは、彼の頭の中にいるAと会話をしていただろう。そのAは、〈先生の助言を実行し  
20 て僕が失敗したとしても、先生を恨みはしません〉などと語ったわけだ。この場合、眼の前  
21 のAが調子を合わせてくれたから、Nはキレなかった。

22  
23 (5/12)「木曜日」

24 「葉巻」の場面で、Nは「お客」と話しながら想像上の芥川とも会話をしていた。

25  
26 N 「葉巻を」吸いたいな。  
27 A お持ちしましょう。  
28 N 「とってくれ給え」  
29 A 「どこにありますか？」  
30 N (「顎」)

31  
32 この場合、実際の会話と想像上の会話が混交している。こういう状態で相手が言うことを  
33 聞かないと、Nはキレてしまうわけだ。

34 こういう混交は誰にでも起こることだろう。ただし、普通の相手なら、怒る。怒られたら、  
35 謝る。ところが、怒られたら、Nはキレてしまう。だから嫌われる。Nは孤立し、無駄にあ  
36 れやこれやと考えて苦しむ。休むに似たり。

37 しかも、悲惨なことに、「木曜日」になると、Nのお膝元に参って、その毒舌に参って、  
38 その演技に参って、彼を神か仏のように崇める自分が可愛くてならない付度自慢の知識人  
39 が集い、Nの鬱憤を晴らしてくれる。だから、反省の機会がない。Nには、まっとうな「忠  
40 告」をしてくれる人材が決定的に不足していた。

41 Nが苦悩したのは、文脈の悪用に自ら騙されていたからだろう。この場合、悪用ではなく、  
42 誤用と言うべきか。

43  
44 (6/12) 空気

45 高慢な人間は不適當な文脈を暗示して他人の思考力を減退させ、他人を奴隷にする。

46 Nは、彼自身の内部の高慢な人格、「黒い影」(『こころ』「先生と遺書」五十五)の本音を  
47 付度できず、Sと同様に自らを自らの奴隷にして苦しんでいた。

48 独裁者は、共有されていない文脈を暗示し、大衆の思考力を減退させ、大衆を奴隷にする。

1 逆に言うと、大衆が共有できていないはずの文脈を共有できているかのように錯覚したら、  
2 独裁者がいなくても、全体主義的風潮が広がる。

3 独裁者不在の全体主義的風潮を〈空気〉と言う。空気の性質は、右翼的であることもある  
4 し、左翼的であることもある。中立的ですらある。思想の傾向とは無関係に、〈忖度という  
5 家畜人の虚栄〉の空気は拡散してしまう。

6 空気という独裁者が大日本帝国を無謀な戦争に駆り立てた。

7 この空気を近代の日本において醸成したのが、文豪夏目漱石だ。

8 忖度は隷従の始まり。

9  
10 (7/12) どっちもどっち

11 「僕が君の位置に立っているとすれば」という言葉の背景には、平等主義とか個性尊重み  
12 たいな思想があるように誤解する人がいるのだろう。そして、自分には教養があると自己欺  
13 瞞して嬉しがるのだろう。甘い。いや、危ない。

14 忖度を「人をいたわしく思う心。あわれみの気持ち」(『広辞苑』「惻隱の情」)などと混同  
15 しているのかもしれない。混同するのは知識があるからだ、本当は知恵が足りないからだ。

16 〈あなたのためだから〉の真意は〈(私にとって都合のいい人になるのが)あなたのため  
17 だから〉ということだろう。それぐらい、知っている人は知っている。知らない人は知らない  
18 が、知っていながら否定する人はおかしい。否定しない根拠はなくてもいい。半信半疑で  
19 様子見だ。否定するのなら、その根拠を明示しなければならない。

20 「みんなちがって、みんないい。」(金子みすゞ『私と小鳥と鈴と』)という文の思想は個  
21 性尊重みだ。でも、違う。卑怯で狡猾。

22 この文の意味は、「君は君、我は我なり。されど仲よき」(武者小路実篤)に似ている。だ  
23 が、まったく違う。こちらには「されど」があるから、逆説的な意味がある。平等というの  
24 は、簡単に纏めると〈「みんな、ちがって」いない〉ということだ。属性の相違を超越した  
25 本質的な何かを直感できなければ、「いい」なんてとても言えるもんじゃない。

26 近頃流行の多様性云々など、絵に描いた餅だ。聖人君子にしか実践できない。のぼせるん  
27 じゃないよ。多様性の尊重とは、資本主義体制における労働者や消費者の平等のことだ。働  
28 いてくれるのなら、あるいは金を払ってくれるのなら、性、人種、民族、体質、神経、知能  
29 など無関係ということだ。寝たきりでも臓器移植の役に立つ。多様性とは、そういう人誑し  
30 の標語だ。

31 「惻隱の心」(『孟子』「公孫丑章句上」)の後、「爾は爾たり、我は我たり」と自慢げに語  
32 った柳下恵について、孟子は「不恭」と評する。「君は君、我は我なり」というのは駄目な  
33 思想なのだ。その前提があるから、「されど」以下が活きる。

34 一方、「みんなちがって、みんないい」だと、何のことやら、わからない。

35 〈「みんなちがって」いても「みんないい」〉という意味か。

36 〈「みんなちがって」いるからこそ「みんないい」〉という意味か。

37 どっちだ。どっちでもないのか。どっちもだろう。

38 「みんなちがって」云々の真意は〈「みんな」と私は「ちがって」いるからこそ「みんな」  
39 は私を「いい」と褒めなさい〉といった優越感の物語だ。この文の前提にあるのは、言うま  
40 でもなく、〈「みんな」と私は「ちがって」いるから「みんな」は私を「いい」と褒めてくれ  
41 ない〉という劣等感の物語だ。

42 劣等感の物語が無根拠に優越感の物語に転化する。劣等感の物語の否定としてしか語り  
43 えない優越感の物語だ。コンプレックスの露呈。混濁の表出。物語の闇汁状態。恨みを残し  
44 たままの虚偽の赦し。人誑し。

45 本当は、どきどき、はらはら、びくびく、おどおどしているくせに、狭量のくせに、酸い  
46 も甘いも噛み分ける大人を気取る駄々っ子。ウザいオッサン。男オバハンも含む。

47  
48 (8/12) 「想像して見て」

1 まだ、もやもやする。

2 「僕が君の位置に立っているとすれば」なんてことを言う人は、逆に〈君が僕の位置に立  
3 っているとすれば〉なんてことを言いかねない。

4  
5 彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像  
6 して見て下さい。

7 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三十六)

8  
9 [2422 「恋の行く手」] 参照。

10 「私を想像して」は意味不明。したがって、この私には何も想像できない。

11 作者は、Sを「想像して」いない。行き詰まったのだ。想像できなくなつて、意味不明の  
12 「私を想像して見て」によって防衛し、自分には想像できない物語を読者が忖度してくれる  
13 ように仕向けている。丸投げだよ。[6223 困難な-恋愛小説] 参照。

14 ここで、あなたが〈「私」の気持ち「を想像して」〉と補填したとしよう。そして、Sの気  
15 持ちを立派に想像できたとしよう。そのとき、あなたは〈語り手Sより自分の方が日本語の  
16 使い手として達者だ〉と自負したことになる。では、さらに、〈文豪より自分の方が日本語  
17 の使い手として達者だ〉と自負できるのか。できるのなら、あなたは超文豪で、『こころ』  
18 以上の名作をすでに執筆しているはずだ。

19 〈自分はSより上で、Nより下だ〉と思う人は、Nに誑されたのだ。責任はNにだけある  
20 のではない。誑かされる方にも責任がある。

21  
22 Kの話が一通り済んだ時、私は何とも云う事が出来ませんでした。此方も彼の前に同じ  
23 意味の自白をしたものだろうか、それとも打ち明けずにいる方が得策だろうか。私はそん  
24 な利害を考えて黙っていたのではありません。ただ何事も云えなかったのです。又云う気  
25 にならなかったのです。

26 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三十六)

27  
28 作者は「何事も」書くことができなかつたのだろう。「同じ意味の自白」を想像すること  
29 が、作者にはできない。Kの「切ない恋」について想像することができないからだ。作者は、  
30 Sの恋の物語が描けないので、Kの恋の物語で代用しようとしたが、それさえも描けず、墓  
31 穴を掘っている。そうだという証拠はないが、そうではないという証拠もなかり。ありも  
32 しない物語を「想像して見て」と、作者は読者に強要しているわけだ。

33 「切ない恋」と「殆ど信仰に近い愛」(下十四)は「同じ意味」か。[2353 「信仰に  
34 近い愛」] 参照。

35 「自白」あるいは「打ち明けずにいる方」というのは、二者択一のようなのだが、違う。二者  
36 択一なら、「自白」あるいは〈作り話〉だろう。Sは作り話さえ思いつかなかつた。いや、  
37 思いつかなかつたのは作者だろう。「自白」の中身が、作者には想像できない。あるいは、  
38 想像したくなかつた。語られるSが苦悩しているのではない。語り手Sが苦勞しているの  
39 もない。作者が苦悶しているのだ。Nは文芸に見せかけて自他を韜晦している。夏目宗徒は、  
40 こうした誤魔化しを卓越した才能の表れか何かと勘違いしている。

41 「云う気にならなかつた」という文は、「云え」る場合にしか意味がない。つまり、「云え  
42 なかつた」という場合には無意味だ。

43 作者は、恋について考えたくなかつた。Kの恋、Sの恋。それらだけではない。どんな恋  
44 についても、考えたくなかつた。Nに恋愛体験がなかつたからかもしれない。だが、どんな  
45 事柄にせよ、体験がなくても想像するのが作家の仕事だろう。

46 『こころ』の核心であるはずの〈静とSの恋物語〉は語られない。〈少女静と学生Sは愛  
47 し合っていた〉という物語はない。「恋」という文字があるだけで、恋の物語はない。恋の

1 雰囲気さえない。そのことに気づかない人は読みが浅過ぎる。

2  
3 (9/12) とんでもない誤読

4 なぜ、私はだらだらと書き続けているのか。

5 今の私が知ったかぶりを読者として想定しているからだ。

6 「受け入れる事」(下二)が意味不明だということ。これが説明できるようになるまで、  
7 私は四苦八苦していた。〔2142 「受け入れる事」〕参照。そのときまで、私は思わせぶ  
8 りなだけで意味不明のNの言葉を「受け入れる事」のできる人、〈自分には、少なくとも自  
9 分だけにはできる〉と信じている人、すなわち夏目宗徒を、読者として想定していた。

10 しかし、彼らを相手にするのは諦めることにした。無理だとわかったからだ。彼らに日本  
11 語は、私が日本語だと思っている言葉は、通じない。そのことを確信した。だから、諦める  
12 ことができた。

13 再び、私は諦めたい。知ったかぶりを読者として想定することを諦めたい。

14 夏目宗徒は、〈「受け入れる事」のできる人〉は選民か何かだと考えている。その考えには  
15 一理ある。一方、知ったかぶりは、〈「受け入れる事」は容易だ〉と勘違いしている。高卒程  
16 度の日本語の知識と凡庸な想像力さえあれば〈「受け入れる事」は容易だ〉と勘違いしてい  
17 る。とんでもない誤読だ。彼らは、文豪の苦悩や狂気や隠蔽などについて想像することがで  
18 きない。こんな人を読者として想定していたら、きりが無い。伝えなければならないことが  
19 膨大にある。しかも、伝えたことさえ、彼らは誤解し、あるいは忘失する。面倒くさい。息  
20 苦しいほどだ。だから、私は彼らを切り捨てたい。そのために、今、書いている。

21 Nのスタイルに対して、良くも悪くも〈普通じゃないな〉と思わない人に、何を言っても  
22 無駄だ。〈独特の名文〉とも思わず、〈奇妙な悪文〉とも思わず、Nのスタイルをそこのわ  
23 かりやすさだけで無益で無害な通俗作家のスタイルと区別できないような人を相手にする  
24 のは、時間と労力の無駄遣いだ。

25  
26 「では、社長のつごうを聞いてみますから、どんなことかおっしゃって下さい」

27 「では、話そう。まちがえるといけないから、メモを取ってくれ、いいか。わたしはな、  
28 社長の大学時代の親友の妹の初恋の相手のおやじだ。そう言えば、わかるはずだ」

29 受付けの女性は妙な顔をしながら、いちおう社長に電話連絡をした。

30 (星新一『あるシステム』\*)

31  
32 「妙な顔」をするのが普通だろう。ところが、知ったかぶりは〈「受付けの女性」は頭が  
33 悪い〉と思う。そして、「初恋」の物語を連想して悦に入る。私は、こうした知ったかぶり  
34 を、私の読者として想定したくないのだ。

35 夏目宗徒みたいな捻くれ者の場合だと、「妙な顔」をしつつも、〈「初恋」には深い意味が  
36 あるのだろう〉と考え、その意味を妄想する。こういう連中を私の読者として想定すること  
37 は、困難だ。想定したくないのではなくて、想定できない。一方、知ったかぶりの連想なん  
38 か、簡単に付度できる。そんなのに構っていたら、きりが無い。だから、私の読者として想  
39 定したくないのだ。

40 同じ〈妙〉でも、奇妙と絶妙は違う。私はNのスタイルを奇妙だと思う。夏目宗徒は『吾  
41 輩は猫である』や『坊っちゃん』などを軽妙、『草枕』などを巧妙、『こころ』などを絶妙と  
42 買い被るのだろう。どうでもいい。重要な問題は、〈妙と思うか否か〉だ。〔1111 〈意  
43 味〉の意味〕参照。

44 連想が自慢で妙な表現を妙だと思うセンスのない君達よ。今、私は、君達に理解してもら  
45 いたくて書いているのではないよ。君達を排除するために書いているのだ。散れ。

46  
47 \*星新一『ご依頼の件』(新潮文庫)所収。

48

1 (10/12) 家畜人の美学

2 〈ある人に心の恋人がいた。彼の友人が、そのことを知らずに、彼女に恋をして、彼女に  
3 は告白しないで、ある人に告白した。ある人は衝撃を受けた。その衝撃とは、これこれしか  
4 じか〉というような物語があるのか。ないのなら、想像できない。どこにもない物語を想像  
5 できる人は、さっさと小説を執筆しなさいって。

6 『こころ』の作者は恋物語を描けなかった。他の作品から借りてもよさそうなのに、そんな  
7 こともしない。なぜだろう。Nにとって「恋」はありふれた物語や歌などに出てくる言葉と  
8 は意味が違うからだ。それは、彼の体験とか妄想などのタイトルみたいなものだ。こうした  
9 真相を隠蔽するために、作者は七転八倒している。〔2340 被愛願望〕参照。

10 Nは、『吾輩は猫である』から『明暗』まで「恋」の物語を仄めかし続けるが、まったく  
11 要領を得ない。語りたくないのではなかろう。夏目語の「恋」は、普通の意味での恋とは違  
12 うらしい。だから、語れるとか語れないとか、語りたいたか語りたくないとか、そういうこ  
13 ととは違うはずだ。

14 Nが隠蔽している何かを、物語を介してではなく、「同情の糸」(上七)によって感知した  
15 人は夏目宗徒になる。〔2253 見捨てられそう〕参照。そんな「糸」さえないのにNを  
16 称賛する人はインチキだ。夏目宗徒はNの文章が難解であることをよく知っている。だから  
17 こそ、自分の読解力を自慢できるのだ。インチキどもは、そのことに気づかない。連中は野  
18 次馬でしかない。彼らの戯言が私の心を蝕む。大半の日本人の心が蝕まれてきたことだろう。

19 私が批判したいのは、夏目宗徒ではない。彼らはNの霊魂と通信できるらしいから、そん  
20 な人を相手にするのは、私にはとても無理だ。批判どころか、排除すら不可能だ。こうした  
21 タイプの人は、信仰の対象が何であれ、何パーセントかはいるものだろう。人間は変な生物  
22 なのだ。どうにもならない。凝っては思案に能わず。

23 私の排除の対象は、インチキな連中の利口ぶった戯言だ。

24 Nの用いた多くの文言は何かを隠蔽している。すべての文言がそうなのかもしれない。文  
25 芸的隠喩とは違う。Nは、隠蔽するしかない何かを自分にとって都合のいいように誤解して  
26 もらいたくて、「意味」を捻じ曲げ、文芸っぽく偽装している。また、そのために小説家に  
27 擬態した。Nの仕事なんて、その程度のものだ。

28 では、なぜ、その程度の仕事で虚名を得ることができているのか。

29 付度は家畜人の美学だからだ。

30 証拠はあるか。ない。

31 だから、もやもやが収まらない。

32  
33 (11/12) 「その人」

34 星新一は、しばしば唐突にソ系語を用いる。わざとやっているのだろう。

35 『こころ』の冒頭の文に含まれた「その人」について、「唐突にソ系の言葉が出てくると、  
36 面食らう」と、私は書いた。〔2112 「その人」と「常に」〕参照。

37 面食らわない人を、私は私の読者として想定しないことにする。想定したら、説明するこ  
38 とが多すぎて収拾が付かなくなるからだ。

39  
40 To Sherlock Holmes she is always THE woman. I have seldom heard him mention her  
41 under any other name.

42 —ARTHUR CONAN DOYLE“A SCANDAL IN BOHEMIA”

43  
44 『その男、ゾルバ』の原題は“Zorba the Greek”だが、この邦題はいかがなものか。

45 『ピーナッツ』の“It was a dark and stormy night.”を、谷川俊太郎は「それは暗い嵐の  
46 夜だった」(1965.07.12)と訳したり、「暗い嵐の夜だった」(1965.07.14)と訳したりして  
47 いる。英和辞典では後者が正しいとされる。だが、私は英和辞典を信用しない。なぜなら、  
48 後者の訳では、日本語として不十分だからだ。勿論、前者の訳は妙だ。でも、妙でいいのだ。

1 ホラーの『IT』を『それ』とは訳せない。『あいつ』が適当だろうが、無理に訳す必要  
2 もなからう。

3 「そら、二位一体という様なことになる」(『三四郎』七)の「そら」は悪用。〔5253  
4 「露悪家」〕参照。共有されていないはずの概念を、あたかも共有されているかのように装  
5 っている。

6 高校の英文法の時間に”It is spring”を「それは春です」と訳してしばらく立たされた。思  
7 い出すと、今も怒りがこみ上げる。授業の後、同級生が寄ってきて、「あんなことも知らな  
8 いなんて、がっかりしたぞ」と憎々しげに言い捨てて去った。まるで私が彼を騙したみたい  
9 だ。私には、私なりの言い分というか疑問があったが、誰も聞いてくれそうにないので、黙  
10 っていた。

11 外来語が大量に入ってきた幕末以降の日本語の揺れ、歪み、多義性、曖昧さ、そういうこ  
12 とに鈍感な人を、私は私の読者として想定しない。

13 外来語の中には、中国語も含まれる。その一例が〈恋愛〉だ。

14  
15 中国ではロブシャイトの「英華字典」(一八六六・六九)に既に見えるが、日本では明治  
16 初年(一八六六)以来、英語 love の訳語として「愛恋」「恋慕」などととも用いられ、  
17 やがて明治二〇年代から「恋愛」が優勢になった。

18 (『日本国語大辞典』「恋愛」)

19  
20 明治以降、物語のない、あるいは典拠不明の漢語が大量に生み出されていた。生んだのは  
21 文豪たちだろう。漢文の訓読という悪習のせいで、日本のインテリは、日本語とも中国語と  
22 もつかない、変な作文をして気取っていた。『平家物語』なんて、ひどいものだ。

23  
24 \*国文学読本諸論(1890)〈芳賀矢一〉五「更に之を平易明暢なる和漢混交文とし」(『日  
25 本国語大辞典』「和漢混淆文・和漢混交文」)

26 \*「日本人」が懐抱する処の旨義を告白す(1888)〈志賀重昂〉「想ふに採長補短てふは  
27 折衷比較的にして、其説ふる処偏に古色を帯び、転た快活果敢ならざる者に似たり」(『日  
28 本国語大辞典』「採長補短」)

29  
30 さらに漢文体というトリック。

31  
32 『平家物語』二で、平重盛が父清盛の暴挙をいさめて言ったことば「悲しき哉、君の御  
33 為に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八万の頂よりも猶高き父の恩、忽ちに忘れんとす。  
34 痛ましき哉、不孝の罪を遁れんとすれば、君の御為には已に不忠の逆臣ともなりぬべし。  
35 進退是窮まれり。是非いかにも弁え難し」を、頼山陽が『日本外史』を著すとき、「出典」  
36 のように漢文で言いかえたもの。

37 (『成語林 故事ことわざ慣用句』「忠ならんとすれば孝ならず、  
38 孝ならんとすれば忠ならず」より)

39  
40 「言いかえ」じゃないよ。ほぼ捏造。

41 ちなみに、『清盛』(NHK)でこの文句を呟く重盛は、疲れきって弱っているようだった。  
42 「いさめて」いるような強さはない。実際は弱っていたのだろう。

43  
44 (12/12)「公平の眼」

45 SがKに〈静とSの恋物語〉を告白できなかった。なぜ? 決定的な理由は、Sの語る能  
46 力が不足していたことにある。また、Kに聞く能力が不足していたからでもある。ただし、  
47 作者はそうした文芸的表現を試みているわけではない。N自身に対話の能力が不足してい  
48 て、しかもその自覚がなかったからだ。自覚がないどころか、屁理屈を捏ねていた。

1  
2 いやしくも公平の眼を具し正義の観念を有つ以上は、自分の幸福のために自分の個性  
3 を発展して行くと同時に、その自由を他にも与えなければすまん事だと私は信じて疑わ  
4 ないのです。

5 (夏目漱石『私の個人主義』)

6  
7 [5541 「自我とか自覚とか」参照。

8 こういう粗雑な文を読んで不快にならない人を、私は私の読者として想定しない。

9 何が言いたいのか？ 〈こっちはそっちのわがままを大目に見てやっただからさ、そっち  
10 もこっちのわがままを大目に見るよな〉ってこと？ 累進課税は公平？ 不公平？

11 〈自分は「公平の眼を具し」ているぞ〉という驕慢と〈自分は「公平の眼を具し」たいな〉  
12 という希望を区別できてる？ 「正義の観念」が万国共通なら、戦争は起きまい。むしろ「正  
13 義の観念」こそが戦争を正当化する。「自分の幸福のために自分の個性」が邪魔をすること  
14 は大いにあるよ。「個性を発展して」は日本語になっていない。「同時に」は意味不明。「そ  
15 の自由」の「そ」が指すのは〈発展〉させて「行く」かな。他人に自由を与える？ 凄い  
16 ことをのたまう。「疑わない」の真意は〈疑いたくない〉だろう。

17 変な日本語には要注意。今世紀の常識だろう？

18 Sは静に愛されたい。Kは静に愛されたい。では、二人で静を共有すべきかな。3P？ 日  
19 替り定食？ 日曜はダメよ、ダメ、ダメ。静にも自由を与えなければね。三人目ができちゃ  
20 ったんだ。Sを「先生」と呼ぶ彼。

21 ロシアの大統領はウクライナを属国にしたい。ウクライナの大統領は属国にされたくな  
22 いばかりか、クリミアを奪還したい。

23 さて、「公平の眼」のあなた。あなたなら、どうする？

24 みんな違って、みんな殺し合ってもいいかな？ 「いいとも」って言わなきゃ。

25  
26 自分は他の人の期待を満たすために生きているのではないという権利を認めるのであ  
27 れば、他の人にもそれと同じ権利を認めなければなりません。他の人は私の期待を満たす  
28 ために生きているわけではないのです。

29 (岸見一郎『アドラー心理学入門 よりよい人間関係のために』)

30  
31 意味不明。「小徳川流」(『中庸』三十)みたいなこと？ 当たり？ 外れ？

32  
33 君と会ったその日から なんとなく幸せ

34 こんな気持ち 初めてなのさ

35 分けてあげたい この幸せを

36 (かまやつひろし作詞・作曲『なんとなくなんとなく』)

37  
38 幸せを分けてあげられる人は限られている。「公平」は無理。

39  
40 幸せって 何だっけ 何だっけ

41 ポン酢醤油のあるうちさ

42 (作者不詳)

43  
44 もう、笑うしかない。

45 (『夏目漱石を読むという虚栄』「第二部と第三部の間」終)